

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第666集

こしだまつながね
越田松長根 I 遺跡発掘調査報告書

宮古市新田平乙部線道路整備事業関連遺跡発掘調査

2017

宮古市都市整備部
(公財)岩手県文化振興事業団

越田松長根 I 遺跡発掘調査報告書

宮古市新田平乙部線道路整備事業関連遺跡発掘調査



越田松長根 I 遺跡遠景 東から



西調査区南壁地層断面



西調査区24号住全景 東から



東調査区捨て場 西から

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、宮古市新田平乙部線道路整備事業に関連して、平成27年度に発掘調査を実施した越田松長根1遺跡の調査成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代前期から弥生時代、平安時代に亘る遺構・遺物が多く出土し、貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました宮古市都市整備部、宮古市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成29年2月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野 洋樹

例 言

1. 本報告書は、宮古市田老字越田79番地1ほかに所在する越田松長根I遺跡の調査成果を収録したものである。
2. 調査は、宮古市新田平乙部線道路整備事業に伴う緊急発掘調査である。宮古市都市整備部と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。
3. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は以下の通りである。
遺跡番号：KG94-0273 遺跡略号：TRKN I-15
4. 発掘対象面積、調査期間、調査担当者は以下の通りである。
面積：4830㎡ 期間：平成27年4月8日～7月30日
担当者：主任文化財専門員 星 雅之 主任文化財専門員 高橋 工
期限付調査員 對馬利彦
5. 室内整理期間、整理担当者は以下の通りである。
平成27年11月1日～平成28年3月31日 担当者：星 雅之
6. 本報告書は、第I章は宮古市都市整備部に依頼し、第II章を佐々木あゆみが、その他は星雅之・高橋工が執筆した。図版全般は對馬が編集・作成した。
7. 各種鑑定・分析は次の外部機関に依頼した。
石材鑑定：花崗岩研究会
石器図化・トレース：榊ラング
黒曜石分析：榊第四紀地質研究所
年代測定：榊加速器分析研究所
テフラ同定分析：榊火山考古学研究所
漆分析：榊環境研究所
基準点測量：(株)スカイ測量設計
航空写真：榊東邦航空
8. 野外調査および本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った。
岩手県教育委員会 宮古市教育委員会 高橋憲太郎 鎌田祐二 安原 誠 長谷川 真
金子昭彦 岩田貴之 川向聖子 菅野紀子 神原雄一郎 鈴木博之 竹下将男 巴 亜子
茅野嘉雄 千葉正彦 藤原秀樹
9. 野外調査では宮古市の方々をはじめ岩泉町、田野畑村、普代村の方々にご協力いただいた。
10. 本遺跡の調査成果は、現地説明会資料、ホームページ、調査略報に掲載しているが、本報告書の内容はそのいずれよりも優先される。
11. 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1 本書における遺構図の凡例は、以下のとおりである。

- | | |
|---------|--|
| (1) 方 位 | 遺構図・地形図の方位は国土座標に基づく座標北を示す。 |
| (2) 土 層 | 基本土層はローマ数字、遺構内の堆積土は算用数字とアルファベット小文字を組み合わせて表記した。土色の観察には「新版標準土色帖」2000年版を使用した。 |
| (3) 標 高 | 海拔標高を示す。 |
| (4) 縮 尺 | 各挿図中に縮小率を示した。 |
| (5) 破 線 | 遺構平面図では、短破線は遺構の推定線を、細破線は柱穴配列を示す。
短破線 - - - - -
細破線 ----- |

2 本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

- | | |
|----------|--|
| (1) 縮 尺 | 縮小率は遺物の大きさと性格により適宜決定し、スケールの上を示した。 |
| (2) 遺物番号 | 土器は1からの、石器は401からの通し番号を付した。 |
| (3) 法 量 | 遺物の法量については、観察表に表記した。推定値は()、残存値は<>内に示した。 |

3 本書で使用した記号（略号）やトーンは以下のとおりである。



目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の概要	1
1	遺跡の位置と地理的環境	1
2	周辺の遺跡	4
III	野外調査・室内整理の方法	8
1	野外調査方法	8
2	室内整理と報告書作成	9
IV	検出遺構	15
1	基本層序	15
2	竪穴住居	15
3	陥し穴	29
4	土坑	29
5	焼土	31
6	柱穴列	33
7	柱穴群と集石遺構	34
8	捨て場	34
V	出土遺物	78
1	土器	78
2	土製品	83
3	石器	83
4	石製品	88
5	その他	88
VI	自然科学分析	147
1	黒曜石産地推定 (株) 第四紀地質研究所	148
2	放射性炭素年代測定 (株) 加速器分析研究所	153
3	テフラ同定分析 (株) 火山灰考古学研究所	157
4	漆分析 (株) 古環境研究所	161

Ⅶ 総括	163
1 遺構	163
2 遺物	170
3 科学分析から	175
4 II群土器の若干の考察	176
報告書抄録	257

図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第31図 26号住	58
第2図 地形分類図	3	第32図 27号住	59
第3図 周辺の遺跡図	5	第33図 28号住	60
第4図 調査区全体図・グリッド図	10	第34図 31号住	61
第5図 西調査区遺構配置図	11	第35図 33号住	62
第6図 東調査区遺構配置図	12	第36図 36号住(1)	63
第7図 基本層序(1)	13	第37図 36号住(2)	64
第8図 基本層序(2)	14	第38図 37号住	65
第9図 1号住	36	第39図 38号住	66
第10図 2号住	37	第40図 39号住	67
第11図 3号住	38	第41図 1・2号陥し穴	68
第12図 4号住	39	第42図 1・2・3号土坑	69
第13図 5号住	40	第43図 4・5・6号土坑	70
第14図 6号住	41	第44図 20・21・22・23号土坑	71
第15図 7号住	42	第45図 1・2・3・4・5・6・7号焼土	72
第16図 8号住	43	第46図 8・9・10・11・12・13号焼土	73
第17図 9号住	44	第47図 1・2号柱穴列(1)	74
第18図 10号住	45	第48図 1・2号柱穴列(2)	75
第19図 13号住	46	第49図 柱穴群	76
第20図 14号住(1)	47	第50図 集石遺構	77
第21図 14号住(2)	48	第51図 1・2・3号住土器	89
第22図 15号住	49	第52図 3・4・6・7号住土器	90
第23図 16号住	50	第53図 7・8・9号住土器	91
第24図 17号住	51	第54図 9・10号住土器	92
第25図 18号住	52	第55図 10号住土器	93
第26図 19号住	53	第56図 13号住土器	94
第27図 21号住	54	第57図 13号住土器	95
第28図 22号住	55	第58図 13・14号住土器	96
第29図 23号住	56	第59図 14・17・18号住土器	97
第30図 24号住	57	第60図 18・19号住土器	98

第61図	19・21・24号住土器	99	第81図	13・14・16・18・19・21・22・24・26号住、 4号焼土、捨て場(1) 剥片石器	119
第62図	24・26・28号住、1・2・3・4号 土坑土器	100	第82図	捨て場(2)、遺構外剥片石器	120
第63図	4号土坑、捨て場(1) 土器	101	第83図	1・3号住礫石器	121
第64図	捨て場(2) 土器	102	第84図	3・4号住礫石器	122
第65図	捨て場(3) 土器	103	第85図	6・7・8・10号住礫石器	123
第66図	捨て場(4) 土器	104	第86図	10号住礫石器	124
第67図	捨て場(5) 土器	105	第87図	10・13号住礫石器	125
第68図	捨て場(6) 土器	106	第88図	13・14・17・19号住礫石器	126
第69図	捨て場(7) 土器	107	第89図	19号住礫石器	127
第70図	捨て場(8) 土器	108	第90図	19・24号住礫石器	128
第71図	捨て場(9) 土器	109	第91図	24号住・遺構外・捨て場(1) 礫石器	129
第72図	捨て場(10) 土器	110	第92図	捨て場(2) 礫石器	130
第73図	捨て場(11) 土器	111	第93図	捨て場(3) 礫石器	131
第74図	捨て場(12) 土器	112	第94図	捨て場(4)、遺構外礫石器	132
第75図	捨て場(13) 土器	113	第95図	石製品	133
第76図	捨て場(14)、遺構外(1) 土器	114	第96図	越田松長根Ⅰ遺跡の住居類型 (前期初頭～前業)	166
第77図	遺構外(2) 土器	115	第97図	住居の建替え状況	167
第78図	遺構外(3) 土器	116	第98図	沢田Ⅰ遺跡の住居類型(前前前業)	168
第79図	土製品	117	第99図	越田松長根Ⅰ遺跡前期土器集成図1	181
第80図	3・4・7・8・9・10・13号住 剥片石器	118	第100図	越田松長根Ⅰ遺跡前期土器集成図2	182

巻頭カラー写真図版目次

カラー写真図版1 遺跡遠景と基本層序

カラー写真図版2 24号住と捨て場

写真図版目次

写真図版1	航空写真	186	写真図版14	15・16号住	199
写真図版2	着手時現況	187	写真図版15	17号住	200
写真図版3	基本層序	188	写真図版16	18号住	201
写真図版4	1号住	189	写真図版17	19号住	202
写真図版5	2号住	190	写真図版18	21・22号住	203
写真図版6	3号住	191	写真図版19	24号住(1)	204
写真図版7	4号住	192	写真図版20	24号住(2)	205
写真図版8	5・23号住	193	写真図版21	26号住	206
写真図版9	6・7・8・9号住	194	写真図版22	27・28号住	207
写真図版10	7・8・9号住	195	写真図版23	31号住	208
写真図版11	10号住	196	写真図版24	33号住	209
写真図版12	13号住	197	写真図版25	36・37号住	210
写真図版13	14号住	198	写真図版26	38号住	211

写真図版27	39号住	212	写真図版51	捨て場(7)土器	236
写真図版28	1・2号陥し穴	213	写真図版52	捨て場(8)土器	237
写真図版29	土坑	214	写真図版53	捨て場(9)土器	238
写真図版30	焼土遺構(1)	215	写真図版54	捨て場(10)土器	239
写真図版31	焼土遺構(2)	216	写真図版55	捨て場(11)、遺構外(1) 土器	240
写真図版32	柱列、柱穴、集石遺構	217	写真図版56	遺構外(2)土器	241
写真図版33	捨て場(1)	218	写真図版57	遺構外(3)土器	242
写真図版34	捨て場(2)	219	写真図版58	土器集合(1)	243
写真図版35	捨て場(3)	220	写真図版59	土器集合(2)	244
写真図版36	調査風景・現地説明会	221	写真図版60	土製品	245
写真図版37	1・2・3号住土器	222	写真図版61	3・4・7・8・9・10・13号住 剥片石器	246
写真図版38	3・4・6・7・8号住土器	223	写真図版62	14・16・18・19・21・22・24・26号住、 4号焼土、捨て場、遺構外剥片石器	247
写真図版39	8・9・10号住土器	224	写真図版63	1・3・4号住礫石器	248
写真図版40	10・13号住土器	225	写真図版64	4・6・7・8・10号住礫石器	249
写真図版41	13号住土器	226	写真図版65	10・13号住礫石器	250
写真図版42	13・14・17号住土器	227	写真図版66	13・14・17号住礫石器	251
写真図版43	18・19号住土器	228	写真図版67	19号住礫石器	252
写真図版44	21・24・26・28号住、 1号土坑土器	229	写真図版68	19・24号住礫石器	253
写真図版45	2・3・4号土坑、捨て場(1) 土器	230	写真図版69	捨て場(1)、遺構外礫石器	254
写真図版46	捨て場(2)土器	231	写真図版70	捨て場(2)礫石器	255
写真図版47	捨て場(3)土器	232	写真図版71	捨て場(3)、遺構外礫石器・ 石製品	256
写真図版48	捨て場(4)土器	233			
写真図版49	捨て場(5)土器	234			
写真図版50	捨て場(6)土器	235			

表 目 次

第1表 田老地区周辺の遺跡表…………… 6	第12表 土器観察表(9)…………… 142
第2表 剥片石器組成表……………85	第13表 土製品観察表…………… 143
第3表 礫石器組成表……………87	第14表 石器観察表(1)…………… 144
第4表 土器観察表(1)…………… 134	第15表 石器観察表(2)…………… 145
第5表 土器観察表(2)…………… 135	第16表 石器観察表(3)…………… 146
第6表 土器観察表(3)…………… 136	第17表 石製品観察表…………… 146
第7表 土器観察表(4)…………… 137	第18表 越田松長根Ⅰ遺跡の縄文時代前期初頭～前葉 の堅穴住居跡一覧…………… 169
第8表 土器観察表(5)…………… 138	第19表 土器表…………… 173
第9表 土器観察表(6)…………… 139	第20表 越田松長根Ⅰ遺跡石器組成…………… 174
第10表 土器観察表(7)…………… 140	第21表 越田松長根Ⅰ遺跡出土土器の器厚表…………… 180
第11表 土器観察表(8)…………… 141	

I 調査に至る経過

越田松長根Ⅰ遺跡は、新田平乙部地区道路整備事業内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

新田平乙部地区道路整備事業は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災により田老地区の被害は甚大なものとなり、当地区の住宅の移転先である乙部高台において災害時に海側の道路が遮断された場合でも地区が孤立することなく、国道45号線と連絡する安全な幹線道路として整備するもので、「安全な地域づくり」を推進するとともに、「すまいとくらしの再建」にも欠かせない道路である。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、宮古市都市整備部建設課から平成26年11月13日付建第422号〔(仮称)新田平乙部線道路整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について(依頼)〕により宮古市教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた宮古市教育委員会は平成26年11月25日から試掘調査を実施し、工事に着手するには越田松長根Ⅰ遺跡の発掘調査が必要になる旨を平成26年12月18日付教文第727号「市道新田平乙部線道路整備事業に係る埋蔵文化財本調査について(報告)」により宮古市都市整備部建設課に報告された。

その結果を踏まえて当建設課は、宮古市教育委員会及び岩手県教育委員会の調整を受けて、平成27年4月1日付で公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

宮古市都市整備部建設課

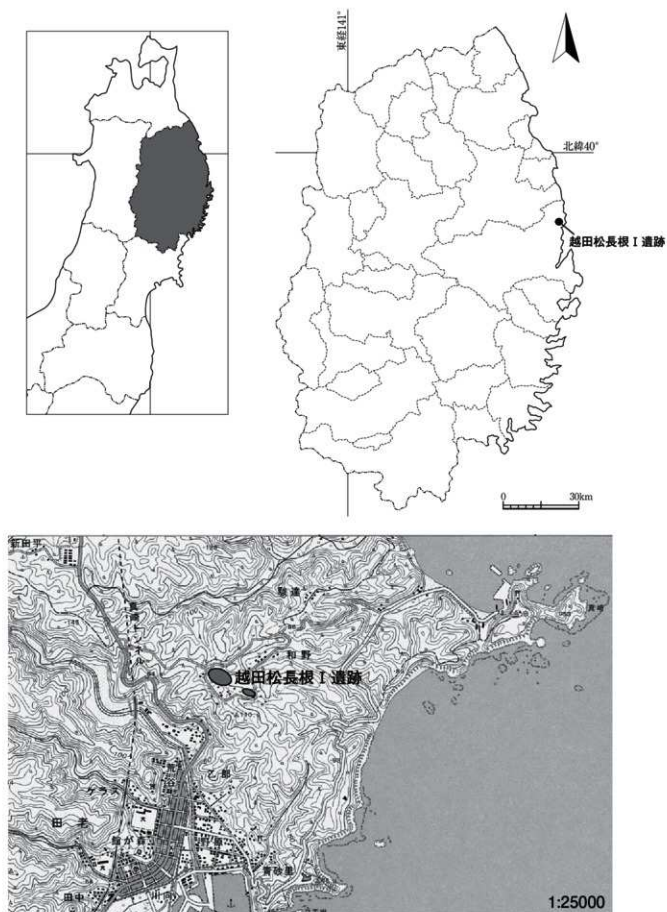
II 遺跡の概要

1 遺跡の位置と地理的環境

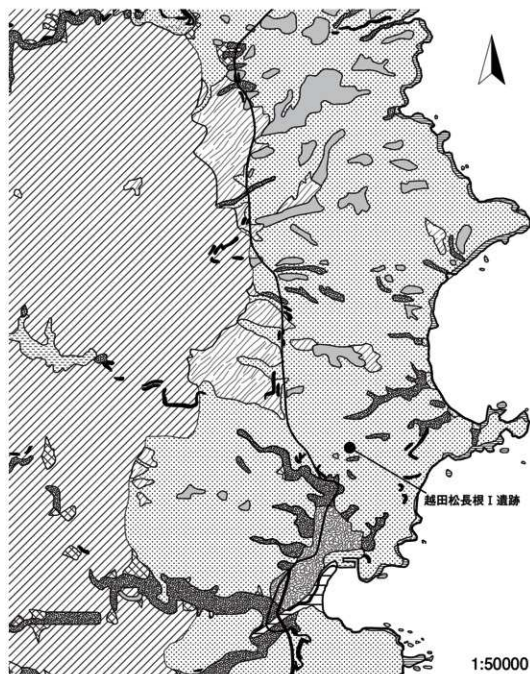
越田松長根Ⅰ遺跡の所在する宮古市は岩手県の最東端に位置し、東には太平洋、西には北上山地を擁する。平成17年6月6日に田老町、新里村と新設合併、平成22年1月1日に西に隣接していた川井村を編入合併し新制の宮古市となった。現在の面積は1,259.15km²、人口は56,436人(平成28年2月1日現在)である。

本遺跡は宮古市田老字越田内に所在する。三陸鉄道北リアス線田老駅の北北東約2km、真崎海岸から約2kmに位置する。調査区における緯度・経度は、北緯39度44分52秒、東経141度58分30秒である。国土地理院発行の5万分の1地形図「田老」及び、2万5千分の1地形図「田老鉱山」の図幅に属する。本遺跡の所在する田老地区の地形分類図を第2図に示した。大勢として西側が高く、東側に向かって低くなる。図幅内では、大きくは捉えれば山地・丘陵・台地・低地に区分されるが、海岸線に沿って見られる小本丘陵(※第2図の丘陵地1)は、海岸段丘が開析されて形成されたもので、段丘面も残存することで、本来は台地として扱うべき地形のようである。この小本丘陵は、西側の山地(※第2図の中起伏山地)とは、海岸線にはほぼ平行して走る高度不連続線を持って境し、北は岩泉、南は宮古市までの南北に延びて分布する。そして、東端では比高約100mの海食崖が形成されている。丘陵頂部にかなり広い段丘面を残存するが、全体的には保存状態が悪く、大半は失われている。従って、古生界や、中生界の堆積岩、花崗岩類からなる基盤岩の露出地帯となっている。ここで本地域の段丘

1 遺跡の位置と地理的環境



第1図 遺跡位置図



第2図 地形分類図

区分に触れると、段丘面高度180～240mが摂待段丘、同100～160mを田老段丘、同70～90mを古里段丘に分類されており、各段丘面高度は南方方向に向かい低下する傾向が指摘されている。遺跡周辺は、田老段丘に相当すると考えられるが、一段低い古里段丘との区分は明瞭ではなく、従って一括して上位段丘とされる。

本調査区の周辺は、上述の小本丘陵に属し、谷地と丘陵地が複雑に入り組んだ地形に立地している。標高は90～110mである。調査範囲は、西調査区と東調査区の二か所に分かれ、西調査区は谷頭の東向き～南向きの斜面にあり現況は畠地と山林、東調査区は谷の南斜面に相当し現況は果樹園と農道である。

越田松長根Ⅰ遺跡は、平成19年に「越田遺跡」と「松長根遺跡」を統合し「越田松長根Ⅰ遺跡」となり、遺跡の範囲は南北で約750m、東西で700m、約400,000㎡に広がる。本調査区の東側隣接地を宮古市教育委員会が調査を実施しているが、今回の調査で主体的な縄文時代前期は副次的で、縄文中期や後期及び古代の集落跡が見つかった。このことは、時代・時期の違いが空間占地の違いにも直結する様相であり、遺跡本来的には時代・時期幅の長い複合遺跡と考えられよう。

2 周辺の遺跡

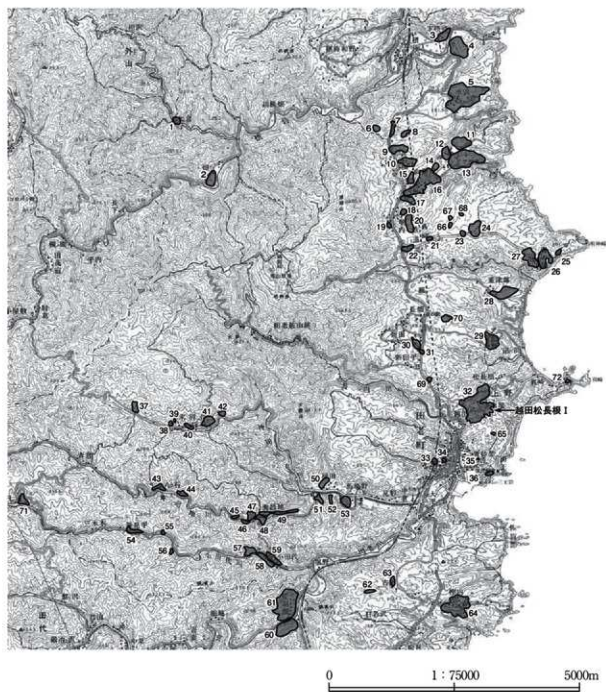
田老地区（旧田老町）では、昭和36年から昭和49年にかけて実施された分布調査の成果に基づいて、平成18年度時点で63箇所の遺跡が周知されていた。その後、平成18年から行われた宮古市教育委員会による分布調査や、三陸沿岸道路建設に伴う試掘調査によって遺跡の新規発見や統合・範囲変更が行われた。平成27年度の岩手県遺跡情報検索システムによると、田老地区の遺跡は81箇所である。

田老地区においては、近年まで開発等に伴う大規模な発掘調査が実施された事例が少ない現状にあったが、その中で比較的大規模な調査事例として、昭和56年度に行われた田老大規模年金保養基地（現在のグリーンピア三陸みやこ）建設に伴う小堀内Ⅰ遺跡の発掘調査がある。この調査では縄文時代早期～前期の土器や、石器などが出土している。なお、この発掘調査の成果は「小堀内Ⅰ遺跡発掘調査報告書」（岩手埋文：1983）として刊行されているが、現在の岩手県遺跡台帳には、そのような遺跡名称で記載されている遺跡はない。報告書に記載された遺跡の位置と現在の遺跡分布図を照合すると向新田Ⅲ遺跡の周知範囲内に相当する。

平成23～25年にかけて、宮古市教育委員会による樫内Ⅰ遺跡の発掘調査が行われた。樫内Ⅰ遺跡は平成18年の分布調査により樫内里遺跡と樫内沖遺跡が統合された遺跡である。平成23年に2次・3次・4次調査、平成24年に5次調査、平成25年に6次調査が行われた。通年の調査で縄文時代中期の竪穴住居跡と遺物（おおよそ大木8a式～10式）が出土した。近年では、東日本大震災の復興道路建設に関連して三陸沿岸道路建設に伴う緊急発掘調査が実施され、乙部遺跡（岩手埋文：2014・※岩手県教委：2015）、青野滝北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡（岩手埋文：2016）、向新田Ⅲ遺跡（岩手埋文：2016）、平成27年度には越田松長根Ⅰ遺跡、重津部Ⅰ遺跡、乙部野Ⅱ遺跡の発掘調査が行われた。

乙部遺跡は、縄文前期前葉大木2a式を主体とした遺跡で、岩手県教育委員会による平成27年度の調査では竪穴住居跡などの遺構に加え、比較的多くの遺物も出土している。特に、特殊磨石（礫の側面に磨り痕を伴う礫石器）が多く出土していることは特記事項である。遺構の上部には十和田中掇テフラが認められることから、同テフラ降下期より古い集落跡と考えられる。

青野滝北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は、青野滝川の北岸の丘陵（海岸段丘）が同川により浸食され形成された谷地形に立地する。3遺跡合せて8,500㎡が調査され、縄文中期後葉～末葉の竪穴住居跡が18棟検出



第3図 周辺の遺跡図

第1表 田老地区周辺の遺跡表

№	道跡No	道跡名	種別	時代	内 容	調査態・備考
1	472	加音	散布地	縄文	縄文土器	分布調査(2006年度)にて範囲変更。
2	473	節	散布地	縄文	石皿、縄文土器	
3	470	栢母	散布地	縄文	縄文(中期)環状土器、石皿、石芥	2007年11月 範囲測小(分布調査)。横風。宮古市道跡分布調査報告書6(宮古市埋文第77)。
4	471	節の畑	城郭跡(仮)・散布地	縄文	縄文土器、石器	50年調査
5	475	水沢Ⅰ	散布地	縄文・弥生	縄文土器(早・前・中・後期)、弥生土器、すり石、石芥	分布調査により水沢Ⅰ、水沢Ⅱ、水沢Ⅲ遺跡跡を統合し、範囲を変更(2007年)。
6	479	向新田Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器(早期)	
7	478	向新田Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)、弥生土器、フレーク	分布調査により向新田Ⅴ、向新田Ⅵ遺跡跡を統合し、範囲を変更(2007年)。
8	480	向新田Ⅳ	散布地			分布調査により範囲測測を縮小(2007年)。
9	481	向新田Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	分布調査により向新田Ⅲ、向新田Ⅳ遺跡跡を統合する(2007年)。
10	483	向新田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、石器	分布調査(2007年度)にて範囲発見。
11	483	向新田Ⅱ	集落跡	縄文・弥生	縄文土器(前期)、弥生土器	小畑内Ⅰ遺跡発掘調査報告書(若手環文第52集)。
12	484	向新田Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(中期)	
13	485	向新田Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器(前・中・後・晩期)、すり石、石芥、フレーク	
14	489	向新田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(中・晩期)、石器	
15	492	向新田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(中期)	分布調査により向新田Ⅱと向新田Ⅲ遺跡跡を統合し、範囲を変更(2007年)。
16	486	向新田Ⅱ	散布地	縄文・弥生	縄文土器(中期)、弥生土器	分布調査により向新田Ⅱ、向新田Ⅲ、向新田Ⅳ、向新田Ⅴを統合し、範囲を変更(2007年)。若手環文第65集。
17	487	向新田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(後期)	
18	488	向新田Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(中・晩期)	
19	600	小畑内Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器、埴輪	分布調査(2006年)にて発見。
20	496	小畑内	散布地	縄文	縄文(前期)内筒系及び織部土器・縄文(中・後期)土器	
21	497	物見峠Ⅱ	キャンプ地	縄文	縄文土器(前期)	
22	496	乙部	散布地	縄文	縄文土器(中期)赤縄文前期土器・特殊磨石	2013(若手環文)若手環文第60集・2015(若手環文)調査。
23	499	物見峠Ⅱ	キャンプ地	縄文	縄文土器(中期)、石芥、フレーク	
24	498	物見峠Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器(前期)	
25	500	青野Ⅰ	キャンプ地	縄文	土器、小畑沖平又は純玉割2、尖頭器、未完成品、フレーク	
26	502	青野Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器(中期)	青野ⅡⅡ・青野ⅡⅢ・青野ⅡⅣ・青野ⅡⅤ遺跡跡を統合、範囲拡張(2007年・分布調査)。
27	501	青野Ⅲ	集落跡	縄文	縄文土器、フレーク、石器	青野ⅢⅤ・青野ⅢⅥ遺跡跡を統合、範囲拡張(2007年・分布調査)。
28	508	重津Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(中・後・晩期)、石器赤縄文前期土器、石器	分布調査にて重津ⅠⅡ・重津ⅠⅢ・重津ⅠⅣ・重津ⅠⅤ遺跡跡を統合し、範囲を変更(2007年)。2015年発掘調査(若手環文)。
29	511	乙部野Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(前・中・後・晩期)、石皿、石芥、石芥	分布調査にて、乙部野Ⅰと乙部野Ⅱ遺跡跡を統合し、範囲を変更(2007年)。
30	598	新田Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	分布調査(2006年)にて発見。
31	599	風の沢Ⅰ	散布地	縄文		分布調査(2006年)にて発見。
32	524	横田杉原Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)、石器赤縄文前期土器・石器	分布調査により横田遺跡と杉原長尾遺跡を統合し、範囲を変更(2007年)。2015年発掘調査(若手環文)。
33	523	田老野寺山	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)、半磨製石、芥、石芥、石器、791貝、仔貝	埋蔵
34	525	赤山(山部ヶ森)	散布地・城郭跡(?)	縄文・中世	縄文土器(前期)、石器、玉器、平場(?)	
35	602	青野ⅢⅠ	散布地	縄文・古代以降	縄文土器、土師器	分布調査(2006年)にて発見。
36	526	三王Ⅰ	城郭跡(?)	中世	三重空堀(?)	50年調査。
37	513	未前Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(中期)、石器	分布調査(2006年度)にて未前遺跡より名称変更。
38	507	未前Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器、鉄片	分布調査(2006年)にて発見。
39	606	未前Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	分布調査(2007年度)にて発見。
40	586	未前Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器、鉄片	分布調査(2006年)にて発見。
41	585	未前Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、鉄片	分布調査(2006年)にて発見。
42	580	森崎遺跡	散布地	縄文	縄文土器	平成17年度分布調査で発見。平成18年6月一部試掘調査(若手環文)。平成18年6月調査委員の試掘調査により、さらに西側の隣接地で遺跡、遺構が発見されている。

Ⅱ 遺跡の概要

No.	遺跡No.	遺跡名	種別	時代	内 容	調査態・備考
43	518	八ツ石	散布地	縄文	縄文土器、鉄滓	昭和60年調査、東郷と西郷縄文遺跡(2007年度・分布調査)
44	589	向森畑Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器、鉄滓	分布調査(2006年)にて発見。
45	588	養呂畑Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、鉄滓	分布調査(2006年)にて発見。
46	595	上小田代Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	分布調査(2006年)にて発見。
47	515	田代畑Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(中期)、石鏝、割片、鉄鏝	養呂畑遺跡から名称変更、南郷縄文遺跡(2007年・分布調査)。
48	594	上小田代Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器、鉄滓	分布調査(2006年)にて発見。
49	520	クダク石	散布地		鉄滓	昭和60年調査。
50	516	神田北	散布地	縄文	縄文土器(前・中・後期)、石鏝、石匙	北郷と南郷縄文遺跡(2007年・分布調査)。
51	517	神田南	散布地	縄文	縄文(中期)大型かめ、石鏝、石芥、石鏝、板状石、鉄鏝	分布調査により範囲を限定した(2007年)。
52	607	八幡水埦Ⅰ	散布地	古代以降	鉄滓	分布調査(2006年度)にて発見。
53	519	畑	散布地	縄文	縄文土器	尾根北郷遺跡。
54	591	根見平Ⅰ	散布地		鉄滓	分布調査(2006年)にて発見。
55	596	上小田代Ⅳ	散布地		鉄滓	分布調査(2006年)にて発見。
56	590	鎌倉Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器、鉄滓	分布調査(2006年)にて発見。
57	528	上小田代Ⅰ	散布地	縄文・ 古代以降	縄文土器、フレイク、土師器、鉄滓	小田代遺跡から名称変更、南郷縄文遺跡(2006年度・分布調査)。
58	597	坂の口Ⅰ	散布地		縄文土器、鉄滓	分布調査(2006年)にて発見。
59	593	小田代Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	分布調査(2006年)にて発見。
60	25	向平	散布地			
61	17	依呂根	散布地	縄文	縄文土器(中・晩期)	
62	530	観音森	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)、石芥、石鏝	
63	529	古田	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)、石鏝、石匙	
64	531	樺内Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器、石鏝、石匙	分布調査(2006年度)にて樺内集落跡と樺内沖遺跡を統合、平成23年度調査(発掘調査)。
65	666	乙部Ⅱ	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、縄文土器、土師器	2013年度試掘調査にて発見。
66	667	青野北Ⅰ	集落跡	縄文	土坑、焼土、縄文土器、石器	2013年度試掘調査(三陸沿岸道路)にて発見。岩手県文庫668号。
67	668	青野北Ⅱ	集落跡	縄文	土坑、縄文土器	2013年度試掘調査(三陸沿岸道路)にて発見。岩手県文庫668号。
68	669	青野北Ⅲ	集落跡	縄文	竪穴住居跡、土坑跡、縄文土器	2013年度試掘調査(三陸沿岸道路)にて発見。岩手県文庫668号。
69	670	飯連Ⅰ	生産遺跡	古代・中世	炭	平成26年3月11～12日新発見(岩手県教育委員会による試掘調査)、平成26年9月29日～10月10日(岩手県教育委員会による発掘調査)。
70	671	乙部Ⅲ	集落跡	縄文	竪穴住居跡、縄文土器(早期・前期・後期・晩期)準高生土器	平成26年4月21～23日新発見(岩手県教育委員会による試掘調査)、2015年度発掘調査(掘方調査)。
71	514	根森	散布地・塚前跡	縄文・中世	円形土坑、土器、縄文	土坑の類ともいわれる。19年調査、東郷縄文遺跡(2007年・分布調査)。
72	522	呉崎	散布地	縄文	縄文土器(晩期)、石鏝、石芥、木炭	分布調査(2007年度)にて範囲変更。

された（※Ⅰが1棟、Ⅱが1棟、Ⅲが2棟）。加えて、早期中葉や後期初頭～前葉の土器も出土している。

向新田Ⅲ遺跡は、縄文前期前葉4棟と縄文晩期末葉～弥生前期11棟の竪穴住居跡が検出されている。出土土器は、上記の時期以外にも縄文早期後半、縄文中期の円筒上層式をはじめ、比較的多岐に亘る。乙部野Ⅱ遺跡は、縄文後期前半を中心に、縄文前期前葉及び弥生時代前期の竪穴住居跡が多く検出された。特にも、縄文後期初頭～前葉期については、本県屈指の住居数をみる（※現在整理中なことから詳細な棟数の記載は避けることとするが、縄文後期初頭～前葉だけで60棟前後をみる）。

最後に、東日本大震災復興道路建設に関連して近年実施された発掘調査により、田老地区には新発見を発信する遺跡事例が相次いだ。特に、縄文前期前葉、縄文中期後葉～後期前葉、弥生前期においては、複数遺跡から竪穴住居跡が検出されており、小本丘陵では上記時期の集落が点在し、人的活動が展開されたことが明らかになった。

Ⅲ 野外調査・室内整理の方法

1 野外調査方法

今回調査の調査地は、新田平乙部地区道路整備事業内で、東・西二つの調査区に分かれる。西調査区は約200m離れており、調査着手時の現況は、西調査区は畠地と山林、東調査区は果樹林であった（写真図版1・2）。西調査区は、概ね東西100m、南北40mの規模をもち、調査面積は4,025㎡である。東調査区は、概ね東西55m、南北10mの規模をもち、調査面積は805㎡で、合計調査面積は4,830㎡である。

調査地内各地点は、大・小メッシュグリッドを設定して呼称した。世界測地系の基準点測量成果により、西調査区の北西、 $X = -27360\text{m}$ 、 $Y = 97820\text{m}$ を架空の原点とし、原点を通る座標正東西線（X軸）をIライン、同南北線（Y軸）をAラインとした。Iラインから南方向へ、100m間隔でⅡ・Ⅲ…の順に、Aラインから東へも同様にB・C・D…の順で基準線を設けた。東西・南北基準線の交点は各ラインの名称を用いて呼び（AⅠ・BⅡなど）、交点の南東側の100m四方を大グリッドとし、その名称は、北西の基準線交点の名称をもって代表した（AⅠ・BⅡグリッドなど）。大グリッド内は、大グリッド基準線を起点に4m間隔で、東方向にa・b・c…の順に基準線（Y軸）を設け、南方向にも1・2・3…の順に基準線（X軸）を設け、これらで区画される4m四方の小グリッドを設定した。各小グリッドの呼称は、大グリッドのそれに準じ、大グリッド名称に続けて、4m方眼の北西側基準線交点の名称をもって代表した（AⅠk7グリッドなど）。

調査開始と共に草木などの雑物撤去を行い、調査範囲内に樹木が残った状態であったので、同時にこれを伐採し、枝木の整理を行った。続いて各所に試掘トレンチを設定し、人力で掘削して土層の堆積状況及び遺構検出面の確認に努めた。その結果、遺跡の基本層序はⅠ～Ⅳ層に分層可能（詳細はⅣ～Ⅰ基本層序参照）と判断され、そのうち、遺物を主に包含するのはⅢ層であることを把握し、加えてこのⅢ層中には縄文前期の降下テフラである十和田中堰テフラの混入が確認された。これにより、Ⅱ層以上は重機を用いて掘削することが可能と判断し、地表面からⅡ層下面までを重機によって掘り下げた。その後の掘削作業は基本的に人力により、遺物包含密度の低い箇所はスコップ、高い箇所は移植ヘラを用いて掘り下げ、同時に遺物の捕集に努めた。層理面においては、鋤鎌・両刃鎌・移植ヘ

ラなどを用いて遺構検出を行った。検出された遺構は、遺物の出土に注意しながら、移植ヘラなどで慎重に掘削した。遺構の規模に応じて4分法と2分法を使い分け、捨て場などについては数か所にベルトを設定して土層観察を行いながら掘削を進めた。また、遺構の範囲や遺構間の重複関係の把握が困難な場合は、サブレンチ掘削による地層の観察を行って対処した。

遺構の平面図作成は、CUBIC社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行った。遺構および地層断面図の作成は、オートレベルを用いた手測りで行った。これらの測量の基準点は、前述の世界測地系基準点である。現場の写真撮影については、キャノンEOS50D（デジタルカメラ）を中心に使用した。

なお、東調査区においては、西側耕地へ進入する農道が調査区を縦断しており、この通行を確保するため、まず、北半分の調査を行い、終了後に反転して南半分の調査を行った。西調査区においては、現況畝の耕作土を再利用したい旨の希望があったので、他の掘削残土と分けてこれを保全した。必要な記録保存が終了した平成27年7月26日、岩手県教育委員会生涯学習文化課の終了確認を仰ぎ、若干の補足調査の後、同7月30日に機材等の撤収作業を行って全作業を終了した。

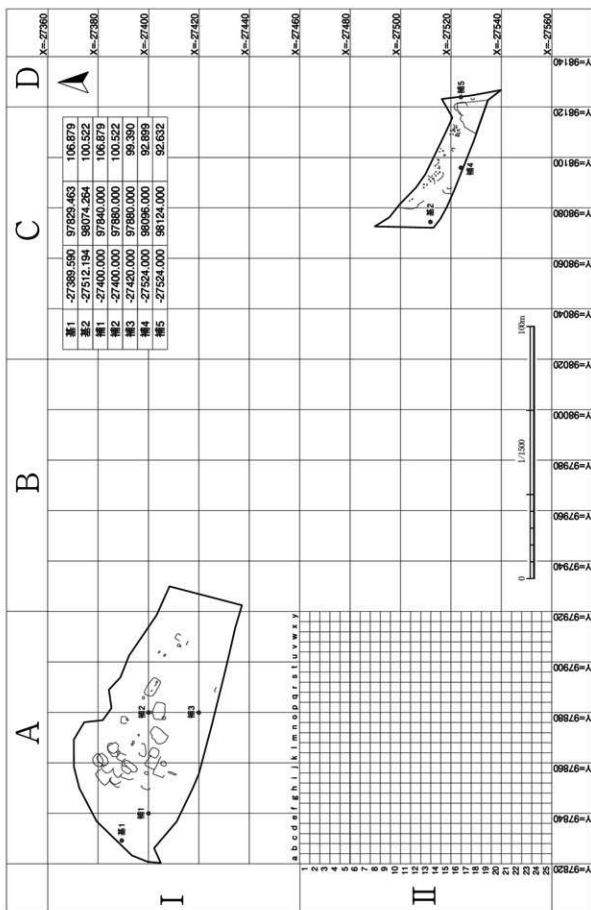
2 室内整理と報告書作成

本書の原稿執筆・表作成は原則星、高橋が分担して行い、第二章に限り佐々木が執筆した。図版の編集作業は對馬が担当、全体の編集・割り付けは星が行った。

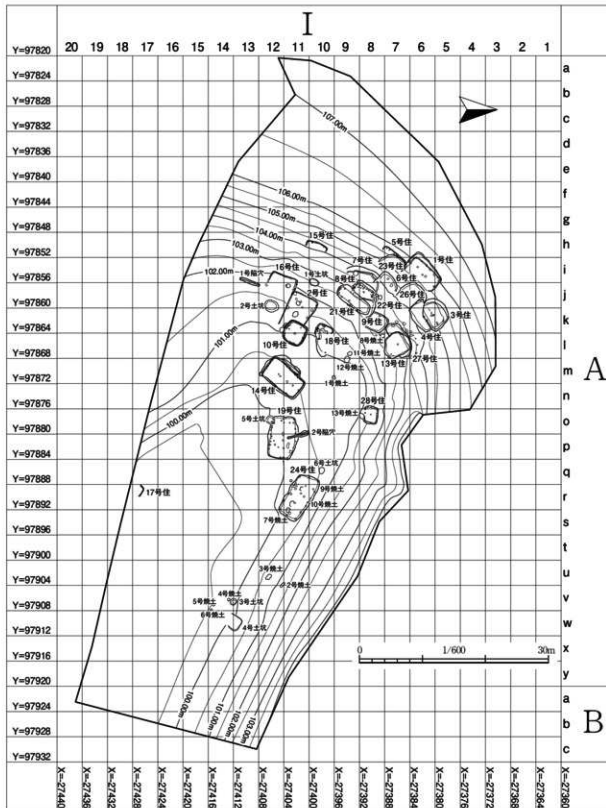
遺構図版は、電子平板のデータで作成した平面図を整理・修正した第2原図を作成し、現場で人力により作成した断面図と合わせてデジタルトレースして作成した。図版縮尺は、1/30、1/50、1/60など、遺構の性格に応じたものを採用した。

遺物の整理について、土器・陶磁器類は水洗後に袋単位で通し番号を付けて重量の計測と登録作業を行った。その際に袋に付けた通し番号は、注記番号として採用した。選択基準は、①残存率の良いもの、②遺構の時期推定になる層位的資料、③口縁部資料、などの順に優先して選択し、仮番号を付け登録した後、掲載遺物として更に選択した。土製品・石器は、水洗後、仮番号付け、掲載物の選択を行った後、掲載番号を付した。遺物図版は、手トレースによって作成し、土器類1/3、土製品1/2、剥片石器2/3、礫石器・石製品1/3で掲載した。石器類で磨痕や敲打痕が観察されるものはスクリーンで明示した。遺構写真図版は、本文や遺構図版と同様の掲載順とした。

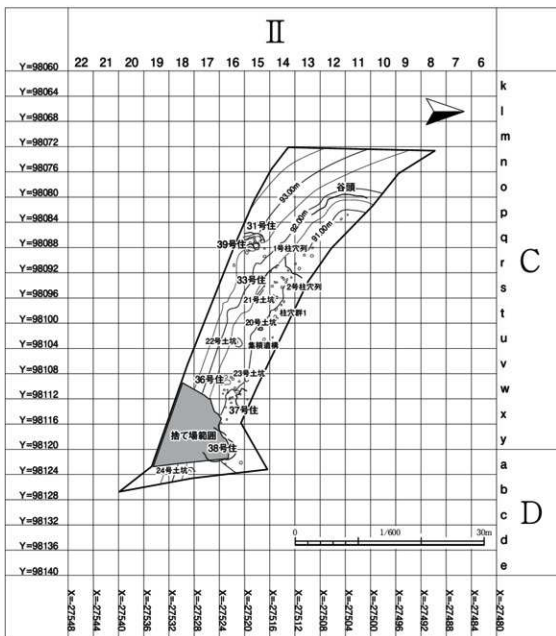
報告書の編集は、編集ソフトIndesignを用いて行い、原色写真をボジ原稿、遺物実測図をトレース図で入稿した他は、すべてデジタルデータで入稿し、印刷・製本を専門業者に委託して行った。



第4図 調査区全体図・グリッド図

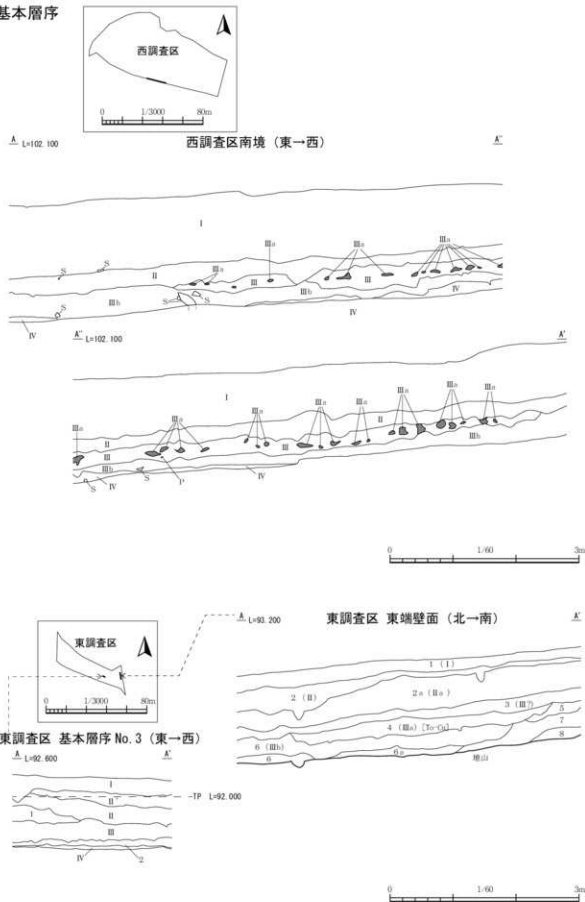


第5図 西調査区道構配置図



第6図 東駒込区道構配置図

基本層序



第7図 基本層序 (1)

西讃地区南境（東→西）

I 10YR4/2こいみ黄褐色シルト質粘土	粘性中	細りや中密		(赤土土、土に塩土層埋層)
II 10YR2/1灰色シルト	粘性やや強	細り中		(赤土土、赤土→泥部カワリ)
III 10YR3/4暗褐色シルト質粘土	粘性やや強	細り中	To-Cu ₂ -ブロック2%混入	(赤土土、赤土→泥部カワリ)
IIIa 10YR6/8明黄褐色テフラ	粘性やや弱	細りやや中密	To-Cu ₂	(赤土土、赤土→泥部カワリ)
IIIb 10YR3/7暗褐色シルト	粘性中	細り中		(赤土土)
IV 10YR5/9黄褐色粘土	粘性やや強	細りやや中密		(赤土土)

東讃地区基本層序No.3（東→西）

I' 10YR6/2灰黄褐色シルト～細粒砂	粘性弱	細りやや中密	細粒砂混入	粘土（近代以降）
II' 10YR5/1褐色中粒砂質シルト	粘性弱	細り中	中粒砂1%混入	II層を研削した粘土
III 10YR4/1褐色シルト	粘性やや弱	細り疎		古土層
III 10YR3/1黄褐色シルト	粘性やや強	細りやや中密		古土層（層中位～中位）
IV 10Y5/4こいみ黄褐色細粒砂混シルト	粘性やや強	細りやや中密		礫山
1 10YR5/2灰黄褐色シルト～粗粒砂	粘性弱	細りやや中密	炭1%・焼土1%混入	捨て場構成層
2 10YR4/2灰黄褐色シルト	粘性やや弱	細りやや中密		中粒火砕土下位の堆積 IIIa層

東讃地区東境壁面（北→南）

1			現代積土	I層
2 10YR2/3黒褐色シルト	粘性やや弱	細り中		II層
2a 10YR4/4褐色シルト質粘土	粘性やや弱	細りやや中密	黄褐色粘土20%・土器多数混入	III層
3 10YR3/3暗褐色シルト	粘性やや強	細りやや中密	(赤土土中～後部の遺物包含層、人為堆積層)	IV層
4 10YR7/6～8蒸橙～明黄褐色テフラ	粘性中	細り中	(To-Cu ₂ 二次堆積層)	IVa層
5 10YR3/3暗褐色シルト	粘性中	細り中	炭化物粒散見	遺構埋土若しくはII層b層系
6 10YR4/4褐色シルト質粘土	粘性中	細り中		遺構埋土若しくはII層b層系
6a 10YR4/4褐色シルト質粘土	粘性中	細り中		IV層上段c)
7 10YR4/4褐色シルト質粘土	粘性中	細りやや中密	炭化物粒散見	遺構埋土若しくはII層b層系
8 10YR3/4暗褐色シルト	粘性やや強	細り中		遺構埋土若しくはII層b層系

第8図 基本層序（2）

IV 検出遺構

越田松長根Ⅰ遺跡で検出された遺構は、堅穴住居跡30棟、陥し穴2基、土坑11基、焼土遺構13基、柱列2条、集石1基、柱穴状土坑7個、捨て場1個所である。遺構の時期は縄文時代前～後期のものが主体で、捨て場には一部弥生時代の遺物を含む。

1 基本層序

表土層から地山層までを基本的に以下の4層順に分層した（第7図、写真図版3）。

I層：上位の5Y6/4浅黄色細礫質シルト（畠作土）と下位の10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂質シルト（盛土層）などからなる。畠作土は現在の地表物質で、盛土層は耕地を造成するために地上げを行った際のものである。盛土中からガラス片が出土したので、近代以降に形成された地層である。層厚は、西調査区で10～110cm、東調査区で10～55cmである。この盛土層は西調査区で顕著に分布し、東調査区では果樹林造成のための雄壇状の地形を構成し、部分的にしか分布しなかった。

II層：10YR2/1黒色シルトからなる古土壌で、いわゆる黒ボク層である。層厚は15～30cmであった。下位のIII層は縄文時代前期の地層であるので、本層の年代の上限は概ね縄文時代中期に求められ、下限については、本調査地で直接に下限を示す遺物は発見されていないが、周辺の調査成果を参考に、古代に求められる。なお、東調査区では、弥生時代前期までの遺物を含む、いわゆる捨て場構成層（II a層とする；詳しくは後述）が形成されていたが、本層中の遺構ととらえられる。

III層：10YR3/4暗褐色シルト質粘土からなる古土壌で、西調査区中央部、東調査区東部で顕著に分布していた。分布域では10～30cmの層厚をもち、最大層厚は40cmに近い。土色は暗色を呈するが、上位のII層ほどではなく、II層との判別は比較的容易であった。層中には十和田中樞火山灰（以後To-Cuテフラと呼ぶ）の偽礫が混じることから縄文時代前期の地層とみてよい。また、西・東調査区ともにTo-Cuテフラの偽礫（10YR6/8明黄褐色テフラ）が濃集する箇所があり、こうした部分については、III a層とし、火山灰偽礫を含まない部分（10YR3/3暗褐色シルト）のIII b層との分離が可能であった。

IV層：10YR5/8黄褐色粘土質シルトからなる地山層である。本層上部には上位層からの草木根によってかき乱された擾乱帯が見られる部分があった。

全体の傾向としては、地形の傾斜が強い西調査区北～西部では、土壌流出のためかII・III層はあまり発達せず、I層か薄いII層の直下でIV層（地山）が検出された。西調査区の上記斜面は中央部付近で傾斜を減じるが、傾斜変換点付近ではII・III層の発達はよく、層厚も厚い傾向があった。変換点より東および南側にかけては、両層は層厚を再び減じ、そのまま東調査区方面へ連続するものとみられた。

2 堅穴住居

1号住（第9図、写真図版4）【位置・検出状況】西調査区の北部、A I 6グリッドに位置し、5号住の北に隣接する。I層を除去した後、IV層の上面で検出した。遺構上面と斜面下側に当る住居の南東側は、耕作による削剥と土壌の流出によって失われているとみられる。【重複関係】本遺構は5号住の北部を切っていた。【平面形・規模】長方形を呈し、南東の長辺を失っている。長軸6.1m、短軸3.7

m以上である。長軸の方向は南西-北東で、概ね地形の等高線の方向に平行する。【壁・床面】堅穴の壁は短辺側2辺と北西の長辺側で検出され、上述のように南東の長辺側では検出されなかった。壁の立ち上り高は、最も良好に遺存する北西側で77cmを測る。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、地山層の堆積物である10cm大の円礫が少なからず露出していたが、貼床などは観察されなかった。また、北西と南西の壁沿いは、地山が段状に掘り残されていた。段は高さ約40cm、幅60cmほどで、北東隅部から始まり、南西隅部付近で最大幅となって南西壁に続くが、南東隅部まで続くかは、欠失のためわからなかった。【堆積土】堅穴内の埋土は1~4層に分層された。遺構の大部分を埋積するのは2層(10YR4/4褐色粘土質シルト)で、3・4層もこれによく似る。これらは地山層を母材としており、人為的に埋められたものとみられる。1層はやや暗色を呈する古土壌(10YR3/4暗褐色シルト質粘土)で、南東下がり堆積するため、南東壁の流出後に形成されたものとみられる。【炉】床面上で炉は検出されなかった。【柱穴】中軸ライン上で3個(PP1・2・14)の柱穴、壁沿いに11個の柱穴ないし小ピット(PP3~11・13)が検出された。中軸線上の3基とその延長上の3基(PP3・11・13)、隅柱に当るPP4・9は、直径の小さいものもあるが、深さが20~30cmあり、主要な構造物の柱穴とみられる。【建替】これらの柱穴のうち、中軸線上には壁際のものも含めて6基(PP1・2・3・11・13・14)が連なるが、直線をなさないのを、これを2時期に分離して整理し、建替え(増築)があったと考えるのが妥当であろう。すなわち、PP2を中心柱穴としてPP1・3と組み合わせセットと、PP14を中心柱穴としてPP13・11と組み合わせセットである。PP2を中心とするセットには、PP4・8を隅柱とする住居が想定可能である(対応する隅柱は欠失)。PP14を中心とするセットにはPP4・9を隅柱とする住居が復元できる。前者を1号住a、後者を1号住bとすると、a→bに増築が行われたとみてよい。b→aだとすると、堅穴の南西部を強固に埋め戻して縮小する必要があるが、B-B'遺構断面ではそうした痕跡は確認できないからである。増築に関する具体的な改作内容は次の通りである。堅穴を南西方向へ柱間1間分(120cm)延長する。中軸線上の柱穴3基(PP13-2-1)を廃して、南西に伸長したPP13-14-11に改める。隅柱PP9とその隣のPP10を新設する。この際、旧住居の既存部分(PP8からPP4まで)はそのまま残して利用する(南東側の対応する柱穴は欠失)。つまり、1号住aの隅柱の一部を残して中軸の柱を一新し、長手方向に伸長する増築が行われたとみられるのである。壁際の段がどちらの段階で付加されたかを判断する証拠はないが、平面プランが拡張後の堅穴と調和的であることから、増築に際して設けられた可能性を指摘しておく。柱間寸法でみた両住居の規模は、1号住aは、PP2-3が2.07m、PP2-1が1.93mで長軸方向(PP1-3)が4.30m、短軸方向は2.56m(復元値)、1号住bはPP14-13が2.74m、PP14-11が2.61mで、長軸方向(PP13-11)が5.35m、短軸方向は2.94m(復元値)となる。以下、増築の模式図は第97図にまとめて示した。【遺物】(第51図1~8第83図451~454、写真図版37・63)土器1,840g(袋16、123未計量)、剥片石器3点(石匙1点、スクレイパー1点、Uフレ1点)、礫石器12点(磨石4点、磨石片2点、礫器6点)、チップ・フレーク418.3g出土した。土器(Na1~8)、石器(Na451~454)を掲載した。【時期】埋土中から出土した縄文土器は組織縄文を施文するものが主体的で、大木1式若しくは早稲田6類に属する可能性があり、遺構の時期は縄文時代前期前葉と推定される。

2号住(第10図、写真図版5)【位置・検出状況】西調査区南西部のA I k11グリッド付近に位置し、16号住の北に隣接する。II層を除去するとIV層となり、その上面で検出された。遺構上面と斜面の下側に当る南東部は、耕作による削割と土壌の流出によって失われているとみられる。【重複関係】本遺構の南辺が、16号住の北辺を切っていた。また、本遺構の東側を切って10号住が造られていた。【平

面形・規模 平面形は整った長方形を呈するとみられ、長軸5.88m以上、短軸4.48mである。長軸の方向は南東-北西方向で、概ね地形の等高線の方向に直交する。【壁・床面】 竪穴の壁は長軸側の二辺と北西の短軸側で検出された。いずれも遺存状況は悪く、高さは最大でも10cm程度であった。床面は地山を平坦に加工して構築しており、貼床などは見られなかった。【堆積土】 竪穴内の埋土は10YR3/4暗褐色シルトであった。【炉】 床面では、長軸方向の中央からやや南西側に、並んで3基の地床炉が検出された。いずれも平面形は楕円形で、炉1は72×56cm、炉2は104×80cm、炉3は80×68cmを測る。【柱穴】 竪穴の壁際と、床面で柱穴が検出された。壁際には8個のビット(PP1~5、8・11・14)があり、いずれも直径10cm程度の小規模なものである。床面では7基の柱穴が検出され(PP6・7・9・10・12・13・15)、PP6・7・13・15は壁沿いに巡る。PP2・13は隅柱に相当する。PP9・10・12は炉1付近にある。【遺物】 (第51図9~11、写真図版37) 土器500g、剥片石器1点(Uフレ)、礫石器2点(敲石1点、礫器1点)出土した。そのうち土器(No.9~11)を掲載した。【時期】 出土した縄文土器は、大木1式を主体とするが上川名2式も含まれる。縄文時代前期前葉と判断したいところではあるが、前期初頭~前葉と時期幅を広げて捉えておく。

3号住 (第11図、写真図版6) 【位置・検出状況】 西調査区北西部のA I k5グリッド付近に位置し、1号住の東にある。II層を除去後、IV層上面で検出された。【重複関係】 本遺構の南東側は半分が4号住の北部を切っていた。【平面形・規模】 隅丸長方形を基調とし、長軸5.00m、短軸3.84mである。長軸の方向は南西-北東方向で、概ね地形の等高線の方向に平行する。【壁・床面】 竪穴の壁は四辺いずれも検出され、最も遺存状態のよい北西側で深さ88cm、最も悪い南東側で20cmであった。床面は地山および下位の4号住埋土を平坦に加工して築いており、貼床は見られなかった。【堆積土】 竪穴内の埋土は5層に細分した。主たる堆積土は1~4層で、西壁際に地山崩壊土の5層が堆積する。1層は10YR3/3暗褐色シルトで、少量の巨礫が混じり、自然堆積したものとみられた。2~4層は地山層を母材とする10YR4/4褐色シルト質粘土を主体とし、人為的に埋められたものとみられた。各層の傾斜方向から、2~4層は北方(斜面の上側)から投入され、埋め残った窪みに1層が堆積したものであろう。【炉・柱穴】 床面では、炉は検出されず、柱穴が6基発見された。PP5は中央に位置し、直径約30cm、深さ20cmである。そのすぐ南にはPP6があり、直径約25cm、深さ24cmを測る。中心柱穴5と6は建替えの関係にある可能性がある。壁際にはPP1~4があり、直径はPP5・6ほど大きくはないが、いずれも深さが30cmほどであった。【遺物】 (第51~52図12~20第80図401第83~84図455~459、写真図版37・61・63) 土器3.100g(袋117・128未計量)、剥片石器1点(石匙)、礫石器14点(磨石6点、磨石片2点、敲磨器1点、敲石1点、石皿1点、礫片スクレイパー1点、円礫2点)、チッププレート32.4g出土した。そのうち土器(No.12~20)、石器(No.401・455~459)を掲載した。【時期】 縄文土器は、圧倒的に前期前葉が多いものの前期初頭が少量含まれる。ただし、4号住居と重複することから、前期初頭は混在の可能性もあり、本住居は縄文時代前期前葉と推定しておきたい。

4号住 (第12図、写真図版7) 【位置・検出状況】 3号住の下位、南側に重複して検出された。【平面形・規模】 長方形を基調とし、長軸4.88m、短軸3.48mである。長軸の方向は南西-北東方向で、概ね地形の等高線の方向に平行する。【壁・床面】 竪穴の壁は四辺いずれも検出され、最も遺存状態のよい南東側で深さ44cm、上位の3号住に破壊された北西側で10cmほどであった。床面は地山を平坦に加工して築いており、貼床は見られなかった。【堆積土】 竪穴内の埋土は、おもに1層(10YR4/4褐色シルト質粘土)と2層(10YR4/3にぶい黄褐色粘土)からなり、ともに人為的な堆積層とみられた。自

然堆積層や古土壌はみられず、3号住構築に際して念入りに埋め戻された可能性がある。【**炉・柱穴**】床面では、炉は検出されず、柱穴が基発見された。PP1は中央に位置し、直径28cm、深さ30cmであり、主柱穴である。床面にはこのほかにPP10・11があるが、いずれも小規模なピットである。北西壁の斜面には小ピットのPP2～7・9があった。【**遺物**】(第52図25～34第80図402第84図460～461、写真図版38・61・63～64) 土器1.012g、剥片石器1点(尖頭器)、礫石器3点(磨石?1点、敲石1点、石皿1点)、チップ・フレク0.8g出土した。そのうち、土器(No.25～34)、石器(No.402・460～461)を掲載した。【**時期**】出土土器は、大木1式あるいは早稲田6類cとみられる組縄縄文を施文するものを中心にNo.31などの上川名2式などを含む。縄文時代前期初頭から前葉と、時期幅を広げて捉えておきたい。【**その他**】補足として、3・4号住として一括して取り上げた土器が880gあり、その内No.21～24土器の掲載をした(第52図21～24、写真図版38)。

5号住(第13図、写真図版8)【**位置・検出状況**】1号住の南西に隣接して検出された。I層を除去後、IV層上面で検出された。【**重複関係**】本遺構は下位の23号住上部を破壊して構築されている。【**平面形・規模**】斜面下側に当る南東部の大部分を土壌の流出によって失い、北西の一辺のみが残っていた。遺存部分の平面形は直線的に延びるので、元来、方形基調のものであったとみてよい。現存部分の長軸方向は4.48m、短軸方向は0.82m以上である。長軸の方は南西～北東方向で、1号住にはほぼ等しく、概ね地形等高線の方向に平行である。【**壁・床面**】竪穴は、遺存した北西部の壁の部分で、深さ10cmほどであった。わずかに検出された床面は地山を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。【**堆積土**】竪穴内の埋土は10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトからなり、多量の炭と焼土を含んでいた。ただし、炭化した構造物材が床面上で出土するような状況はなく、消失住居ではないとみられた。【**炉・柱穴**】床面では、炉は検出されなかった。北西の壁際と段の斜面には小ピットのPP1～15があった。小ピットはいずれも直径10～15cm程度、深さも10cmほどのものが多かった。【**遺物**】出土遺物は図化できるもの出土がなく、時期を決定できるものがなかった。ただし、1号住に切られるので、これより遅ることは確実である。縄文時代前期初頭～前葉と推定しておきたい。

6号住(第14図、写真図版9)【**位置・検出状況**】1・5号住の南東(斜面の下側)に位置する。Ⅲ層を除去し、Ⅳ層の上面で検出された。【**重複関係**】本遺構は下位の7・9号住の上部を切って構築されている。【**平面形・規模**】東半部の大部分を失い、西半部が遺存していた。遺存部分の平面形は隅丸形状を呈し、本来、方形基調であったものとみられる。現存部分は南北2.88m、東西2.28mを測る。【**壁・床面**】竪穴は深さ最大25cmほどであった。床面は地山および下位の7・9号住の埋土を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。【**堆積土**】竪穴内の埋土は10YR3/4暗褐色シルトなどであった。【**炉・柱穴**】竪穴残欠の東方で、二基の地床炉が南北に並んで検出された。これらが本遺構の屋内炉であれば、住居の平面形は長方形基調のものとなる。北側の炉1の平面形は48×48cm、炉2は32×28cmで、ともにほぼ円形を呈していた。また、柱穴状の遺構が3基あり、規模からみて、PP2・3は主柱穴であろう。【**遺物**】(第52図35～36第85図462、写真図版38・64) 土器300g、礫石器3点(磨石2点、礫器1点)が出土した。そのうち土器(No.35～36)、石器(No.462)を掲載した。【**時期**】出土土器が少なく、尚且つ縄文時代前期初頭と前葉の両者が出土している。

7号住(第15図、写真図版9～10)【**位置・検出状況**】6号住の南側(斜面の下側)に位置する。Ⅲ層を除去し、Ⅳ層の上面で検出された。【**重複関係**】本遺構は下位の8号住の上部を破壊して構築さ

れている。[平面形・規模] 東半部の大部分を失い、西半部が遺存していた。本来の平面形は小判状であったとみられる。現存部分は南北5.64m以上、東西3.56mを測る。[壁・床面] 竪穴は深さ25cmほどであった。床面は地山および下位の8号住の埋土を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。[堆積土] 竪穴内の埋土は10YR4/4褐色シルトであった。[炉・柱穴] 床面で炉や柱穴は検出されなかったが、西部に屋内土坑が1基見つかった。この土坑は、平面形が直径約80cmの円形で、深さは5cmほどで、埋土は10YR6/4褐色シルトであった。[遺物] (第52～53図37～46・49第80図403～404第85図463～464、写真図版38・61・64) 土器2.730g、剥片石器2点(石匙2点)、礫石器7点(磨製石斧2点、磨石4点、磨石片1点)、石製品1点(不明石製品)、チップ・フレーク31.9gが出土した。そのうち土器(No.37～46・49)、石器(No.403～404・463～464)を掲載した。[時期] これらの縄文土器のほとんどは縄文時代前期前葉である。しかしながら留意点として、No.46の上川名2式は本遺構(7号住)と13号住からの出土破片が接合したものである。

8号住(第16図、写真図版9～10) [位置・検出状況] 7号住の東側に位置する。7号住を除去した段階で、IV層の上面で検出された。[重複関係] 本遺構は下位の21・22号住の上部を切って構築されている。[平面形・規模] 東半部を失い、西半部のみが遺存していた。現存部分の平面形は隅丸方形状で、本来は方形基調であったとみられる。現存部分は南北4.56m、東西1.88mを測る。[壁・床面] 竪穴の深さは最大で25cmほどであった。床面は地山および下位の21・22号住の埋土を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。[堆積土] 竪穴内の埋土は10YR4/4ないし10YR4/6褐色シルトであった(図中の1・2層)。[炉・柱穴] 床面で炉は検出されなかったが、西壁沿いに25個の小ピットが発見された。いずれも直径は小さく、深さも10cm前後のものが多いが、PP19・22などはやや大型である。[遺物] (第53図47～48・50第80図405～406第85図465～466、写真図版38～39・61・64) 土器270g、剥片石器3点(石匙1点、スクレイパー2点)、礫石器5点(磨製石斧2点、特殊磨石1点、磨石2点)が出土した。そのうち土器(No.47～48・50)、石器(No.405～406・465～466)を掲載した。[時期] 出土した縄文土器は上川名2式で、大木1式相当を含まない。縄文時代前期初頭に属する可能性が高い。

9号住(第17図、写真図版9～10) [位置・検出状況] 8号住の東側、A I k7グリッドに位置する。Ⅲa層を除去したのち、Ⅲb層の上面で検出された。[重複関係] 本遺構は22号住に切られている。[平面形・規模] 南半部を失い、北半部のみが遺存していた。現存部分の平面形は隅丸方形状で、本来も方形基調であったとみられる。現存部分は南北3.00m、東西2.84mを測る。[壁・床面] 竪穴の深さは30cmほどであった。床面は地山を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。[堆積土] 竪穴内の埋土は10YR3/4暗褐色シルトであった。[炉・柱穴] 床面で炉は検出されなかったが、西壁沿いに3基の柱穴が発見された。柱穴は各々直径30cmほどで、深さは10cm前後とやや浅かった。[遺物] (第53～54図51～65第80図407～410、写真図版39・61) 土器1.620g、剥片石器7点(石鏃2点、石匙1点、スクレイパー2点、Uフレ1点、縦長剥片1点)、礫石器3点(磨製石斧1点、磨石1点、磨石片1点)、チップ・フレーク18.3gが出土した。そのうち土器(No.51～65)、石器(No.407～410)を掲載した。[時期] 出土した縄文土器は大木1式を主体に、上川名2式が含まれる。縄文時代前期初頭～前葉と、時期幅を広げて捉えておきたい。

10号住(第18図、写真図版11) [位置・検出状況] 西調査区A I k11・111グリッドに位置し、2号住の東に当る。Ⅲa層を除去し、Ⅲb層上面で検出した。[重複関係] 本遺構は2号住東部を切っている。

[**平面形・規模**] 平面形は整った隅丸方形を呈し、東西3.70m、南北3.68mである。[**壁・床面**] 堅穴部の壁は四辺ともに良好に遺存しており、その深さは北部で最大80cmを測る。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。また、床面上で炉は検出されなかった。堅穴南辺中央部には、幅(東西)50cmで奥行(南北)20cmの小規模な段が、地山を掘り込んで造られていた。段の高さは床面から35cmであった。壁沿いのPP9と位置が重なるもの、建物の出入口に設けられたステップの可能性があらう。[**堆積土**] 堅穴内は、おもに、10YR3/3暗褐色シルト(図中1層)、10YR4/4褐色シルト(同2層)、10YR3/3暗褐色～10YR2/3黒褐色シルト(同5層)などによって堆積されていた(写真図版11中・下段)。5層は暗色を呈し、上面付近に巨礫が水平に並ぶ堆積状況からみて、自然堆積層とみられた。2層の堆積物は地山層に起源し、礫や土器を乱雑な状態で含んでおり、人為的に埋められたものとみられた。1層も暗色を呈し、埋められ残った窪地に有機物が堆積し、草木が繁茂するなどして土壌化した部分とみられた。また、2層が堆積した段階で現地性の可能性がある焼土が認められた。[**柱穴**] 堅穴中央にPP11と堅穴各辺の壁際にPP1～10・12～20が検出された。PP11は直径約30cmで、深さも38cmあり、中央柱穴である。壁際の柱穴は、四隅のPP1・2・5・13・18と各辺中央のPP3・9・12・16は深さが深く、主要な構造材の痕であろう。これらの間の小ピットは深さが浅く、副次的な支柱穴であろう。床面の壁際には周壁溝がみられた。溝は幅5～20cm、深さは5cm内外と浅かったが、PP9の東側の一部を除いて各辺を巡っており、本来、全周したものであろう。[**遺物**] (第54～55図版66～91第80図411～415第85～87図467～475、写真図版39～40・61・64～65) 土器9330g、剥片土器9点(石鏃2点、石匙2点、石筥1点、スクレイパー4点)、礫石器19点(特殊磨石1点、磨石15点、敲石2点、板状礫1点)、チップ・フレーク49.8gが出土した。そのうち土器(Na66～91)、石器(Na411～415・467～475)を掲載している。[**時期**] 13号住に次ぐ土器量が出土した。主体は大木1式若しくは早稲田6類cであるが、上川名2式も含まれる。縄文時代前期初頭～前葉と、時期幅を広げて捉えておきたい。

13号住(第19図、写真図版12) [**位置・検出状況**] 西調査区A I7グリッドに位置し、3・4号住の南東に当る。Ⅲ層を除去し、Ⅳ層の上面で検出した。[**重複関係**] 本遺構は下位の27号住中央部を切って造られている。[**平面形・規模**] 平面の規模は、東西3.78m、南北3.83mである。平面形は整った隅丸方形で、南辺が幅広い舌状に張り出した平面形を呈している。[**壁・床面**] 堅穴部の壁は、斜面下方に当る南辺を除いて良好に遺存しており、北部で最大95cmの深さがあった。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。また、床面上で炉は検出されなかった。[**堆積土**] 堅穴内は、おもに10YR4/1褐色シルト(図中1層)と10YR5/2灰黄褐色シルトなどからなる図中2層(①～⑤)で埋積されていた。2層は地山起源の偽礫などからなり、人為的に埋め戻されたものである。各単層は北に厚く、かつ南に下がって堆積しており、北側から堅穴を埋める作業が行われたことを示している。1層は暗色を呈し、埋め残された窪地に生成された土壌化層である。また、堅穴の南側には幅90cm、高さ25cmで、10YR4/4褐色シルトからなる土手状の高まりがみとめられた(図中3層)。この位置はPP27～28ラインの外側に当り、堅穴の南の壁を盛土によって形成した可能性が考えられた。[**柱穴**] 堅穴中央でPP19、堅穴各辺の壁際でPP22～28が検出された。PP19は直径24cmで、深さも約30cmあり、中央柱穴である。壁際の柱穴は、やはり四隅のPP22・23・24・26は深さが深く、主要な構造材の痕であろう。その他の壁際の柱穴は深さが浅く、副次的な支柱穴であろう。南辺の一部には、幅10cm、深さ5cmほどの溝があり、周壁溝の一部とみられた。また、堅穴の外周部には、堅穴上端から1～1.5mの間において14基のピットが巡っていた(PP4～11・13～17・21)。いずれも深

さは10cm内外と浅く、堅穴の方向に傾斜がみとめられるものもあり、垂木を懸けおろした接部分の痕跡かと思われた。しかし、樹木痕と峻別できたとは言えず、可能性を指摘するに留め置きたい。【遺物】(第56～58図92～128第80～81図416～422第87～88図476～482、写真図版40～42・61・65～66)土器13.050g、剥片石器18点(石鏃2点、石匙7点、スクレイパー3点、力持型スクレイパー1点、Uフレ5点)、礫石器19点(磨製石斧2点、特殊磨石1点、磨石8点、磨石片3点、台石?1点、礫器2点、礫片スクレイパー2点)、チップ・フレイク89.8g出土した。そのうち土器(Na92～128)、石器(Na416～422・476～482)を掲載した。【時期】今回調査の堅穴住居跡の中で最も多くの土器量を誇る。これらの土器は大木1式を主体に上川名2式が含まれる。また、Na121～124は遺構間接合の関係を示した。調査判断の難しい遺構であるが、縄文時代前期初頭～前葉と時期幅を広げて捉えておきたい。

14号住(第20～21図、写真図版13)【位置・検出状況】西調査区A I m12グリッドに位置し、10号住の東に当る。Ⅲ a層を除去し、Ⅲ b層の上で検出した。【重複関係】本遺構は他の遺構との重複関係をもたない。【平面形・規模】平面形は整った長方形を呈するが、北西辺が約1 m外方に張り出している。長軸方向で7.11m、短軸方向で4.50m(張出し部含む)を測る。長軸の方位は南西～北東である。本遺構周辺の地形はほぼ平坦であるが、北西側の斜面の等高線に平行する方位をとっている。【壁・床面】堅穴部の壁は、四辺とも良好に遺存しており、北部で最大76cmの深さがあった。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。また、床面上では検出されなかった。床面上では、北東の短辺から約1 m内側で、PP29～69～43のラインとほぼ重なる段が検出された。段差は約5 cmで外方が高くなっていた。この段差は後述する、建物の増築に係るものとみられる。【堆積土】堅穴内の埋土は、大まかに3層(図中の1～3層)に分けることができた。1層は10YR3/3暗褐色シルトを主体とし、さらに5層準に細分が可能であった(1・1a～1d層)。2層は10YR4/4褐色シルトを主体とし、さらに8層準に細分することが可能であった(2・2a～2g層)。3層は10YR4/6褐色シルト質粘土を主体とし、さらに4層準に細分することができた(3・3a～3c層)。2・3層は地山および旧地表物質(Ⅲ b層)を母材とし、偽礫構造も観察できるので、人為的な埋戻し層とみられる。1層は暗色化した土壌化層で、埋め残った窪みの中で生成されたものとみられた。1層中には明黄褐色のテフラ(To-Cuテフラ)堆積物の偽礫が含まれる個所があった。【柱穴】床面上の長軸方向中軸線に沿って4基の柱穴(PP66～69)が、壁沿いに65個の柱穴・小ピットが並んで検出された。中軸線上の柱穴は直径が20～30cmあって、深さも40～60cmあった。また、この延長上で壁際にあるPP6・36も同じ特徴があった。壁際の小ピットの中にも直径が他より大きく、かつ深さも深い、PP1(南東隅柱)・11(南西隅柱)・12・14・18・27・29・33(北西隅柱)・40(北東隅柱)・43・48・59～61があった。これらは両側の長辺にあって、ほぼ等間隔で配置されていることを指摘できる。これらも主要な構造材ととらえることができよう。また、四周の壁際には幅10cm、深さ5cm程度の周壁溝があり、南東隅付近を除いてほぼ全周していた。【増築】柱配置と床面に見られた段を併せ考えることによって、以下のように堅穴住居を増築した過程を復元することができる。まず、増築前の段階として、PP67を中央柱穴とする住居を抽出することができる。長手方向の中心軸上にPP67と組み合わせるPP6・69があり、PP67から両者への柱間寸法は2.49m(PP69)、2.57m(PP6)とはほぼ等しい。床面に見られた段はPP29～69～43のラインにほぼ等しく、この段は増築前の堅穴部北東壁の基部と考えられる。よって、第1段階の堅穴の限界をここに求め、PP29～43をその隅柱とし、対応する隅柱をPP1・11とする住居が復元されるのである。つまり、壁際のPP1・6・11・12・14・18・27・29・69・43・48・54・61と中央穴PP67を主要柱穴とする堅穴住居で、これを14号住 a

と呼称する。これに増築を加えたのが第2段階で、14号住 a の北東の短辺を柱間1間分拡張したものである。つまり、この箇所堅穴を約1.2m外方（北東）へ掘り広げ、新たに隅柱PP33・40、中心軸上のPP36を設けて増築を行ったのである（14号住 b とする）。第1段階では中央柱穴1基（PP67）だったものを廃し、新たにPP66・68を設けて中央柱穴に2本を配した構造としたのであろう。その際の柱間寸法は、PP6-66（2.20m）、PP66-68（1.83m）、PP68-36（2.27m）である。増築前の壁際の主柱穴は、切合いが認められないので、そのまま継続して用いられたとみられるが、その間のより小規模なピットは、14号住 a の相当箇所では密度が新設部分より明らかに高く、増築段階で改装が行われた可能性が高い。床面上の段差は、堅穴を拡張する際、わずかに床面高に齟齬が生じたと考えられるし、意図的にそうした可能性もあろう。柱間寸法でみた全体の規模は、14号住 a は長軸方向5.06m、短軸方向3.50m、14号住 b は長軸方向6.30m、短軸方向3.50mとなる。一方、増築ではなく、PP29-69-43のラインを屋内の間仕切りとし、1棟の住居とする考え方も成り立つ。この場合の根拠はPP29-69-43に小ピットが見当たらないことで、外壁とは違う構造の壁が想定できることにある。しかし、そうすると、中軸上の柱穴が4基（壁際も含めると6基）と多く、しかも柱間寸法が不規則となる。また、壁際の小ピットの密度に差があることも説明がつきにくくなり、やはり、増築と考える方が妥当である。【遺物】（第58～59図129～142第81図423～424第88図483～486、写真図版42・62・66）土器3,900g、剥片石器6点（石鏃1点、石匙2点、スクレイパー1点、力持型スクレイパー1点、Uフレ1点）、礫石器14点（磨製石斧2点、磨石8点、台石1点、礫器2点、扁平礫1点）、石製品1点（石棒）、チップ・フレーク40.8gが出土した。そのうち土器（No.129～142）、石器（No.423～424・483～486）を掲載した。【時期】これらの出土した縄文土器は、No.129（前期初頭）以外は縄文前期前葉である。縄文時代前期前葉に属するものとみられる。

15号住（第22図、写真図版14）【位置・検出状況】西調査区A I h10グリッドに位置し、7号住の南西、1号土坑の西に当る。I層を除去するとすぐにIV層が現れ、その上面で検出された。他の遺構との重複関係はない。【平面形・規模】斜面の下方に当る東側の大半を土壌流出で失い、ほぼ西側の一辺のみが遺存していた。現存部分は南北3.48m、東西1.03mを測る。平面形は直線的で、本来、方形基調のものであったとみられる。現存部分の方位は南南西～北北東である。【壁・床面】堅穴の深さは最大で30cmであった。床面は地山を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。【堆積土】堅穴内の埋土は10YR4/4褐色シルトであった。【炉・柱穴】床面では西壁沿いに12個の小ピットが発見された。このうち、PP3・4・7・9・10・12は比較的深く掘られていた。炉は検出されていない。【遺物】土器20gが出土したが、図化できるものはなく、時期も特定することができなかった。【時期】縄文時代前期初頭～前葉の時期幅で推定される。

16号住（第23図、写真図版14）【位置・検出状況】西調査区A I j12グリッドに位置し、2号住の南、1号土坑との間に当る。I層を除去するとすぐにIV層が現れ、その上面で検出された。2号住居に北東辺を切られている。【平面形・規模】斜面の下方に当る南東側の大半を土壌流出で失い、西側の一辺付近のみが遺存していた。現存部分は南北4.59m、東西1.90mを測る。平面形は直線的で、本来、方形のものであったとみられる。現存部分の方位は南南西～北北東である。【壁・床面・堆積土】堅穴の深さは最大で23cmで、堅穴内の埋土は10YR4/4褐色シルトであった。床面は地山を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。炉は検出されていない。床面北部には屋内土坑があった。この土坑は南北87cm、東西58cm、深さ7cmで、埋土は10YR4/4褐色シルト（1層）と10YR5.6黄褐色粘土（2

層)で、2層は土坑の掘削時形成層であろう。【**炉・柱穴**】西壁沿いの床面と斜段面に22個の小ピットが発見された。このうち、PP1・2・3・8・10・11・15・17・19・20は比較的深く掘られており主要な構造材の柱穴であろう。PP3・15は隅柱で、PP2・20は対向する位置に当る。【**遺物**】(第81図425、写真図版62)【**出土遺物**】土器50g、剥片石器1点(石鏃)出土した。そのうち石器(№425)を掲載した。【**時期**】縄文時代前期初頭～前葉の時期幅で推定されるが、2号住に切られる事実を最大限評価すれば、あるいは縄文時代前期初頭に属する可能性もある。

17号住(第24図、写真図版15)【**位置・検出状況**】西調査区南端東部のA I r16グリッドに位置し、調査区南限に遺構の一部がかかる状態で検出された。Ⅲ層を除去し、Ⅳ層の上面で検出された。【**平面形・規模**】検出された部分は東西1.4m以上、南北0.9m以上を測る。東端は隅に近いようで、全体形としては、後述する28号住のように小型方形の住居かもしれない。【**壁・床面・堆積土**】堅穴の深さは40cmであった。堅穴内のおもな埋土は、10YR2/3黒褐色シルト(図中2層)、10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルトなど(同7～9・12層)、10YR5/6黄褐色粘土(同6層)であった。6層は扁平な地山層偽礫からなり、加工時形成層である。7～9・12層は地山層起源の偽礫からなり、壁の崩落ないし人為的な埋戻しに伴うものである。2層は遺構廃絶後、埋め残った窪地で生成された古土壌である。【**炉・柱穴**】炉は検出されなかった。壁沿いの床面には8個の小ピットが発見された。このうち、PP1・8は、他と比べて直径も大きく、深く掘られていた。【**遺物**】(第59図143～145第88図487、写真図版42・66)土器400g、礫石器2点(特殊磨石1点、磨石片1点)が出土した。そのうち土器(№143～145)、石器(№487)を掲載した。【**時期**】出土土器は大木1式で縄文時代前期前葉に属するとみられる。

18号住(第25図、写真図版16)【**位置・検出状況**】西調査区A I k10グリッドに位置し、Ⅲ a層を除去し、Ⅲ b層の上面で検出された。中央部を風倒木によって大きく破壊され、木の根による攪拌も被っていた。【**平面形・規模**】東西5.20m、南北2.86mを測り、平面形は不整な楕円形を呈する。【**壁・床面**】【**堆積土**】堅穴の深さは南側で40cmであった。堅穴内の埋土は、10YR5/1褐灰色シルトであった(図中8・13)。【**炉・柱穴**】炉はみとめられず、壁沿いには9個の小ピットが発見された。【**遺物**】(第59～60図146～156第81図426、写真図版43・62)土器3.810g、剥片石器6点(石匙2点、スクレイパー3点、Uフレ1点)、礫石器1点(磨石片)、チップ・フレーク43.9gが出土した。そのうち土器(№146～156)、石器(№426)を掲載した。【**時期**】出土土器は大木1式と上川名2式である(※上川名2式も一定量以上含まれる)。縄文時代前期初頭～前葉と、時期幅を広げて捉えておきたい。

19号住(第26図、写真図版17)【**位置・検出状況**】西調査区中央部のA I p12グリッドに位置し、14号住と24号住の間に当る。Ⅲ a層を除去し、Ⅲ b層の上面で検出した。【**重複関係**】2号陥穴と5号土坑が本遺構を切っている。【**平面形・規模**】平面形はやや胴張り気味の長方形を呈し、長軸方向で6.70m、短軸方向で4.88mを測る。長軸の方位はほぼ正東西である。本遺構周辺の地形はほぼ平坦であるが、北側の斜面の等高線に平行する方位をとっている。【**壁・床面**】堅穴部の壁は、四辺とも良好に遺存しており、北西隅で最大85cmの深さがあった。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。また、床面上で炉は検出されなかった。【**堆積土**】堅穴内の埋土は、大まかに4層に分けることができた。1層は10YR3/4暗褐色シルト質粘土、2層は10YR3/3暗褐色シルト質粘土、3層は10YR2/3黒褐色シルト、4層は10YR4/4褐色粘土からなる。4層と2層は地山層を母材とする人為的な直立層で、2回の埋戻し作業があったことがわかる。3層と1層は暗色を呈する古

土壌である。3層は最初の埋立て（4層）作業後に生成されたもので、2回の埋立てに時間的間隙があったことを示す。1層はⅢa層で、遺構が廃絶した後、草木の繁茂とともに生成されたものであろう。【柱穴】床面上の長軸方向中軸線に沿って5基の柱穴（PP27・35・36・38・24）があり、壁沿いには26基の柱穴（PP1～21・30～34）が並んで検出された。これらとは別に、壁から離れた位置にも柱穴（PP22～25・28・29・34）が分布していた。これらの柱穴のうち、中軸線にのらず、壁から離れて掘られた柱穴の機能が問題となる。これらのうち、東側のPP27・28とその延長上のPP8・30、そして西側のPP24・37とその延長上のPP22・25は、それぞれに竪穴内を南北に分割するラインを構成している。【増築】これについては、住居内の間仕切りか建替え（ないし増築）の痕跡のいずれかと考えることができるが、以下の理由から増築と考えた。間仕切りと考えた場合、西側は東西にわずかに50cmほどの空間を仕切っていることになり、その設置目的に疑問を覚える。また、南壁際の柱列の密度が高く、内外に2列がみとめられることに合理的な説明ができない。この問題は、西辺を50cm、東辺を150cmそれぞれ拡張し、南辺を造り直したとすれば、説明が可能となる。つまり、PP36を中央柱穴とし、隅柱をPP8・30・22・25とする住居（19号住a）が先行してあり、それを上記のように改作して、中央柱をPP35・38とし、隅柱をPP1・4・10・13とする住居（19号住b）にしたのである。南壁際の柱穴の密度の高い箇所は2つの住居の壁柱列がほぼ同じ位置に重複して設けられていたことを示す。一方、北壁際の柱穴の密度は南壁より低いことから、この部分の旧住居の柱を残して利用したとみられる。改作は北壁の一部のみを残し、他をすべて造り替えた、完全な建替えに近い増築であったとできよう。19号住aでは中央柱穴1本（PP36）で、柱間寸法はPP36-24が2.00m、PP36-27が2.06mであった。建替えに際しては長軸方向に伸長するので、19号住bでは、中央柱穴2本（PP35-38）で、柱間寸法は、PP35-38が1.14m、PP38-2が2.28m、PP35-12が2.79mとなっている。柱間寸法をみた全体の規模は、19号住aは長軸方向4.06m、短軸方向3.75m、19号住bは長軸方向6.21m、短軸方向3.98mとなる。【遺物】（第60～61図157～168第81図427第88～90図488～498、写真図版43・62・67～68）土器3.010g、剥片石器4点（スクレイパー3点、Uフレ1点）、礫石器44点（磨製石斧1点、特殊磨石2点、磨石14点、敲磨器2点、敲石4点、砥石1点、石皿2点、台石4点、凹石1点、礫器3点、礫片スクレイパー1点、円礫9点）、チップ・フレーク23.9gが出土した。そのうち土器（№157～168）、石器（№427・488～498）を掲載した。【時期】出土土器は大木1式と上川名2式である（※上川名2式も一定量以上含まれる）。また、明確に組縄縄文と特定できなかった土器類（Ⅱ群6類b種）も、特徴的に出土していることも、特記事項である。縄文時代前期初頭～前葉と、時期幅を広げて捉えておきたい。

21号住（第27図、写真図版18）【位置・検出状況】西調査区A I 9グリッドに位置し、8号住を除去した後、Ⅲb層上面で検出された。重複関係は、22号住を切り、8号住に切られている。【平面形・規模】平面形は長い楕円形で、長軸6.14m、短軸2.25mである。長軸の方向は南西～北東方向で、概ね地形の等高線の方向に平行する。【壁・床面】竪穴の壁は四角いながらも検出され、最も遺存状態のよい西側で深さ35cmほどであった。床面は地山を平坦に加工して築いており、貼床は見られなかった。【堆積土】竪穴内の埋土は、おもに10YR4/4褐色シルト（図中1層）と10YR3/4暗褐色シルト（図中2層）であった。【炉・柱穴】床面では、炉は検出されず、柱穴と小ピットが26基発見された。大部分は壁沿いに掘られており小ピットが多い。PP7・10・13・18・24～26などは比較的深く掘られているが、総合的には規則性に乏しい。【遺物】（第61図169～172第81図428、写真図版44・62）土器1.190g、剥片石器2点（石鏃1点、石匙1点）、礫石器4点（磨製石斧1点、磨石3点）、石製品1点（石刀?）、

チップ・フレーク19.4gが出土した。そのうち土器 (No169～172)、石器 (No428) を掲載した。【時期】出土土器は多くないが大木1式がほとんどである。縄文時代前期前葉に属するものとみられる。

22号住 (第28図、写真図版18) 【位置・検出状況】 8号住の東側、A1J8グリッドに位置する。Ⅲa層を除去したのち、Ⅲb層の上面で検出された。【重複関係】 本遺構は9号住を切り、8・21号住に切られている。【平面形・規模】 南半部を21号住によって壊され、北半部のみが遺存していた。現存部分の平面形は隅丸方形状で、本来も方形基調であったとみられる。現存部分は東西2.88m、南北2.48mを測る。【壁・床面】 堅穴の深さは50cmほどであった。床面は地山を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。【堆積土】 堅穴内の埋土は10YR4/4褐色シルト (図中の1層)、10YR4/4褐色粘土質シルトであった (図中の2層)。【炉・柱穴】 床面で炉および柱穴は検出されなかった。【遺物】 (第81図429、写真図版62) 剥片石器1点 (石鏃) 出土した。石器 (No429) を掲載した。【時期】 縄文時代前期初頭から前葉に属する8・21号住に切られているので、所属時期はそれを下ることはない。よって、縄文時代前期初頭の可能性がある。

23号住 (第29図、写真図版8) 【位置・検出状況・重複関係】 西調査区A1I7グリッドに位置し、5号住を除去した後、Ⅳ層上面で検出された。【平面形・規模】 斜面下方に当る南東部を失い、北・西辺のみが遺存する。平面形は隅丸方形状とみられ、南西-北東方向で3.50m、南東-北西方向で3.30mである。【壁・床面】 堅穴の壁は、最も遺存状態のよい北西側で深さ30cmほどであった。床面は地山を平坦に加工して築いており、貼床は見られなかった。【堆積土】 堅穴内の埋土は、おもに10YR4/3Cいり黄褐色粘土質シルト (図中1層) であった。偽磔構造がみとめられ、人為的な埋戻しが行われていたとみられる。【炉・柱穴】 床面では、炉は検出されなかった。北西部の壁際に小ピット2個 (PP1・2) が検出された。【遺物】 土器30gが出土したが、所属時期を特定できるものはなかった。【時期】 縄文時代前期初頭～前葉の時期幅で推定される。

24号住 (第30図、写真図版19～20) 【位置・検出状況】 西調査区A1I11グリッドに位置し、19号住の東に当る。Ⅱ層を除去し、Ⅲb層の上面で検出した。【重複関係】 本遺構埋土の3層上面で7・9・10号焼土を検出した。【平面形・規模】 平面形は整った長方形を呈し、長軸方向で7.53m、短軸方向で3.84mを測る。長軸の方位は東南東-西西北西で、北側の斜面の等高線に平行する方位をとっている。【壁・床面】 堅穴部の壁は、四辺とも良好に遺存しており、北部で最大75cmの深さがあった。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。床面上で炉は検出されなかった。また、南辺の壁斜面には立石状の板石が出土した。板石は斜面に斜めに突き刺さったような状態で検出されたが、その機能は不明である。【堆積土】 堅穴内の埋土は、大まかに以下の4層に分けることができた。図中の (以下省略) 1層は10YR2/3黒褐色シルトからなり、その上位にTo-Cuテフラの小偽磔が混じっていた。下位層 (3層) による埋戻しで埋め残った窪地に生成された土壌化層である。3層は10YR4/6褐色粘土質シルト、4層は10YR4/6褐色粘土質シルト、5層は10YR4/4褐色シルト質粘土からなっており、それぞれの母材はⅣ層 (地山) である。いずれも偽磔構造がみとめられ、人為的な埋戻し層とみてよい。3層を用いた埋戻しが終了した後、その上面には、3基の焼土遺構 (7・9・10号焼土遺構) が東西に並んで検出された。埋戻し後、浅い窪地として残った場所を利用して地床炉が設けられたものとみられる。【柱穴】 床面上の長軸方向中軸線に沿って4基の柱穴 (PP19～22) が、壁沿いには16個の小ピットが並んで検出された。これとは別に長軸線にも壁沿いのラインに

も外れる柱穴状遺構が5基 (PP17・18・23・25・26) あった。PP18・25・26は断面形が浅い皿状で柱穴とはみられなかったが、そのほかは、直径の差はあるもののある程度の深さをもって掘られており、これらを柱穴として扱う。【増築】ここでも19号住と同様に、長軸と壁のラインから外れる柱穴に注目すると、増築が行われたことがわかる。つまり、PP17・23は中軸線上のPP19とともに南北方向の間仕切りのような位置をとるが、間仕切りであればPP17が外側に突出する説明がつかなくなる。やはり、以下のように増築が行われたとみるのが妥当であろう。第1段階として、PP20・21の2本を中心柱とし、PP11・15・4・9を隅柱とする竪穴住居 (24号住 a) が復元できる。第2段階に、この住居の北西を柱間1間分 (約150cm) 拡張し、中心軸上南西の柱 (PP22) を約50cm南東へずらす改作が行われた。それに際しては、北西妻側のPP19・23・17を廃して、PP2・1・3を新設し、反対側ではPP22を廃してPP10に移したとみられるのである。その一方、旧住居の中心柱や平側の柱はそのまま利用され続けられ、PP20・21を中心柱、PP1・3・9・11を隅柱とする住居 (24号住 b) ができたとみられるのである。

24号住 a の長軸 (棟) 方向の柱間寸法は、PP20-21で1.83m、PP21-22で1.85m、PP20-19で1.33m、全体としては長軸方向5.01m、短軸方向3.45mとなる。同様に、24号住 b では、PP20-21で1.83m、PP21-10で2.37m、PP20-2で2.77m、全体としては長軸方向7.07m、短軸方向3.45mとなる。【遺物】(第61~62図173~185第79図348~349第81図430~432第90~91図499~504、写真図版44・60・62・68) 土器6.104g、土製品2点 (円盤状土製品2点)、剥片石器4点 (石鏃2点、石匙1点、ウレ1点)、礫石器24点 (磨製石斧1点、特殊磨石2点、磨石8点、磨石片3点、敲磨器1点、敲石2点、砥石1点、台石1点、台石?1点、棒状礫1点、礫器1点、円礫2点)、チップ・フレーク10.4gが出土した。そのうち土器 (No173~185)、土製品 (No348~349)、石器 (No430~432・499~504) を掲載した。【時期】出土土器は大木1式である (これらの土器には前期初頭が含まない)。縄文時代前期前葉に属するものとみられる。

26号住 (第31図、写真図版21) 【位置・検出状況】西調査区A I 6グリッドに位置し、1・4・6号住の間に当る。I層を除去した後、IV層上面で検出された。重複関係は、4号住に切られている。【平面形・規模】斜面下方に当る南東部を失い、北・西辺のみが遺存する。平面形は隅丸方形状とみられ、南西-北東方向で4.0m以上、南東-北西方向で3.9m以上である。【壁・床面】竪穴の壁は、最も遺存状態のよい北西側で深さ30cmほどであった。床面は地山を平坦に加工して築いており、貼床は見られなかった。【堆積土】竪穴内の埋土は、10YR4/6褐色シルト (図中1層)、10YR4/4褐色シルト (同2層)、10YR4/6褐色シルト (同3層) であった。地山層を母材とする2層には偽礫構造がみとめられ、人為的に投入されたものとみられた。【竪穴】床面では、炉や柱穴等は検出されなかった。【遺物】(第62図186~188第81図433、写真図版44・62) 土器630g、剥片石器1点 (石鏃)、礫石器5点 (特殊磨石1点、敲石1点、礫器3点)、チップ・フレーク15.3gが出土した。そのうち土器 (No186~188)、石器 (No433) を掲載した。【時期】埋土中から出土した縄文土器は細片であるが、胎土や地文の様相などから縄文時代前期前葉と推定される。

27号住 (第32図、写真図版22) 【位置・検出状況】西調査区A I 7グリッドに位置し、13号住に中央部を切られていた。13号住とII層を除去した後、IV層上面で検出された。【平面形・規模】竪穴は、斜面下方で13号住に壊され南辺中央部を失うが、そのほかは概ね遺存していた。平面形は長楕円形とみられ、南西-北東方向で5.98m、南東-北西方向で約2.7mである。【壁・床面】竪穴の深さは20cm

ほどであった。床面は地山を平坦に加工して築いており、貼床は見られなかった。【堆積土】 堅穴内の埋土は、10YR4/1褐色シルト（図中3層）、10YR5/2暗灰黄色シルト（同4層）であった。【炉・柱穴】 床面では、炉は検出されず、北東部の壁際で小ピットが2個（PP1・2）検出された。これらは直径、深さともに小規模なもので、ほかに同様な遺構もみられなかった。【遺物】 チップ・フレイク38gが出土した。【時期】 本遺構を切る7号住は縄文時代前期初頭～前葉に属するので、これを行くことはない。縄文時代前期初頭の可能性がある。

28号住（第33図、写真図版22）【位置・検出状況・重複関係】 西調査区A I o8グリッドに位置し、調査区中央の北限に近い。II層を除去し、IV層の上面で検出した。なお、本遺構南に近接して、13号焼土を検出している。【平面形・規模】 平面形は整った隅丸方形を呈し、東西285cm、南北230cmである。【壁・床面】 堅穴部の壁は四辺ともに良好に遺存しており、その深さは斜面上方に当る北部で38cm、下方の南部で12cmであった。床面は地山層を平坦に加工して利用しており、貼床などは観察されなかった。また、床面上で炉は検出されなかった。【堆積土】 堅穴内は、おもに、10YR5/6黄褐色粘土～10YR4/4褐色シルトなどからなる1層（第33図A-A'では1～1f層に細分）、10YR3/4褐色シルト質粘土（図中2層）、10YR5/6黄褐色粘土（図中3層）などによって埋積されていた。【柱穴】 堅穴中央にPP24と堅穴各辺の壁際に24個の小ピットが検出された。PP24は直径16cm、深さ27cmで、中央柱穴である。壁際のものも直径約10cm、深さ5～10cm程度のもが多いが、PP4・9などは深さ20cmほどあり、各辺中央にある柱穴はやや大形とみられた。周壁溝はみとめられなかった。【遺物】（第62図189～191、写真図版44）土器280gが出土した。そのうち土器（№189～191）を掲載した。【時期】 出土土器から縄文時代前期前葉に属するものとみられる。

31号住（第34図、写真図版23）【位置・検出状況】 東調査区の西方南端、C II q15グリッドに位置する。I層を除去するとすぐにIV層が現れ、その上面で検出された。39号住居を切っている。【平面形・規模】 北へ下がって斜面の下方に当る北東側の大半を土壤流出と1層の耕作によって失い、南部は調査区外に当っており、北西部の一部のみが遺存していた。現存部分は南北3.45m、東西4.40mを測り、平面形は隅丸形状である。本来、方形基調の堅穴住居で、北西隅付近が遺存しているとみてよい。【壁・床面・堆積土】 堅穴の深さは約70cmで、北部で東へは90°屈曲していた。床面はIII・IV層を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。堅穴内の埋土は10YR4/1褐色シルト（II層）であった。床面では地床炉が2箇所検出された。炉1は北西隅付近にあり、東西72cm、南北85cmであった。炉2は調査区南壁際にあつて、東西44cm、南北35cmであった。【炉・柱穴】 西壁沿い5基の柱穴（PP1・3・4・8・9）と、壁から少し離れた床面に3基の柱穴（PP5～7）が発見された。これらは直径が20～50cm、深さ20～30cmあって、いずれも主柱穴とみられる。【遺物】 土器667g、剥片石器2点（石鏃1点、スクレイパー1点）、礫石器37点（特殊磨石1点、磨石2点、磨石片1点、円礫33点）、チップ・フレイク1.0gが出土した。【時期】 埋土中からは、詳しく時期は判定できる遺物は発見されなかったが、遺構埋土にII層が含まれるので縄文中期から平安時代までのいずれかに当るが、方形基調の住居の形態からみて古代に属する可能性が高い。

33号住（第35図、写真図版24）【位置・検出状況】 31号住の北東、C II s15グリッドに位置する。II層を除去した後、III層の上面で検出された。【平面形・規模】 堅穴南東隅付近だけが遺存していた。現存部分は南東～北西方向で4.00m、東西南西～北東方向で0.96mを測る。【壁・床面・堆積土】 堅穴の

深さは18cmであった。床面はIV層を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。竪穴内の埋土は10YR3/1黒褐色シルト（II層）であった。竪穴から南東方向へは、幅約30cm、深さ約20cmの溝が伸びていた。竪穴内にかまどの痕跡や、焼土などはみられなかったが、煙道である可能性が考えられる。【**炬・柱穴**】壁および床面相当の位置で5基の柱穴（PP2・3・6・22・23）が発見されたが、住居の柱配列を復元するには至らなかった。【**遺物**】土器40g、礫石器4点（磨石片1点、円礫2点、礫器1点）が出土した。【**時期**】溝埋土中からは、ミガキを加えた土師器片が出土し、遺構埋土はII層であるので古代に属する可能性が高い。

36号住（第36・37図、写真図版25）【**位置・検出状況**】東調査区の東方、C II w16グリッドに位置する。II層を除去した後、IV層の上面で検出された。壁は未検出にある。【**平面形・規模**】中央PPを中心に16個の小ピット（PP1～16）がこれを取り巻くように分布していた。中央PPは東西0.78m、南北0.99m、深さ0.17mを測り、大部分は10YR4/1褐色シルトが自然堆積して埋没していた。その他のピットは直径20～30cm、深さ10～30cmほどのもので、地山層偽礫を含む黒褐色シルトで埋められているものが多かった。PP2・9・11・12～15は直径2m強の円の上に分布し、小規模な竪穴住居の柱穴のみが遺存している可能性が考えられた。【**遺物**】土器20g出土した。【**時期**】埋土中からは、詳しく時期は判定できる遺物は発見されなかったが、遺構埋土の様相から、古代の可能性もある。

37号住（第38図、写真図版25）【**位置・検出状況**】36号住の北東、調査区北壁際位置するII層を除去した後、IV層の上面で検出された。竪穴の南半部を検出したが、北半部は調査区外へ続いていた。他の遺構との重複関係はない。【**平面形・規模**】現存部分は東西2.68m、南北2.00mを測る。平面形は隅丸方形を呈するものとみられる。【**壁・床面・堆積土**】竪穴の深さは西側で15cmほどであったが、大部分は遺存状況が悪く、5cm程度しかなかった。床面はIV層を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。竪穴内の埋土は10YR4/1褐色シルト（II層）であった。南辺の中央部には舌状の突出があり、その内側からは炭化物がやや集中して出土した。その辺りに被熱した面はみられなかったが、かまどが設置されていたものとみられる。突出部は煙道の痕跡であろう。【**炬・柱穴**】竪穴のほぼ中央とみられる位置に柱穴が1基みとめられた（PP2）。PP2は直径、深さともに15cmほどであった。【**遺物**】なし。【**時期**】一辺2.5mほどの小型竪穴建物で、かまどをもち、一辺の中央部に煙道を設けた例は下閉伊郡山田町沢田I遺跡RA502・507（平安時代）でみられる。本遺構はこれらに類似すること、II層が埋土になっていることから古代に属するものとみられる。

38号住（第39図、写真図版26）【**位置・検出状況**】東調査区の東端付近D II a16グリッドに位置する。III a層を除去した後、III b層上面で検出された。他の遺構との重複関係はない。【**平面形・規模**】平面形は不整な楕円形で、南側の一部を失う。遺存部分は、南西～北東方向で3.2m、南東～北西方向で3.23mである。【**壁・床面**】竪穴の深度は、最も遺存状態のよい北西側で深さ50cmほどであった。床面は地山を平坦に加工して築いており、貼床は見られなかった。【**堆積土**】竪穴内の埋土は、To-Cuテフラの偽礫を多く含むIII a層の下に、10YR5/3に黄褐色シルト（図中2層）、10YR5/1褐色シルト（同3層）、10YR6/3に黄褐色シルト（同4層）、10YR4/4褐色シルト（5層）がみとめられた。地山層を母材とする2層には偽礫構造がみとめられ、人為的に投入されたものとみられた。3～5層は土壌化層とみられた。【**炬・柱穴**】床面では、炬は検出されなかった。北東の竪穴壁際に小ピットが1個検出された。【**遺物**】土器445gが出土した。【**時期**】埋土中から出土した縄文土器

は細片で土器型式の特定はできないが、胎土や地文の様相などから縄文時代前期前葉と推定される。加えて、To-Cuテフラ降下期より古い。

39号住 (第40図、写真図版27) [位置・検出状況] 東調査区の西方南端、31号住の東に位置する。31号住に切られており、同遺構を除去し、IV層上面で検出された。後述するように、方位は31号住にはほぼ等しく、本遺構を建替えて31号住が造られたのかもしれない。[平面形・規模] 遺存部分は東西1.2m、南北2.7mで、ほぼ南北方向に直線的に延びていた。この方位は31号住とほぼ同じで、竪穴の西部のごく一部が遺存するものとみられた。[壁・床面・堆積土] 竪穴の深さは約15cmであった。床面はⅢ・Ⅳ層を平坦に加工したもので、貼床は見られなかった。竪穴内の埋土は10YR4/1褐色シルト(Ⅱ層)であった。北側には、東西1.05m、南北0.97m、深さ0.12mの窪みがあり、竪穴内側方向に向かって、馬蹄形に開いていた。内部は焼土や粘土塊が詰まっており、かまど基底部の残欠とみられた。煙道の痕跡はみられなかった。[炉・柱穴] 6個の小ピット(PP1~6)が発見された。PP1は直径48cm、深さ12cmあり、支柱穴を構成するものかもしれない。また、PP3・4はかまどの両袖の位置に当り、かまどの構造に関係するものかもしれない。[遺物] 礫石器23点(円礫23点)出土した。[時期] 埋土中からは、詳しく時期は判定できる遺物は発見されなかったが、遺構埋土にⅡ層が含まれるので縄文中期から平安時代までのいずれかに当たるが、31号住との関係からみて古代に属する可能性が高い。

3 陥し穴

1号陥し穴 (第41図、写真図版28) 西調査区A I i13グリッドに位置し、16号住の南に当る。平面形は細長い溝状で、方位は南南西-北北東である。他の遺構との重複関係はない。長さ3.23m、幅0.51m、深さ0.79mを測る。上端から20cm下で幅25cmほどとなり、それ以下はさらに急角度に深くなっていた。埋土は、地山層の崩落土(図中の2・5層)を含む自然堆積層(同3・4層)で、最終的に古土壌(Ⅱ層; 図中の1層)が形成されて埋没していた。[遺物] 土器280gが出土した。[時期] 時期はⅡ層を埋土に含むことから、縄文時代中期若しくは後期とみられるが、詳細は不明である。

2号陥し穴 (第41図、写真図版28) 西調査区A I p11グリッドに位置し、19号住の北側に当る。平面形は細長い溝状で、方位は南南西-北北東である。19号住を切っていた。長さ3.46m、幅0.55m、深さ0.85mを測る。上端から15cm下で幅30cmほどとなり、それ以下はさらに急角度に深くなっていた。埋土最下層(図中の4層)は自然堆積しており、その上位に地山層の偽礫を含む人為的な埋戻し層(図中の2・3層)が堆積し、最終的に古土壌(Ⅱ層; 図中の1層)が生成されて埋没していた。[遺物] 土器10g、礫石器1点(磨石)出土した。[時期] 時期はⅡ層を埋土に含むことから、縄文時代中期若しくは後期とみられるが、詳細は不明である。

4 土 坑

土坑は野外調査時において、西調査区で検出したものに1号から順に連番で命名し、東調査区で検出したものを20号土坑から命名して精査を行った。西調査区で検出した土坑様のプランの中には、精査途中で木根攪乱など人為により掘削された土坑でないものが多く判明した。従って、それらは欠番とした(※7~19号土坑は存在しない)。

1号土坑 (第42図、写真図版29) [位置・検出状況] 西調査区A I i10グリッドに位置し、16号住の北側に当る。I層の除去後、IV層上面で検出した。[平面形・規模] 平面形は楕円形で、長軸方向は1.56m、短軸方向は1.12m、深さは15cmである。[壁・底面] 断面形は皿状で、底面は平坦、壁は緩やかに立ち上がる。[堆積土] 埋土は暗褐色シルトや褐～黄褐色粘土 (図中の1・2層) が主体であった。[遺物] (第62図192～193、写真図版44) 土器220g、礫石器1点 (磨石) が出土した。そのうち土器 (No 192～193) が出土した。[時期] 出土土器は上川名2式で、大木1式を含まない。遺物からみて、縄文時代前期初頭に属すると推定される。

2号土坑 (第42図、写真図版29) [位置・検出状況] 西調査区中央部A I j12グリッドに位置する。本来、16号住と重複する位置にあるが、土壌流出のため本遺構まで16号住の埋土が分布していないので、切合い関係は不明であった。I層の除去後、III層上面で検出した。[平面形・規模] 平面形はほぼ円形で、長軸方向は1.56m、短軸方向は1.12m、深さは0.27mである。[壁・底面] 断面形は皿状で、底面は凹凸が激しく、壁は約45°で立ち上がる。[堆積土] 埋土は暗褐色シルト (図中の1・2層) が主体であった。[遺物] (第62図194、写真図版45) 土器340g、礫石器1点 (礫器) が出土した。そのうち土器 (No 194) を掲載した。[時期] 出土遺物から縄文時代前期前葉に属すると推定される。

3号土坑 (第42図、写真図版29) [位置・検出状況] 西調査区東部A I v13グリッドに位置する。I層の除去後、IV層上面で検出した。[平面形・規模] 平面形はほぼ円形で、長軸方向は1.16m、短軸方向は0.97m、深さは0.25mである。[壁・底面] 底面はほぼ平坦、壁はかなり急に立ち上がる。[堆積土] 埋土は褐色シルトや灰黄色シルト (図中の3・4層) が主体であった。[遺物] (第62図195～196、写真図版45) 土器100gが出土した。そのうち土器 (No 195～196) を掲載した。[時期] 出土遺物から縄文時代前期前葉に属すると推定される。

4号土坑 (第43図、写真図版29) [位置・検出状況] 西調査区東部A I o12グリッドに位置し、19号住の東南に当る。II層の除去後、III層上面で検出した。19号住を切っていた。[平面形・規模] 平面形は隅丸方形で、斜面下方に当る南側を欠失する。遺存部分は東西2.23m、南北2.35m、深さは0.20mである。[壁・底面] 底面は平坦、壁はほぼ垂直に立ち上がる。[堆積土] 埋土は灰黄褐色シルトであった。柱穴などは発見されなかったが、形状と規模から、28号住のような小堅穴住居であった可能性もある。[遺物] (第62～63図197～200、写真図版45) 土器120g、剥片石器1点 (石匙) が出土した。そのうち土器 (No 197～200) を掲載した。[時期] 出土遺物から縄文時代前期前葉に属すると推定される。

5号土坑 (第43図、写真図版29) [位置・検出状況] 西調査区中央部A I v13グリッドに位置する。I層の除去後、IV層上面で検出した。[重複関係] 本遺構が19号住を切る。[平面形・規模] 平面形はほぼ円形で、長軸方向は1.32m、短軸方向は1.18m、深さは0.24mである。[壁・底面] 底面はほぼ平坦、壁は急角度で立ち上がる。[堆積土] 埋土は褐色シルト (図中の1層) が主体で、偽礫構造がみとめられ、人為的に埋め戻されていた。[遺物] なし。[時期] 詳細な時期は特定できないが、検出面や埋土の様相から縄文時代前期前葉に属すると推定される。

6号土坑 (第43図) [位置・検出状況] 西調査区中央部A I q10グリッドに位置し、24号住の北西に当る。II層の除去後、IV層上面で検出した。[平面形・規模] 平面形はほぼ円形で、長軸方向は0.97m、

短軸方向は0.81m、深さは0.13mである。【壁・底面】底面はほぼ平坦、壁は急角度で立ち上がる。【堆積土】埋土は暗褐色粘土質シルトであった。【遺物】なし。【時期】詳細な時期は特定できないが、19号住より新しい。状況から縄文時代前期前葉に属すると推定される。

20号土坑（第44図）【位置・検出状況】東調査区中央部C II u15グリッドに位置する。II層の除去後、III層の上面で検出された。【平面形・規模】平面形は洋梨形で、東西方向は0.58m、南北方向は0.83m、深さは0.2m前後である。【壁・底面】底面は鉢状、壁はほぼ垂直に立ち上がる。【堆積土】埋土は10YR5/4にぶい黄褐色シルトで、地山層の偽礫を含み、人為的に埋められたものとみられた。【遺物】なし。【時期】時期は不明である。

21号土坑（第44図）【位置・検出状況】東調査区中央部C II t14グリッドに位置する。II層の除去後、III層の上面で検出された。【平面形・規模】平面形は不整形な方形で、サブレンチで北半部を失った。東西方向は0.98m、南北方向は0.70m、深さは0.20mである。【壁・底面】底面は鉢状、壁はほぼ垂直に立ち上がる。【堆積土】埋土は褐色シルトなどからなり、地山層の偽礫を含み、人為的に埋められたものとみられた。【遺物】なし。【時期】時期は不明である。

22号土坑（第44図）【位置・検出状況】東調査区中央部C II u16グリッドに位置する。II層の除去後、III層の上面で検出された。【平面形・規模】平面形は楕円形で、倒木痕によって南半部を欠失していた。東西方向は0.32m、南北方向は0.62m、深さは0.15mである。【壁・底面】底面は鉢状、壁は急角度で立ち上がる。【堆積土】埋土はにぶい黄褐色シルトなどからなり、地山層の偽礫を含み、人為的に埋められたものとみられた。【遺物】なし。【時期】時期は不明である。

23号土坑（第44図）【位置・検出状況】東調査区C II w15グリッドに位置し、22号土坑の東に当る。II層の除去後、III層の上面で検出された。【平面形・規模】平面形は楕円形で、サブレンチによって西半部を失った。遺存状態で、東西方向は1.25m、南北方向は1.05m、深さは0.10mである。【壁・底面】断面形は皿状で、底面は平坦、壁は緩やかに立ち上がる。【堆積土】埋土はにぶい黄褐色シルトなどからなり、地山層の偽礫を含み、人為的に埋められたものとみられた。【遺物】なし。【時期】時期は不明である。

5 焼 土

1号焼土（第45図、写真図版30）【位置・検出状況】西調査区A I m10グリッドに位置する。検出層位はIII層上面で、現地性焼土である。【平面形・規模】平面形は不整形である。規模は63×51cm、焼土層の厚さは12cmである。【遺物】なし。【時期】詳細な時期は特定できないが、検出面や周囲の検出遺構などにより、縄文時代前期前葉と推定される。

2号焼土（第45図、写真図版30）【位置・検出状況】西調査区A I u12グリッドに位置する。検出層位はIV層擾乱層の上面で、現地性焼土である。【平面形・規模】平面形は長楕円形である。規模は93×53cm、焼土層の厚さは8cmである。【遺物】なし。【時期】詳細な時期は特定できないが、検出面や周囲の検出遺構などにより、縄文時代前期前葉と推定される。

3号焼土 (第45図、写真図版30) **【位置・検出状況】** 西調査区A 1u12グリッドに位置し、2号焼土遺構の南西に当る。検出層位はⅣ層擾乱層の上面で、現地性焼土である。**【平面形・規模】** 平面形は不整形円形である。規模は103×57cm、焼土層の厚さは5cmである。**【遺物】** なし。**【時期】** 詳細な時期は特定できないが、検出面や周囲の検出遺構などにより、縄文時代前期前葉と推定される。

4号焼土 (第45図、写真図版30) **【位置・検出状況】** 西調査区A 1v14グリッドに位置し、3号土坑の南に隣接する。検出層位はⅢ層上面で、現地性焼土である。**【平面形・規模】** 平面形はほぼ円形である。規模は42×36cm、焼土層の厚さは4cmである。**【遺物】** (第81図434、写真図版62) 土器40g、剥片石器1点(石匙)が出土した。石器(No434)を掲載した。**【時期】** 出土土器は細片で詳細な時期は特定できない。検出面や周囲の検出遺構などにより、縄文時代前期前葉と推定される。

5号焼土 (第45図、写真図版31) **【位置・検出状況】** 西調査区A 1v14グリッドに位置し、4号焼土の南に当る。検出層位はⅢ層上面で、現地性焼土である。**【平面形・規模】** 平面形は楕円形である。規模は50×27cm、焼土層の厚さは4cmである。**【遺物】** なし。**【時期】** 詳細な時期は特定できないが、検出面や周囲の検出遺構などにより、縄文時代前期前葉と推定される。

6号焼土 (第45図、写真図版31) **【位置・検出状況】** 西調査区A 1v14グリッドに位置し、5号焼土遺構の東に隣接する。検出層位はⅢ層上面で、現地性焼土である。**【平面形・規模】** 平面形はほぼ円形である。規模は31×30cm、焼土層の厚さは3cmである。**【遺物】** なし。**【時期】** 詳細な時期は特定できないが、検出面や周囲の検出遺構などにより、縄文時代前期前葉と推定される。

7号焼土 (第45図、写真図版30) **【位置・検出状況】** 西調査区A 1r11グリッドに位置する。検出層位は24号住埋土3層上面で、現地性焼土である。同層上面に3基検出された焼土遺構のひとつで、最も東よりのものである。**【重複関係】** 24号住より新しい。**【平面形・規模】** 平面形は不整形楕円形である。規模は75×56cm、焼土層の厚さは5cmである。**【遺物】** なし。**【時期】** 縄文時代前期前葉の24号住より新しく、To-Cuテフラより古い。

8号焼土 (第46図、写真図版31) **【位置・検出状況】** 西調査区A 1I8グリッドに位置し、9・13号住の間に当る。検出層位はⅢ層上面で、現地性焼土である。**【平面形・規模】** 平面形は不整形円形である。規模は63×56cm、焼土層の厚さは7cmである。**【遺物】** 土器23gが出土した。**【時期】** 出土土器は全て細片で詳細な時期を特定できないが、縄文時代前期前葉と推定される。

9号焼土 (第46図) **【位置・検出状況】** 西調査区A 1r11グリッドに位置する。検出層位は24号住埋土3層上上で、現地性焼土である。同層上面の焼土遺構のうち、最も西よりのものである。**【重複関係】** 24号住より新しい。**【平面形・規模】** 平面形は隅丸方形である。規模は57×32cm以上で、焼土層の厚さは5cmである。**【遺物】** なし。**【時期】** 縄文時代前期前葉の24号住より新しく、To-Cuテフラより古い。

10号焼土 (第46図) **【位置・検出状況】** 西調査区A 1r11グリッドに位置する。検出層位は24号住埋土3層上上で、現地性焼土である。同層上面の焼土遺構のうち、中央のものである。**【重複関係】** 24号

住より新しい。[平面形・規模] 平面形は不整な円形である。規模は90×40cm以上で、焼土層の厚さは10cmである。[遺物] なし。[時期] 縄文時代前期前葉の24号住より新しく、To-Cuテフラより古い。

11号焼土 (第46図、写真図版31) [位置・検出状況] 西調査区A I 9グリッドに位置する。検出層位はⅢ層上面で、現地性焼土である。[平面形・規模] 平面形は不整な円形である。規模は74×60cm、焼土層の厚さは5cmである。[遺物] なし。[時期] 詳細な時期は特定できないが、検出面や周囲の検出遺構などにより、縄文時代前期前葉と推定される。

12号焼土 (第46図、写真図版31) [位置・検出状況] 西調査区A I m9グリッドに位置し、11号焼土遺構の東に隣接する。検出層位はⅢ層上面で、現地性焼土である。[平面形・規模] 平面形は不整な楕円形である。規模は98×77cm、焼土層の厚さは8cmである。[遺物] なし。[時期] 詳細な時期は特定できないが、検出面や周囲の検出遺構などにより、縄文時代前期前葉と推定される。

13号焼土 (第46図、写真図版31) [位置・検出状況] 西調査区A I o8グリッドに位置し、28号住の南に隣接する。検出層位はⅣ層擾乱層の上面で、現地性焼土である。[平面形・規模] 平面形は不整な楕円形である。規模は94×66cm、焼土層の厚さは7cmである。[遺物] なし。[時期] 詳細な時期は特定できないが、検出面や周囲の検出遺構などにより、縄文時代前期前葉と推定される。加えて、28号住となんらかの関係が示唆される。

6 柱 穴 列

1号柱穴列 (第47～48図、写真図版32) [位置・検出状況] 東調査区西西部に位置する。2条がほぼ平行して延びる柱列の南側のものである。Ⅱ層を除去後、Ⅲ・Ⅳ層上面で検出した。[方位・寸法] 北西-南東の方位をとり、8基の柱穴が並ぶ。PP7とPP8の間は柱穴が検出されなかったが、PP8は同一線上にあり、本来、この間にも柱穴があったものとみられる。PP1からPP7の間の柱間寸法は0.91～1.99mと最大2倍以上のばらつきがある。一方、PP1-PP7間の距離は8.76mで、これを柱間6間で除すると平均柱間寸法1.46m(≒5尺)が得られる。PP1-PP8間の距離は15.12mで、これを1.46mで除すると柱間数10.38が得られ、おそらく本来はこの間に10間(柱数11本)の設計であったと推定される。このことからPP8は同一の遺構とみられる。PP8の北西には1.32mの距離でPP9がある。方位はややずれるが、同一の遺構の可能性はある。[柱穴・埋積土] 個々の柱穴の平面形はほぼ円形で、直径は25～35cm程度、深さは25～40cmであった。柱穴の埋土は地山層の礫層を主体とし、人為的に埋められていた。PP4～6では、柱抜き取りの痕跡が明瞭にみとめられた。[遺物] なし。[時期] 柱穴の平面形は円形基調であり、平安時代の特徴とみられる。

2号柱穴列 (第47～48図、写真図版32) [位置・検出状況] 1号柱穴列から北側へ約1mの間隔をもち、平行して延びる柱列である。Ⅱ層を除去後、Ⅲ・Ⅳ層上面で検出した。[方位・寸法] 方位は1号柱穴列とはほぼ同じで、6基の柱穴が並ぶ。PP5とPP6の間には検出されなかったが、もう1基を補って6間分と考えるべきであろう。PP1とPP6の間の距離は8.83mで、この間が6間とすると、平均柱間寸法1.47m(≒5尺)が得られ、1号柱穴列とはほぼ同じとなる。[柱穴・埋積土] 個々の柱穴の形態や規模も1号柱穴列とはほぼ同じで、柱抜き取り痕跡が観察されるものもあった。このように1・2

号柱穴列はよく似た規格で建てられている。両者の間隔が狭いことから、これらが同時に存在したとは考えられず、建て替えられたものとみるべきであるが、その新旧関係を判断する手掛かりは得られなかった。〔遺物〕なし。〔時期〕柱穴の平面形は円形基調であり、平安時代の特徴とみられる。

7 柱穴群と集石遺構

(1) **柱穴群** (第49図) [位置・検出状況] 東調査区C II t14・C II u14グリッドに位置し、2号柱穴列の西に当る。II層を除去後、III・IV層上面で検出した。〔方位・寸法〕柱穴群は、3～7号柱穴と8・9号柱穴の2群に大別することができる。3～5号柱穴は、1・2号柱穴列の方位に平行、6・7号柱穴はほぼ直交するので、3～7号柱穴が1棟の建物の隅角部とみることもできるが確証はない。8・9号柱穴はこれらの東にあって、1.3mの距離をもって並列している。〔柱穴・埋積土〕個々の柱穴の形態は円形ないしは楕円形で、直径は20～50cm、深さも10～30cmとばらつきがある。埋土は地山偽礫を主体としており、人為的に埋められたものとみられた。〔遺物〕なし。

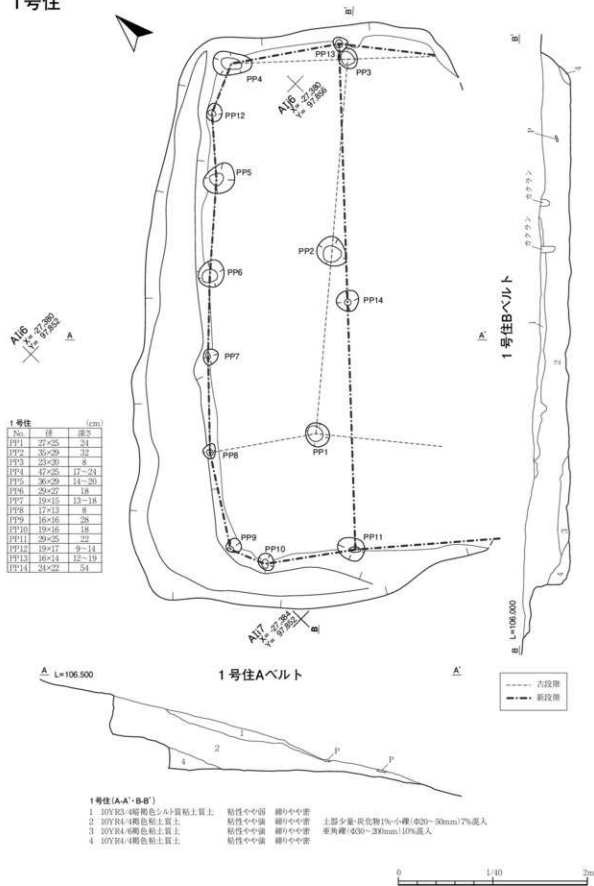
(2) **集石遺構** (第50図、写真図版32) [位置・検出状況] 東調査区C II u15グリッドに位置し、20号土坑北東に当る。II層を除去後、III層上面で検出した。〔形態・規模〕平面形は不整な楕円形で、55×34cmを測り、深さは20cmであった。〔柱穴・埋積土〕埋土は暗灰色シルトであった。内部には5～10cmほどの自然礫が2個詰り込まれていた。〔遺物〕なし。

8 捨て場

捨て場 (第6図、写真図版33～35) [位置・検出状況] 土器・石器を多量に含む人為堆積層 (II a層) を、東調査区東端南側、III層の上面で検出した。北へ下がる斜面に立地し、日常的に不要物や土砂を投棄した、所謂「捨て場」である。〔範囲・規模〕東調査区の南東隅から北へ11m、西へ13mの範囲で、扇形の平面形をもって広がり、東・南の調査区外に続く。捨て場の基盤層はIII層で、III層の上面標高は調査区東南隅角部で92.7m、捨て場北端部で91.4m、同西端部で91.5mであるのであった。距離10mほどで比高約1.3mの斜面に廃棄行為が行われたことになる。捨て場堆積層の層厚は約70cmであった。〔埋積状況〕調査区の東端付近に、南北方向のトレンチを穿って捨て場の堆積状況を調べたところ、黄褐色の地山層偽礫を主とする単層と、暗色を呈するやや泥質の堆積物からなり、遺物・炭化物・焼土塊を多く含む単層が互層に堆積していることがわかった。地山偽礫層を、住居や貯蔵穴を掘削した際の排土、やや泥質の暗色層を、有機質な日常的な廃棄物を含む地層と仮定すると、両層の組み合わせが、居住環境の整備→日常的な居住というサイクルを反映している可能性が考えられた。このため、この組合せに注目してII a層を上位・中位・下位に細分し、上位から分層発掘を試みた。また、捨て場堆積層の縁辺部 (下方) は地形の傾斜が緩やかになっており、この辺りには明黄褐色細粒砂が部分的に自然堆積していた。このことは、斜面より上方に同時代の古土壌 (II層) が形成されず、土壌が流出しやすい裸地 (集落の中心など) であった可能性を示している。〔遺物〕 (第63～76図201～280第79図341～347・350～356・360第81～82図435～448第91～94図506～530第95図551～554、写真図版45～55・60・62・69～71) 土器426.806g、土製品32点 (ミニチュア土器8点、ミニチュア土器?1点、円盤状土製品21点、三角形土製品1点、不明1点)、剥片石器120点 (石鏃39点、石鏃?1点、尖頭器2点、石匙6点、石錐10点、石鏃2点、スクレイパー41点、ピエス・エスキュー2点、コア1点、

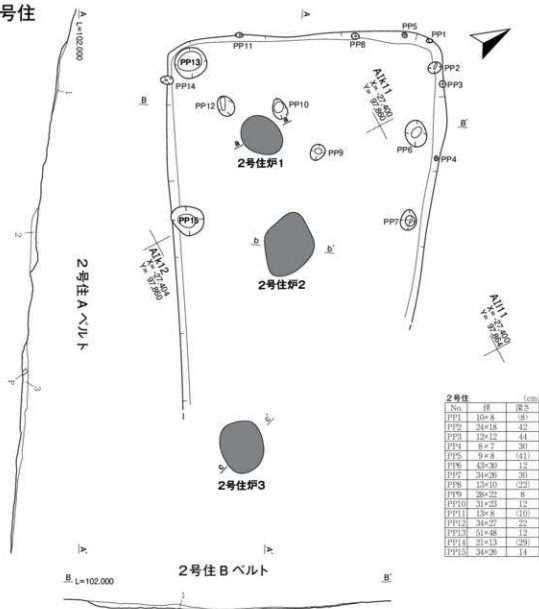
Uフレ15点、剥離ある剥片1点)、礫石器1,271点(磨製石斧34点、特殊磨石18点、磨石437点、磨石? 1点、磨石片27点、敲磨器20点、敲石36点、凹石8点、砥石2点、石皿18点、石皿? 1点、石皿片1点、台石15点、台石? 1点、礫器29点、礫片スクレイパー5点、板状礫8点、棒状礫2点、円礫608点)、石製品17点(有孔石製品1点、男根状石製品1点、円盤状石製品1点、石棒5点、石刀9点)、チップ・フレーク1,270.8gが出土した。そのうち土器(No.201~280)、土製品(No.341~347・350~356・360)、石器(No.435~448・506~530)、石製品(No.551~554)を掲載した。[遺構時期]出土遺物は縄文時代中期後葉から後期初頭を中心に弥生時代中期と古代が微量出土している。土器などの量から判断して、この捨て場の形成時期は、縄文時代中期末葉大木10式期~縄文時代後期初頭菰窪式期と判断される。

1号住



第9図 1号住

2号住



2号住(A-A'-B-B')

- 1 30YR3・4暗褐色シタ 粘性やや弱 礫9中
- 2 5YR5・6明赤褐色土 粘性中 礫9中
- 3 10YR3・4暗褐色シタ 粘性やや弱 礫9やや密 (※別遺構用土中)



2号住炉1



2号住炉1(a-a')

- 1 5YR5・6明赤褐色土 粘性弱 礫9密

2号住炉2



2号住炉2(b-b')

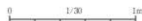
- 1 5YR4・6赤褐色土 粘性やや弱 礫9やや密

2号住炉3



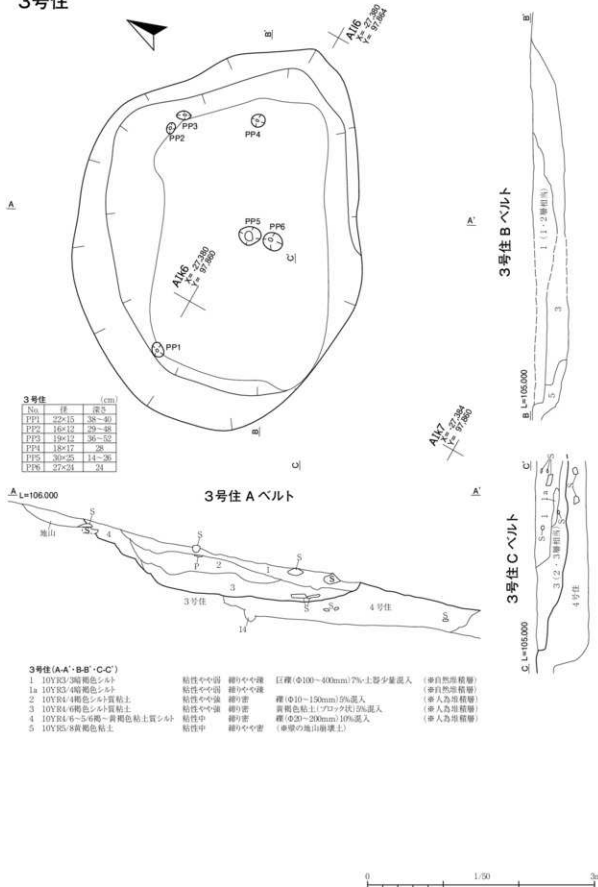
2号住炉3(c-c')

- 1 5YR4・6赤褐色土 粘性中 礫9やや密



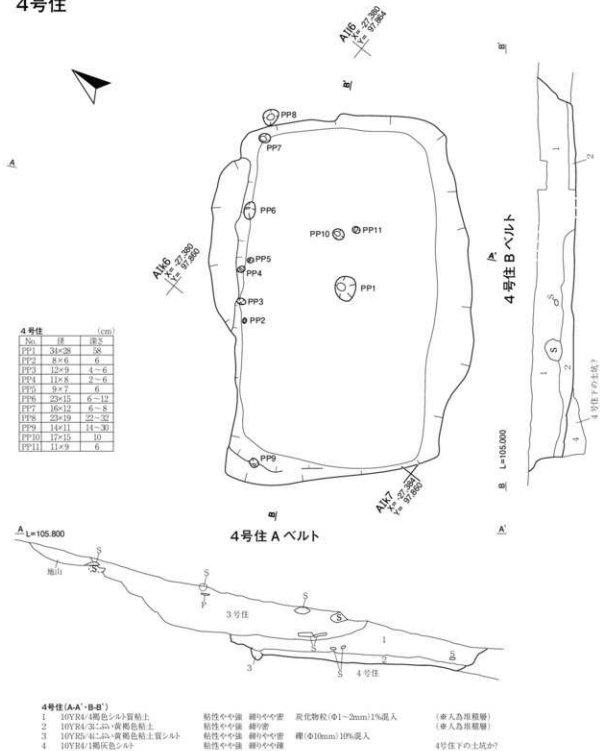
第10図 2号住

3号住



第11図 3号住

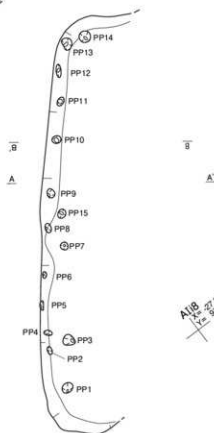
4号住



第12図 4号住

5号住

A117
No. 27,284
9/28/82



5号住		
No.	坪	深さ
PP1	13×11	6
PP2	9×6	4-10
PP3	11×7	10
PP4	9×6	10
PP5	12×5	2-12
PP6	7×4	2-12
PP7	9×9	8
PP8	10×6	2-12
PP9	10×8	14
PP10	11×8	6
PP11	11×7	10
PP12	15×6	12
PP13	10×10	6-18
PP14	13×13	10-14
PP15	10×8	6

5号住 A ベルト

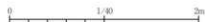


5号住 B ベルト



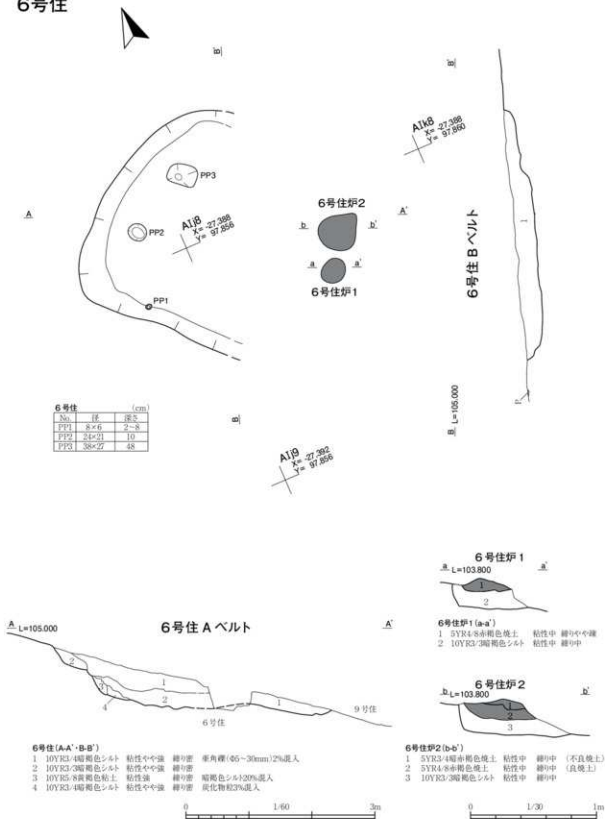
5号住 (A-A'・B-B')

- | | | | |
|------------------------|-------|-------|--------------|
| 1 10YR4.5/2黄褐色粘土質シルト | 粘性強 | 締りやや強 | 炭を多く含む |
| 2 10YR2.1/1灰色粘土質シルト | 粘性強 | 締りやや強 | 炭を多く含む(林藪取次) |
| 3 25YR5.6/明赤褐色シルト質粗粒砂石 | 粘性やや弱 | 締りやや強 | 機土層 |



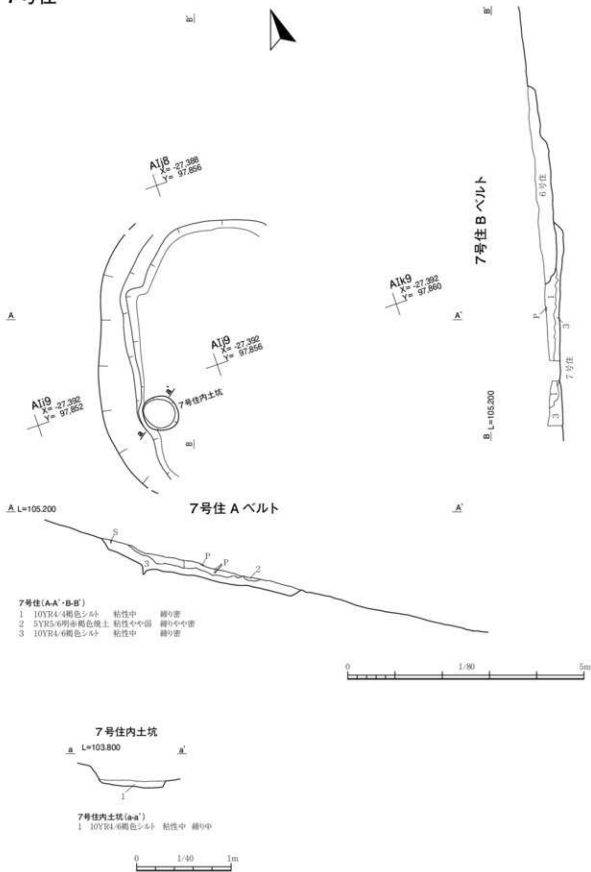
第13図 5号住

6号住



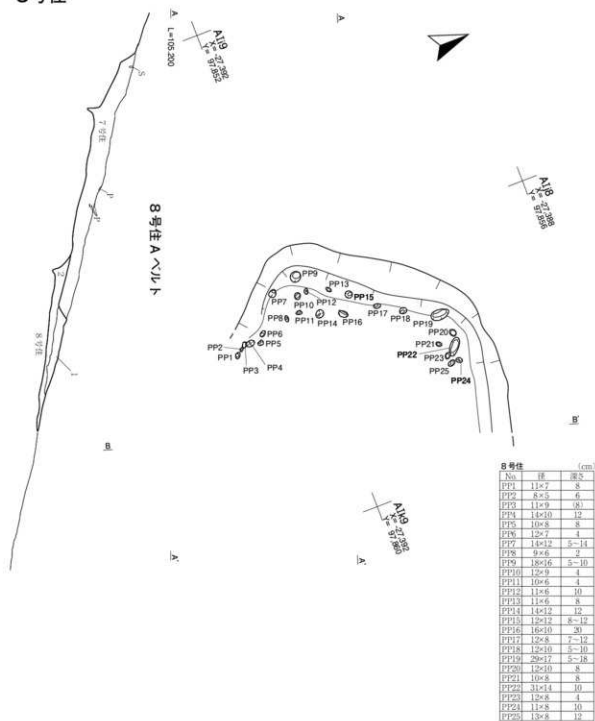
第14図 6号住

7号住



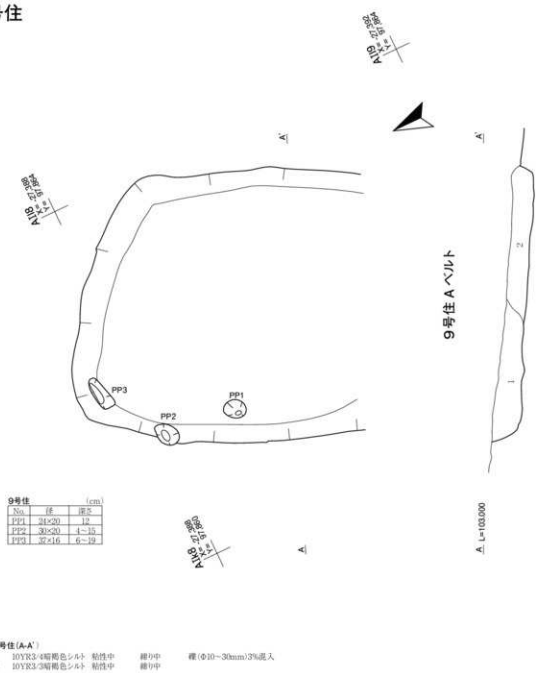
第15図 7号住

8号住



第16図 8号住

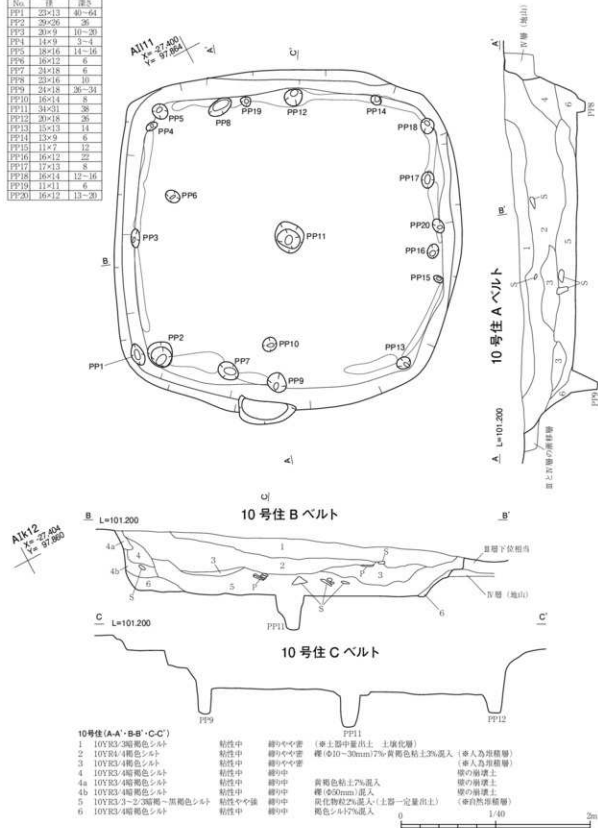
9号住



第17図 9号住

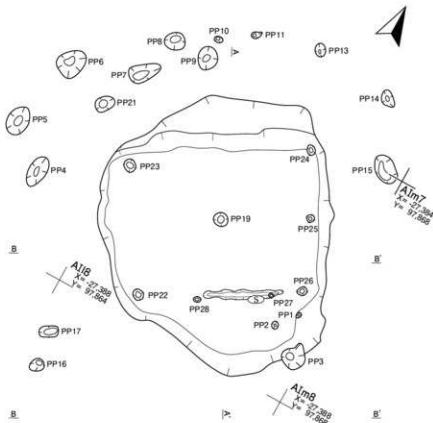
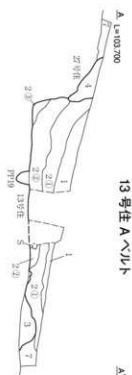
10号住

10号住 (cm)		
No.	径	深さ
PP1	29×13	40-64
PP2	28×26	26
PP3	20×9	10-20
PP4	14×9	3-4
PP5	28×16	14-18
PP6	26×12	6
PP7	24×18	6
PP8	24×16	10
PP9	24×18	26-31
PP10	16×14	8
PP11	34×31	26
PP12	30×18	26
PP13	15×13	14
PP14	13×9	6
PP15	11×7	12
PP16	16×12	22
PP17	17×13	8
PP18	16×14	12-16
PP19	11×11	6
PP20	16×12	13-20



第18図 10号住

13号住



13号住 (cm)		
No.	径	深さ
PP1	10x8	1
PP2	13x11	4.1
PP3	80x38	6
PP4	52x29	12
PP5	89x34	8
PP6	89x43	10
PP7	89x29	4
PP8	82x29	6
PP9	88x33	4
PP10	13x11	2
PP11	28x12	4
PP13	22x17	2
PP14	34x20	6
PP15	48x32	12
PP16	55x29	6
PP17	11x18	6
PP18	13x11	30
PP21	82x30	6
PP22	18x16	26
PP23	22x16	26
PP24	17x15	26
PP25	14x12	26
PP26	17x13	30
PP27	8x8	15
PP28	13x10	15

13号住(AA'-BB')

- 1) 10YR5/1-2 黒灰色シルト
- 2) 10YR5/2-3 黒褐色シルト

2) 10YR5/2-3 黒褐色粘土質シルト (地山層付層)

- 2-1) 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
- 2-2) 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト
- 2-3) 10YR3/1 黒褐色シルト
- 3) 10YR4/4 褐色シルト
- 4) 2.5Y5/2 灰黄色シルト
- 5) 10YR4/1 褐色シルト
- 6) 10YR5/2 灰黄色シルト
- 7) 10YR5/1 褐色シルト

- 粘性弱 砂り硬
- 粘性やや弱 砂りやや硬

- 粘性やや強 砂りやや硬
- 粘性弱 砂り硬
- 粘性やや強 砂り硬
- 粘性弱 砂り硬
- 粘性弱 砂り硬
- 粘性弱 砂り硬
- 粘性弱 砂り硬
- 粘性弱 砂り硬
- 粘性弱 砂り硬

- 層(Φ10mm以下)1%混入
- 層付層(Φ5mm以下)
- 灰境上の小片1%以下混入
- 層付層(Φ10mm以下)1%以下混入
- 層付層(Φ10mm以下)1%以下混入
- Φ10mm程度の地山層付層含む
- Φ50mm程度の地山層付層含む
- 層付層(Φ10mm以下)1%以下混入
- 層付層(Φ10mm以下)1%以下混入
- 層付層(Φ30mm以下)1%地山層付層混入

- 13号住地盤の上生土成層
- 13号住地盤時の人為堆積土
- 13号住地盤時の人為堆積土
- 13号住地盤時の人為堆積土
- 13号住地盤時の人為堆積土
- 13号住地盤時の人為堆積土
- 13号住地盤時の人為堆積土
- 13号住地盤時の人為堆積土
- 13号住地盤時の人為堆積土
- 13号住地盤時の人為堆積土



第19図 13号住

14号住



14号住 (cm)

No.	径	深
PP1	22×13	14~52
PP2	14×11	4~6
PP3	9×5	3~4
PP4	0×7	4
PP5	7×5	4~6
PP6	21×17	30~39
PP7	3×3	4
PP8	0×4	2~4
PP9	16×8	8~14
PP10	9×2	4
PP11	22×16	35~44
PP12	20×17	14~22
PP13	12×8	8~12
PP14	18×10	20~31
PP15	16×8	6~8
PP16	0×4	4
PP17	9×7	3~6
PP18	17×13	38~38
PP19	18×5	4
PP20	10×8	2~4

No. 径 深 (cm)

No.	径	深
PP21	5×3	4~6
PP22	8×5	5~8
PP23	8×6	8
PP24	7×6	8
PP25	7×6	6
PP26	12×7	18
PP27	33×20	30~40
PP28	9×7	8
PP29	30×13	32
PP30	11×10	10
PP31	7×5	6
PP32	11×8	4
PP33	21×16	38~48
PP34	8×8	6
PP35	12×7	6
PP36	32×23	14~52
PP37	11×6	6
PP38	14×12	2~4
PP39	8×6	2
PP40	25×20	17~54

No. 径 深 (cm)

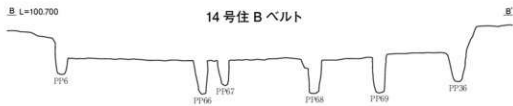
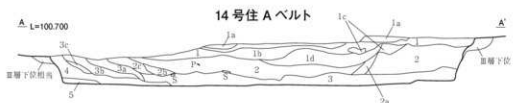
No.	径	深
PP41	18×16	8
PP42	12×8	3~6
PP43	20×23	50~66
PP44	10×6	8~10
PP45	19×11	10~14
PP46	8×6	2
PP47	15×12	11~16
PP47	8×8	18~20
PP48	21×21	38
PP49	13×11	10
PP50	12×8	12
PP51	8×5	14
PP52	15×10	12
PP53	16×11	12
PP54	20×12	12~18
PP55	10×10	18
PP56	11×9	13~16
PP57	11×6	5~8
PP58	10×7	9~10
PP59	12×10	17~22
PP60	11×8	17~22

No. 径 深 (cm)

No.	径	深
PP61	21×14	30~32
PP62	9×5	7~12
PP63	12×8	3~8
PP64	11×8	9~12
PP65	8×6	2
PP66	20×17	26
PP67	22×20	42
PP68	34×30	54
PP69	25×23	60
PP70	15×11	4~8
PP71	25×25	35
PP72	17×13	24
PP73	16×8	2~14

0 1/60 3m

第20図 14号住 (1)



14号住 PP11



14号住 PP33



14号住 PP40



14号住 PP1



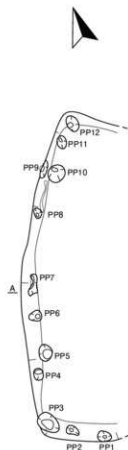
14号住(A-A'-B-B'-C-C')

1	30YR2-3黒褐色シルト	粘性やや弱	締り中	
1a	30YR3-4暗褐色シルト	粘性弱	締りやや密	明黄褐色チタツ20%混入(※Ti-Cu混入層)
1b	30YR3-3暗褐色シルト	粘性中	締りやや密	にじみ半褐色砂土30%混入
1c	30YR3-4暗褐色シルト	粘性やや強	締り中	黄褐色粘土3%混入
1d	30YR3-4暗褐色シルト	粘性やや弱	締り中	礫径10-30mm径%土投混入
2	30YR4-4褐色シルト	粘性やや強	締り中	黄褐色粘土+小平ラック%混入
2a	30YR4-4褐色シルト	粘性やや強	締り中	
2b	30YR3-3暗褐色シルト	粘性中	締り中	
2c	30YR3-3暗褐色シルト	粘性中	締り中	炭化微粒1%混入
2d	30YR4-4褐色シルト	粘性中	締り中	黄褐色粘土7%混入
2e	30YR3-4暗褐色シルト	粘性中	締り中	黄褐色粘土3%混入
2f	30YR4-4褐色シルト	粘性中	締りやや密	黄褐色粘土30%混入
2g	30YR4-4褐色粘土	粘性やや強	締りやや密	黄褐色粘土10%混入
3	30YR4-6褐色シルト質粘土	粘性やや強	締りやや密	
3a	30YR2-3黒褐色シルト	粘性やや強	締り中	
3b	30YR3-4暗褐色シルト	粘性やや強	締り中	黄褐色粘土7%混入
3c	30YR2-3黒褐色シルト質粘土	粘性やや強	締り中	
4	30YR4-4-5.6暗黄褐色粘土	粘性やや強	締り密	
5	30YR4-6褐色粘土	粘性やや強	締りやや密	
6	30YR2-3黒褐色シルト質粘土	粘性やや強	締り中	

第21図 14号住(2)

15号住

 A1h10
 $X=27,286$
 $Y=97,648$

 A1i10
 $X=27,296$
 $Y=97,852$


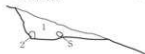
15号住 [cm]		
1. 番号	幅	長さ
PP1	15×11	2~6
PP2	16×10	2~6
PP3	36×18	18~22
PP4	12×10	20
PP5	18×13	16~22
PP6	14×12	6~14
PP7	20×12	21~24
PP8	11×8	5~12
PP9	20×7	20~40
PP10	30×18	30~34
PP11	14×10	8~12
PP12	18×12	16~18

 A1i11
 $X=27,400$
 $Y=97,852$

 A1h11
 $X=27,400$
 $Y=97,648$

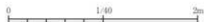
15号住 A ベルト

A L=104.500



15号住(A-A')

- 1 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 細砂やや密
 2 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中 細砂やや密 (壁の地山崩壊土アブラワ)



第22図 15号住

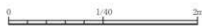
16号住



16号住 (cm)

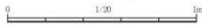
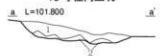
No.	径	深
PP1	52-26	38
PP2	72-10	30-24
PP3	38-19	34-28
PP4	10-8	4-10
PP5	11-7	1-8
PP6	9-5	6
PP7	13-9	1-10
PP8	10-10	11-16
PP9	7-3	2-6
PP10	9-10	8-14
PP11	10-8	10-12
PP12	14-9	5-7
PP13	10-8	6
PP14	12-9	8-14
PP15	21-9	24-28
PP16	9-7	8
PP17	30-23	1-18
PP18	8-6	6
PP19	11-7	12
PP20	18-15	28-32
PP21	38-23	5-10
PP22	10-18	10
PP23	38-16	12-14

16号住 A ベルト



- 16号住(A-A')
- 1 10YR4/4褐色シルト 粘性中 細りやや密
 - 2 10YR5/6黄褐色粘土 粘性やや中 細りやや密
 - 3 10YR5/6黄褐色粘土 粘性やや中 細りやや密

16号住内土坑



- 16号住内土坑(a-a')
- 1 10YR4/4褐色シルト 粘性中 細りやや密
 - 2 10YR5/6黄褐色粘土 粘性中 細り密

第23図 16号住

17号住



Alr17
X=27.424
Y= 97.888

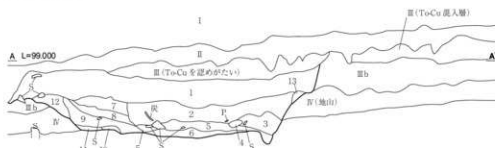
17号住 (cm)		
No.	層	厚さ
PP1	10×16	20~31
PP2	11×4	14
PP3	12×10	16~18
PP4	12×9	4
PP5	14×8	12
PP6	11×9	6~8
PP7	10×10	4
PP8	12×14	20~28



調査区境

Alr18
X=27.428
Y= 97.888

17号住 A ベルト



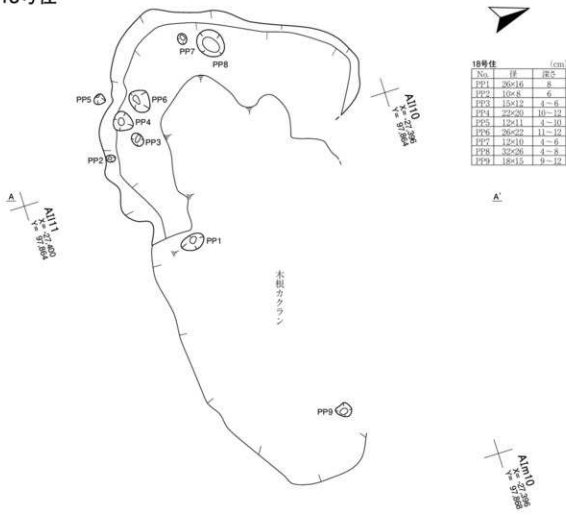
17号住 (A-A')

- | | | | |
|------------------------|-------|-------|--------------------------|
| 1 10YR2/1黒色シルト | 粘性やや強 | 締り中 | 上部少量混入 |
| 2 10YR2/3暗褐色シルト | 粘性やや強 | 締り中 | 上部少量混入・炭化物粒(φ2~10mm)5%混入 |
| 3 10YR4/4褐色粘土 | 粘性やや強 | 締りやや密 | 黄褐色粘土フロック10%・炭化物粒3%混入 |
| 4 5YR4/4L赤褐色黄土 | 粘性やや強 | 締り中 | |
| 5 10YR2/3~3/4暗赤~暗褐色シルト | 粘性やや強 | 締り中 | 炭化物粒(φ10~15mm)7%混入 |
| 6 10YR4/6黄褐色粘土 | 粘性やや強 | 締りやや密 | |
| 7 10YR4/4褐色シルト | 粘性やや強 | 締り中 | 暗褐色シルト7%混入 |
| 8 10YR2/4暗褐色シルト | 粘性やや強 | 締り中 | |
| 9 10YR4/3L~2L黄褐色粘土質シルト | 粘性やや強 | 締り中 | 暗褐色シルト10%混入 |
| 10 10YR6/6明黄褐色粘土質土 | 粘性強 | 締り中 | |
| 11 10YR2/2黒褐色シルト | 粘性やや強 | 締り中 | |
| 12 10YR2/3暗褐色シルト | 粘性やや強 | 締り中 | |
| 13 10YR2/6黄褐色粘土 | 粘性やや強 | 締りやや密 | |

0 1/40 2m

第24図 17号住

18号住

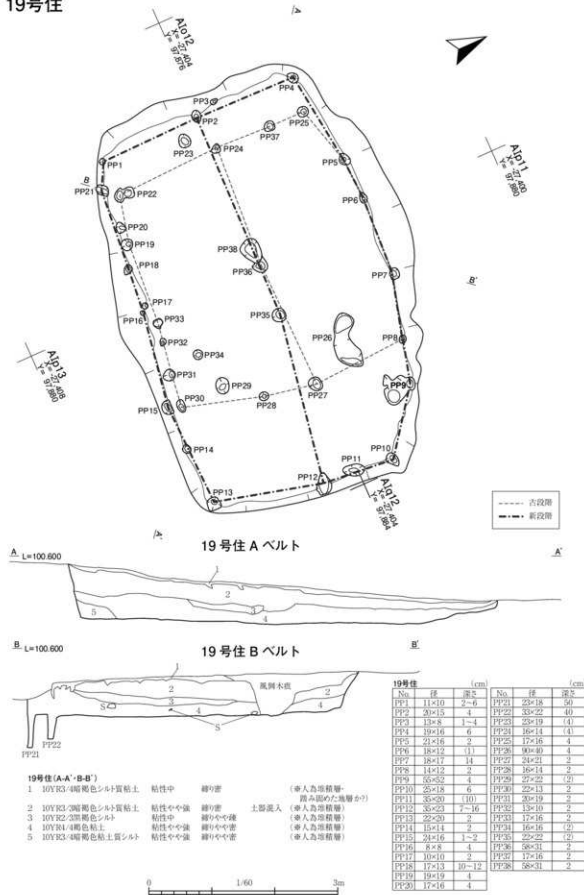


- 18号住(A-A')
- | | | | | |
|---|--------------------|-------------|------------------------------------|--------|
| 1 | 2SYB6/4に赤い黄色粘土質シルト | 粘性やや強 練りやや強 | 垂角礫(Φ20-50mm)2%
微細な地山礫少量混入 | 18号住埋土 |
| 2 | 10YR3/1期灰色シルト | 粘性やや弱 練りやや強 | 垂角礫(Φ30mm)1%混入 | |
| 3 | 10YR2/1期褐色粘土質シルト | 粘性やや強 練りやや密 | 中興火山灰礫1%・角礫(Φ30mm)1%混入 | |
| 4 | 10YR3/1期灰色シルト | 粘性やや弱 練りやや強 | 木の根の残った地山 | |
| 5 | 10YB6/1期灰色シルト | 粘性やや弱 練りやや強 | 微細な地山・火山灰礫少量混入
垂角礫(Φ30mm)-微細な地山 | |



第25図 18号住

19号住



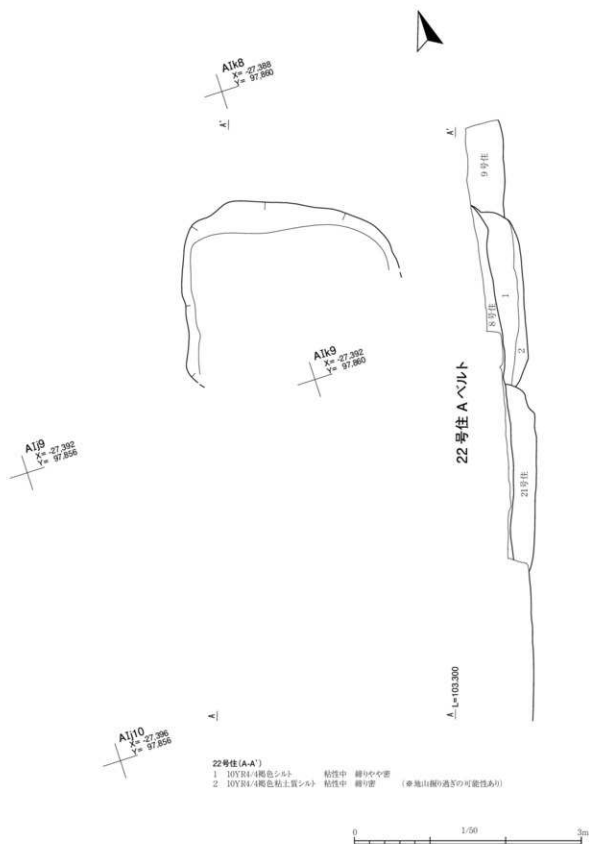
第26図 19号住

21号住



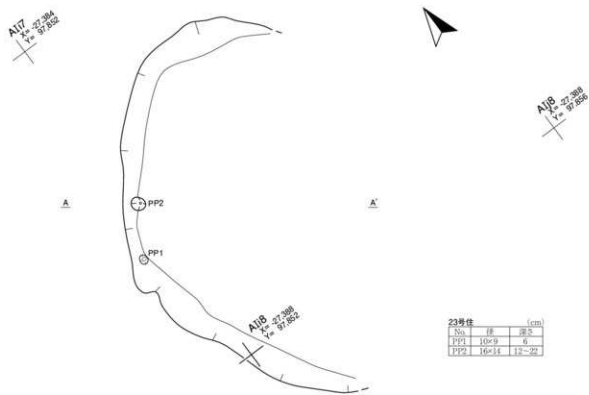
第27図 21号住

22号住

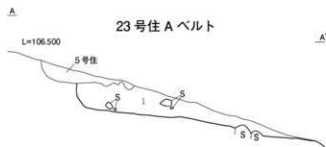


第28図 22号住

23号住



23号住		[cm]	
No.	種	長さ	
PP1	10 ² -9	6	
PP2	10 ² -14	12-22	



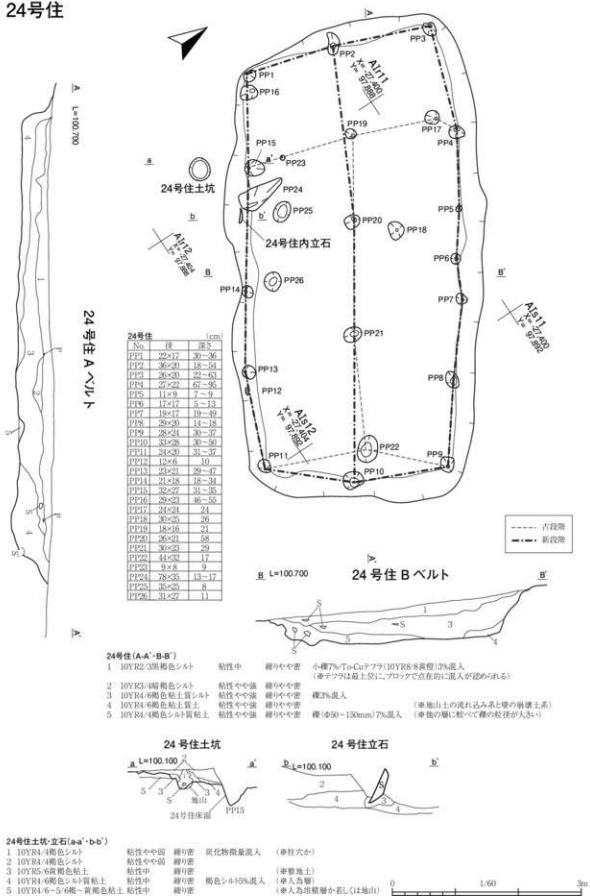
23号住(A-A')

1 10YR4/3L2.5L 黄褐色粘土質シタ 粘性強 細砂質 垂角礫(φ100mm)1%混入(※人為混入層中)



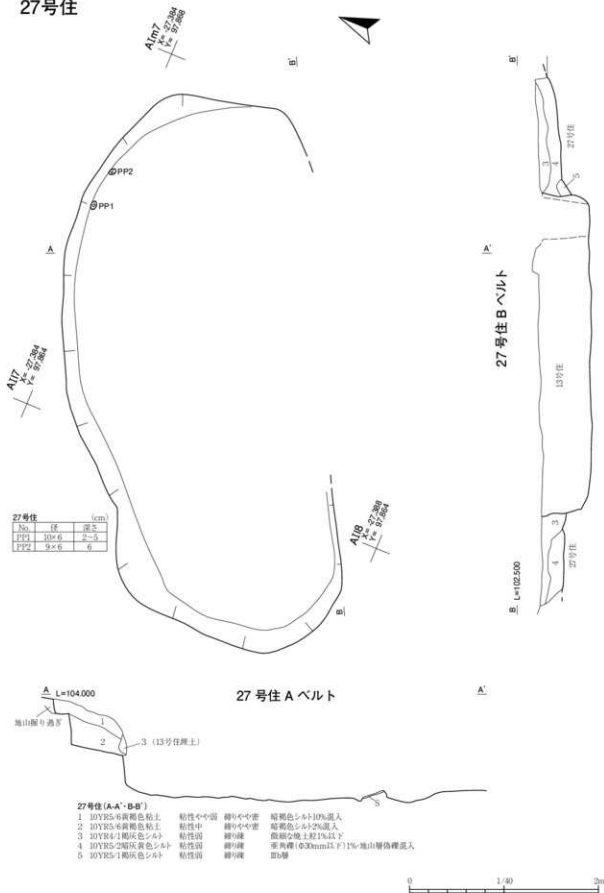
第29図 23号住

24号住



第30図 24号住

27号住

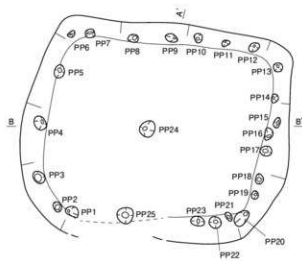


第32図 27号住

28号住 A1o8
 X= 27,388
 Y= 97,876



A1o8
 X= 27,388
 Y= 97,880



A1o9
 X= 27,392
 Y= 97,876

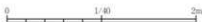


28号住(A-A'・B-B')

- | | | | | |
|----|-----------------|-------|-------|------------------|
| 1 | 10Y23・4暗褐色シタ | 粘性やや強 | 締り中 | 礫(φ10~30mm)10%混入 |
| 1a | 10Y23・4暗褐色粘土 | 粘性やや強 | 締りやや強 | |
| 1b | 10Y24・4褐色シタ小霞粘土 | 粘性やや強 | 締り中 | |
| 1c | 10Y24・4褐色シタ小霞粘土 | 粘性やや強 | 締り中 | |
| 1d | 10Y23・3暗褐色シタ | 粘性やや強 | 締り中 | |
| 1e | 10Y23・4暗褐色シタ | 粘性やや強 | 締りやや強 | |
| 1f | 10Y24・4褐色シタ | 粘性やや強 | 締り中 | |
| 2 | 10Y23・4褐色シタ小霞粘土 | 粘性やや強 | 締り中 | 褐色シタ5%混入 |
| 3 | 10Y25・6黄褐色粘土 | 粘性やや強 | 締り中 | 褐色シタ5%混入 |
| 4 | 10Y23・3暗褐色シタ | 粘性中 | 締り中 | |

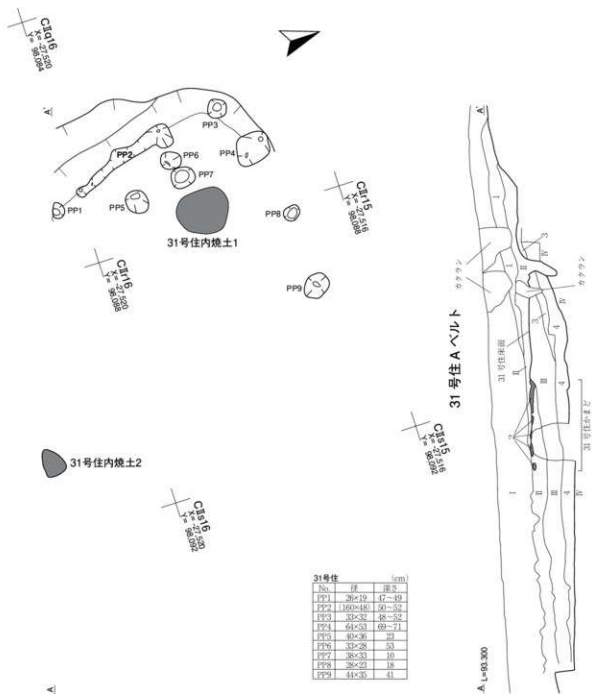


28号住		(cm)
No.	種	深さ
PP1	15x11	11
PP2	11x9	3~7
PP3	14x11	5~9
PP4	16x12	10~20
PP5	14x11	4~5
PP6	9x6	1~8
PP7	11x9	6~10
PP8	12x9	4~9
PP9	14x9	13~17
PP10	10x9	8~15
PP11	9x6	8~12
PP12	13x9	7~13
PP13	10x10	4~7
PP14	10x7	7~10
PP15	11x7	6~12
PP16	14x9	4~6
PP17	13x10	1~5
PP18	11x9	4~7
PP19	10x8	3~5
PP20	10x13	6~7
PP21	7x11	3~5
PP22	14x12	4~8
PP23	16x10	5~7
PP24	18x16	9
PP25	17x17	9



第33図 28号住

31号住



31号住(AA)

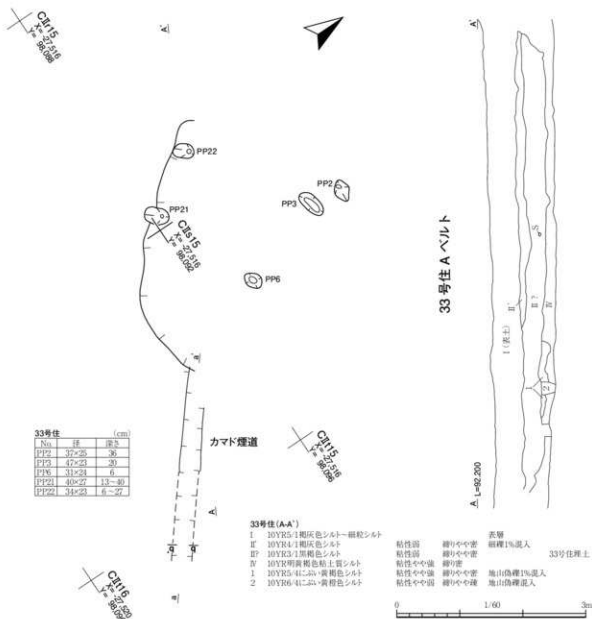
- I 2S186-2区黄色粘土質シルト
- II 10YR4/1黒灰色シルト
- III 2S15-2暗灰黄色細砂-シルト
- IV 10YR6-6暗黄褐色砂質シルト
- 1 10YR5-2黄褐色細砂-シルト
- 2 5YR6-8褐色シルト
- 3 10YR6-4c土黄褐色粘土質細砂砂質シルト
- 4 10YR5-2c土黄褐色砂質シルト

- | | | |
|-------|-----|-------------|
| 粘性やや強 | 線付線 | 縄文 |
| 粘性やや弱 | 線付線 | 縄文前期～平安の古土層 |
| 粘性やや弱 | 線付線 | 縄文前期～中期の古土層 |
| 粘性やや弱 | 線付線 | 馬山 |
| 粘性やや弱 | 線付線 | II層を除去した作土層 |
| 粘性弱 | 線付線 | 焼土 |
| 粘性やや強 | 線付線 | 馬山表層の草木炭灰部分 |
| 粘性やや弱 | 線付線 | 馬山表層の草木炭灰部分 |

0 1.00 3m

第34図 31号住

33号住



33号住 カマド短

※断面Lは掘削時の地層がほぼLに一致している。

△ L=91,400



△ L=91,400

33号住 カマド

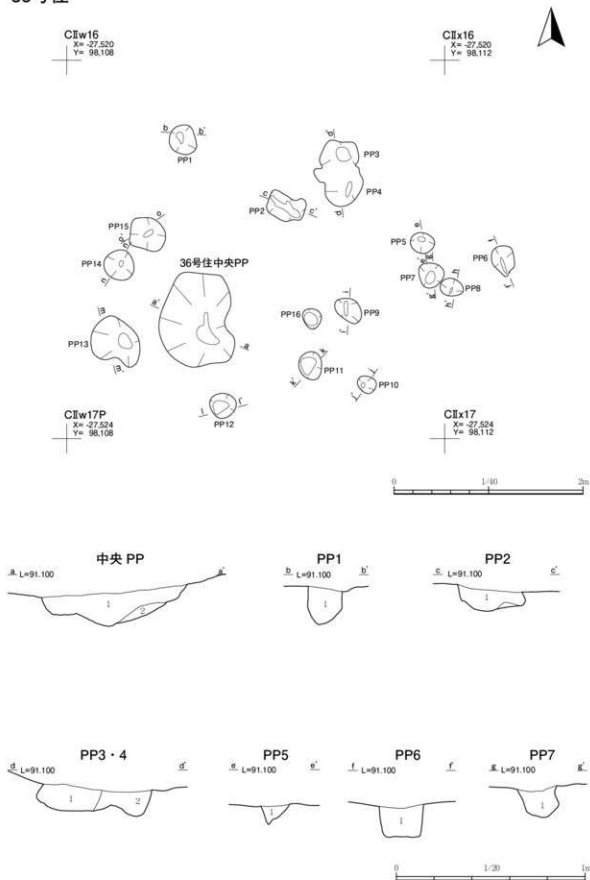


33号住カマド(a-a'・b-b')

I 10YR3-1原褐色シルト 粘性やや強 粘り密 建造部埋土6?

0 1/30 3m

36号住



第36図 36号住 (1)

PP8
L=91.100



PP9
L=91.100



PP10
L=91.100



PP11
L=91.100



PP12
L=91.100



PP13
L=91.100



PP14
L=91.100



PP15
L=91.100



中央PP(a-a')

- 1 10YR4/1 黒灰色シルト 粘性弱 締り強 地山偽稜混入 (※自然原積か?)
2 10YR5/2 灰褐色粘土質シルト 粘性强 締り密 地山偽稜混入 (※人為堆積か?)

PP1 (b-b')

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 粘性やや弱 締り密 地山偽稜混入 (※人為堆積)

PP2 (c-c')

- 1 10YR4/1 黄灰色シルト 粘性弱 締り強 地山偽稜混入 (※人為堆積)

PP3-4 (d-d')

- 1 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂混りシルト 粘性やや強 締り密 地山偽稜・灰混入 (※人為堆積)
2 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性强 締りやや強 地山偽稜・灰混入 (※人為堆積)

PP5 (e-e')

- 1 10YR4/1 黒灰色シルト 粘性やや強 締り強

PP6 (f-f')

- 1 10YR4/1 黒灰色シルト 粘性やや弱 締りやや強 地山偽稜混入 (※人為堆積)

PP7 (g-g')

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや強 締り強 地山偽稜混入 (※人為堆積)

PP8 (h-h')

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや強 締り強 地山偽稜混入
2 10YR5/2 灰褐色粘土質シルト 粘性やや強 締り強 地山偽稜混入

PP9 (i-i')

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや弱 締りやや密 地山偽稜混入 (※人為堆積か?)

PP10 (j-j')

- 1 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性强 締り密 地山偽稜混入 (※人為堆積か?)

PP11 (k-k')

- 1 10YR5/2 灰褐色シルト 粘性やや弱 締り強 地山偽稜混入 (※人為堆積)

PP12 (l-l')

- 1 10YR4/1 黒灰色シルト 粘性弱 締り強 (※人為堆積か?)

PP13 (m-m')

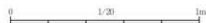
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性弱 締り強

PP14 (n-n')

- 1 10YR4/1 黒灰色シルト 粘性弱 締り強 地山偽稜混入 (※人為堆積)

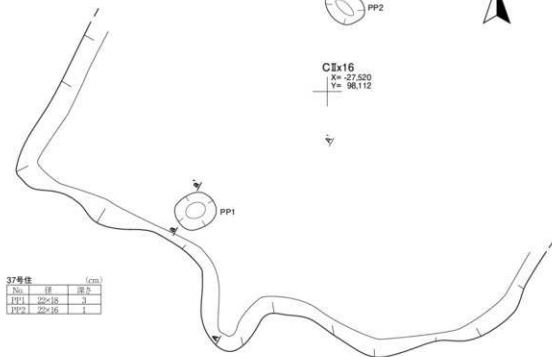
PP15 (o-o')

- 1 10YR4/1 黒灰色極細粒砂 粘性弱 締り強 (※遺構ではないかと推定)



第37図 36号住 (2)

37号住



37号住 (cm)

No.	径	深さ
PP1	22×18	3
PP2	22×16	1

37号住 A ベルト



37号住(A-A')

I 10YR4/1黄褐色シルト 粘性强 細砂混 泥3%混入

PP1

A L=91,000



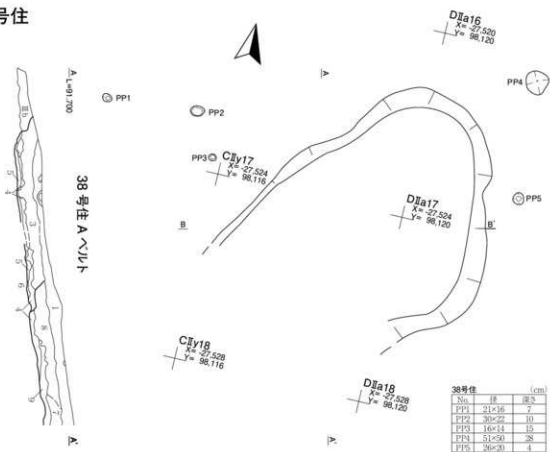
37号住PP1(a-a')

I 10YR3/1黄褐色シルト 粘性强 細砂混

CE17
X=27,524
Y=98,112

第38図 37号住

38号住



38号住(A-A')

1	10YR5/1 赭灰色	粘性中～弱	締り硬	中程角礫10%混入	
2	10YR5/1 赭灰色	粘性中～弱	締り硬		38号住埋土
4	10YR5/2.5 赤～黄褐色	粘性中～弱	締り硬		38号住埋土
5	10YR4/4 褐色	粘性弱	締り硬		38号住埋土
6	10YR6/6 明黄褐色	粘性中～弱	締り硬		38号住埋土
7	15YR4/4 褐色	粘性中～弱	締り中～硬	灰1%・クサリ礫(φ300mm以下)3%混入	地山
8	10YR4/1 赭灰色	粘性中～弱	締り中～硬	クサリ礫1%混入	
9	10YR5/2 赤黄褐色	粘性弱	締り硬		
BB	10YR4/2 赤黄褐色シト				

38号住(B-B')

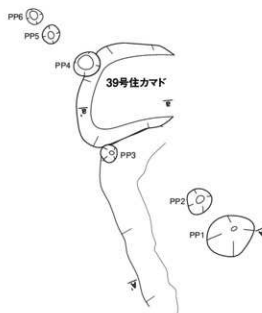
1	10YR5/1 赭灰色	粘性中～弱	締り硬	中程角礫10%混入	38号住埋土
2	10YR5/2.5 赤～黄褐色	粘性中～弱	締り硬	中程角礫10%混入、い・F1.6占土壤少	38号住埋土
3	10YR5/1 赭灰色	粘性中～弱	締り硬	中程角礫10%混入、い・F1.6占土壤少	38号住埋土
4	10YR5/2.5 赤～黄褐色	粘性中～弱	締り硬	中程角礫10%混入、い・F1.6占土壤少	38号住埋土
5	10YR4/4 褐色	粘性弱	締り硬	中程角礫10%混入、い・F1.6占土壤少	38号住埋土
6	10YR6/6 明黄褐色	粘性中～弱	締り硬	中程角礫10%混入	地山



第39図 38号住

39号住

Cir15
X= 27,516
Y= 58,088



39号住 A ベルト

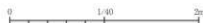


- 39号住[A-A']
- | | | | |
|---|--------------------|-----|-------|
| 1 | 10YR4/3褐色砂質シルト | 粘性弱 | 締り強 |
| 2 | 10YR5/3赤い黄褐色粘土質シルト | 粘性弱 | 締り強 |
| 3 | 10YR3/1茶褐色シルト | 粘性弱 | 締りやや強 |

39号住カマド

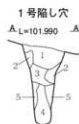
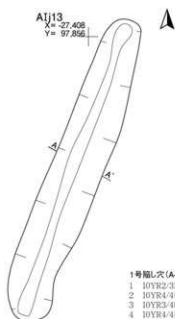


- 39号住カマド[B-B']
- | | | | | |
|---|---------------------|-----------|-----|---------|
| 1 | 5YR4/6赤褐色シルト-細粒シルト | 10YR4/1褐色 | 粘性弱 | 締り強 |
| 2 | 10YR5/2灰黄褐色シルト質極細粒砂 | 粘性弱 | 締り強 | カマドの崩落土 |



第40図 39号住

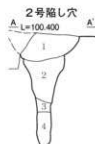
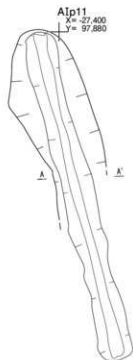
1号陥し穴



1号陥し穴(A-A')

- | | | | | |
|---|---------------|-------|-------|-----------------------|
| 1 | 10YR2/3黒褐色シルト | 粘性中 | 締りや中硬 | |
| 2 | 10YR4/4褐色シルト | 粘性や中強 | 締りや中強 | 黄褐色粘土15%混入 (峠原の地山崩壊土) |
| 3 | 10YR2/4黒褐色シルト | 粘性中 | 締りや中強 | |
| 4 | 10YR4/4褐色シルト | 粘性や中強 | 締りや中硬 | |
| 5 | 10YR4/4褐色シルト | 粘性中 | 締りや中硬 | 黄褐色粘土15%混入 (峠原の地山崩壊土) |

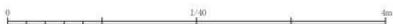
2号陥し穴



2号陥し穴(A-A')

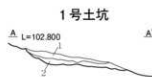
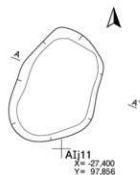
- | | | |
|---|-------------------|----------|
| 1 | 10YR2/3黒褐色シルト | (直撃) |
| 2 | 2.5Y4/1黄灰色シルト | (地山崩壊含む) |
| 3 | 10YR7/6暗黄褐色粘土質シルト | (地山崩壊含む) |
| 4 | 10YR4/1黒灰色シルト | (自然原積) |

Alp12
X=-27,404
Y=97,860



第41図 1・2号陥し穴

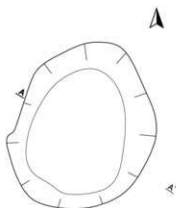
1号土坑



- 1号土坑(A-A')
- 1 10YR3/4暗褐色シロト 粘性中 締り中 土層片混入
 - 2 10YR4/6-5.5暗-黄褐色粘土 粘性中や強 締りやや密

2号土坑

A1k12
X=27,404
Y=97,860



- 2号土坑(A-A')
- 1 10YR3/4暗褐色シロト 粘性中 締り中 土層一定量混入
 - 2 10YR3/4暗褐色シロト 粘性中 締り中 黄褐色粘土30%混入

3号土坑



A1w14
X=27,412
Y=97,908

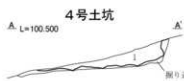
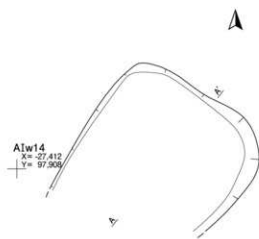


- 3号土坑(A-A')
- 1 7.5YR4/1暗灰色シロト 粘性中 締り中や強 極小礫1%混入
 - 2 10YR3/3.5暗-黄褐色シロト 粘性中 締り中や強
 - 3 10YR4/1暗褐色シロト 粘性中 締り中や強 小礫1%混入
 - 4 10YR4/2.5黄褐色シロト 粘性中 締り中や強 小礫1%混入



第42図 1・2・3号土坑

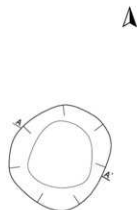
4号土坑



4号土坑(A-A')
1 10YR4/2灰黄褐色シロト 粘性中 細りや中礫 極小礫1%混入

5号土坑

AIo12
X=-27,404
Y=97,676



5号土坑(A-A')
1 10YR4/4褐色シロト 粘性やや強 細り中
2 10YR5/6黄褐色粘土 粘性やや強 細り中 褐色シロト10%混入

6号土坑

AIq10
X=-27,396
Y=97,884



6号土坑(A-A')
1 10YR3/4暗褐色粘土質シロト

AIq11
X=-27,400
Y=97,884



第43図 4・5・6号土坑

20号土坑

CIIu15
X=27,516
Y=98,100



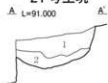
21号土坑



CII15
X=27,516
Y=98,096



21号土坑



A L=91.000

21号土坑(A-A')

- 1 IOYR4/1 褐色灰色シルト 粘性やや弱 砂/礫 地山層位埋没入
2 IOYR6/1 紅褐色細粒砂 粘性弱 砂/礫 地山層位埋没入

22号土坑

CIIv16
X=27,520
Y=98,104



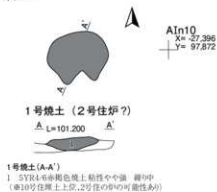
23号土坑

CIIw16
X=27,520
Y=98,108

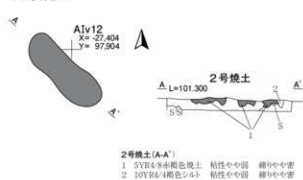


第44図 20・21・22・23号土坑

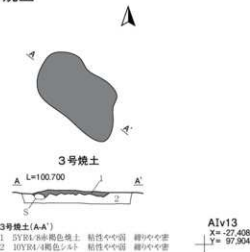
1号烧土



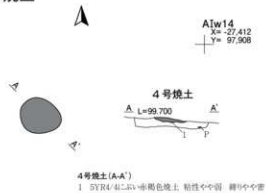
2号烧土



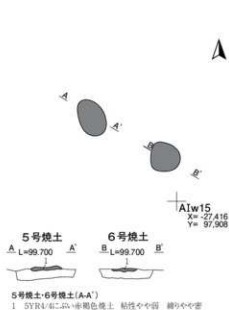
3号烧土



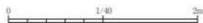
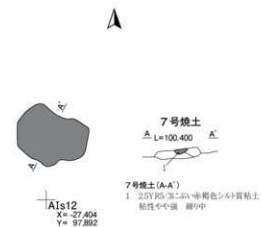
4号烧土



5号烧土・6号烧土



7号烧土



第45図 1・2・3・4・5・6・7号烧土

8号烧土

A1i8
 $X = -27.388$
 $Y = 97.884$



8号烧土(A-A')

1. 25YR4/6赤褐色シロト 粘性弱 継9中 (●焼上層)

10号烧土



10号烧土
 $L = 100.300$



A1s12
 $X = -27.434$
 $Y = 97.882$

10号烧土(A-A')

1. 25YR5/3赤褐色シロト質粘土 粘性やや強 継9中

12号烧土



12号烧土(A-A')

1. 5YR4/6赤褐色焼土 粘性中 継9中

A1m10
 $X = -27.396$
 $Y = 97.868$

9号烧土

A1i11
 $X = -27.400$
 $Y = 97.888$

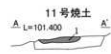
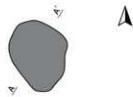


9号烧土(A-A')

1. 25YR5/3赤褐色シロト質粘土 粘性やや強 継9中

11号烧土

A1n9
 $X = -27.392$
 $Y = 97.868$

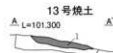
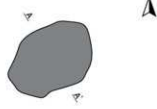


11号烧土(A-A')

1. 5YR5/6赤褐色焼土 粘性中 継9中

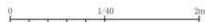
13号烧土

A1o9
 $X = -27.392$
 $Y = 97.876$



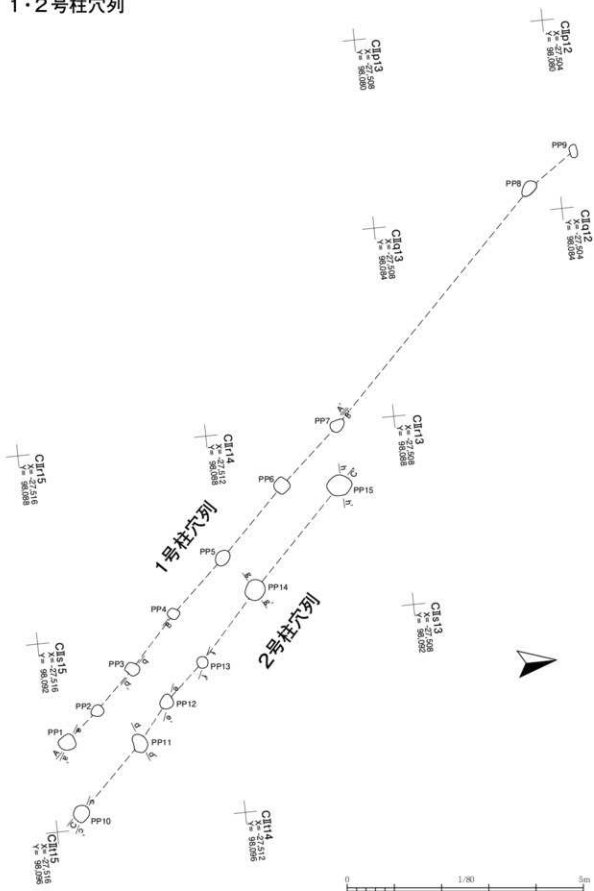
13号烧土(A-A')

1. 5YR5/6赤褐色焼土 粘性中 継9中

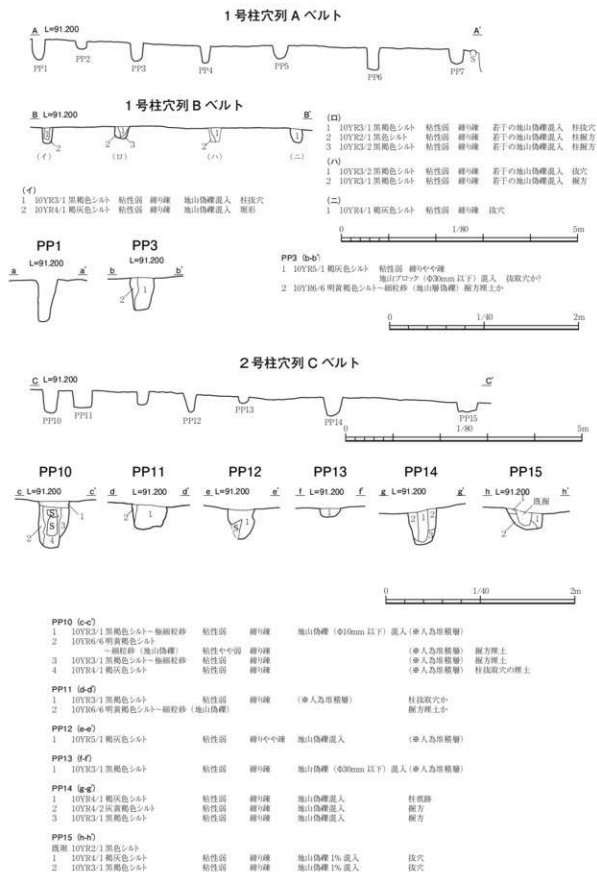


第46図 8・9・10・11・12・13号烧土

1·2号柱穴列



第47图 1·2号柱穴列 (1)



第48図 1・2号柱穴列 (2)

柱穴群



φ30mmの円錐



2号柱穴(a-a')

1 10YR2/1黒褐色シルト 粘性弱 締り疎 地山係埋没入 (※人為基盤層)

3号柱穴(b-b')

1 10YR2/1黒褐色シルト 粘性弱 締り疎 地山の微小係埋没入

4号柱穴(c-c')

1 10YR2/1黒褐色シルト 粘性弱 締り疎 地山層係埋没円錐(φ30mm)没入

5号柱穴(d-d')

1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性弱 締り疎 地山層係埋没円錐没入

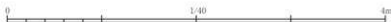
6号柱穴(e-e')

1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性弱 締り疎 地山層係埋没円錐没入

7号柱穴(f-f')

1 10YR2/1黒褐色シルト 粘性弱 締りやや疎 (※人為基盤層、後述の穴の埋没か?)

2 10YR5/1にのみ黄褐色シルト 粘性弱 締り密 (※人為基盤層、柱脚方埋没か?)

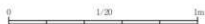


第49図 柱穴群

集石遺構



CEv15
x = 27,516
y = 98,104



V 出土遺物

遺物は、大コンテナ（42×32×30cm）で約61箱分が出土した。内訳は、土器大コンテナ43箱分、土製品小コンテナ1箱分（39点）、石器大コンテナ16箱分（2071点）、石製品大コンテナ2箱分（29点）、チップ・フレーク小コンテナ1箱分である。出土土器の主体性から、時期の出土傾向を述べると、縄文時代（※以後、時代は省略）早期は西調査区で、縄文前期の9割以上が西調査区、縄文中期～後期・弥生・古代は東調査区のみで出土している（※縄文中期末葉～後期初頭の出土地は東調査区捨て場には限定される）。ここでは、遺構内出土遺物と遺構外出土遺物を合せて扱い記述する。

1 土器

縄文土器、弥生土器、奈良時代の土器を合わせて550.635g出土した。主体は縄文前期初頭～前葉及び中期後葉～後期初頭である。他の時代・時期として、縄文早期前葉（1点）、弥生中期（2点）、奈良時代の土器（3点）の出土が認められた。

土器の観察項目としては、器種、口縁部形状・口唇部形態、残存部位、文様・特徴（縄文原体の回転方向は、横回転を横位、縦回転を縦位、斜回転を斜位と表記）、内面調整、土器の器厚（※観察表には最大値と最小値を表記）、土器胎土中に認められる繊維量（※主に縄文前期土器が対象、超多量、多量、中量、少量、微量の5段階で示す）、時期・分類の、各項目を、観察表に記載した。時期・分類では、縄文早期をⅠ群、縄文前期をⅡ群、縄文中期～後期をⅢ群、弥生をⅣ群、古代をⅤ群と分類し、Ⅱ群とⅢ群はさらに細分を行い明記する。

(1) 縄文土器

【Ⅰ群：早期】早期前葉日計式（日計式後半か）と推定される破片である。4号住の埋土中から出土したもので、今回の調査ではNa34の1点のみである。口縁部の形状は平縁で、口唇部に浅い刻みが施される。文様は、円柱状の素材に文様を掘り完成した原体を土器の器面に回転押捺させ、原体の陰刻部を器面に表出させる施文技法で、いわゆる押型文による横位平行線状文及び波状線文が観察される。土器胎土中には少量の繊維が認められる。なお、出土地である4号住からは縄文前期初頭～前葉の土器が纏まって出土しており、それらに混在した異時期のものと調査判断される。

【Ⅱ群：前期】土器胎土中に繊維の混入が認められる土器群で、前期初頭～前葉の時間幅で捉えられる。今回の調査では、西調査区で検出した竪穴住居跡やそれらの検出作業時において、纏まって出土した。また、東調査区捨て場においては、To-Cuテフラの混入層より下位において少量の出土があった。調査全体では、土器総量の約20%が当該期と推定される。

従来の土器型式編年では、前期初頭上川名2式や、前期前葉大木1式などに比定されるが、長七谷地Ⅲ群、表館式、早稲田6類cなどに共通する属性・要素もみられる。前期初頭は口縁部に縄文原体の押圧による側面疔痕や短沈線、胴部に0段多条の縄文原体による非結束羽状縄文が特徴的に認められるが、前期前葉は地文のみが多く、土器型式への比定が難しい土器群といえる。

ここでは、施文される縄文原体の種類及びその施文手法などの諸特徴の違いから1類～10類に分類し、さらに細部の違いで分種を試行してみる。時期や土器型式への比定については、Ⅶ章総括で検討・考察することとする。

Ⅱ群1類：縄文原体の側面による押圧縄文（側面圧痕文）の手法を用いるものを1類とした。口縁部に集約して認められる（口縁部文様帯形成を意識していると捉えられよう）。さらにa～c種に細分してみた。

Ⅱ群1類a種・早蕨状・渦巻状がモチーフされる。共存する属性として短沈線を伴うものが多い。

Ⅱ群1類b種・口縁部に押圧縄文が横方向に施されるもの（平行条線として表出されるもの）。

Ⅱ群1類c種・地文施文後に押圧縄文が施されるもの。

Ⅱ群1類は、縄文原体の側面を押し付けた押圧縄文により文様が構成される土器類である。早蕨状・渦巻文様のモチーフ（Ⅱ群1類a種）や、2条が直線的に並行して走りその間に短沈線が伴うもの（Ⅱ群1類b種）、地文を施文後に横位に平行する原体押圧文が施されるもの（Ⅱ群1類c種）などが見られる。a種とb種の胴部地文は、0段多条のLRとRLの2種類の原体を用いた非結束羽状縄文が横位に帯状に走るものがほとんどである（セット関係にある）。器厚は、最大値で10mmを超えるものが主体を占め、尚且つ最大値から最小値を引いた厚差は2mm以上が多い（※厚手が多く、また傾向として厚さが均一でないものが多い）。

Ⅱ群2類：羽状縄文を施文・構成するものを本類とした。以下a～d種に細分した。

Ⅱ群2類a種・0段多条のLRとRLの2種類の原体を用いて非結束羽状縄文を構成するもの。

Ⅱ群2類b種・2種類の原体による非結束羽状縄文を構成するもの（※原体は0段多条以外）。

Ⅱ群2類c種・2種類の原体を用いて結束羽状縄文を構成するもの（※原体は0段多条以外）。

Ⅱ群2類c種ア・横位に帯状に走るもの（横回転）。

Ⅱ群2類c種イ・縦回転と横回転を併用し、菱形を構成するもの。

Ⅱ群2類d種・1種類の原体を異方向に回転し羽状縄文を構成するもの。

Ⅱ群2類は、羽状縄文を構成・施文するものを対象とし、a～d種の4種類に区分した。0段多条の原体を用いて非結束羽状縄文を構成するものをⅡ群2類a種に、0段多条を用いない原体（0段2条など）により非結束羽状縄文を構成するものをⅡ群2類b種、結束羽状縄文（※今回調査は全て結束第1種で結束第2種は存在していない）をⅡ群2類c種（横回転をア、縦回転をイに細分）、1種類の原体を異方向に回転させ羽状縄文を構成するものをⅡ群2類d種とした。器厚は、Ⅱ群2類a種・b種は最大値10mmを超えるものが多く、d種は7～8mm、c種は両者の中間的な9mm前後が多い。Ⅱ群2類a種とした0段多条の原体による非結束羽状縄文は、Ⅱ群1類a類・b類に分類した土器の胴部地文として採用されている場合が大半である（上述の通りセット関係にある）。また、Ⅱ群2類d種としたNa173は、分類する上で異方向羽状縄文の属性を要感したが、Ⅱ群1類c種の属性も兼ね備えている（※Ⅱ群1類c種とⅡ群2類d種は共存属性の関係にあり、帰属時期も同じ可能性で考えられる）。

Ⅱ群3類：単節・複節など地文の施文のみが認められるものを本類として一括する。原体の回転方向の違いでa～e種に細分した。

Ⅱ群3類a種・単節・複節を用いて横回転を基調とする。0段多条の採用の有無でアとイに2分した。

Ⅱ群3類a種ア・0段多条の原体を用いるもの。

Ⅱ群3類a種イ・0段多条以外のもの（0段2段を用いるもの）。

Ⅱ群3類b種・縦回転を基調とするもの。

Ⅱ群3類c種・斜回転を基調とするもの。

Ⅱ群3類d種・原体を異方向に回転し重層施文するもの

Ⅱ群3類e種・原体が判別できないもの。

Ⅱ群3類は、単節・複節など地文のみを施文するものを一括し、原体の回転方向の違いでa～d種に分け、回転方向不明をe種とした。また、a種についてはさらに0段多条を用いるものをア、0段2段をイと2つに分けた。本群土器（前期土器）の中で最も多いのがⅡ群3類a種イとした、0段が非多条の原体による横回転を施文する土器である（※口縁部～胴部まで地文のみを施文する土器群として一括される）。また、0段多条の原体を用いて横回転が施されるⅡ群3類a種アは、同原体による非結束羽状縄文のⅡ群2類a種と比較して、器厚がやや薄い。加えて、原体の節も細長いものが多いことも相違点と捉えられる。底部が残存する資料としては、Ⅱ群3類a種アに分類した№106・111は丸底である。また、Ⅱ群3類a種イに分類した№1・195は、胴部下半からの器形の連続性から丸底の可能性がある。

Ⅱ群4類：環付き末端ループの手法をとるもの。

Ⅱ群4類は、縄文原体末端を折り曲げ押し付けた後に回転施文される、いわゆる環付き末端ループで、原体はLR、RL、RLRの3種類が認められた。今回の調査では総数11点出土したが（全て掲載した）、全て横回転である。出土割合は低い（前期土器群に占める割合は5%以下で、推定では2%くらいと判断される）。№200と298は多段に施文される。

Ⅱ群5類：付加条の原体を用いるもの。

Ⅱ群5類は、付加条の原体を用いるもので、総数3点認められた（※付加条は全て掲載した）。何れもLRにLを付加する。本遺跡の前期土器に占める出土割合は1%に満たない（希少性が非常に高い）。口縁部が残存する№390・391は微波状口縁で、器厚6mm前後と薄い。

Ⅱ群6類：組縄縄文（俗称ビッチリ縄文）を施文するもの。

Ⅱ群6類a種：組縄縄文を施文するものである。

Ⅱ群6類b種：組縄縄文の可能性が高いものの、特定できかねたもの。

Ⅱ群6類は、組縄縄文と特定できるもの（Ⅱ群6類a種）及び組縄縄文と推定されるもの（Ⅱ群6類b種、※断定できないがその可能性が高いもの）を一括した。今回の調査では多く出土しており、前期土器に占める割合は高い（前期土器の20%前後を占める）。口縁部から胴部まで、組縄縄文のみを施文するものがほとんどで、一個体に組縄と共存する文様などは認め難い。口縁部形状は平縁若しくは微波状である。口唇部は、角状に面取りが施されたものが多く、指頭圧痕文が連続施文されるものが多く認められ、Ⅱ群6類の中では約半数（約50%）に指頭圧痕文が認められる。底部が残存する資料として、№72は丸底、№295は尖底で、加えて№81は器形の連続性から丸底の可能性が高い。

Ⅱ群7類：組紐を施文するもの。

Ⅱ群7類は、原体に組紐を用い回転施文するものである。28号住出土の№191の1点のみ認められた。

Ⅱ群8類：口縁の端部付近に円形の刺突列が施文されるもの。

Ⅱ群8類は、口縁部に横位方向の円形刺突列が認められるものである。14号住出土の№138の1点認められた。刺突列の下部にはLR横回転が施文される。口唇部はミガキが施された丁寧な作りである。

Ⅱ群9類：S字状連鎖沈文を施文するもの。

Ⅱ群9類は、S字状連鎖沈文が施文されるものである。西調査区遺構外出土の№318の1点のみである。

Ⅱ群10類：口縁端部に斜位の刻みを持つもの。

Ⅱ群10類は、口縁端部に斜めの刻みが列で施されるものもある。西調査区遺構外出土の№317の1点のみである。

最後に、Ⅱ群土器の器形に関する内容を補足する。

全体の器形を推定できる資料は希少にあるが（ほとんどない）胴部から口縁部にかけて直線気味に立ち上がるものや、穏やかに外傾するものを基本とする。その他に少数ではあるが、口縁の端部付近が若干内湾気味のもの（№31・156など）が含まれる。

口縁形状は、平縁が主体で、次いで僅かに波状を呈する（微波状と呼ぶことにする）ものが中心である。波状口縁は少ない。口唇形状は大別すれば、面取りが施され角状のもの（平滑なもの）、内側に内削ぎ状のもの（内傾するもの、「内削ぎ」と表記）、丸気味のもの（「丸み」と表記）がある。ある程度の出土数を得られているものの中で傾向を探ると、Ⅱ群1類a種は内削ぎや丸みが多く、Ⅱ群3類a種・Ⅱ群4類・Ⅱ群6類は角状が多い。また、口唇部に縄文や刺突文が施されるのはⅡ群3類a種イに多く、指頭圧痕文はⅡ群6類に多い。

底部形態について、胎土中に繊維を含む底部資料を見る限り、平底と丸底の両者がある。また、胴部下半の破片の中にはその連続性から丸底と推定されるものもある。平底の確実な資料は未確認である（※普通大木1式は平底であるが、本遺跡資料では平底の存在は不明と言わざるをえない）。掲載した中で底部資料若しくは底部形状が窺える資料としては№1・72・81・106・111・195・295が挙げられ、その内№295は平底で、他は丸底と推定される。上記した分類では、Ⅱ群3類a種ア（№106・111）、Ⅱ群3類a種イ（№1・195）、Ⅱ群6類（№72・81・295）に相当するものに伴う。完形資料がなく、底部形態から時期の言及は難しい。丸底は、基本的に前期初頭と捉えたいところであるが、今回出土した6点は前期前葉に帰属する可能性が窺える資料である。大木1式は平底で、早稲田6類には丸底も存在するのが従来からのセオリーと思われるが、あるいは本地域の前期前葉土器（大木1式期の土器）には丸底が存在する可能性がある。

【Ⅲ群：中期後葉～後期初頭】中期後葉～後期初頭の土器をⅢ群として一括する。

調査全体での土器総量の中では、80%弱をⅢ群土器が占める。そのほとんどが東調査区捨て場出土である。捨て場における該期の遺物包含層はⅡa層と命名した土層で、同層は上位・中位・下位の3分して取り上げた。層位間における時期の新旧関係ははっきりせず、特に中期末葉と後期初頭は混在した出土状況にある。土器型式に比定できるものについては、大木9式をⅢ群1類に、大木10式をⅢ群2類、後期初頭（葦窪式期）をⅢ群3類として表記する。また、中期末葉～後期初頭の時間幅で推定されるもの特定出来かねたものを4類とした。

なお、底面に圧痕が認められる資料として、№214・232・237～240・271・275・321に網代痕が、№228・273・274に木葉痕がある。これらは総じて土器型式への比定が難しいものであるが、後期初頭の可能性がある。このことは、中期末葉大木10式段階では底面の圧痕をミガキ消すなどの行為が行われ、後期初頭段階ではそのような行為が簡素化されたことが窺われる。

Ⅲ群1類：大木9式を一括する。

今回の調査では、文様から大木9式と判断できるのは掲載した2点のみである。何れも東調査区捨て場から出土した。№201と202は、文様施文の類似性や器厚が同じ値（6mm）を示すことから、同一個体と捉えられる（破片同士に接点なし）。№202を見ると、上位の楕円形文は隆線区画で区画内に刺突文が施文される。その下位の楕円形文（※上位より幅が狭いスリムな楕円若しくは逆U字状）は、LR縦回転施文後に沈線による区画され、磨消縄文手法が採用される。文様モチーフの在り方から、大木9式の中ではやや新しい段階と捉えられる。

Ⅲ群2類：大木10式を一括する。

文様の属性やその施文手法などから、大木10式に比定される。阿部昭典氏の提示した幅年に準拠すると、大木10式の中で古相・中相・新相の3時期区分が可能と判断される資料もある。古相と判断さ

1 土器

れるものとしてNo203・204・212・213・231が、中相はNo205～211・319・320、新相としてはNo215～217が挙げられる。No216・217の内面には漆の塗布が確認された（※No216は漆分析を実施し、漆と特定された）。

■群3類：後期初頭と推定できるものを一括した。

土器型式への比定は難しいものも含むが、概ね葦窪式あるいはその前後型式（上村式など）に相当すると捉えられる。葦窪式の土器型式名を用いることは、観察者の理解が弱いまま使っていることで躊躇もあるが、本稿ではNo253・254・259などに代表される口縁部への貼付隆線により文様がモチーフされ、その隆線の上に円形の細かい刺突文が施文される土器などが葦窪式と捉えている。また、No258・261・263・322に代表される貼付隆線の側縁に刺突文が沿う土器群も葦窪式のバリエーションの一つと考えている。

大木10式と葦窪式の、両者の特徴を持つものとしてNo243などを挙げておきたい。あるいはこれらが、上村式と呼ばれる土器であろうか。

次に、東北地方南部を代表する後期初頭の土器型式である門前式の影響を受ける、あるいは折衷と推定されるものとして、No245のボタン状貼付文を持つものや、No248・251・254など連鎖状隆起線文を施文する土器を挙げておく。門前式と判断されるものは数量的には少なく、本地域はより北の影響が強い土器群が分布すると推定しておきたい。

■群4類：中期末葉～後期初頭の時間幅で推定される。

中期末葉～後期初頭の時間幅で推定されるもの、土器型式への比定が困難なものを一括する。磨消縄文を伴う壺形土器であるNo224や、無文で2足付きのNo272、さらには上記した土器底面に網代痕を持つNo275・321や木葉痕を持つNo273・274についても、ここに分類した。

■群4類としたものは、器形などの特徴や胎土の様相など、明瞭とは言えない内容を昇華してあえて述べれば、主体は後期初頭の可能性で考えている。

(2) 弥生土器

弥生土器をIV群とした。東調査区の捨て場Ⅱa上位層よりNo276・277の2点が出土した。外面には赤色顔料の塗布が認められる。No276は無文地に沈線による流水文が描かれる。No277は、胴部にLR充填縄文による縄文帯で横方向に展開する流水文が描かれる。これら2点は、何れも弥生中期の前半段階と推定されるが、詳細は分からない。

(3) 土師器

古代の土器（土師器）はV群とした。東調査区捨て場Ⅱa上位層よりNo278～280の3点と、33号住の煙道より1点（2cm程の小破片で不掲載とした）出土した。外面は横方向を基調とするヘラミガキが施され、内面はハケメによる調整痕が認められる。3点ともに小破片で、器種の特定は困難にあるが、壺や壺の胴部と推定される。時代は何れも奈良時代と推定される。

今回の調査地では、古代の遺構は全般に遺存状態が不良で、また遺構からの遺物出土もなかったが、東側に隣接して宮古市教育委員会が発掘調査を実施した調査地ではカマドの遺存状態の良好な古代の竪穴住居跡が検出されている。

2 土 製 品

土製品は39点出土した。ミニチュア土器9点、三角埴形土製品1点、円盤状土製品28点、土偶1点である。

(1) ミニチュア土器

ミニチュア土器は9点出土し、6点掲載した(No.341~346)。完形品は無い(観察表の器高値は□を付けて遺存値を記載)。無文が多く、また地文のみ(No.345)や多重沈線(No.346)などの特徴からは、詳細な時期が特定できない。ただし、全て東調査区捨て場からの出土であることから、縄文中期末葉~後期初頭と推定しておきたい。

(2) 三角埴形土製品

No.347の1点出土した。縁辺に2列の刺突列が巡る。器体側面に貫通孔が穿たれている。東調査区捨て場出土であることから、縄文中期末葉~後期初頭と推定される。また、県内の出土事例からも当該時期が支持できよう。補足として、宮古市教育委員会調査地(平成27年度調査で、東調査区の近接地)からも同様の土製品が出土している。

(3) 円盤状土製品

28点出土し、12点掲載した。時期は、出土地や縄文原体の様相、胎土中繊維の有無などから、No.348・349・357~359は縄文前期前葉、No.350~356は縄文中期末葉~後期初頭と推定される。傾向としては、縄文中期末葉~後期初頭と推定されるものに、縁側面全周に亘り丁寧なミガキが施される。縄文前期前葉は、打ち欠いたままの状態のものや、一部分のみ粗いミガキが施されるものが多い。

(4) 土 偶

土偶として掲載したのがNo.360である。抽象的な形態の土偶の右手~右胸付近と捉えた。細かい刺突による刺突列で文様モチーフされている。また、右肩上面付近に「肩パット」が付く、特異なものといえる。時期は明確には分らないが、刺突文の様相が三角埴形土製品に施文されるそれと類似することから、中期末葉~後期初頭の産物と推定しておきたい。

3 石 器

(1) 剥片石器

剥片石器は249点出土した。内訳は、石鏃65点、尖頭器4点、石匙45点、石鎌10点、石筵4点、スクレイパー77点、ピエス・エスキュー3点、コア1点、力持型スクレイパー5点、Uフレ33点、その他2点である。また、剥片石器制作時の残滓と捉えられるチップ・フレークが総量で2,584.3g出土した。【石鏃】:65点出土(石鏃?1点含む)、15点掲載した。

前期初頭~前葉の産物と捉えられる西調査区出土が、No.407・408・411・412・416・425・429~431・433である。基部形態は、棒状1点を除くと、前期はほぼ2種類に限定され、平基を中心にわずかに抉りが認められる。棒状の形態で長さ5.1cmを測るNo.433を除くと、平均最大長は約2.4cm、平均の

重量1.3gである。

対して、中期末葉～後期初頭の産物と捉えられるのが、№435～439である。不掲載としたものも含めた観察所見としては、基部形態が№435のように強く抉れるものや、有茎のものなどが含まれる。平均最大長は2.8cm、重量1.5gで、前期よりやや大形のものが増える傾向が看取され、合せて先端部が欠損するものの割合も高くなる（前期が5%、中～後期が約21%）。石材は全て北上山地中生代の頁岩である。

【尖頭器】：槍先などの刺突具と推定されるものである。4点出土し、2点掲載した。形状は、石鏃様や横幅のあるものなどがある。掲載した№402は6g、№440は6.8gを測るが、石鏃と平面形状が似るものについては、重量5g以上を区分の基準に用いた（※石鏃の平均重量1.5gを逸脱して超えるものは尖頭器と認知することとした）。№402は、その平面形状が基部から先端部にかけて緩い弧状（※直線的ではなくやや曲がる形状）を呈し、基部の作り出しもやや粗雑にある。石材は北上山地中生代の頁岩である。№440は菱形に近い形状で、基部と判断した部位は先端部とした側と比べて、二次剥離が粗雑にみとれる。北上山地中生代の赤色頁岩を用いている。

【石匙】：一端に摘み状の突起を持ち、側縁の一部に刃部を有するものうち、錐部を持つもの（石鏃）を除き、石匙として一括する。45点出土し、17点掲載した。摘みを上にしてみた場合、①主要な刃部が縦方向のもの（縦型と呼称する。）と、②横方向のもの（横型と呼称）、③斜め方向をみるもの（斜型と呼称）の、大きくは3つに大別される。今回出土した45点の内訳は、縦型19点、横型13点、斜型6点、欠損により摘み部のみで遺存で主要刃部が推定できないもの7点である。西調査区からの出土が全体の73%を占めることから、前期初頭～前葉に多く制作されたことが推定できよう。また、斜型は西調査区からのみ出土している（※中期末葉～後期初頭には認めたいと考えられようか）。主要刃部をみると、縦・横・斜型に関わらず片面のみに剥離がほどこされるもの（片刃）が主体にある。石材は、№428が珪質頁岩、他は全て頁岩である。

【石鏃】：10点出土し、3点掲載した。全て東調査区捨て場出土であることから、今回の調査で出土した石鏃については、縄文中期末葉～後期初頭の産物と推定され、前期前葉にはほとんど認めたい器種と考えられる。掲載した3点の平面形状は三様と言え、№441は簡易的な摘みを持ち錐部が直線的に伸び（スマートな作りで、錐部の先端が欠損する）、№442は錐部が短く横幅が広めの形状、№443は棒状を呈する。全て北上山地中生代の頁岩である。

【石鏃】：4点出土し、2点掲載した。№414は、西調査区1号焼土付近で出土したもので、礫の切断面に剥離を施し片面に礫面を残し、刃部は下端と推定される。刃部角度は50°前後を測る。後述する力持型スクレイパーと仮称した石器（岩手埋文第510集：2008）の小形とも見て取れるが、刃部の加工具合（刃部中央に向かいやや窪むような作り）や礫面側の右辺側縁に剥離が施されることで、力持型スクレイパーとは相違する（※同器種とは区分して示す）。石材は凝灰岩である。№444は、東調査区捨て場から出土した。撥状の形態を呈し、刃部は両面加工が施される。石材は頁岩である。

【スクレイパー】：77点出土し、7点掲載した。本稿でスクレイパーとしたものは、二次加工や微細剥離のあり方から、刃部を有すると判断されたもので、加えて力持型スクレイパーや礫片スクレイパーを除いたものである（№406・427・445～448、主に削搔器と判断される刃部を有するもの）。加えて、石鏃、石匙、石鏃など定形石器の未成品や、それらの折損品の可能性を有するもの（№415）も含めた。剥片石器の約30%を占める。石材は頁岩製が多く、次いで赤色頁岩やメノウなどが用いられている。石鏃未成品の可能性のある№415の黒曜石製は、男鹿系の分析結果を得られた。

【ピース・エスキュー】：3点出土し、1点掲載した。両極打法による階段状剥離痕が認められるもの、

若しくは全体形状が楔形を呈するものを本器種とした。掲載したNa449は、表面に自然面を広く残し、上端に階段状の剥離が認められる。さらに、裏面（一次剥離面）の上下端にも同様に両極打法による階段状剥離が認められる。石材は砂岩である。

【コア】：剥片を剥がした際に残された残核と判断されたもので1点出土した（不掲載とした）。重量は約340g、石材鑑定は実施していないが頁岩と推定される。

【力持型スクレイパー】：普代村力持遺跡で仮称された石器で（岩手埋文第510集：2008）、片面のほぼ全面に自然面（母岩表皮）を残す剥片を素材とし、切断面側の縁辺に剥離が施され、刃部は鈍角（平均的には約60°）をみる。平面形は楕円形や長方形で、両側縁がほぼ平行気味な作りを成す。5点出土し、2点掲載した。全て西調査区からの出土である。Na422は長辺6.4cm（※遺存値）、短辺4.7cm、重量58gを測る。Na450は、長辺9.9cm（※遺存値）、短辺6.0cm、重量143.6gを測る。石材は砂岩と凝灰岩が認められる。力持遺跡の報文中の分類に準拠すると、AⅡ群に相当する。力持遺跡で出土しているAⅡ群の平均法量値と比較すると、Na422はほぼ平均値に、Na450はやや大形の部類に属する。

【Uフレ】：剥片に二次剥離など加工の痕跡はないものの、使用痕と判断される微細剥離が認められるもので、本稿ではユーティライズドフレイクの略称としてUフレと呼ぶこととする。33点出土し、全て不掲載とした。なお、形状や規模から石鏝の制作初期の放棄品（いわゆる未成品）と推定されるものも含めた。

【その他】：上述してきた器種以外の石器（名称の付け難いもの）としては、自然礫の一端に打ち欠き痕が認められるもの1点と、Na410として掲載した縦長剥片が出土した。石材は頁岩である。

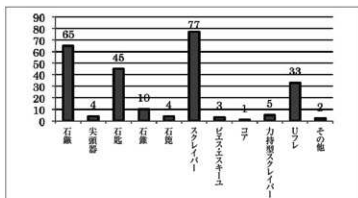
(2) 礫石器

礫石器は1822点出土した。磨製石斧59点、特殊磨石41点、磨石681点、磨器34点、敲石68点、凹石11点、砥石4点、石皿30点、台石24点、礫器71点、礫片スクレイパー14点、板状礫9点、棒状礫4点、扁平礫1点、円礫771点、である。

【磨製石斧】：59点出土し、16点掲載した。完形品と捉えられるのはNa508・509・510・531・532の5点のみで、欠損品36点（刃部や基部に多い）、未成品13点、何らかの別器種への転用品（敲石など）5点である。石材は9種類が採用されており、ヒン岩、頁岩、デイサイト、砂岩の順に多い。

【特殊磨石】：側面に磨面を持つ石器を「特殊磨石」の名称を用い、「磨石」とは区分して示す。41点出土し、12点掲載した。磨面の幅は1.0～3.2cmの範囲で認められ、平均値1.8cmである。磨面がザラザラした感触のものや磨面縁辺に剥離が施されたものなどが顕著に認められる。法量値は、長さ14cm前後、幅7.5cm前後が多い。重量は、最も軽いもので208g、最も重いもので1.551gを測り、平均値683.1gである。石材は、石材鑑定を実施したものでみると、砂岩、花崗岩、花崗閃緑岩、花崗斑岩、礫岩、細粒閃緑岩の6種類であるが、不掲載としたものを見る限りそれ以外にも多様な石材の礫が用いられている。出土地は、西調査区21点、東調査区20点である。

第2表 剥片石器組成表



【磨石】：磨痕が認められるものを磨石とした（※特殊磨石と認知したものは除く）。破片や何らかの未成品（磨製石斧の制作最初期段階か）の可能性があるものなどを含め681点出土した。出土地は、東調査区（※ほぼ捨て場に限定される）から508点、西調査区155点（その内、住居跡出土が90点）、その他18点は宮古市教育委員会による試掘調査で出土したものである。平均重量は467.1gである。掲載に際して、住居出土を優先して選択し24点を掲載した。不掲載としたものを含め観察所見を述べると、形状・規模・磨痕の位置、石材など様々にある。また、表裏のほぼ全面に磨痕を持つもの（※掲載した中では、No456・468・469・470・472・473・479・486などに代表される）のほかに、磨痕磨痕ある礫の一端が切断されたもの（No462・475・478・492）、輪切り状のもの（No453）や、一端に打ち欠き痕や敲打痕を持つもの（No452・455・464・471・474・501・502など）、焼成痕が観察できるものなどがある。石材は花崗閃緑岩や花崗岩が圧倒的に多く、次いで砂岩、花崗斑岩、ヒン岩などが用いられている。

【敲打器】：磨痕と敲打痕が併用して認められるもので、34点出土し（認知し）、2点掲載した（No493・518）。出土地は、東調査区捨て場が主体を占める。No493は、表裏面に亘り磨痕を載る敲打痕が認められる。No518は、表面のほぼ全面に磨痕が認められ、内外面の縁端部に敲击擦ったような敲打痕が認められる。留意点として、磨石や礫石と分類したものと、若干混在した可能性があることを付記しておく。石材はデイスサイトと砂岩である。

【砥石】：敲打痕を有し、砥石としての用途が推定されるものである。68点出土し、8点掲載した。縁端部などに敲击擦ったような敲打痕を持つNo494・519・520・535や、多面体に敲打痕が認められるNo521は、磨製石斧などの加工具の可能性で調査判断される。No503・534は特殊磨石と同様に側面に敲打痕が認められ（敲击擦ったような様子なので敲打痕としたが、ザラザラ感の強い磨痕様相ともいえる）、高且つ敲打痕縁辺に剥離が施される。また、No499・511は、磨製石斧から砥石への転用品と推定される。石材はヒン岩、頁岩、細粒閃緑岩、デイスサイト、砂岩である。

【凹石】：明瞭な凹部を確認できるものを凹石とした。11点出土し、6点掲載した。なお、11点中8点が東調査区捨て場出土である。全て両面に凹部を有し、凹部の位置は石器中心軸付近にある。重量は249～443gで、平均値352gである。石材は凝灰岩や砂岩である。力持遺跡で実施されている石器使用痕分析からは、オニグルミの殻の先端を敲き飛ばす道具と考察されているが、重量などからテリケートな作業に適した重さの礫が選定されていると捉えられよう。また、出土地は上述のとおり東調査区捨て場が主体を占めることから、縄文中・後期において、遺跡周辺ではオニグルミが採取できる植生環境にあったことが考えられようか。

【砥石】：溝状の砥痕を有するものや、研いだ際の研磨痕と判断される使用痕を有するものを砥石とした。4点出土し、1点掲載した。掲載したNo504は、石材がホルンフェルスで、石器の中心部に比較的広い擦痕が認められる。この有り方からは、磨製石斧などの加工具（砥石）と調査判断された。また、石器全体の規模的観点からNo497やNo505など台石や石皿としたものにも砥痕を有するものが認められるが、用途的には砥石としたものと同様の可能性もある。補足として、不掲載とした3点は小破片で砂岩が用いられているが、石皿としたNo458に類似することから、本来的には石皿の破片であった可能性も考えられることを付記しておく。

【石皿】：30点出土し、6点掲載した。主に大形の扁平礫を素材とし、周縁が高まりが巡らされ、その内部の使用面に磨痕や、砥痕（研磨痕らしきものも含む）、敲打痕（凹部含む）などの使用痕が認められる。また、縁辺や底部に敲打による整形が施されるものもあるや両面に磨痕が認められるものもある。全て欠損品若しくは破片で、石材は砂岩が主体を占める。

【台石】：作業台的な使用が想定される扁平礫を台石とした。24点出土し(台石? 3点を含む)、1点掲載した。石皿と比較して、完形品が少ないことや砂岩性が多い点は共通する。

【礫器】：礫石器として登録してきた磨製石斧、磨石、敲石、砥石、石皿などの器種に分類し難いものの、整形を意図した可能性で推定される打ち欠き痕や、磨痕、敲打痕などが認められるものを礫器として一括した。71点出土し、5点掲載した。№537は、表面に礫面を残し、裏面に二次剥離が全面に施される打製石斧に類似したもので、磨製石斧の制作工程の初期段階で制作放棄された可能性がある。また、不掲載としたものを含め概観すると、磨製石斧の最初期段階で制作放棄されたと推定されるものの、その形状から磨製石斧未成品とするには躊躇したものについてもここに含めた。石材はデイサイト、ヒン岩、細粒閃緑岩である。

【礫片スクレイパー】：円礫の切断面に、使用痕と推定される微細剥離が認められるものを礫片スクレイパーと、仮称して示す。補足として、使用痕(刃部)と推定した微細剥離が、明確に使用痕であると断定できないものが主対象にあり、スクレイパーとは区分して示すことを目的に仮称した。14点出土し、3点掲載した。破損した磨石片を再利用した可能性を有するものもあるが、多くは円礫として後述する小円礫を打ち欠きその縁辺を刃部として用いている。また、礫面を残すスクレイパーという観点では力持型スクレイパーの定義に違い石器といえるがそれとの相違点としては、①切断面に意図的な二次加工が施されていないこと、②規模が小さく両側縁が必ずしも直線的でないこと(形状が斧的ではないこと)、③刃部角度が30~45°と浅角(鋭角)なもの(比較的鋭利な刃部を呈する)が多い(力持型スクレイパーは60°以上の鈍角がほとんどで、鋭利ではない)。石材は砂岩や細粒閃緑岩である。

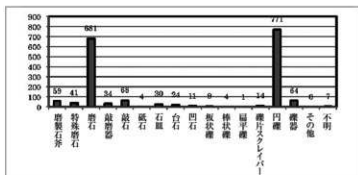
【板状礫】：9点出土し、全て不掲載とした。平面形状が方形気味で、表裏面が平坦気味の礫を板状礫とした。補足として、使用痕や加工痕が認められなく、台石とするには躊躇したものである。規模的にも台石とするには小さいと調査判断された。

【棒状礫】：4点出土し、全て不掲載とした。明確な加工の痕跡が認められないものの、石棒の形状をした礫である。あるいは石棒加工用に持ち込まれた礫である可能性が考えられようか。石質鑑定は実施していないが、凝灰岩と推定される。

【扁平礫】：1点出土し、不掲載とした。意図的な加工痕や使用痕が認めたい扁平礫である。平面形状が楕円形に近いことで、板状礫と区分した。石材鑑定は実施していないが、砂岩と推定される。

【円礫】：771点出土し、3点掲載した。本稿で円礫としたものについて説明すると、大きさは径3~8cmほどの自然円礫である(※磨石くらしいのもの~磨石の倍ほどの大きさくらいまでが主体を占める)。771点の平均重量は約61gである。使用痕などは認められないが、東調査区捨て場から多量出土(捨て場から745点出土)したことから、何らかの特性と捉え全て取り上げ登録した。形状をみると、①円形の板状、②円形の球状、③楕円形の板状、④楕円形の球状などの4種類に大別される。数的には①と③が圧倒的に多い。石材鑑定を実施したものは、細粒閃緑岩、ヒン岩、花崗岩が認められた。

第3表 礫石器組成表



4 石製品

石製品は29点出土した。有孔石製品1点、男根模倣石製品1点、円盤状石製品2点、石棒9点、石刀13点、不明石製品2点である。

【有孔石製品】：№551の1点が出土した。長径7.3cm、短径2.6cm、厚さ2.3cmの長楕円形の棒状礫両端に穿孔が認められる。孔の上端径は7mm前後である。裏面とした面の一部分にわずかに擦痕（自然摩耗？）が認められるものの、穿孔部以外は人為の整形や加工がなく、自然礫の原形を留めているものである。石材は頁岩で、色調は酸化によるものなのかやや赤み帯びる。

【男根模倣石製品】：№552の1点出土した。やや曲がった棒状礫の両端が研磨されたもので、推定の域は出ないが男性性器を模した石製品と捉えたが、従来から周知されている「男根状石製品」とは、形状や規模、片方の端部付近に擦痕の整形が施されるなど、相違点が多々あることから、同名称を回避して、「男根模倣石製品」と仮称し表記する。長径6.3cm、短径3.4cm、厚さ1.8cmで、砂岩製である。出土地は東調査区捨て場であるが、層位は縄文中期末葉～後期初頭の包含層であるⅡa層より下位のⅡb層で出土している（包含層の主体時期より古いか）。類例は探索し得なかった。上述した男根状石製品は、西和賀町峠山牧場1遺跡B地区（岩手埋文320集：2000）や煤孫遺跡（岩手埋文196集：1996）など大木6式期を中心とする遺跡で出土している（※前期末葉に限定した産物の可能性が考えられる）。

【円盤状石製品】：礫縁辺を打ち欠き円形（円盤状）を意識した仕上げを志向したと思われるものであるが、きれいな円形でなくやや重なる形にある。2点出土したが不掲載とした。

【石棒】：棒状に加工が施された石製品である。9点出土し2点掲載した。№553は、上端部に柄と捉えられる握み状が作り出しされている。全身が丹念に研磨されている。石材は頁岩である。№553を除く8点は元々棒状に近い形状の礫縁辺に、敲打を加えて棒状の形に整形したもの（制作途中の未成品の可能性あり）で、掲載した№555に代表される。石材は凝灰岩である。

【石刀】：13点出土し1点掲載した。13点中、東調査区捨て場から9点出土していることから、縄文中期末葉～後期初頭が制作の中心時期と捉えられる。また、断面形が長楕円形に近いものを石刀とし、石棒とは断面形の違いで区分した。また、加工に伴う擦痕なのか自然摩耗した形状が類似する自然礫なのか、その区分が困難なものも含まれる。№554は、先端部が欠損したもので、表裏両面に亘り加工に伴う擦痕が認められる。石材は砂岩である。

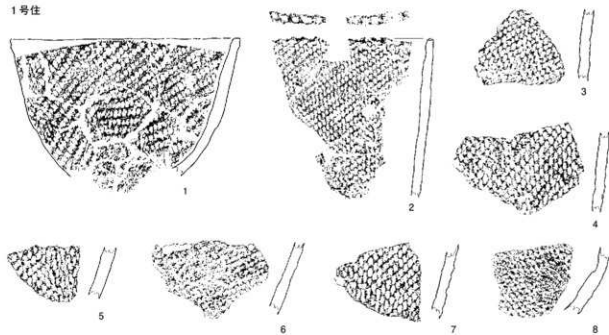
【不明石製品】：2点出土した。何らかの人工品と捉えたが、器種区分が困難なものを不明石製品とした。掲載した№556は、半円に近い形状で、中心付近に穿孔途中（未貫通）の孔が認められる。耳飾りの未成品の可能性を推定しておきたい。石材は頁岩である。

5 その他

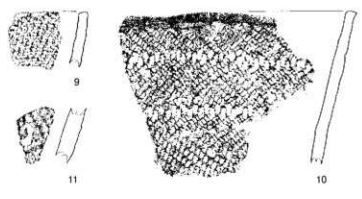
羽口の小破片1点と鉄滓1点が東調査区の試掘の際に、カクラン層より出土している。何れも不掲載とした。今回の調査では、鉄生産関連の遺構は出土していないことと、奈良時代の土師器が少量出土しているが、平安時代や中世の遺物は出土していないため、状況は掴めない。

本遺跡から近距離には、古代～中世と推定される炭窯を検出した駿達遺跡がある。

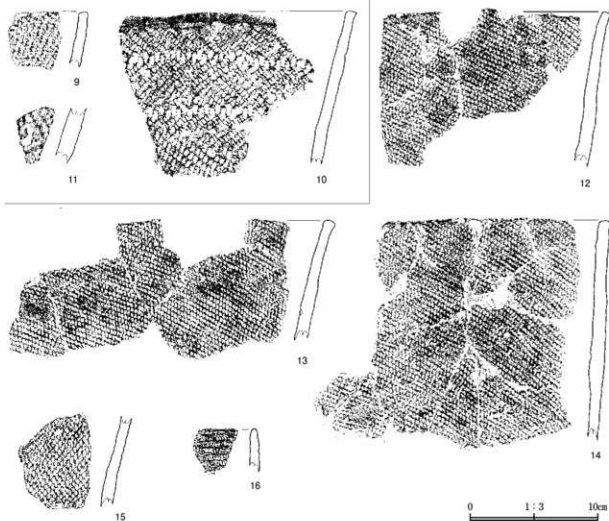
1号住



2号住



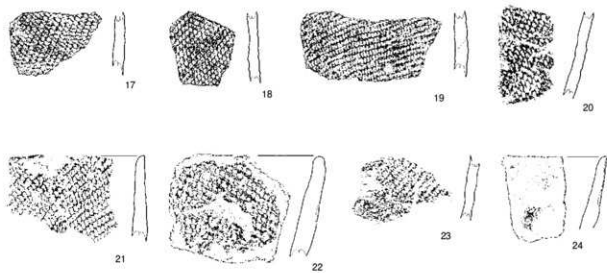
3号住



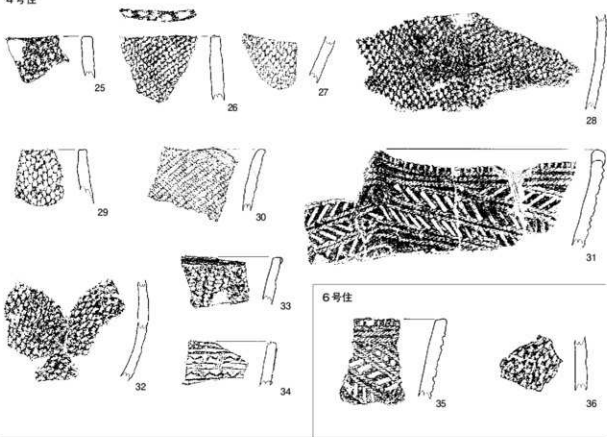
0 1:3 10cm

第51図 1・2・3号住土器

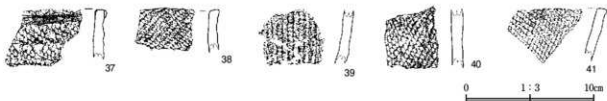
3号住



4号住



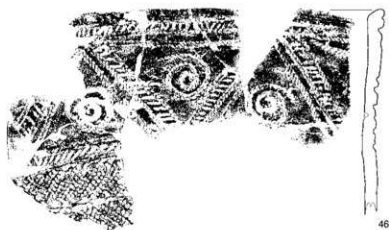
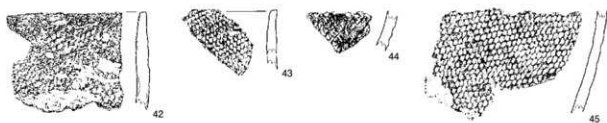
7号住



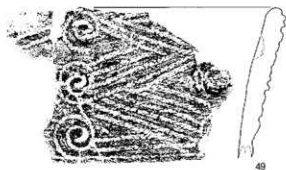
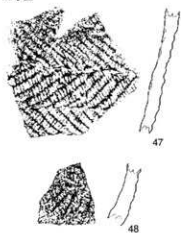
0 1:3 10cm

第52图 3·4·6·7号住土器

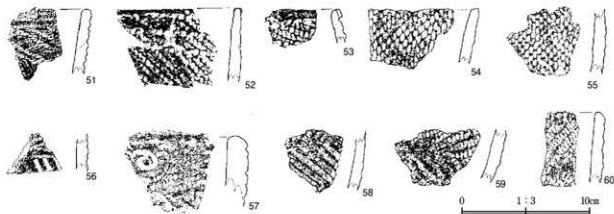
7号住



8号住



9号住

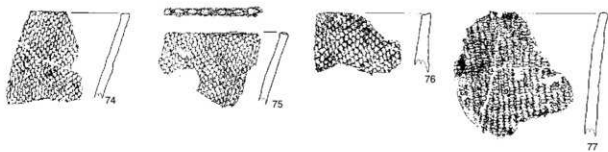
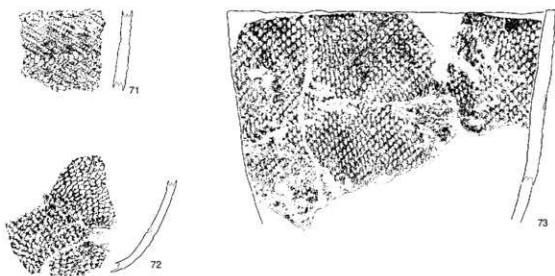
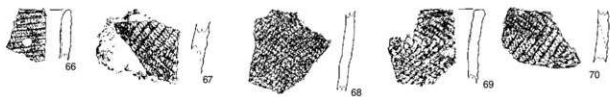


第53图 7・8・9号住土器

9号住

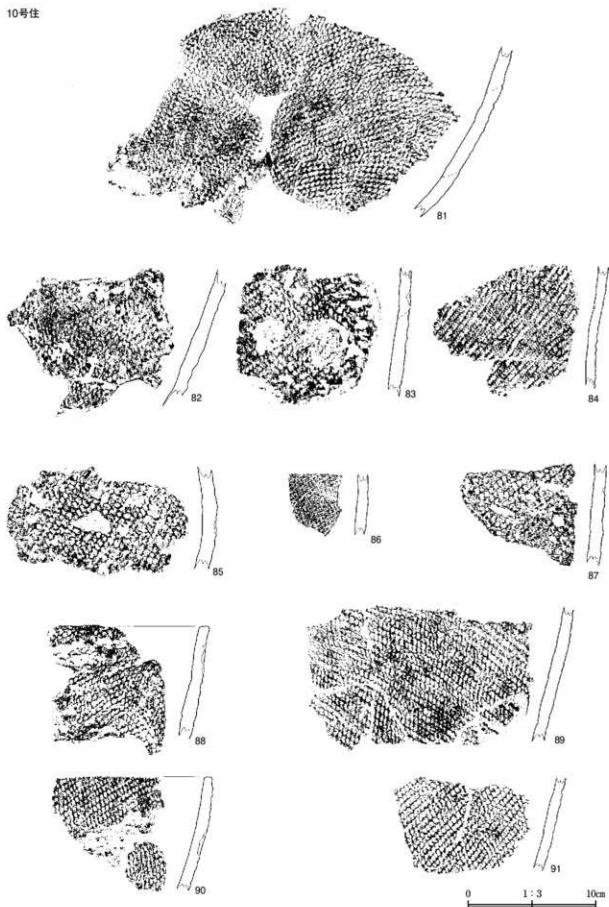


10号住



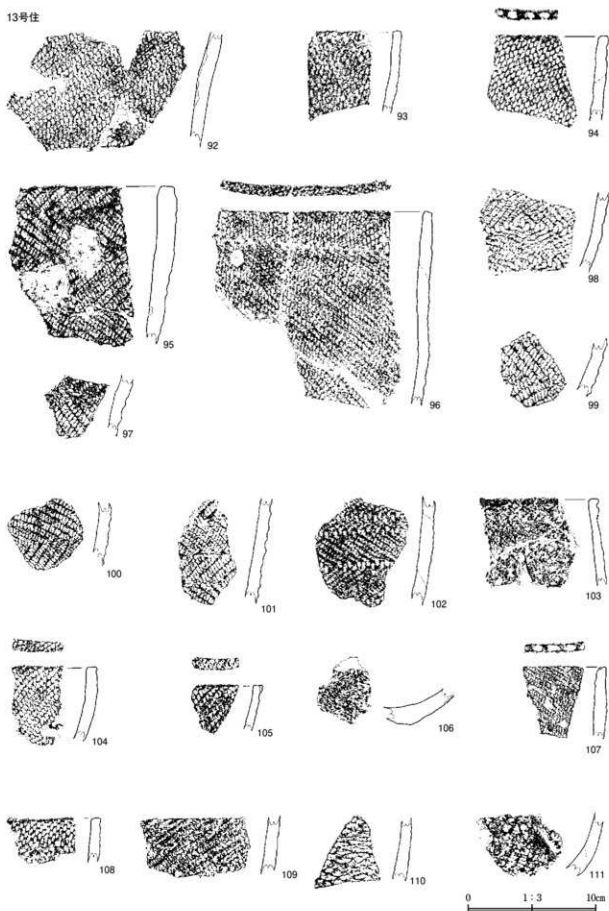
第54图 9・10号住土器

10号住



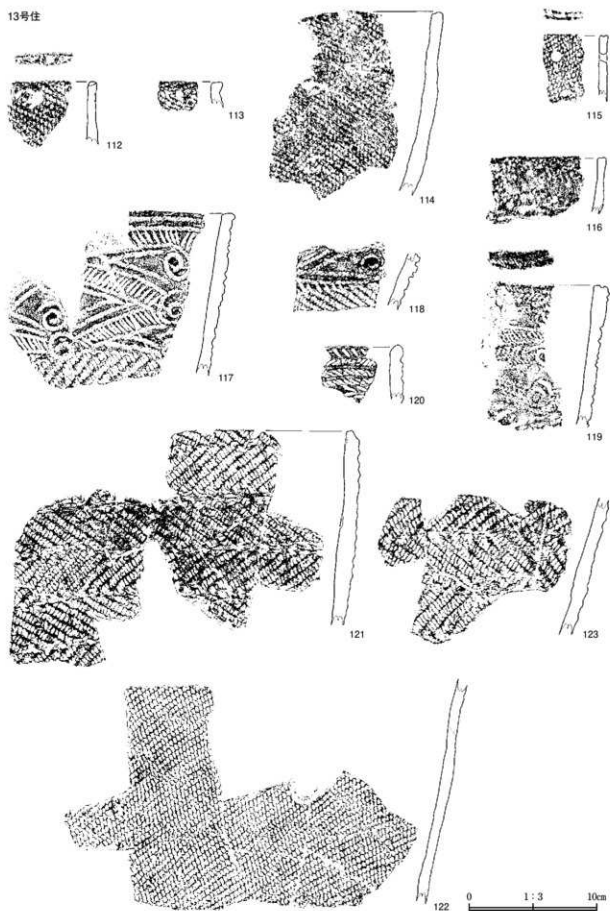
第55図 10号住土器

13号住



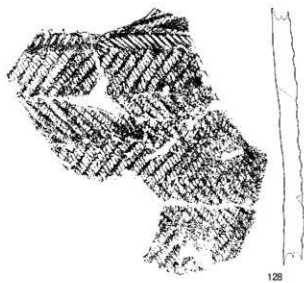
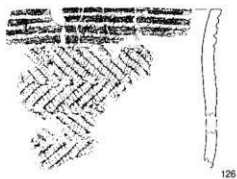
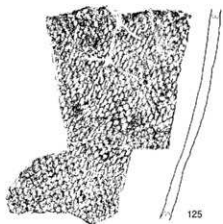
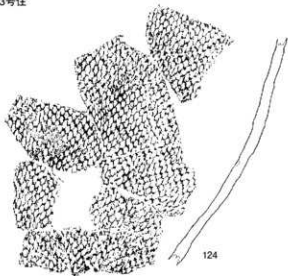
第56图 13号住土器

13号住

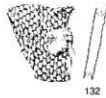
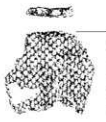


第57図 13号住土器

13号住



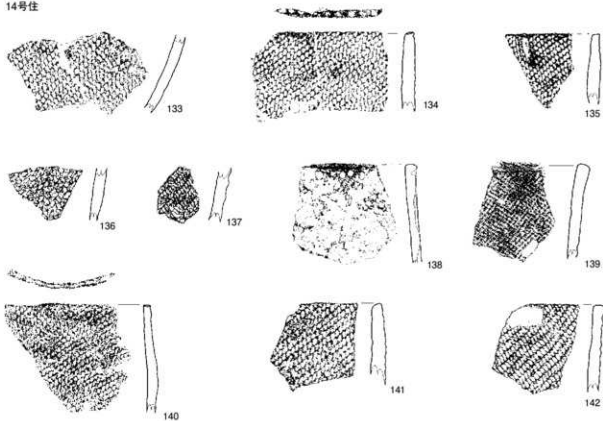
14号住



0 1:3 10cm

第58图 13・14号住土器

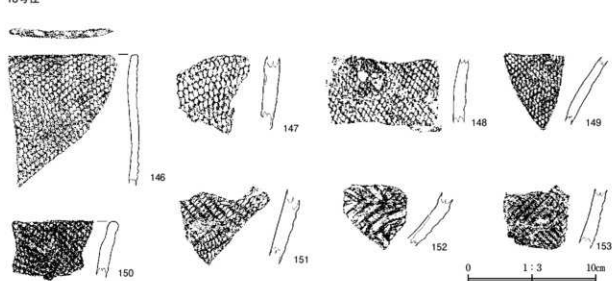
14号住



17号住

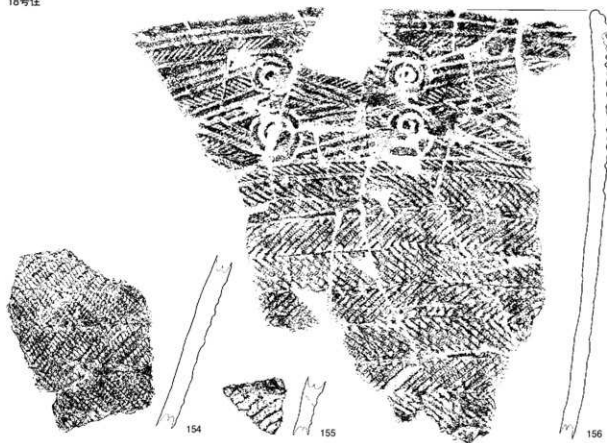


18号住

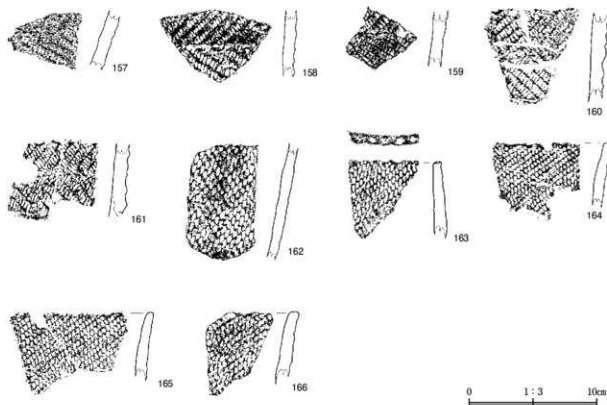


第59図 14・17・18号住土器

18号住



19号住



第60图 18·19号住土器

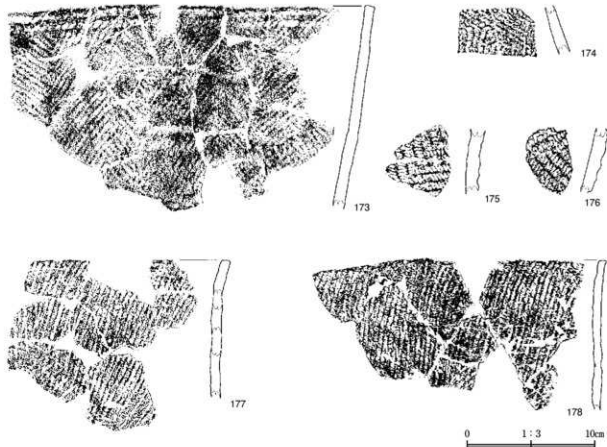
19号住



21号住

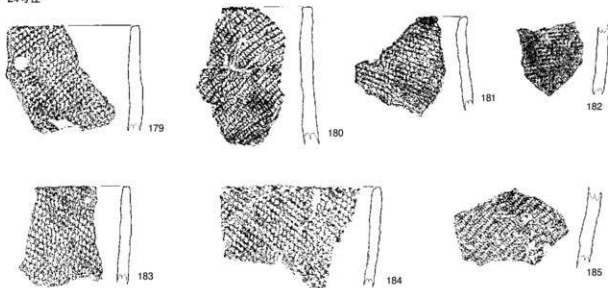


24号住



第61図 19・21・24号住土器

24号住



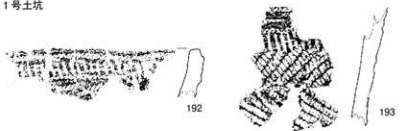
26号住



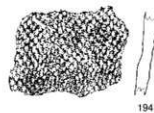
28号住



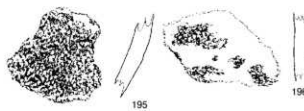
1号土坑



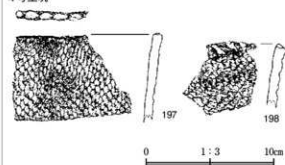
2号土坑



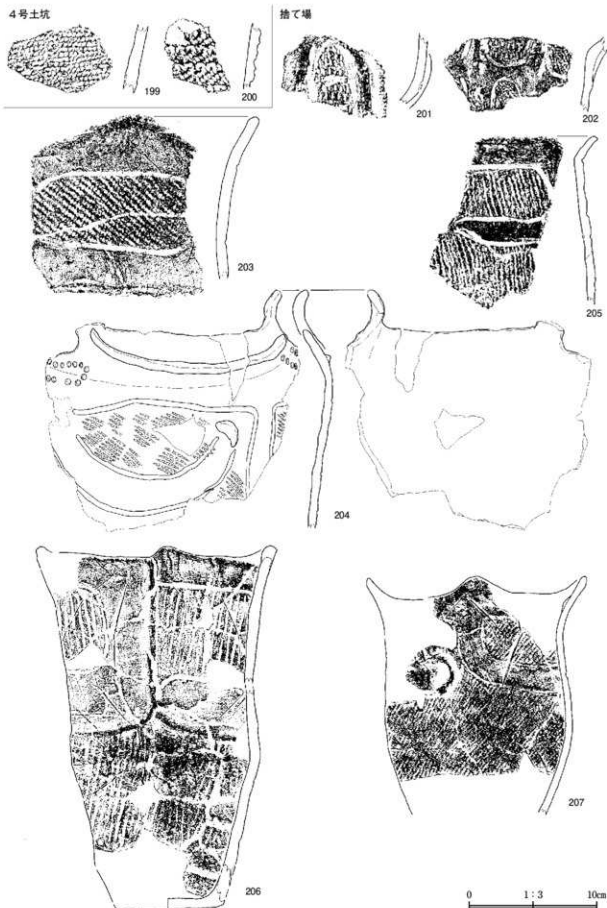
3号土坑



4号土坑

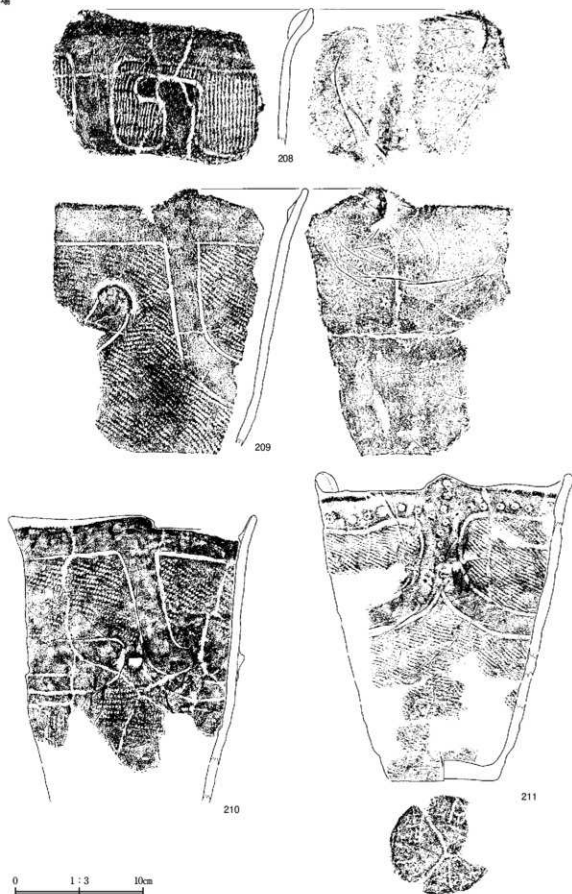


第62图 24·26·28号住、1·2·3·4号土坑土器



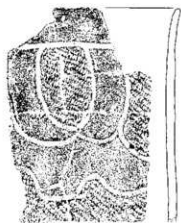
第63図 4号土坑、捨て場(1)土器

捨て場



第64図 捨て場(2) 土器

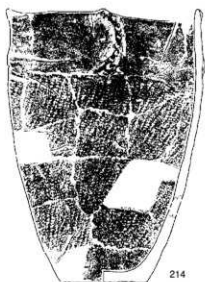
捨て場



212



213



214



215



216

◎黒部分 漆

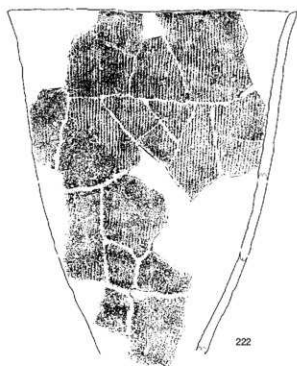
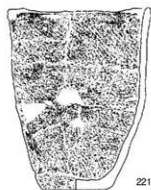
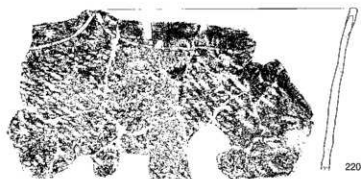
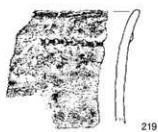
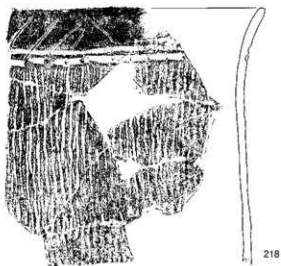


217

0 1:3 10cm

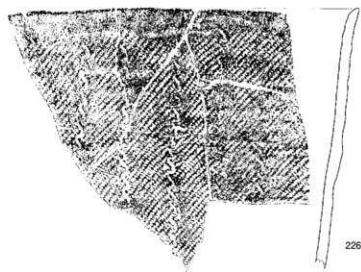
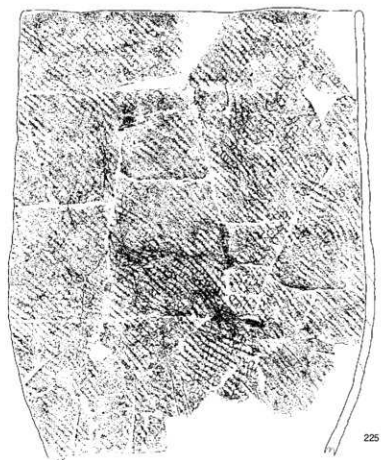
第65図 捨て場(3) 土器

捨て場



第66図 捨て場 (4) 土器

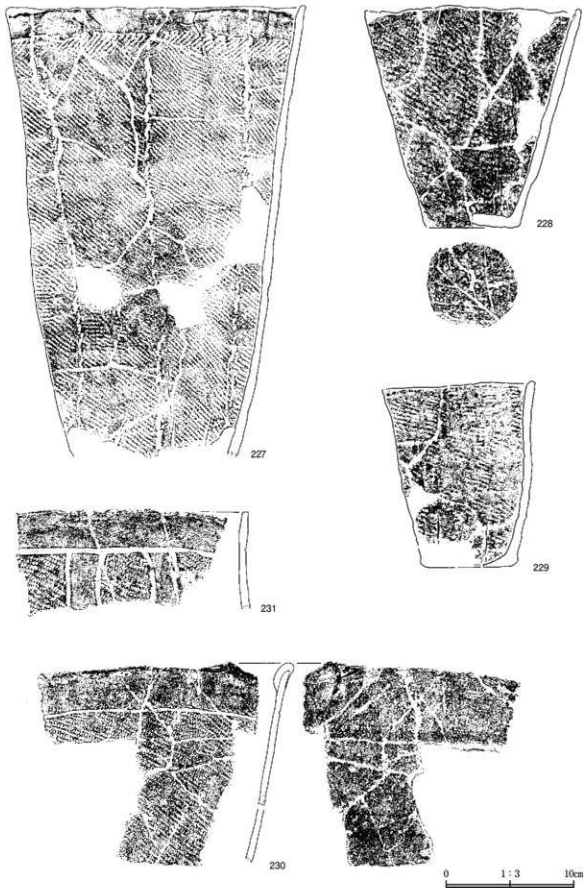
捨て場



0 1:3 10cm

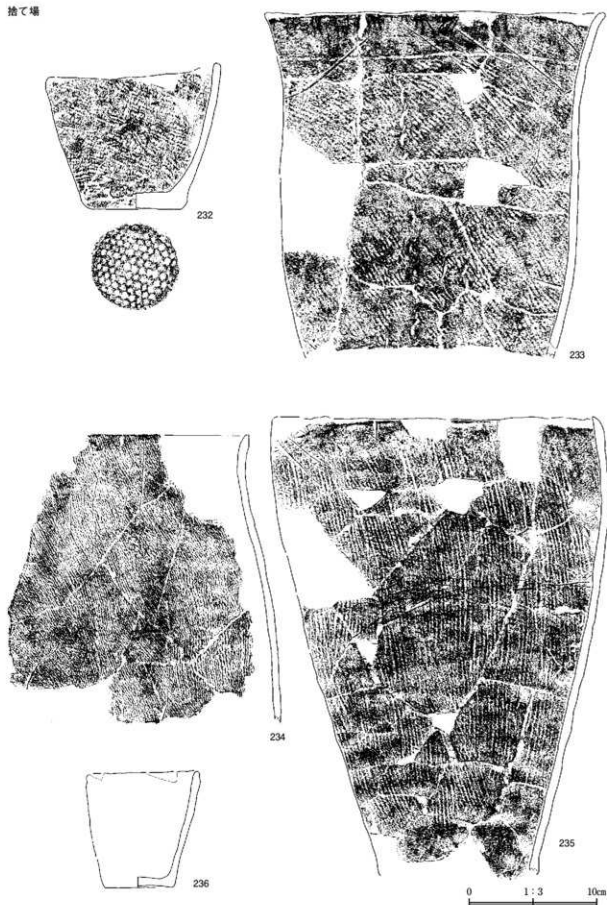
第67図 捨て場 (5) 土器

捨て場

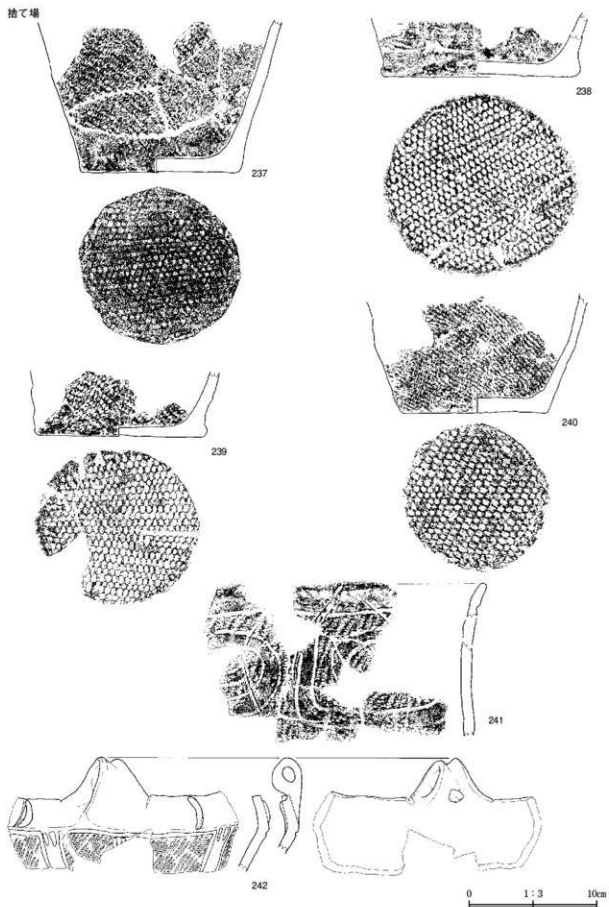


第68図 捨て場(6) 土器

捨て場

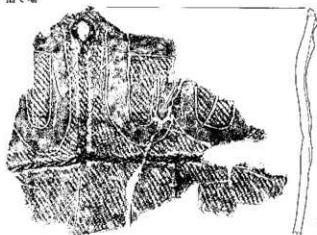


第69図 捨て場(7) 土器



第70図 捨て場 (B) 土器

捨て場



243



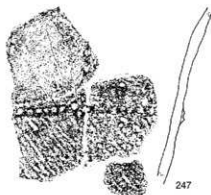
244



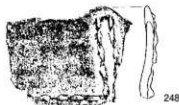
245



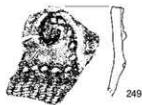
246



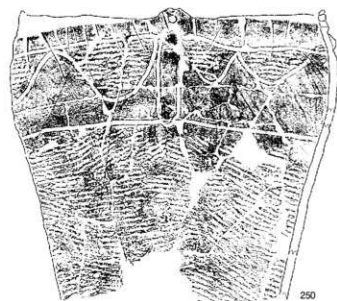
247



248



249



250

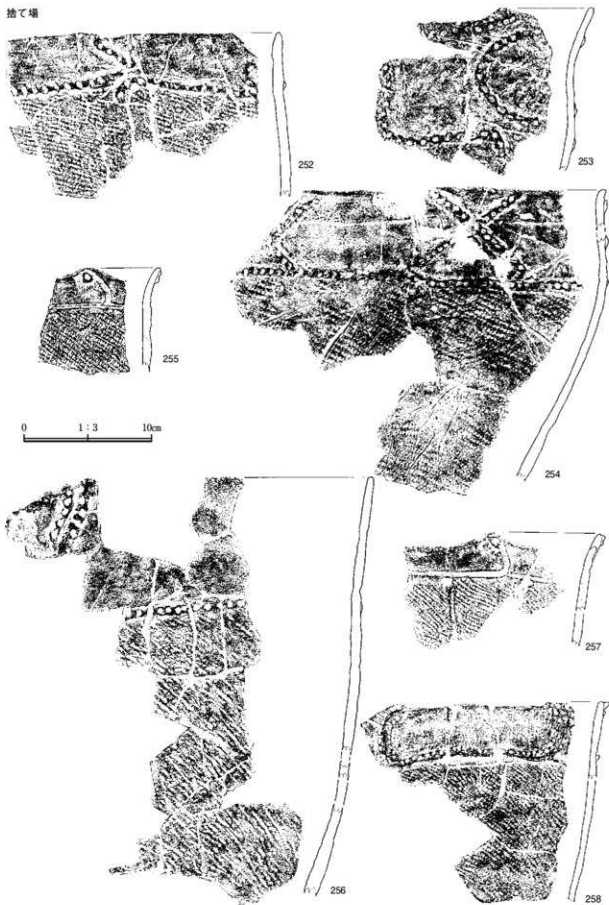


251

0 1:3 10cm

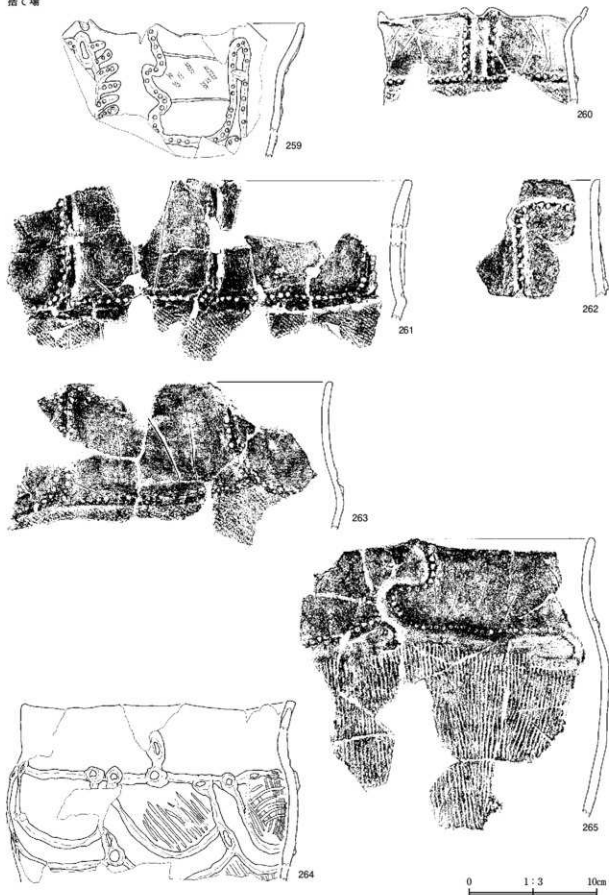
第71図 捨て場(9) 土器

捨て場



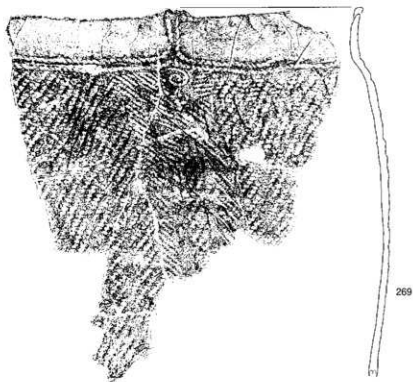
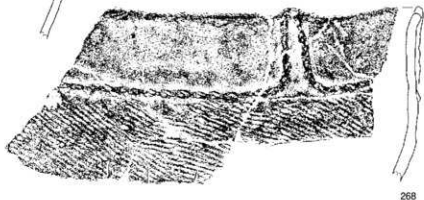
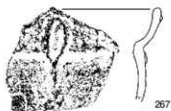
第72図 捨て場 (10) 土器

捨て場



第73図 捨て場 (11) 土器

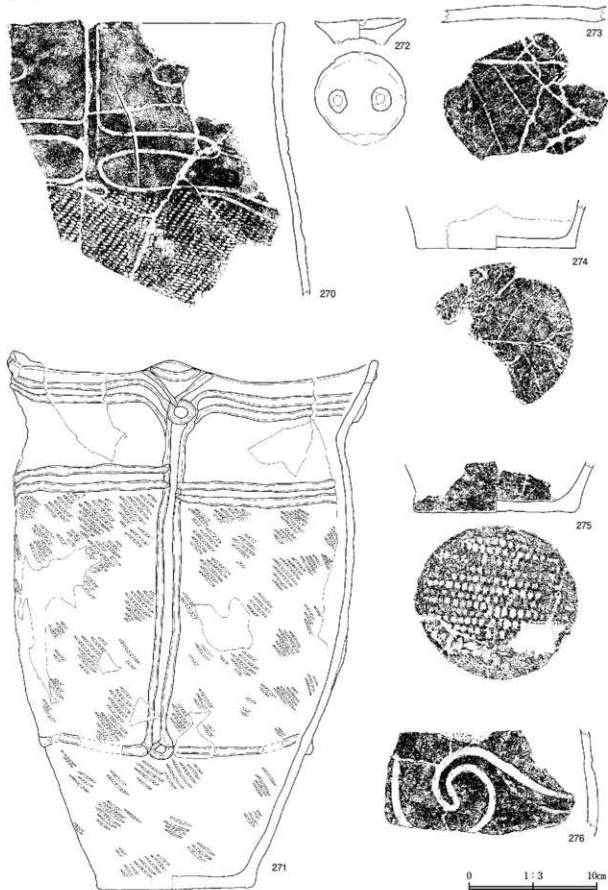
捨て場



0 1:3 10cm

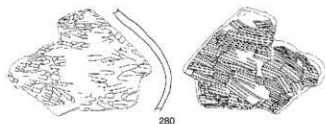
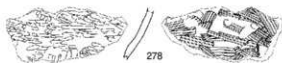
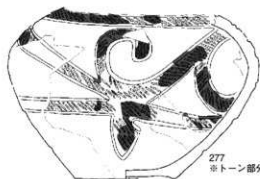
第74図 捨て場 (12) 土器

捨て場

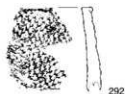
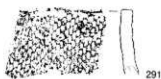
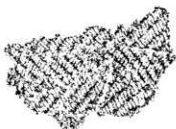
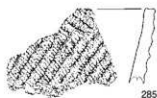


第75図 捨て場 (13) 土器

捨て場



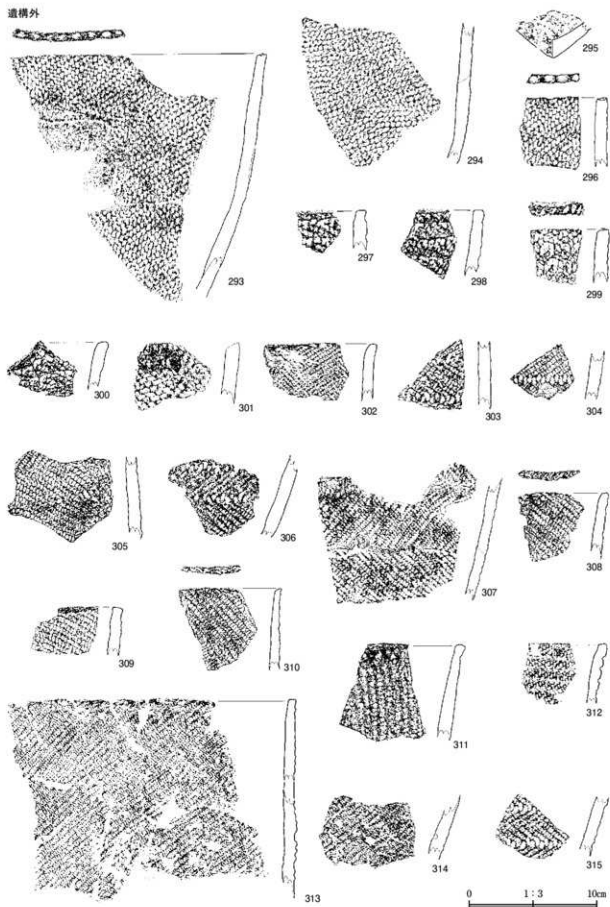
遺構外



0 1:3 10cm

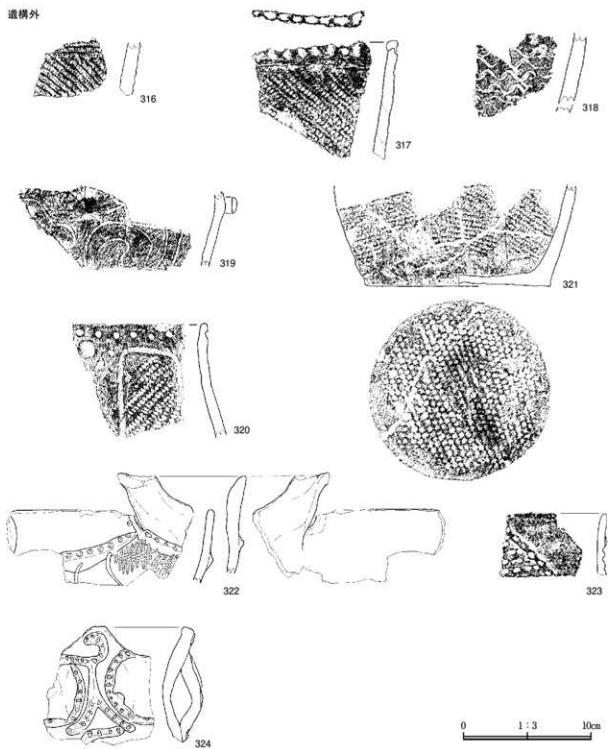
第76図 捨て場(14)、遺構外(1)土器

遺構外



第77図 遺構外(2)土器

遺構外

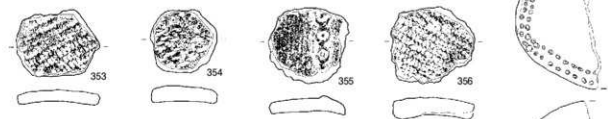
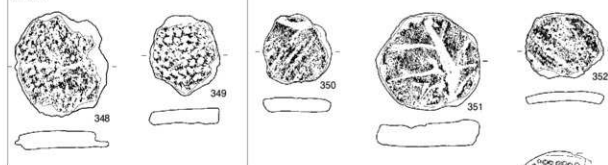


第78図 遺構外(3) 土器

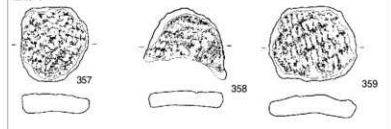
捨て場



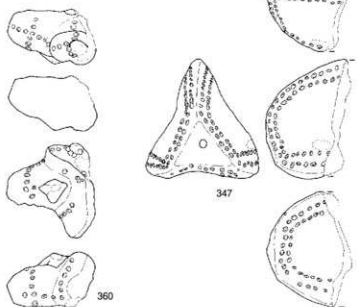
24号住



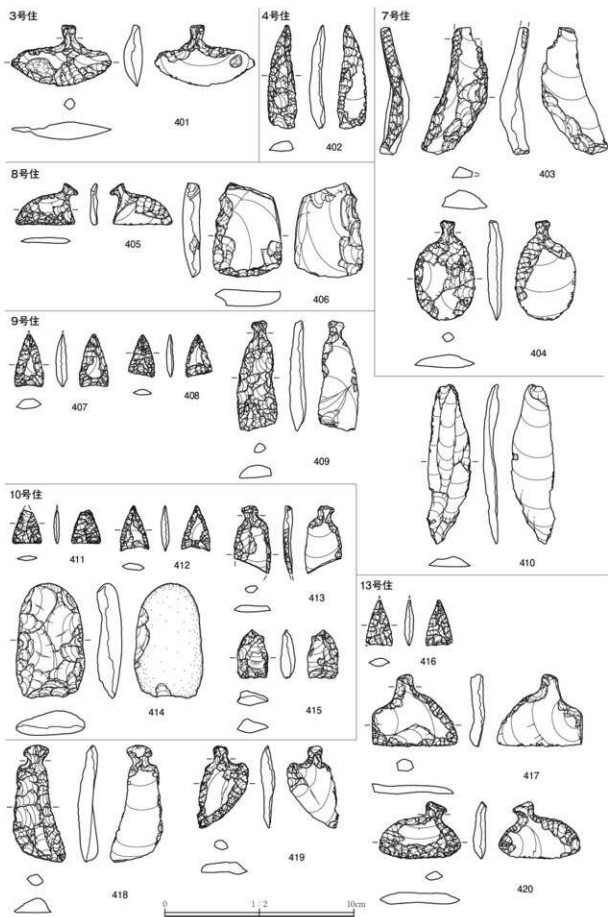
遺構外



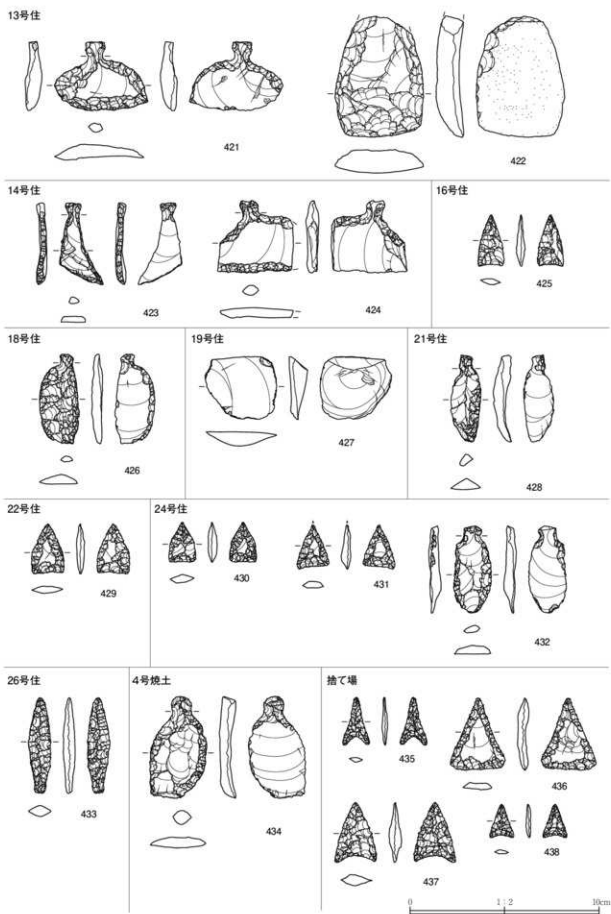
0 1:2 10cm



第79図 土製品

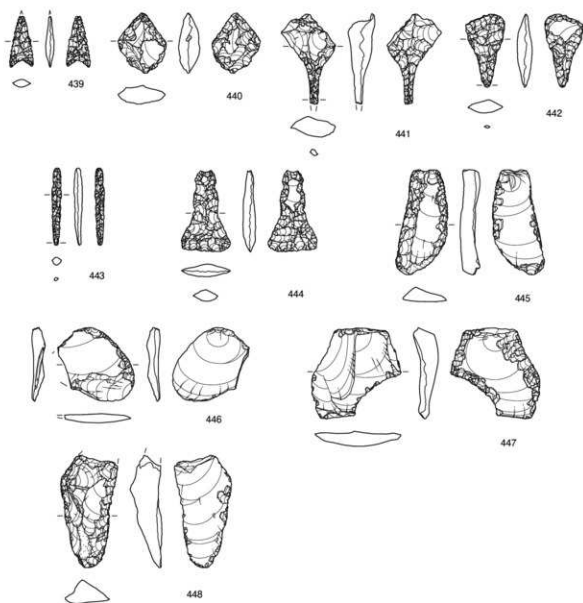


第80图 3·4·7·8·9·10·13号住剥片石器

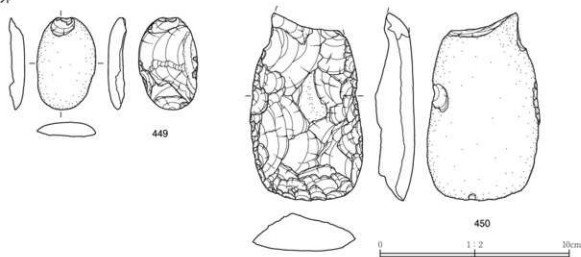


第81図 13・14・16・18・19・21・22・24・26号住、4号焼土、捨て場(1) 剥片石器

捨て場

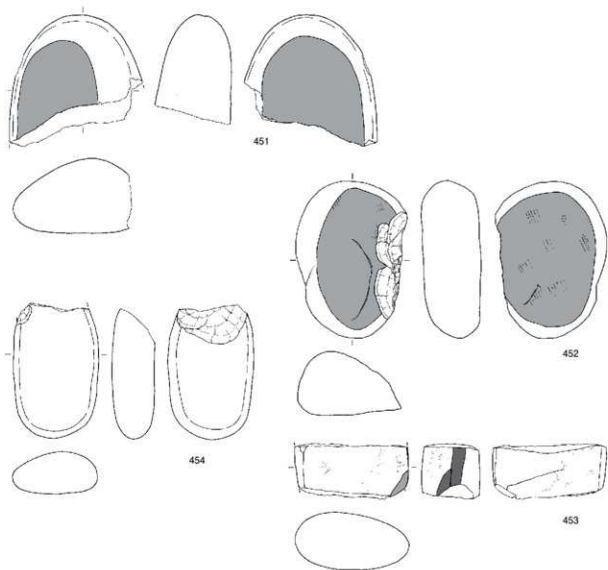


遺構外

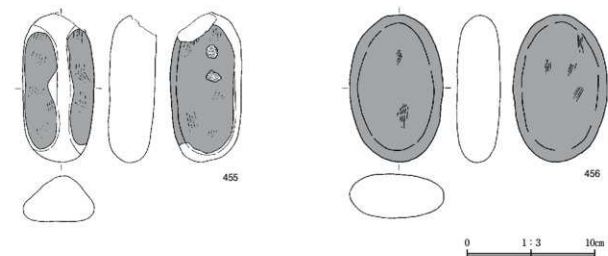


第82図 捨て場（2）、遺構外剥片石器

1号住

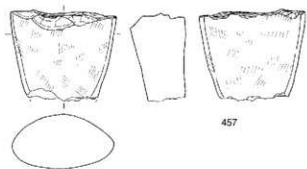


3号住



第83図 1・3号住礫石器

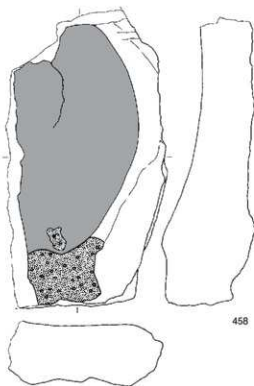
3号住



457

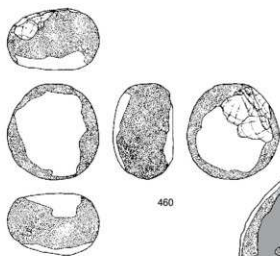


459

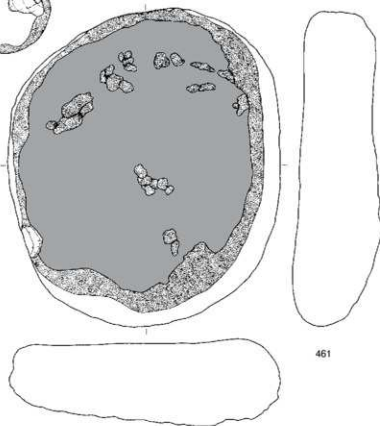


458

4号住



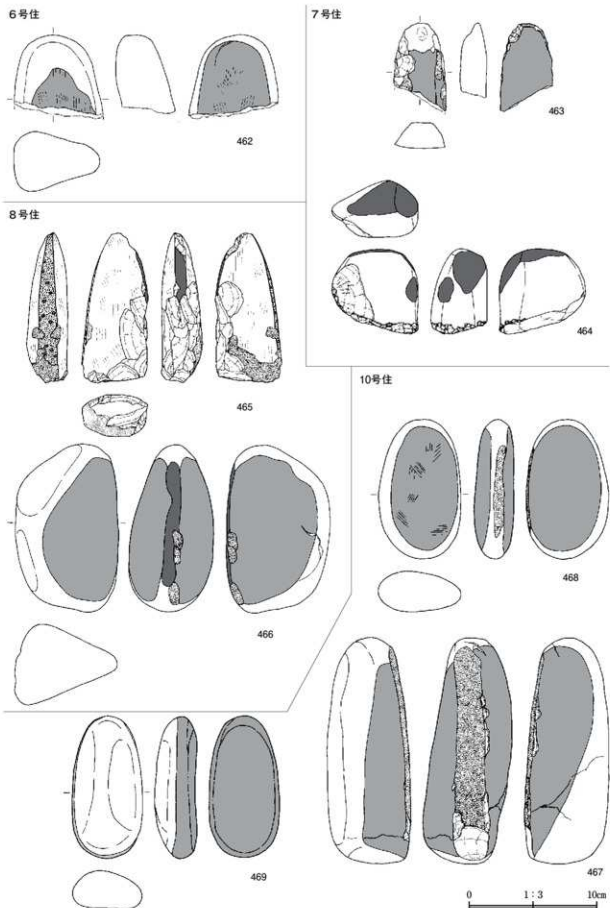
460



461

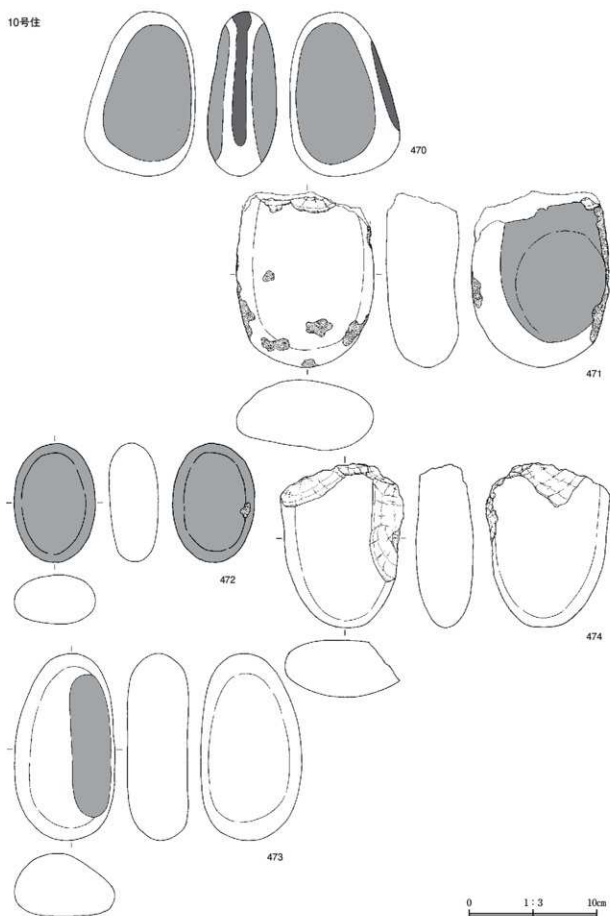
0 1:3 10cm

第84図 3・4号住燻石器



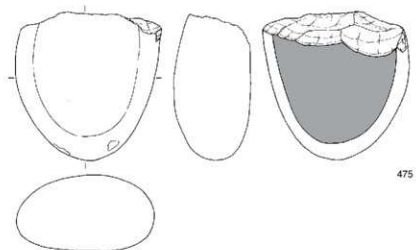
第85図 6・7・8・10号住礫石器

10号住



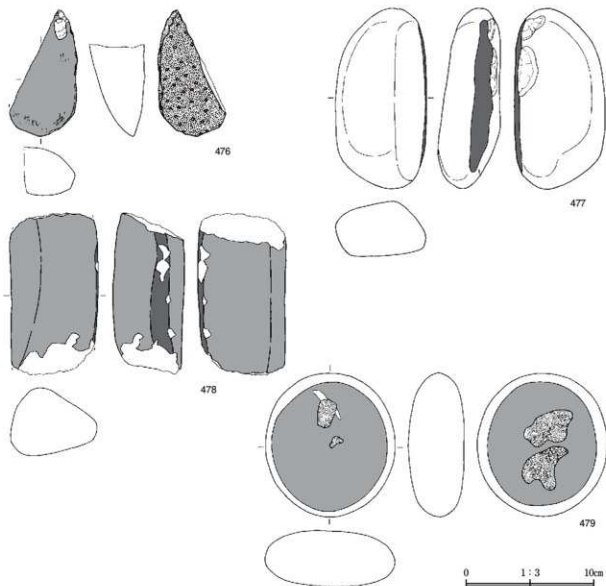
第86图 10号住礫石器

10号住



475

13号住



476

477

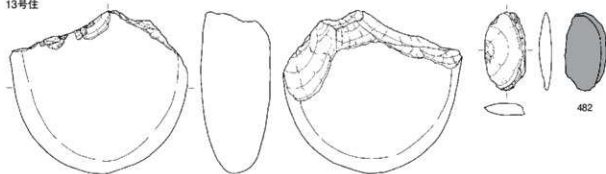
478

479

0 1:3 10cm

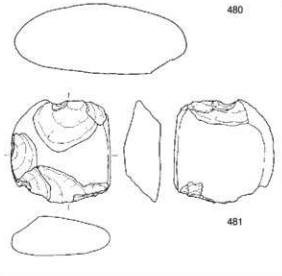
第87図 10・13号住礫石器

13号住



480

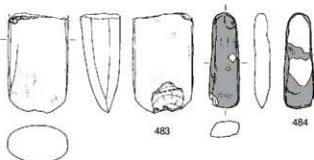
482



481

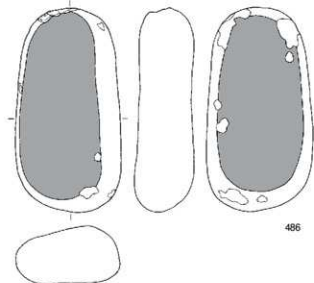
485

14号住



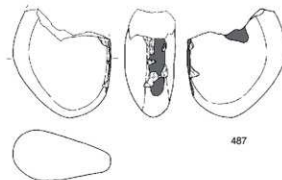
483

484



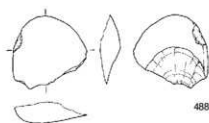
486

17号住



487

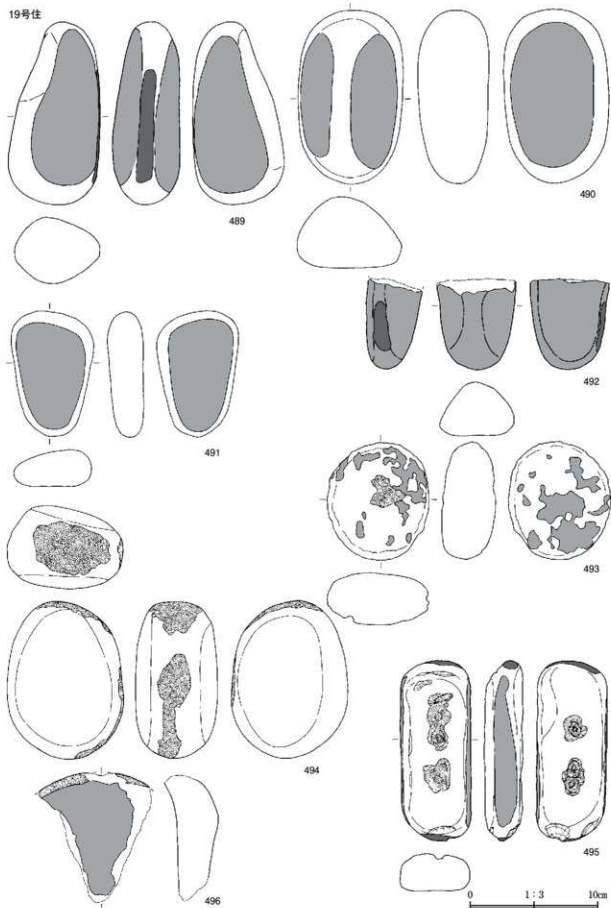
19号住



488

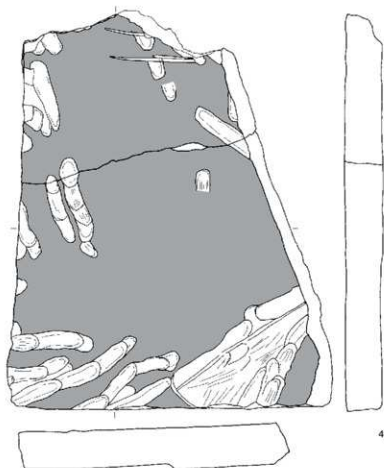
0 1:3 10cm

第88图 13·14·17·19号住石器

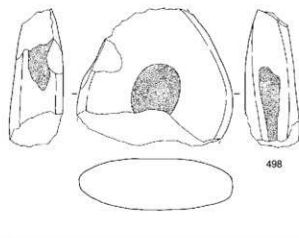


第89图 19号住礫石器

19号住

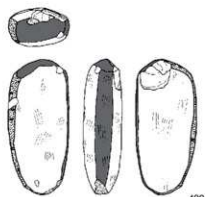


497

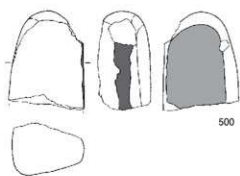


498

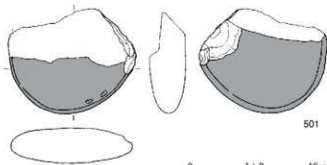
24号住



499



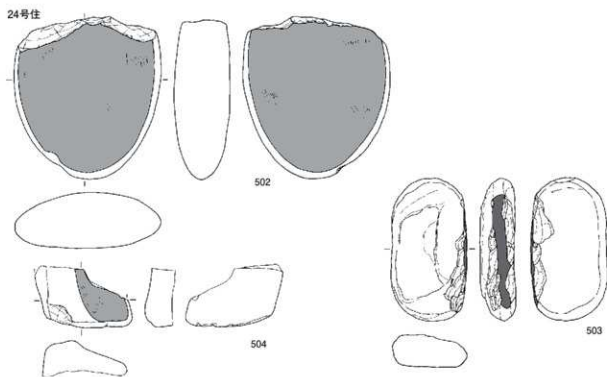
500



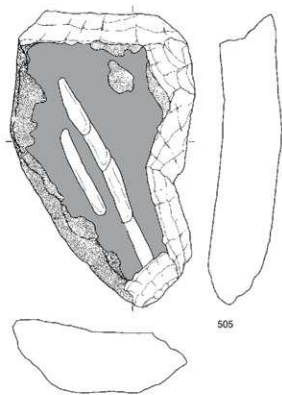
501

0 1:3 10cm

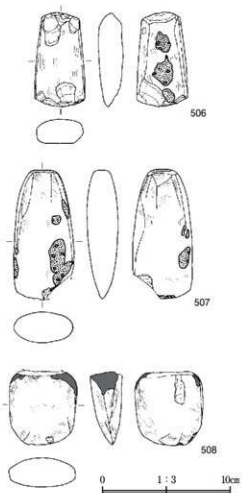
第90図 19・24号住礫石器



遺構外

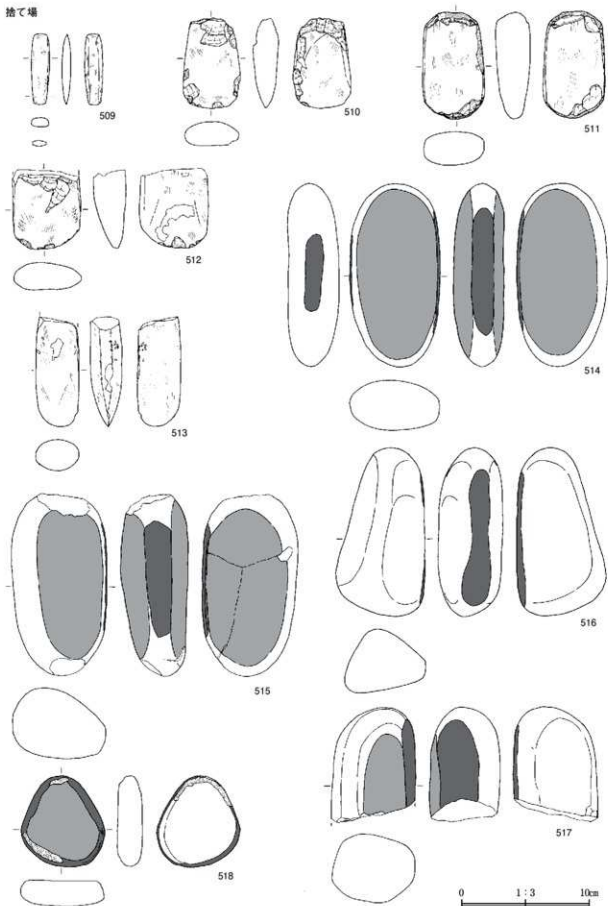


捨て場



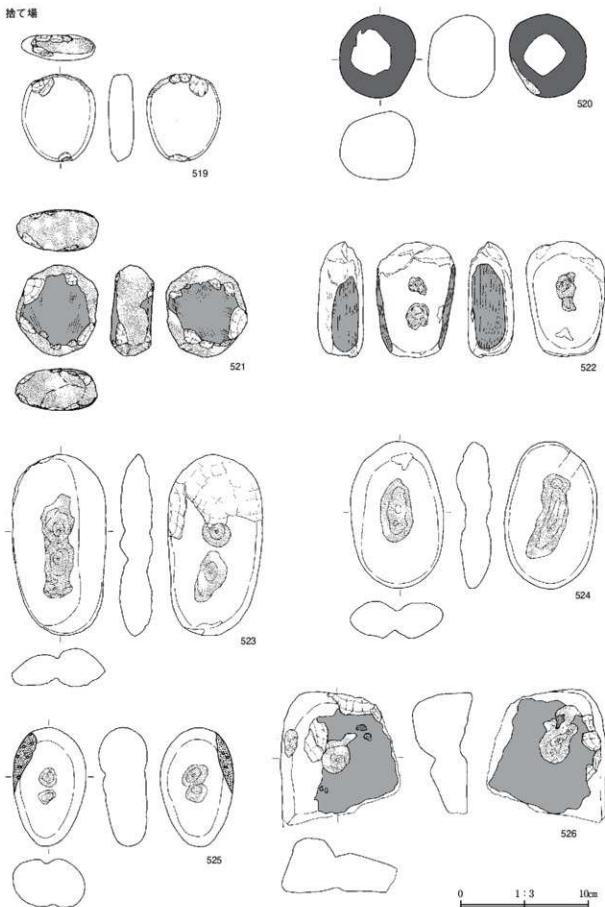
第91図 24号住・遺構外・捨て場(1) 礫石器

捨て場



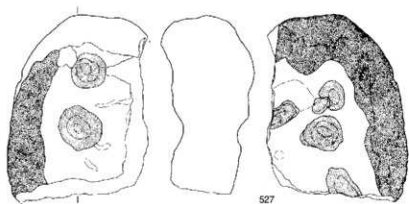
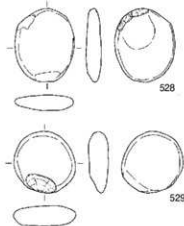
第92図 捨て場 (2) 礫石器

捨て場

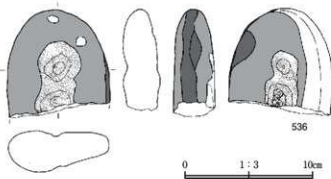
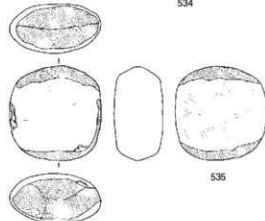
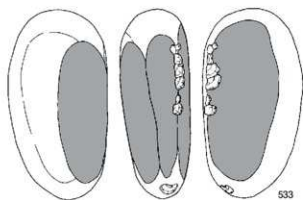
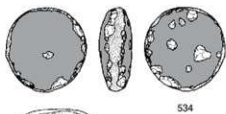
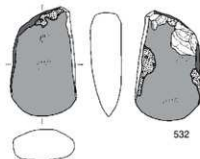
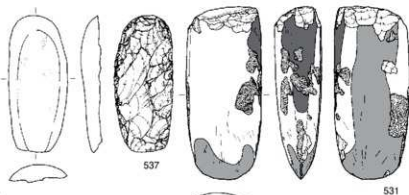
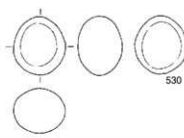


第93図 捨て場 (3) 礫石器

捨て場



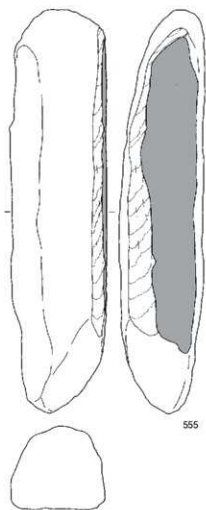
遺構外



0 1:3 10cm

第94図 捨て場（4）・遺構外礫石器

遺構外



555

捨て場



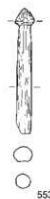
552

551

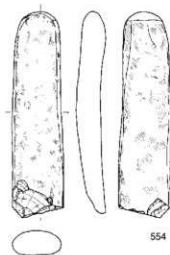
※トーン部分赤色顔料



556



553



554

552・554・555 0 1:3 10cm

551・553・556 0 1:2 10cm

第4表 土器観察表(1)

順番 No.	出土地点	層位	器種	部位	口縁・口郭	文様など	内面	機能 用途	器厚(mm)	最新分類	備考
1	1号住Q4	埋土上位	深鉢	口・胴部	横波状、角状 (面取り)	L.R.横・斜位	面ナテ	多量	60-110	Ⅱ群3型a種	丸底?
2	1号住	2層	深鉢	口縁部	平縁、押圧縄文	L.R.横位	面ナテ	中量	60-80	Ⅱ群3型a種	底縁は組縄縄文の可能性有
3	1号住Q1	埋土中	深鉢	胴部		組縄縄文	ナテ	中量	70-80	Ⅱ群6型a種	内面窪付着、6と同一体?
4	1号住Q1	埋土中	深鉢	胴部		組縄縄文	ナテ	中量	70	Ⅱ群6型a種	潤滑有
5	1号住Q1	埋土中	深鉢	胴部		組縄縄文	ナテ	中量	70-80	Ⅱ群6型a種	
6	1号住Q2	埋土中	深鉢	胴部		組縄縄文	ナテ	中量	55-75	Ⅱ群6型a種	内面窪付着、3と同一体?
7	1号住Q4	埋土中	深鉢	胴部		組縄縄文	面ナテ	中量	70-85	Ⅱ群6型a種	
8	1号住Q3	埋土中	深鉢	胴部		L.R.直線縄文 (回転方向は多様)	多量	90-95	Ⅱ群3型a種	潤滑多	
9	2号住東部	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	L.R.横位	面ナテ	多量	60-75	Ⅱ群3型a種	
10	2号住	埋土中	深鉢	口縁部	横波状、面取り	短、L.R.結束引状縄文横位	面ナテ	多量	60-100	Ⅱ群2型b種	
11	2号住東部	埋土中	深鉢	胴部		①段多量L.R.・短、非結束引状縄文横位	ナテ	中量	100-120	Ⅱ群2型a種	
12	3号住Q3	埋土中	深鉢	口縁部	横波状、ミガキ	組縄縄文	面いナテ	多量	75-90	Ⅱ群3型a種	
13	3号住Q3	埋土中	深鉢	口・胴部	平縁、角状(面取り)	L.R.横位(組縄?)	面ナテ	多量	55-90	Ⅱ群6型a種	12と同一体?
14	3号住Q3	埋土中	深鉢	口・胴部	平縁、角状(面取り)	L.R.横位(組縄?)	面ナテ	多量	80-110	Ⅱ群6型a種	13と同一体?
15	3号住北部	埋土中	深鉢	胴部		組縄縄文	面いナテ	中量	80-90	Ⅱ群6型a種	
16	3号住Q2	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、内屈ぎ	L.R.斜位(急勾歩走)	ミガキ	中量	55-80	Ⅱ群3型a種	
17	3号住Q2	埋土中	深鉢	胴部		L.R.横位	中量	70-80	Ⅱ群3型a種	潤滑多	
18	3号住Q2	埋土中	深鉢	胴部		L.R.横位	面ナテ	多量	65-80	Ⅱ群3型a種	
19	3号住北部	埋土中	深鉢	胴部		L.R.横位	面ナテ	中量	75-110	Ⅱ群3型a種	
20	3号住北部	埋土中	深鉢	胴部		L.R.横位(組縄縄文?)	面いナテ	中量	70-80	Ⅱ群3型a種	
21	3-4号住東部	3層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	L.R.横位	ナテ	多量	40-90	Ⅱ群3型a種	潤滑多
22	3-4号住東部	3層	深鉢	胴部		L.R.横位	面ナテ	多量	70-130	Ⅱ群3型a種	
23	3-4号住東部	2層下位	深鉢	胴部		L.R.横位	面ナテ	多量	80-90	Ⅱ群3型a種	
24	3-4号住東部	3層	深鉢	口縁部	平縁、内屈ぎ	外面のはほぼ全面潤滑	ナテ	中量	100	Ⅱ群	
25	4号住	2層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	L.R.横位	面ナテ	中量	75-90	Ⅱ群3型a種	
26	4号住	2層	深鉢	口縁部	横波状、新交文	L.R.横位	ナテ	中量	80-100	Ⅱ群3型a種	粘土中に砂粒多量混入
27	4号住	2層	深鉢	胴部		組縄縄文	面いナテ	中量	80-90	Ⅱ群6型a種	
28	4号住ベルト 10号住Q2	2層・埋土中	深鉢	胴部		形状不明(組縄縄文 or L.R.)	面ナテ	中量	70-80	Ⅱ群6型b種	大木式or超田6型 の遺構関係有
29	4号住	1層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	L.R.横位	ナテ	中量	65-95	Ⅱ群3型a種	粘土中に砂粒多量混入
30	4号住	1層	深鉢	口縁部	小波状	L.R.横位	面ナテ	中量	55-70	Ⅱ群3型a種	
31	4号住南側	埋土上位	深鉢	口縁部	波状、角状(面取り)	口縁縁部に刻み列、押圧 縄文(L.R.)による横位連結 赤褐色文、短沈線列(斜位)	ミガキ	多量	95-100	Ⅱ群1型a種	35・51・56と同一体? ?
32	4号住	埋土中	深鉢	胴部		組縄縄文	面いナテ	多量	60-80	Ⅱ群6型a種	
33	4号住	埋土中	深鉢	口縁部	横波状、ミガキ、 斜り返し	L.R.横位中心に斜位	面ナテ	中量	55-85	Ⅱ群3型a種	割草道具文様斜付(未 確認)
34	4号住	埋土中	深鉢	口縁部	平縁?、浅い刻み	短交文・横位平直線状文・ 波状文	面ナテ	少量	75-70	1群	
35	6号住Q1	埋土中	深鉢	口縁部	波状、角状(面取り)	口縁縁部に刻み列、押圧 縄文(L.R.)による横・斜位、 短沈線列(斜位)	ミガキ	多量	90-110	Ⅱ群1型a種	31・51・56と同一体? ?
36	6号住	埋土中	深鉢	胴部		組縄縄文	ミガキ	中量	80	Ⅱ群6型a種	
37	7号住	13層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	本層ルーブリック横位(横 方向に帯状に施文)	面ナテ	中量	70-80	Ⅱ群4型	52・53と同一体? ?
38	7号住	13層	深鉢	口縁部	平縁、ミガキ	L.R.横位	面ナテ	中量	55-70	Ⅱ群3型a種	大木式?
39	7号住焼土	埋土中	深鉢	胴部		付加条(L.R.)斜位	面い面ナ テ	多量	65-70	Ⅱ群5型	177・178と同一体? の可能性有
40	7号住焼土	埋土中	深鉢	胴部		L.R.横位	ナテ	多量	75-80	Ⅱ群3型a種	
41	7号住ベルト	11層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	L.R.横位(組縄?)	面ナテ	中量	70	Ⅱ群6型b種	
42	7号住ベルト	11層	深鉢	口縁部	平縁、ミガキ	L.R.横位?	面ナテ	中量	75-100	Ⅱ群3型a種	潤滑多
43	7号住ベルト	11層	深鉢	口縁部	平縁、内屈ぎ	L.R.横位	面ナテ	中量	50-80	Ⅱ群3型a種	

第5表 土器観察表(2)

調査号	出土地点	層位	器種	部位	口縁・口唇	文様など	内面	横径 縦径	厚さ(mm)	最新分類	備考
44	7号住	埋土中	深鉢	胴部		0段多条L.R.縦線文	横ミガキ	中量	8.0	II群3期a種	
45	7号住	埋土中	深鉢	胴部		L.R.縦線文(組網?)	横ミガキ	中量	7.0-8.5	II群6期b種	
46	7号住-13号住 集積	埋土中	深鉢	口~胴部	平縁, 内唇直 (組網?)	口: 押圧縄文(三角形五箇 の区画モチーフ+波倉文 文)、短沈線列 胴: 0段多 条L.R.-R.L.非結束引状縄文 横線	指ナゲ ミガキ	中量	10.0-12.0	II群1期a種	127と同一個体
47	8号住	床直	深鉢	胴部		0段多条L.R.-R.L.非結束引状 縄文横線	ミガキ	中量	10.0-11.0	II群2期a種	調査多
48	8号住(ベルト)	埋土中	深鉢	胴部		0段多条L.R.-R.L.非結束引状 縄文横線	ナゲ	中量	11.0-12.0	II群2期b種	
49	7号住	1層	深鉢	口縁部	平縁, 丸み	押圧縄文による横線連続 波倉文	ミガキ	中量	11.0-17.0	II群1期a種	50・57と同一個体
50	8号住-21号住	埋土中	深鉢	口縁部	平縁, 丸み	押圧縄文による矢形状の モチーフ	ミガキ	中量	13.0-17.5	II群1期a種	49・57と同一個体
51	9号住Q3	埋土下位	深鉢	口縁部	溝状, 角状(面取り)	口縁部部に斜み入, 押圧 縄文(L.R.)による横・斜列, 短沈線列(斜位)	ミガキ	多量	8.0-9.5	II群1期a種	31・35・56と同一個 体?
52	9号住Q5	埋土下位	深鉢	口縁部	平縁, 角状(面取り)	未施ロープ+R.L.横線文(重 層施文)	横ナゲ	中量	5.0-9.5	II群4期	37・53と同一個体?
53	9号住Q3	埋土中	深鉢	口縁部	平縁, 角状(面取り)	未施ロープ+R.L.横線文(重 層施文)	横ナゲ	中量	6.0-8.5	II群4期	37・53と同一個体?
54	9号住Q4	埋土中	深鉢	口縁部	溝状, 組網	組網縄文	指ナゲ	中量	7.0-8.5	II群6期a種	
55	9号住Q3	埋土中	深鉢	胴部		組網縄文	横ナゲ	中量	7.5-10.0	II群6期a種	
56	9号住	埋土中	深鉢	胴部		押圧縄文(L.R.)による横線 連続波倉文、短沈線列 (斜位)	ミガキ	多量	9.0-9.5	II群1期a種	31・35・51と同一個 体?
57	9号住Q3	埋土中	深鉢	口縁部	平縁, 丸み	押圧縄文による横線連続 波倉文	ミガキ	中量	15.0-17.0	II群1期a種	49・50と同一個体
58	9号住Q1	埋土中	深鉢	胴部		0段多条L.R.-R.L.非結束引状 縄文横線	ナゲ	多量	7.0-9.5	II群2期b種	
59	9号住Q3	埋土中	深鉢	胴部		L.R.-R.L.非結束引状縄文	横ミガキ	中量	8.0-9.5	II群2期b種	
60	9号住Q4	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	口縁部部に斜み入, 0段多 条L.R.-R.L.非結束引状縄文	縦ミガキ	中量	8.0-11.0	II群2期b種	
61	9号住Q4	埋土中	深鉢	胴部		非輪縁帯体第1期(L.R.)-R.L. 非結束引状縄文	ナゲ	中量	6.0-8.5	II群2期b種	部位の凹み文と横線の 重層による引状縄文
62	9号住Q2	埋土中	深鉢	胴部		L.R.-R.L.非結束引状縄文	横ナゲ	多量	8.5	II群2期b種	
63	9号住Q4	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	未施ロープ+R.L.横線文	ナゲ	中量	6.5-7.5	II群4期	
64	9号住Q4	埋土中	深鉢	胴部		L.R.横線文	指ナゲ	中量	6.5	II群3期a種	薄手
65	9号住Q4	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	R.L.斜位(条が横走)	ミガキ	少量	6.0-8.5	II群3期c種	66と同一個体(遺構 別層台)
66	10号住(ベルト)	5層	深鉢	口縁部	平縁	横線孔, R.L.斜位(条が横走)	ミガキ	少量	6.0-8.0	II群3期c種	65と同一個体(遺構 別層台)
67	10号住(ベルト)	5層	深鉢	胴部		L.R.-R.L.非結束引状縄文横線	ミガキ	多量	9.0-12.0	II群2期b種	70と同一個体
68	10号住Q3	埋土中位	深鉢	胴部		L.R.非結束引状縄文(縦・横 位の異なる引状縄文)による 変形横線	ナゲ	中量	7.0-8.0	II群2期b種	
69	10号住	1層	深鉢	口縁部	平縁, 角状(面取り)	R.L.-R.L.非結束引状縄文横線	指ナゲ	中量	6.5-8.5	II群2期c種	
70	10号住Q2	埋土中	深鉢	胴部		L.R.-R.L.非結束引状縄文横線	ミガキ	多量	8.0-10.0	II群2期b種	67と同一個体
71	10号住	埋土上	深鉢	胴部		R.L.-R.L.非結束引状縄文横線	指ナゲ	中量	7.0-8.5	II群2期c種	外面に黒色の付着物
72	10号住(ベルト)	2層	深鉢	胴~底部		組網縄文	横ナゲ	中量	6.0-6.5	II群6期a種	丸底?
73	10号住(ベルト)	2層	深鉢	口~胴部	平縁, 角状(口唇に 凹み仕直)	組網縄文	横ナゲ	多量	7.0-9.5	II群6期b種	
74	10号住	1層	深鉢	口縁部	平縁, 角状(口唇に 凹み仕直)	組網縄文	指ナゲ	多量	6.5-7.0	II群6期a種	75・137と同一個体
75	10号住Q1	埋土上位	深鉢	口縁部	平縁, 角状(口唇に 凹み仕直)	組網縄文	指ナゲ	多量	6.0-7.0	II群6期a種	74・137と同一個体
76	10号住Q1	埋土上位	深鉢	口縁部	平縁, 角状(面取り)	組網縄文	横ナゲ	中量	7.5-12.0	II群6期a種	
77	10号住(ベルト)	5層	深鉢	口縁部		L.R.縦線文	ナゲ	少量	6.0-8.0	II群3期b種	
78	10号住Q2	埋土下位	深鉢	胴部		L.R.横線文	指ナゲ	中量	11.0	II群3期a種	薄手(器厚約10mm), 82・85・87と同一個 体
79	10号住Q2	埋土下位	深鉢	胴部		L.R.斜位→横位(重層施文)	指ナゲ	多量	7.0-8.0	II群3期a種	
80	10号住Q1	埋土下位	深鉢	胴部		R.L.横線文	ナゲ	中量	7.0-9.0	II群3期a種	

第6表 土器観察表(3)

調査号	出土地点	層位	器種	部位	口縁・口郭	文様など	内面	機能 有無	器厚(mm)	最新分類	備考
81	10号住Q1・Q2	5層	深鉢	胴・底部		縦溝織文?	指ナテ		11.0~11.5	Ⅱ群6組a種	器口の連続性から底部を配定
82	10号住Q4	埋土中～下位	深鉢	胴部		LR横位	指ナテ		8.5~9.5	Ⅱ群3組a種	厚手(器厚約10mm)、78-82-85-87と同一個体
83	10号住<6>2	2層	深鉢	胴部		LR横位	指ナテ		8.0~11.0	Ⅱ群3組a種	厚手(器厚約10mm)、78-82-85-87と同一個体
84	10号住Q1	1層	深鉢	胴部		0段多条LR横位	横ナテ		6.0~8.0	Ⅱ群3組a種	
85	10号住Q2	埋土中	深鉢	胴部		LR横位	ナテ		11.5	Ⅱ群3組a種	厚手(器厚約10mm)、78-82-85-87と同一個体
86	10号住Q3	埋土中	深鉢	胴部		LR横・縦位(垂懸織文)	指ナテ		7.0~7.5	Ⅱ群3組a種	
87	10号住	埋土中	深鉢	胴部		横溝孔、LR横位	指ナテ		10.0	Ⅱ群3組a種	
88	10号住Q1	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	LR横位、外面溝溝多	ナテ		7.5~10.0	Ⅱ群3組a種	溝溝多
89	10号住Q2	埋土中	深鉢	胴部		LR横位	指ナテ		7.5~10.0	Ⅱ群3組a種	
90	10号住Q2	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、ミガキ	LR横位	指ナテ		7.0~10.0	Ⅱ群3組a種	91と同一個体
91	10号住Q2	埋土中	深鉢	胴部		LR横位	指ナテ		8.0	Ⅱ群3組a種	90と同一個体
92	13号住	床敷	深鉢	口縁部		縦溝織文	瓶いナテ		8.5~11.0	Ⅱ群6組a種	94・122と同一個体
93	13号住Q3	1層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	縦溝織文?	指ナテ		7.0~8.0	Ⅱ群6組b種	
94	13号住Q3	1層	深鉢	口縁部	平縁、角状(口唇に凹溝仕立)	縦溝織文	瓶いナテ		6.5~10.5	Ⅱ群6組b種	92・122と同一個体
95	13号住Q1	2層	深鉢	口～胴部	微波状、ミガキ	0段多条LR・LR非結果引状織文横位	ミガキ		9.0~12.0	Ⅱ群2組a種	
96	13号住Q4	2層	深鉢	口～胴部	平縁、織文	口・LR非・LR1筋束引状織文横位・胴・LR2筋束	指ナテ		6.5~9.0	Ⅱ群2組a種	
97	13号住Q4	2層	深鉢	胴部		0段多条LR・LR非結果引状織文横位	ミガキ		8.0~9.0	Ⅱ群2組a種	
98	13号住Q3	2層	深鉢	胴部		LR・LR1筋束引状織文縦・横位による変形を構成	ナテ		8.0~8.5	Ⅱ群2組a種	
99	13号住	1層	深鉢	胴部		0段多条LR・LR非結果引状織文横位	ナテ		8.0~9.0	Ⅱ群2組a種	
100	13号住	1層	深鉢	胴部		0段多条LR・LR非結果引状織文横位	ミガキ		8.5~9.0	Ⅱ群2組a種	
101	13号住Q2・Q3	3層	深鉢	胴部		0段多条LR・LR非結果引状織文横位	横ナテ		6.5~9.0	Ⅱ群2組a種	器厚が薄手なことから前期 শেষ?
102	13号住	埋土上位	深鉢	胴部		RL・LR結果引状織文横位	ミガキ		8.0~8.5	Ⅱ群2組a種	粘土にガラス質の風化(石質?)
103	13号住Q4	2層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	LR非LR織文横位、LR横位?	ナテ		6.5~7.5	Ⅱ群1組b種	
104	13号住	2層	深鉢	口縁部	微波状、織文	LR横位	指ナテ		9.0~10.0	Ⅱ群3組a種	
105	13号住Q3	2層	深鉢	口縁部	微波状、織文	LR横位	横ナテ		5.0~6.5	Ⅱ群3組a種	
106	13号住Q3	2層	深鉢	底部		0段多条LR横位	ナテ		11.0	Ⅱ群3組a種	丸底
107	13号住	1層	深鉢	口縁部	微波状、凹溝仕立文	RL横位	横ナテ		6.5~8.5	Ⅱ群3組a種	
108	13号住Q3	1層	深鉢	口縁部	微波状、角状(面取り)	縦溝織文	横ナテ		3.5~8.5	Ⅱ群6組a種	
109	13号住	埋土上位	深鉢	胴部		LR横位	横ナテ		8.0~9.0	Ⅱ群3組a種	
110	13号住	埋土上位	深鉢	胴部		器体不明	ミガキ		7.0~9.0	Ⅱ群3組a種	器体はLL?
111	13号住	埋土上位	深鉢	胴・底部		0段多条LR横位主体	ミガキ		8.0	Ⅱ群3組a種	丸底
112	13号住Q3	埋土上位	深鉢	口縁部	平縁、刺突文	RLLR横位	瓶いナテ		3.5~7.5	Ⅱ群3組a種	
113	13号住Q3	埋土上位	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	丸底グループ+RL横位	ミガキ		6.0~8.5	Ⅱ群4組	
114	13号住	埋土最上位	深鉢	口～胴部	小波状、角状(面取り)	RLLR横位	瓶いナテ		8.0~11.5	Ⅱ群3組a種	
115	13号住Q1	埋土最上位	深鉢	口縁部	平縁、刺突文	横溝孔、LR横位	ナテ		6.0~7.5	Ⅱ群3組a種	
116	13号住Q1	埋土最上位	深鉢	口縁部	微波状、凹溝仕立文	LR横位?	ナテ		5.0~11.0	Ⅱ群3組a種	
117	13号住Q4	2層	深鉢	口～胴部	微波状、ミガキ	口・押圧織文(L)による横位・溝筋滑きり文、別注横位・胴・LR横位	ミガキ		9.5~12.0	Ⅱ群1組a種	
118	13号住東部	2層	深鉢	口～胴部		口・押圧織文(L)による横位・溝筋滑きり文、別注横位・胴・LR横位	ミガキ		7.5~10.0	Ⅱ群1組a種	本体は引状織文か?
119	13号住Q1・Q4	1・2層	深鉢	口～胴部	平縁、押圧織文	口・押圧織文(L)による横位・溝筋滑きり文、別注横位・胴・LR横位	瓶いナテ		8.0~12.0	Ⅱ群1組a種	

第7表 土器観察表(4)

調査区	出土地点	層位	器種	部位	口縁・口郭	文様など	内面	備録 特徴	厚さ(mm)	最新分類	備考
120	13号住	1層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	短沈線、押圧縄文(L形)	横シガキ		65-100	II群1a類	
121	13号住Q1-Q3-Q4、26号住	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、ミガキ	①段多条記、L形非結束引状縄文模写	縦ミガキ	多量	110-150	II群2a類	口縁部内凹
122	13号住Q3-9号住Q4	埋土中	深鉢	胴部		組織縄文	横シガキ	多量	70-90	II群6a類	92-94と同一個体
123	13号住Q4-Q17住	2層・埋土中	深鉢	胴部		①段多条記、L形非結束引状縄文模写	指ナデ	少量	90-120	II群2a類	
124	13号住東部Q3-Q4号住Q2	①埋土中	深鉢	胴部		組織縄文	指ナデ→縦ミガキ	中量	50-70	II群6b類	内面調査は丹念なミガキ、125と同一個体
125	13号住Q3-A1m9ドリッド	①埋土中②II層下層	深鉢	胴部		組織縄文?	指ナデ→縦ミガキ	中量	65-80	II群6b類	内面調査は丹念なミガキ、124と同一個体
126	13号住	2層	深鉢	口一胴部	平縁、角状(面取り)	口:③条平行押圧縄文(L形) 胴:①段多条記、L形非結束引状縄文模写	ナデ、ミガキ	中量	75-100	II群1b類	
127	13号住Q4-A1m17ドリッド	2層・Ⅲ層	深鉢	口一胴部	平縁、内傾平(面取り)	口:押圧縄文(三角形基部の区画モチーフ・渦巻き文)、短沈線 胴:①段多条記、L形非結束引状縄文模写	指ナデ→ミガキ	中量	95-120	II群1a類	46.1と同一個体
128	12号住・A1k107ドリッド	埋土中・Ⅲ層	深鉢	胴一胴部		指:押圧縄文(L形)、短沈線 胴:①段多条記、L形非結束引状縄文模写	ミガキ	中量	130-140	II群1a類	
129	14号住	6層	深鉢	胴部		①段多条記、L形非結束引状縄文模写	ナデ	中量	95-105	II群2a類	
130	14号住Q3	埋土下空	深鉢	口縁部	微波状、前縁圧痕文	組織縄文	指ナデ	多量	65-100	II群6a類	134と同一個体?
131	14号住Q3	埋土下空	深鉢	口縁部	微波状、前縁圧痕文	組織縄文	ミガキ	多量	80-100	II群6a類	
132	14号住Q3	埋土下空	深鉢	胴部		組織縄文	ナデ	中量	55-75	II群6a類	
133	14号住Q3	埋土下空	深鉢	胴部		組織縄文	ナデ	少量	60-65	II群6a類	
134	14号住ベルト	1d層・2層	深鉢	口縁部	微波状、前縁圧痕文	組織縄文	指ナデ	多量	65-100	II群6a類	130と同一個体?
135	14号住ベルト	1d層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	組織縄文?	ミガキ	中量	55-90	II群6b類	
136	14号住Q3	埋土下空	深鉢	胴部		原形不明	ナデ	少量	60-70	II群3a類	
137	14号住Q4	2層	深鉢	胴部		①段多条記、L形	ナデ	中量	85-90	II群3a類	器底がやや深いことから前面が小さい
138	18号住ベルト	1b層	深鉢	口縁部	平縁、ミガキ	円筒形割変例、L形模写、外面調査多	横ナデ	中量	80-85	II群8類	
139	14号住Q4	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、丸み(ミガキ)	L形模写・模写の異方向による重畳施文	ナデ	中量	80-95	II群3a類	
140	14号住Q1	埋土中	深鉢	口縁部	微波状、角状(面取り)	L形模写	横ナデ	多量	55-80	II群3a類	外面スズ多量付着、⑧号代埋定実施(A5504)
141	14号住Q1	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	L形模写	指ナデ	多量	80-110	II群3a類	器底に表出
142	14号住Q2	埋土中	深鉢	口縁部	微波状、角状(面取り)	L形模写	ミガキ	中量	60-95	II群3a類	
143	17号住	埋土中	深鉢	胴部		組織縄文?	横ナデ	少量	60-70	II群6b類	
144	17号住	埋土中	深鉢	胴部		L形模写	指ナデ	少量	80-90	II群3a類	
145	17号住	埋土中	深鉢	胴部		L形模写	ナデ	少量	90-105	II群3a類	
146	18号住	埋土中	深鉢	口縁部	微波状、前縁圧痕文	組織縄文	指ナデ	中量	50-70	II群6a類	厚約6mmと薄手
147	18号住	埋土中	深鉢	胴部		組織縄文	ナデ	少量	90-95	II群6a類	
148	18号住	埋土中	深鉢	胴部		組織縄文	ナデ	中量	70-80	II群6a類	
149	18号住	埋土中	深鉢	胴部		組織縄文?	ナデ	中量	55-75	II群6b類	
150	18号住	埋土中	深鉢	口縁部	微波状、ミガキ	L形模写	指ナデ	中量	70-80	II群3a類	
151	18号住	埋土中	深鉢	胴部		①段多条記、L形非結束引状縄文模写	横シガキ	中量	100-110	II群2a類	
152	18号住	埋土中	深鉢	胴部		①段多条記、L形非結束引状縄文模写	ミガキ	中量	95-100	II群2a類	調査多
153	18号住	埋土中	深鉢	胴部		①段多条記、L形非結束引状縄文模写	ミガキ	中量	90-105	II群2a類	
154	18号住	埋土中	深鉢	胴部		①段多条記、L形非結束引状縄文模写	ミガキ	中量	120	II群2a類	
155	18号住	埋土中	深鉢	胴部		①段多条記、L形非結束引状縄文模写	縦ミガキ	少量	105-120	II群3a類	
156	18号住	埋土中	深鉢	口一胴部	平縁、丸み	口:押圧縄文(L形)による横分層粘着施文、短沈線(同径) 胴:①段多条記、L形非結束引状縄文模写	指ナデ	多量	100-150	II群1a類	

第8表 土器観察表(5)

調査号	出土地点	層位	器種	部位	口縁・口郭	文様など	内面	機能 有無	厚さ(mm)	最新分類	備考
137	19号住	5層	深鉢	胴部		6段多葉L・LR非結束引状縄文模写	横ナテ		100-105	Ⅱ群2型a種	
138	19号住Q1	4層	深鉢	胴部	縮径口縁	6段多葉L・LR非結束引状縄文模写	横ナテ		85-90	Ⅱ群2型a種	前期段階に準じては、やや薄手か?
139	19号住Q4	Ⅱ土中	深鉢	胴部		6段多葉L・LR非結束引状縄文模写	横ナテ		85-100	Ⅱ群2型a種	
140	19号住Q2	Ⅱ土中	深鉢	胴部		6段多葉L・LR非結束引状縄文模写	ミガキ		110-115	Ⅱ群2型a種	
141	19号住Q2	Ⅱ土中	深鉢	胴部		6段多葉L・LR非結束引状縄文模写	横ナテ		11.0	Ⅱ群2型a種	
142	19号住ベルト	2層	深鉢	胴部		縦縄文	横ナテ		60-85	Ⅱ群6型a種	
143	19号住Q1	Ⅱ土中	深鉢	口縁部	平縁、指頭圧痕文	縦縄文	横ナテ		60-95	Ⅱ群6型a種	
144	19号住Q4	Ⅱ土中	深鉢	口縁部	平縁、指頭圧痕文	L段横位(縦縄?)	横ナテ		50-85	Ⅱ群6型b種	縦縄文にも見える
145	19号住Q1	2層	深鉢	口縁部	平縁、指頭圧痕文	L段横位(縦縄?)	ナテ		55-85	Ⅱ群6型b種	縦縄文にも見える
146	19号住ベルト	2層	深鉢	口縁部	簡流状、指頭圧痕文	L段横位(縦縄?)	横ナテ		75-100	Ⅱ群6型b種	縦縄文にも見える
147	19号住Q1	Ⅱ土中	深鉢	胴部		L段横位(縦縄?)	ナテ		80-110	Ⅱ群6型b種	縦縄文にも見える
148	19号住ベルト	1層	深鉢	口縁部	平縁、面取り	L段横位	横ナテ		50-70	Ⅱ群3型a種	
149	21号住	Ⅱ土中	深鉢	胴部		縦縄文	横ナテ		75-100	Ⅱ群6型a種	
170	21号住	Ⅱ土中	深鉢	口縁部	平縁、面取り	L段横位	横ナテ		60-100	Ⅱ群3型a種	
171	21号住	Ⅱ土中	深鉢	胴部		L・LR・LR結束引状縄文模写	ナテ		85-90	Ⅱ群2型b種	LRのA段多葉の原型
172	21号住	Ⅱ土中	深鉢	口縁部	平縁、ミガキ	押圧縄文(L・R)	ナテ		90-100	Ⅱ群1型	※大木1式型?
173	24号住	Ⅱ底	深鉢	口縁部	平縁、ミガキ	口縁部部に押圧縄文(L・R)、L・LR非結束引状縄文(縦・横位の両方向縄文による縦文)	横ナテ		65-70	Ⅱ群2型b種	
174	24号住Q1	2層	深鉢	胴部		L段横位→斜位(重層編文+非結束引状縄文意匠)	横ナテ		60-75	Ⅱ群3型b種	
175	24号住Q3	2層	深鉢	胴部		6段多葉L・LR非結束引状縄文模写	ナズリ(条痕?)		95-100	Ⅱ群2型a種	
176	24号住	Ⅱ土中	深鉢	胴部		6段多葉L・LR非結束引状縄文模写	ミガキ		70-90	Ⅱ群2型a種	
177	24号住Q1-Q2	1-2層	深鉢	口縁部	簡流状、ミガキ	付加条(L・R+L)斜位	横ナテ		50-60	Ⅱ群5型	39-178と同一製体の可能性
178	24号住Q1-Q2	1-2層	深鉢	口縁部	簡流状、ミガキ	付加条(L・R+L)斜位	横ナテ		40-60	Ⅱ群5型	39-177と同一製体の可能性
179	24号住ベルト	1層	深鉢	口縁部	平縁	縦縄文	ナテ		60-95	Ⅱ群6型a種	粘土中に砂粒多量混入
180	24号住Q2トレンチ	1-2層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	L段横位	横いナテ		65-100	Ⅱ群3型a種	
181	24号住ベルト	1層	深鉢	口縁部	流状	LR横位	横いナテ		50-65	Ⅱ群3型a種	
182	24号住Q4	2層	深鉢	胴部		L段横位→斜位(重層編文)	ナテ		45	Ⅱ群3型b種	
183	24号住	Ⅱ土中	深鉢	口縁部	平縁	LR横位	横いナテ		60-65	Ⅱ群3型a種	184と同一製体?
184	24号住	Ⅱ土中	深鉢	口縁部	平縁	LR横位	ナテ		60-70	Ⅱ群3型a種	183と同一製体?
185	24号住	Ⅱ土上段	深鉢	胴部		6段多葉L段横位	横ナテ		85-90	Ⅱ群3型a種	
186	26号住	Ⅱ土中	深鉢	胴部		L段斜位→斜位(重層編文)	横いナテ		30.0	Ⅱ群3型b種	
187	26号住	Ⅱ底面	深鉢	胴部		LR横位	ナテ		80-85	Ⅱ群3型a種	
188	26号住	Ⅱ土中	深鉢	胴部		6段多葉L・LR非結束引状縄文模写	ミガキ		100-120	Ⅱ群2型a種	
189	28号住	Ⅱ土中	深鉢	胴部		L・LR・LR非結束引状縄文模写	ナテ		80-90	Ⅱ群2型b種	
190	28号住	Ⅱ土中	深鉢	胴部		LR・LR結束引状縄文模写	横ナテ		85-90	Ⅱ群2型b種	大木1式型→大木2式式の可能性
191	28号住	Ⅱ土中	深鉢	胴部		縦縄	ナテ		8.5	Ⅱ群7型	
192	1号土坑	Ⅱ土中	深鉢	口縁部	平縁、丸み	押圧縄文(横位平行)、縦位短流河	ミガキ		85-120	Ⅱ群1型a種	
193	1号土坑	Ⅱ土中	深鉢	口縁部		口縁部に押圧縄文(横位平行)、縦位短流河、胴部6段多葉L・LR非結束引状縄文模写	横いミガキ		105-115	Ⅱ群1型a種	
194	2号土坑	Ⅱ層下位	深鉢	胴部		LR横位→L段横位(重層編文)	横ナテ		75-85	Ⅱ群3型b種	
195	3号土坑	Ⅱ土中	深鉢	胴部		L段横位?	ナテ		105-110	Ⅱ群3型a種	器形の連続性から胴部丸尻?
196	3号土坑	Ⅱ土中	深鉢	胴部		調落多L段横位?	横ナテ		95-105	Ⅱ群3型a種	

第9表 土器観察表(6)

調査号	出土地点	層位	器種	部位	口縁・口郭	文様など	内面	機能 有無	器厚(mm)	最新分類	備考
197	4号土坑	埋土中	深鉢	口縁部	平縁、角状(口郭に 沿って凸出)	縦溝織文	面ナデ	多量	5.0-7.5	Ⅱ群6a種	74-75と同一製体
198	4号土坑	埋土中	深鉢	口縁部	微波状、短沈線	未施ループ+L形横位(横方 向に帯状に施文)	ナデ	中量	6.5-9.0	Ⅱ群4種	20と同一製体。宮 古市教委試掘4ト レンチ南半(A.1x11→ w13タテツブ付記)
199	4号土坑	埋土中	深鉢	胴部		L形縦位(帯が横走)	面ナデ	多量	7.0-8.0	Ⅱ群3a種	
200	4号土坑	埋土中	深鉢	胴部		未施ループ+L形横位(横方 向に帯状に施文)	ナデ	中量	6.0-7.0	Ⅱ群4種	
201	拾得場	Ⅱ層	深鉢	口縁部	波状	段縁による横沟形文、網 突	面ナデ		6.0	Ⅱ群1種	202と同一製体?
202	拾得場	Ⅱa層	深鉢	胴部		段縁による横沟形文、網 突、L形縦位→帯門形文(波 状)→帯消滅文	面ナデ		6.0	Ⅱ群1種	20と同一製体?
203	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	口縁部	波状	L形縦位→L形縦位→帯消 滅文	ナデ		6.5	Ⅱ群2種	
204	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	口→胴部	波状(段差)、突起	斜突起、L形縦位→L形縦 位→横位突起→帯消滅文	面ナデ		6.0	Ⅱ群2種	
205	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	半輪給全体第1型(Ⅱ)→L 形縦位→帯消滅文	ナデ		5.0-6.5	Ⅱ群2種	
206	拾得場南面	Ⅱa中位層	深鉢	口→底部 3/4境	平縁、突起(4単位)	半輪給全体第1型(Ⅱ)→L 形縦位→帯付段縁→帯消 滅文	面ナデ		5.5	Ⅱ群2種	
207	拾得場	Ⅱa中位層	深鉢	口→胴部	波状(4単位)	短突起、L形縦位→横位 突起→帯消滅文	ミガキ		5.0	Ⅱ群2種	
208	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	口縁部	平縁、突起	半輪給全体第1型(Ⅱ)→L 形縦位→帯消滅文	ナデ		6.0-6.5	Ⅱ群2種	
209	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	口→胴部	波状	無文(帯消滅文)、L形縦位 →L形縦位(帯付字状)→帯 消滅文、横位突起	面ナデ		5.0-6.0	Ⅱ群2種	
210	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	口→胴部	波状(単位)ノノ字状突起	L形縦位、斜位→L形縦位→ 帯消滅文	ミガキ		6.0	Ⅱ群2種	
211	①遊得場・② CⅡw16タテツ ブ	Ⅱa層・ⅡB層	深鉢	口→底部 5/3境	微波状、ノノ字状 突起(4単位)	L形縦位→L形縦位(横 沟形)→帯消滅文→斜突起 制→L形縦位	面ナデ		4.5-7.0	Ⅱ群2種	
212	拾得場	Ⅱa中位層	深鉢	口→胴部	平縁	L形縦位→L形縦位→帯消滅 文→部分的にL形斜り直し 制→L形縦位	横ミガキ		4.5-5.5	Ⅱ群2種	231と同一製体奉時 別要検討
213	拾得場	Ⅱa下位層	小形 深鉢	口→胴部	微波状	口：沈線モチーフ+L及L化 横溝文 胴：L形縦位	ミガキ		5.5-6.0	Ⅱ群2種	
214	拾得場	Ⅱa中位層・ Ⅱ層	深鉢	口→底部 2/3	微波状、突起(4単 位)	口：無文、帯付段縁によ るノノ字状文(段縁上に 斜突起) 胴：短突起 底：網代底	ミガキ		4.5-5.0	Ⅱ群3種	
215	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	口縁部	平縁	横位突起、短突起	ミガキ		3.5-4.5	Ⅱ群2種	
216	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	胴部		L形縦位→沈線モチーフ →帯消滅文	ミガキ		5.5-7.0	Ⅱ群2種	内面に黒色顔料散布 (奉時分析実施)
217	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	胴部		沈線区画→L形L化横溝 文)→帯消滅文	面ナデ		6.0-6.5	Ⅱ群2種	外面に黒色顔料 (帯)散布
218	拾得場ペルト	Ⅱa中位層	深鉢	口→胴部	平縁	口：無文 底：横位沈線、 斜突起 胴：半輪給全体 第1型(Ⅱ)	面ナデ		4.0-6.0	Ⅱ群2種	
219	拾得場	Ⅱa上位層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	帯付段縁(段縁上に短突起)	横ミガキ		5.0-6.0	Ⅱ群3種	
220	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	口→胴部	波状、台形状の突起	口：口縁無文(帯消滅文)、 沈線 胴：L形縦位	面ナデ		5.0-6.5	Ⅱ群2種	
221	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	口→底部 1/2境	平縁	L形縦位	ミガキ		4.5-5.0	Ⅱ群2種	
222	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	口→底部 1/3境	平縁	半輪給全体第1型(Ⅱ)	面ナデ		6.0	Ⅱ群2種	
223	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	胴部		沈線区画→L形L化横溝 文)、斜突起	面ナデ		4.5-5.0	Ⅱ群2種	
224	拾得場	Ⅱa下位層	盆	胴部		半輪給全体第1型(Ⅱ)→L 形縦位→帯消滅文	ミガキ		3.5-4.5	Ⅱ群4種	
225	拾得場	Ⅱa中位層	深鉢	口→胴部	平縁、丸み	L形縦位	ミガキ		6.0-6.5	Ⅱ群2種	
226	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	短突起未施処理横位	ミガキ		6.0-7.0	Ⅱ群	
227	拾得場南面	Ⅱa層	深鉢	口→胴部	平縁、丸み	口：無文帯(約3cm)、L形 未施処理横位 胴：L形 未施処理横位	ミガキ		4.0	Ⅱ群	

第10表 土器観察表 (7)

調査区	出土地点	層位	器種	部位	口縁・口郭	文様など	内面	機能 有無	厚さ(mm)	最新分類	備考
228	拾得場南西部	Ba層	深鉢	口-底部 1/2残	微波状	割:LR縦文 底:本巻文	横ミナギキ		50-70	B群	
229	拾得場南西部	Ba層	深鉢	口-底部 1/2残	微波状	LR縦・斜文	ミナギキ		50	B群	
230	拾得場南西部	Ba層	深鉢	口-胴部	平縁, 突起	口:無文, 横波状線 割: LR縦文	ナゲ		45-50	B群3期	口縁突起内面に隆線 による「ノ」の字状文 (断面も写真参照), ※時間要後検討
231	拾得場	Ba-中笠層	深鉢	口縁部	平縁	LR縦文→北縁文→滑溝 文→部分的に北縁引直し	横ミナギキ		45-60	B群2期	
232	拾得場	Ba-上笠層	深鉢	口-底部 3/4残	平縁	口-割:付加条(LR+L)縦 文 底:網代文	ミナギキ		50	B群	
233	拾得場	Ba-上笠層	深鉢	口-胴部	平縁	口:無文, 横波状線 割: LR縦文	横ミナギキ		55-60	B群	
234	拾得場西ト レンジ	Ba層	深鉢	口-胴部	平縁	単純条巻体第1期	横ミナギキ		45-50	B群	
235	拾得場・3C Ew3aグランド	①Ew3a層・②E w3bグランド	深鉢	口-胴部	小波状	単純条巻体第1期	ナゲ		50-65	B群	
236	拾得場	Ba-上笠層	深鉢	口-底部 2/3残	小波状	無文	横ナゲ		45-60	B群	小形深鉢(器高約9 cm)
237	拾得場	Ba-下笠層	深鉢	胴-底部	割	割:LR縦文 底:網代文	横ナゲ		60	B群	
238	拾得場	Ba-下笠層	深鉢	胴-底部	割	割:LR縦文 底:網代文	ナゲ		65	B群	
239	拾得場	Ba-中笠層	深鉢	胴-底部	割	割:LR縦文 底:網代文	横ナゲ		75	B群	
240	拾得場	Ba-上笠層	深鉢	胴-底部	割	割:LR縦文 底:網代文	ナゲ		70	B群	上面観情内形
241	拾得場	Ba-下笠層	深鉢	口-胴部	平縁	短尺LR縦文→北縁区画→滑 溝横文	横ナゲ		55-75	B群2期	
242	拾得場	Ba-下笠層	深鉢	口縁部	平縁, 中空突起	横波状線, 乳線区→北縁 区画→滑溝横文→短尺波 (2割1折)	ナゲ		60-65	B群3期	
243	拾得場	Ba-中笠層	深鉢	口-胴部	山形状	口:貼付隆線→LR縦文→ 波線モチーフ→滑溝横文 割:短尺隆線→LR縦文	横ミナギキ		50-65	B群3期	
244	拾得場西ト レンジ	Ba層	深鉢	口縁部	平縁	爪形状の刺突文(横帯)	ミナギキ		40-50	B群3期	
245	拾得場	Ba-下笠層	深鉢	口-胴部	平縁	単純条巻体第1期(笠区) →北縁区画→滑溝横文→ゴ テン状貼付文・刺突文	ミナギキ		50-65	B群3期	
246	拾得場南西部	Ba層	深鉢	口-胴部	波状?	口:無文, 横波状線(隆 帯上LR) 割:LR縦文	横ミナギキ		50-65	B群3期	
247	拾得場	Ba-上笠層	深鉢	口-胴部	波状	口:滑溝状隆起線文 割: 単純条巻体第1期(笠区)	ミナギキ		60	B群3期	
248	拾得場	Ba-上笠層	深鉢	口縁部	平縁, 突起	連続状隆起線文	横ナゲ		40-50	B群3期	内面式に類似
249	拾得場南東北 ムト	Ba-上笠層	深鉢	口-胴部	波状	口:連続状隆起線文 割: 短尺隆文 割:LR縦文	ナゲ		55-65	B群3期	内面式に類似
250	拾得場	Ba-上笠層	深鉢	口-胴部	平縁, 突起(4単位?)	口:突起部に乳・L斜紋→ 北縁文→滑溝横文 割:L 斜紋	ミナギキ		40-55	B群3期	
251	拾得場	Ba-上笠層	深鉢	口-胴部	小波状, 二層状突起	口:隆起線文(隆線の上に刺 突列) 割:LR斜紋	ミナギキ		55-60	B群3期	
252	拾得場南西部	Ba層	深鉢	口-胴部	平縁	口:無文, 貼付隆線(隆 帯上押し隆文) 割:LR縦 ・斜紋	ミナギキ		50-65	B群3期	
253	拾得場	Ba-上笠層	深鉢	口縁部	波状	貼付隆線(隆線の上に刺突 列)	ミナギキ		45-50	B群3期	
254	拾得場	Ba-上笠層	深鉢	口-胴部	微波状	口:貼付隆線による「X」字 状文(隆線の上刺突列) 割: 横波状線 割:LR縦文	ナゲ, ミ ナギキ		50-70	B群3期	
255	拾得場	Ba-上笠層	深鉢	口縁部	平縁	口:波溝部にゴテン状貼 付文, 波線文 割:付加 条(LR+L)の縦文	ミナギキ		55-65	B群3期	263と同一個体
256	拾得場	Ba-上笠層	深鉢	口-胴部	微波状, 突起	口-割:無文, 隆起線文(隆 線の上に刺突列) 割:付加 条(LR+L)	ミナギキ		55	B群3期	
257	拾得場	Ba-上笠層	深鉢	口-胴部	波状	口:波溝部にゴテン状貼 付文, 波線文 割:付加 条(LR+L)の縦文	ミナギキ		55-60	B群3期	261と同一個体
258	拾得場	Ba-中笠層	深鉢	口-胴部	平縁	口:貼付隆線(隆線の上に刺 突列) 割:LR縦文	横・ 縦ミナギキ		40-60	B群3期	

第11表 土器観察表(8)

調査号	出土地点	層位	器種	部位	口縁・口郭	文様など	内面	機能 有無	器厚(mm)	最新分類	備考
229	拾得場	Ba上笠層	深鉢	口縁部	流状	肌履位→隈線文(隈線上に刺突列) 刷:上笠履位	ナデ		40-45	B群3期	
230	拾得場	Ba中笠層	深鉢	口→胴部	簡流状	口:貼付隈線(隈線輪縁に刺突列) 刷:上笠履位	横ミガキ		40-45	B群3期	
231	拾得場	Ba中笠層	深鉢	口→胴部	平縁?	口:貼付隈線(隈線輪縁に刺突列) 刷:上笠履位	横ミガキ		60-75	B群3期	
232	拾得場	Ba中笠層	深鉢	口縁部	平縁	貼付隈線(隈線上に刺突列)	横ミガキ		60	B群3期	
233	拾得場	Ba中笠層	深鉢	口→胴部	簡流状	口:貼付隈線(隈線輪縁に刺突列) 刷:上笠履位	横ミガキ		45-55	B群3期	
234	拾得場	Ba上笠・中笠層	深鉢	口→胴部	簡流状、突起	無文、蓋部は窪起筒文、ボタンは貼付文、多量流紋文	ミガキ		40-55	B群3期	ボタン状貼付文は起点に付加
235	拾得場	Ba中笠層	深鉢	口→胴部	流状	口:無文、貼付隈線(隈線輪縁に刺突列) 刷:車輪跡(赤褐色土笠履位)	横ナデ		50-60	B群3期	
236	拾得場	Ba上笠層	深鉢	口→胴部	簡流状、突起(4等分)	口:貼付隈線(隈線上に押込溝文) 刷:付加条(上笠+L)	ミガキ		70	B群3期	
237	拾得場	Ba層	深鉢	口→胴部	流状	無文、貼付隈線による格目彩文、流紋による格目彩文	横ナデ		50-60	B群3期	266と同時期
238	拾得場西トレンチ	Ba層	深鉢	口→胴部	小流状	口:貼付隈線(隈線上に刺突列) 刷:上笠履位	横ナデ		60-70	B群3期	台土中に径1-3cmの小礫多量混入
239	拾得場	Ba上笠層	深鉢	口→胴部	平縁、突起(胴部に隣文)	口:無文、押込溝文(刷) 刷:突起流紋文(流紋)、肌-L肌履位(流紋文取除)	横ナデ		45-60	B群3期	
220	拾得場	Ba上笠層	深鉢	口→胴部	簡流状	口:上流紋 刷:肌履位	横ナデ		60	B群3期	上村一基宣式、幸時周要検討
271	拾得場	Ba中笠層	深鉢	口→底部	流状	口:無文、貼付隈線、流紋下に凹文 蓋:二重流紋 刷:上笠履位→隈線(流紋下から基びる) 変:銅代板	ナデ		45-60	B群3期	土器形式要検討
272	拾得場西トレンチ	Ba層	蓋			無文、二足付き			35	B群4期	
273	拾得場	Ba層	深鉢	底部		木製煎			一	B群4期	
274	拾得場南西部	Ba層	深鉢	刷→底部		木製煎	横ナデ		55	B群4期	
275	拾得場南西部	Ba層	深鉢	刷→底部		刷:上笠履位 煎:銅代板	横ナデ		55	B群4期	
276	拾得場	Ba上笠層	不明	口縁部		流紋による流本支起片	ミガキ		50-70	B群	外面に赤色顔料
277	拾得場	Ba上笠・中笠層	倉	刷→底部		流紋による窪空に貫通する流本支→肌履位(刷)	ミガキ		80	B群	外面に赤色顔料使用
278	拾得場	Ba上笠層	土師器 蓋?	胴部		ヘラミガキ	ハケメ		35-45	V群	外面に土色付着、内面調整はあるいはヘラナデ
279	拾得場	Ba上笠層	土師器 砂器	胴部		ヘラミガキ	ハケメ		25-50	V群	内面調整はあるいはヘラナデ
280	拾得場	Ba中笠層	土師器 砂器	刷→底部		ヘラミガキ	ハケメ		35-60	V群	内面調整はあるいはヘラナデ
281	AIa15グリッド	Bb層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	口縁部部に斜ら、押込溝文(L肌) 短流紋	横ミガキ	中量	115	II群1期a種	
282	AIa17-07グリッド	I-1層	深鉢	口→胴部		押込溝文(肌-L肌)、短流紋	ミガキ	多量	95-115	II群1期a種	
283	AIa10グリッド	Bb層	深鉢	胴部		押込溝文(L肌)、短流紋	ミガキ	中量	95-110	II群1期a種	
284	AIa10グリッド	Bb層	深鉢	胴部		①砂多量肌-L肌赤粘葉引状縄文模印 ②砂多量肌-L肌赤粘葉引状縄文模印	横ナデ	中量	115-130	II群2期a種	
285	AIa11グリッド	Bb層	深鉢	口縁部	平縁、縄文	①砂多量肌-L肌赤粘葉引状縄文模印 ②砂多量肌-L肌赤粘葉引状縄文模印	ミガキ	多量	70-100	II群2期a種	
286	AI10グリッド	Bb層	深鉢	胴部		①砂多量肌-L肌赤粘葉引状縄文模印 ②砂多量肌-L肌赤粘葉引状縄文模印	ミガキ	中量	120-155	II群2期a種	
287	AIa2グリッド	Bb層	深鉢	胴部		①砂多量肌-L肌赤粘葉引状縄文模印 ②砂多量肌-L肌赤粘葉引状縄文模印	ミガキ	中量	110-125	II群2期a種	
288	宮古市教委委託 掘削トレンチ	Bb層	深鉢	胴部		組縄縄文	ミガキ	中量	95-100	II群6期a種	※AIa19-03グリッド付託
289	高橋地区北西 洞窟	Bb層	深鉢	口縁部	簡流状、縄文草体	組縄縄文	横ナデ	多量	60-75	II群6期a種	
290	AIa15グリッド	Bb層	深鉢	口縁部	簡流状、前部は縄文	肌履位(組縄縄文?)	横ナデ	多量	60-100	II群6期b種	

第12表 土器観察表(9)

調査区	出土地点	層位	器種	部位	口縁・口郭	文様など	内面	備録 有無	器厚(mm)	最新分類	備考
291	A1a09グランド	Ⅱ層下部	深鉢	口縁部	平縁、折り返し	組縄織文	瓶いナデ		多量 70-80	ⅡB06a種	
292	A1a09グランド	Ⅱ層下部	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	組縄織文	ミガキ		中量 65-85	ⅡB06a種	
293	A1a22グランド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、折返し	組縄織文	瓶いナデ		多量 65	ⅡB06a種	
294	A1a09グランド	Ⅱb層	深鉢	胴部		組縄織文?	瓶いナデ		中量 80-100	ⅡB06b種	
295	西岡倉区北西 斜面	Ⅱ層	深鉢	底部		組縄織文?	瓶いナデ		少量 8.5	ⅡB06b種	片欠
296	A1a11グランド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	瓶流状、折返し	組縄織文	ナデ		中量 65-90	ⅡB06a種	
297	A1a11グランド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)		瓶いナデ		中量 70-95	ⅡB04種	
298	A1a11グランド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)		瓶いナデ		中量 60-80	ⅡB04種	
299	A1a10グランド	Ⅱb層	深鉢	口縁部	平縁、折み		瓶いナデ		中量 80-100	ⅡB04種	
300	A1a10グランド	Ⅱb層	深鉢	口縁部	山形状		瓶いナデ		中量 90	ⅡB04種	
301	A1a10グランド	Ⅱb層	深鉢	胴部		組縄織文?(未確認)横位	ミガキ		中量 9.5	ⅡB06b種	
302	A1a10グランド	Ⅱb層	深鉢	口縁部	平縁、ミガキ	L.R.横位(重層横位)	瓶いナデ		少量 5.5-8.0	ⅡB03a種	
303	A1a11グランド	Ⅱ層	深鉢	胴部		L.R.北結束引状縄織文横位	ミガキ		少量 8.5-9.0	ⅡB02a種	
304	A1a11グランド	Ⅱ層	深鉢	胴部		L.R.北結束引状縄織文	ナデ		少量 70-95	ⅡB02a種	
305	A1a11グランド	コケラン層	深鉢	胴部		L.R.北結束引状縄織文横位	瓶いナデ		少量 7.5-8.0	ⅡB02b種	
306	A1a11グランド	コケラン層	深鉢	胴部		R.L.北結束引状縄織文横位	ミガキ		少量 7.5-8.0	ⅡB02a種	
307	A1a11グランド	Ⅱ層・コケラン層	深鉢	胴部		(R.L.結束引・R.L.北結束引状縄織文横位)	瓶いナデ		中量 70-7.5	ⅡB02a種	R.Lのみ片未確認!
308	A1a10グランド	Ⅱb層	深鉢	口縁部	瓶流状、縄文	R.L.横位	瓶いナデ		中量 5.5-8.5	ⅡB03a種	
309	トロンチ 長瀬部	Ⅱb層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	R.L.横位	ミガキ		中量 60-7.5	ⅡB03a種	
310	西岡倉区北西 斜面	Ⅱ層	深鉢	口縁部	瓶流状、縄文	(R.L.横位)	瓶いナデ		多量 40-65	ⅡB03a種	
311	西岡倉区北西 斜面	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、丸み、折り返し	R.L.斜位(条は縦走)	瓶いナデ		多量 60-100	ⅡB03a種	
312	西岡倉区中央 やや北	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	L.R.横位→押入縄文(R.L.)による横位平行	ミガキ		多量 65-80	ⅡB01a種	
313	A1a10グランド	Ⅱb層	深鉢	口縁部	平縁、角状(面取り)	(R.L.横位)	瓶いナデ		多量 60-85	ⅡB03a種	
314	A1a11グランド	Ⅱ層	深鉢	胴部		L.R.横位	瓶いナデ		多量 8.5	ⅡB03a種	
315	A1a10グランド	Ⅱ-Ⅱ層	深鉢	胴部		L.R.北結束引状縄織文横位による重層横位	瓶いナデ		中量 8.5-9.5	ⅡB02a種	
316	A1a10グランド	Ⅱ-Ⅱ層	深鉢	胴部		(R.L.結束引・条は縦走)・横位(条は斜走)	ナデ		中量 90-100	ⅡB03a種	
317	A1a11付産	Ⅱb層	深鉢	口縁部	平縁、小突起、折返し	口縁部に斜位の折み、付加条(R.L.)横位	瓶いナデ		中量 70-90	ⅡB01a種	
318	A1a11グランド	Ⅱ層	深鉢	胴部		S字状連続文	ミガキ		微量 90-105	ⅡB09種	
319	CEw66グランド	Ⅱ層	直 胴部			R.L.横位→北組区画→器用縄文、折手	ミガキ		4.5-5.5	ⅡB02種	
320	CEw66グランド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁	R.L.横位→北組区画→器用縄文→斜交列・折返し	ミガキ		60-75	ⅡB02種	
321	CEw62グランド	Ⅱ層	深鉢	胴-底部		斜・L.R.横位 底・網代直	ミガキ		7.5	ⅡB04種	
322	CEw65-S17 グランド	Ⅱ-Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、突起	段縁文(段縁部に斜交列)・R.L.横位→定規文→器用縄文	ナデ		30-65	ⅡB03種	
323	CEw65-S17 グランド	Ⅱ-Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁	斜位の斜付段縁(段縁上に斜交列、斜交文(段縁の外に集合的に施文))	瓶いナデ		50	ⅡB03種	
324	CEw65-S17 グランド	Ⅱ-Ⅱ層	深鉢	口縁部	山形状	中空折手、斜付段縁(段縁上に斜交列)	瓶いナデ		7.5	ⅡB03種	

第13表 土製品観察表

調査 区	砂椀	出土地点	層位	文様・特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	時期	備考
341	ミユチユア上部	捨て場	Ⅱa上段層	無文	22	4.2	0.4	47	中期末～後期前半	口縁部片
342	ミユチユア上部	捨て場	Ⅱa層	無文	22	2.2	0.6	61	中期末～後期前半	胴～底部片
343	ミユチユア上部	捨て場	Ⅱa下段層	無文	—	—	—	48	中期末～後期前半	胴～底部片
344	ミユチユア上部	捨て場	Ⅱa下段層	無文	24	3.4	0.6	279	中期末～後期前半	
345	ミユチユア上部	捨て場	Ⅱa層	LR痕跡	30	4.0	0.5	357	中期末～後期前半	
346	ミユチユア上部	捨て場	Ⅱa上段層	多重花縄文	22	1.6	0.7	81	後期前半?	胴～底部片
347	三角埴輪土製品	捨て場	Ⅱa中段層	細いV字の刺突列	45	6.3	6.0	904	中期末～後期前半	腹面の中央部に貫通孔が穿孔される
348	円盤状土製品	24号住	3層	磨減のため不明(RL?)	56	4.9	1.0	250	前期前半	全周打ち欠き、縁部少量欠入
349	円盤状土製品	24号住	埋土中	粗縄縄文?	42	3.7	0.9	128	前期前半	打ち欠きとミガキがランダム、縁部少量欠入
350	円盤状土製品	捨て場	Ⅱa層	沈降、早稲跡糸体第1期	36	3.6	0.8	116	中期末葉	全周ミガキ
351	円盤状土製品	捨て場	Ⅱa上段層	木葉痕	52	5.5	1.4	453	中期末～後期前半	全周ミガキ、底面片の再利用
352	円盤状土製品	捨て場	Ⅱa中段層	磨減のため不明	3.5	4.1	0.7	91	中期末～後期前半	全周打ち欠き
353	円盤状土製品	捨て場	Ⅱa中段層	LR	3.3	4.4	0.8	108	中期末～後期前半	全周打ち欠き、方形基調
354	円盤状土製品	捨て場	Ⅱa層	早稲跡糸体第1期	3.3	3.5	0.9	109	中期末～後期前半	全周ミガキ
355	円盤状土製品	捨て場	Ⅱa上段層	連続状隆起縄文	4.0	4.2	1.1	159	後期前半?	全周打ち欠き
356	円盤状土製品	捨て場	Ⅱa下段層	LR	4.0	4.4	1.2	161	時期不明	全周打ち欠き
357	円盤状土製品	A1a11グリッド	Ⅱ層	LR・RL糸結束状縄文	4.0	3.6	1.1	164	前期前半	全周ミガキ(丁重と粗い部分有)、縁部少量欠入
358	円盤状土製品	A1a5グリッド	Ⅱ層	LR・RL結束状縄文	3.8	4.3	0.9	103	前期前半	半円形、打ち欠きとミガキがランダム、縁部少量欠入
359	円盤状土製品	宮古市教委試掘	3～4層	(段)多葉LR	4.0	4.6	1.2	214	前期前半～前半	打ち欠きとミガキがランダム、帯入1x11～w13グリッド付
360	不明	捨て場	Ⅱa層	細いV字の刺突列	4.6	5.0	3.0	462	後期前半	キノコフ、土削?、土彫突起?

第14表 石器観察表(1)

調査区	器種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	材質	産地	時代	備考	
401	石腕	3号住Q3	埋土中	32	5.3	10	97	頁岩	北上山地	中年代	横型
402	丸淵器	4号住Q1	埋土中	5.5	1.5	0.8	60	頁岩	北上山地	中年代	
403	石腕	7号住	埋土中	(6.7)	3.5	1.6	186	頁岩	北上山地	中年代	鈴型
404	石腕	7号住	2層	5.3	3.2	0.8	118	頁岩	北上山地	中年代	
405	石腕	8号住ベルト	埋土中	2.2	3.1	0.4	21	頁岩	北上山地	中年代	
406	スタレイベー	8号住ベルト	埋土中	5.0	3.7	1.0	217	頁岩	北上山地	中年代	磨製石斧かとの取用品
407	石腕	9号住Q3	埋土中	(2.8)	1.6	0.6	22	頁岩	北上山地	中年代	
408	石腕	9号住Q1	埋土中	2.2	1.9	0.4	69	頁岩	北上山地	中年代	
409	石腕	9号住	埋土中	5.8	2.1	0.9	97	頁岩	北上山地	中年代	縦型
410	縦長薄片	9号住Q1	埋土下位	8.4	2.3	0.8	10.1	頁岩	北上山地	中年代	
411	石腕	10号住	埋土中	(1.8)	1.6	0.3	0.8	頁岩	北上山地	中年代	先端部欠損
412	石腕	10号住Q1	埋土上位	2.4	1.5	0.4	1.3	頁岩	北上山地	中年代	
413	石腕	10号住Q2	埋土下位	(3.6)	2.0	0.5	3.3	頁岩	北上山地	中年代	欠損品
414	石腕	10号住Q1	埋土下位	6.1	3.7	1.3	36.1	燧灰岩	北上山地	中年代白峯紀 原地山層	1号焼土遺構附近、小型力持型スタレイベー
415	スタレイベー	10号住Q1	埋土中	2.6	1.6	0.8	2.8	燧灰岩	北上山地	中年代	燧灰岩産地特定分析実施
416	石腕	13号住	1層	(2.4)	(1.4)	0.5	1.2	頁岩	北上山地	中年代	埋土シメント
417	石腕	13号住	埋土最上位	3.8	4.5	0.8	9.4	頁岩	北上山地	中年代	
418	石腕	13号住	埋土最上位	6.2	2.7	1.1	12.2	頁岩	北上山地	中年代	
419	石腕	13号住	埋土最上位	4.3	2.7	0.7	6.4	頁岩	北上山地	中年代	
420	石腕	13号住東部	埋土中	3.0	4.3	0.7	6.9	頁岩	北上山地	中年代	
421	石腕	13号住Q2	埋土中	3.6	5.0	0.9	11.0	頁岩	北上山地	中年代	
422	力持型スタレイベー	13号住Q4	2層	(6.4)	4.7	1.5	38.0	燧灰岩	北上山地	中年代白峯紀 原地山層	黄褐色・埋戻土
423	石腕	14号住ベルト	1層	4.3	2.3	0.6	3.4	頁岩	北上山地	中年代	
424	石腕	14号住Q2	埋土中	3.8	(4.1)	0.7	10.3	頁岩	北上山地	中年代	横型、両端欠損
425	石腕	16号住	埋土中	2.7	1.4	0.5	1.1	頁岩	北上山地	中年代	
426	石腕	16号住北側ベルト	埋土中	4.7	2.1	0.6	5.3	頁岩	北上山地	中年代	縦型
427	スタレイベー	19号住ベルト	4層	3.3	3.8	1.0	9.8	頁岩	北上山地	中年代	
428	石腕	21号住	埋土中	4.6	1.6	1.0	4.0	珧質頁岩	北上山地	中年代	縦型
429	石腕	22号住	埋土中	2.7	1.7	0.4	1.5	頁岩	北上山地	中年代	
430	石腕	24号住	埋土上位	2.1	1.4	0.5	1.1	頁岩	北上山地	中年代	
431	石腕	24号住Q4	埋土中	(2.3)	1.7	0.5	1.4	頁岩	北上山地	中年代	
432	石腕	24号住Q2	2層	4.6	2.0	0.7	5.4	頁岩	北上山地	中年代	(南東)縦型
433	石腕	26号住	埋土中	5.1	1.2	0.6	3.2	頁岩	北上山地	中年代	南セクション、最大値13cm
434	石腕	4号焼土遺構	焼土層直後	4.3	3.1	0.9	11.5	頁岩	北上山地	中年代	
435	石腕	捨て場	Ba-D中位層	2.5	1.4	0.3	0.4	頁岩	北上山地	中年代	
436	石腕	捨て場	Ba層	3.8	2.9	0.6	3.9	頁岩	北上山地	中年代	東トレンチ(南北方向)
437	石腕	捨て場	Ba-D中位層	3.2	2.2	0.7	2.6	頁岩	北上山地	中年代	大型
438	石腕	捨て場	Ba-D中位層	1.8	1.3	0.3	0.4	頁岩	北上山地	中年代	
439	石腕	捨て場	Ba-D中位層	(2.7)	1.3	0.4	1.0	頁岩	北上山地	中年代	
440	丸淵器	捨て場	Ba-D中位層	3.2	2.6	1.1	6.8	赤色頁岩	北上山地	中年代	
441	石腕	捨て場	Ba-D中位層	(4.8)	2.9	1.4	8.6	頁岩	北上山地	中年代	鎌部の先端欠損
442	石腕	捨て場	Ba-D中位層	2.9	2.1	0.8	3.9	頁岩	北上山地	中年代	
443	石腕	捨て場南	Ba層	4.1	0.5	0.5	0.8	頁岩	北上山地	中年代	スリムな鎌部
444	石腕	捨て場	Ba-D中位層	4.3	2.6	0.7	5.2	頁岩	北上山地	中年代	
445	スタレイベー	捨て場	Ba-D中位層	5.6	2.7	1.1	12.6	頁岩	北上山地	中年代	ブーメラン状
446	スタレイベー	捨て場	Ba-D中位層	3.9	(4.1)	0.7	8.6	赤色頁岩	北上山地	中年代	
447	スタレイベー	捨て場	Ba-D中位層	4.8	4.7	1.3	18.4	頁岩	北上山地	中年代	東セクション
448	スタレイベー	捨て場	Ba層	(5.9)	3.1	1.7	20.9	赤色頁岩	北上山地	中年代	
449	ビス・エスキュー	A1 n11グロッ	遺層	4.9	3.1	1.0	17.4	砂岩	北上山地	中年代	両端打込、1号住の南~2m、居住跡か?
450	力持型スタレイベー	A1 n9グロッ	遺層	(9.9)	6.0	2.1	143.6	砂岩	北上山地	中年代	

第15表 石器観察表(2)

調査区	部種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	産地	時代	備考
451	磨石	1号住	2層	10.4	10.0	6.1	751.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	花崗岩系、欠損品
452	磨石	1号住	2層	12.4	9.4	5.0	763.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	南北セクション、一層に打欠損あり
453	磨石	1号住Q3	埋土中	4.4	9.1	4.6	296.0	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	輪切り状
454	礫部	1号住	床底	10.7	6.8	3.4	305.0	凝灰岩	北上山地	中生代白亜紀 原山層	磨石の先端部に打欠損あり
455	磨石	3号住Q2	埋土中	11.8	5.7	3.6	373.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	花崗岩系
456	磨石	3号住Q3	埋土中	12.1	7.4	3.5	457.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
457	磨石	3号住Q4	埋土中位	7.2	8.4	4.4	350.0	砂岩	北上山地	中生代	両面に打欠損
458	石皿	3号住	3層	23.0	12.8	7.3	2233.0	砂岩	宮古層群	中生代白亜紀	東西セクション中
459	埋片 スタレイバー	3号住北端	埋土中	4.0	3.6	1.0	25.0	砂岩	北上山地	中生代	
460	原石	4号住南北ベルト	1層	7.6	7.3	4.9	388.0	デイサイト	原山層	中生代白亜紀	
461	石皿	4号住	1層	25.1	21.6	7.0	3000.0	砂岩	宮古層群	中生代白亜紀	南北セクション
462	磨石	6号住	埋土中	6.6	7.0	4.7	269.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	花崗岩系、欠損品
463	磨石 石芥	7号住	11層	7.0	4.2	2.1	80.0	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀	未成物品
464	磨石	7号住	11層	6.7	6.9	4.5	280.0	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀	打欠損有
465	磨石 石芥	8号住	埋土中	11.8	5.2	3.3	289.0	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀	刃部欠損
466	特殊磨石	8号住	埋土中	11.3	8.2	6.7	831.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
467	特殊磨石	10号住Q2	埋土中位	17.8	6.6	7.0	1057.0	礫岩	北上山地	中生代	表面がザラザラ
468	磨石	10号住Q4	埋土中～上位	11.0	6.5	3.2	344.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
469	磨石	10号住Q1	埋土上位	11.2	5.6	3.3	308.0	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	
470	磨石	10号住Q1	埋土中	13.0	8.8	5.5	847.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
471	磨石	10号住Q2	埋土下位	13.8	10.9	5.7	1357.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
472	磨石	10号住Q3	埋土中	9.4	6.5	3.9	349.0	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	
473	磨石	10号住Q3	埋土中	14.8	7.9	5.0	921.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
474	磨石	10号住Q3	埋土中	13.0	9.8	4.5	872.0	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
475	磨石	10号住Q2	埋土中	11.7	11.6	6.1	1168.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
476	磨石 石芥	13号住	埋土上位	10.0	5.4	4.4	215.0	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	欠損品
477	特殊磨石	13号住	1層	14.3	7.2	5.0	703.0	砂岩	北上山地	中生代	
478	磨石	13号住	埋土上位	12.7	7.1	5.6	799.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
479	磨石	13号住東部	埋土上位	11.3	10.3	4.5	774.0	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	
480	礫部	13号住Q1	2層	12.9	14.1	5.5	1238.0	デイサイト	原山層	中生代白亜紀	打ち欠損ある種
481	礫部	13号住	1層	8.2	7.9	3.1	294.0	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀	黒シルト、両面に打欠損、磨片未成物品か
482	埋片 スタレイバー	13号住	埋土中	6.2	3.3	1.0	25.0	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
483	磨石 石芥	14号住Q1	埋土上	7.9	4.8	3.1	191.0	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀	
484	磨石 石芥	14号住Q1	埋土上位	7.5	2.4	1.3	37.0	頁岩	北上山地	中生代	小形
485	磨石	14号住Q4	埋土中	6.5	6.3	4.4	218.0	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	
486	磨石	14号住Q1	埋土中	16.1	8.4	4.7	1044.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	花崗岩系
487	特殊磨石	17号住	埋土中	8.6	7.8	4.0	347.0	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	欠損品
488	埋片 スタレイバー	19号住ベルト	2層	5.4	3.9	1.7	51.0	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	磨片未成物品からの転用品か
489	特殊磨石	19号住Q2	埋土中	14.5	7.3	5.4	740.0	砂岩	北上山地	中生代	
490	特殊磨石	19号住Q2	埋土中	13.7	8.3	5.7	1020.0	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	
491	磨石	19号住	床面	9.9	6.6	3.0	296.0	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	
492	磨石	19号住ベルト	2層	7.2	6.3	4.4	260.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
493	礫部	19号住Q1	4層	9.3	8.1	4.2	479.0	デイサイト	原山層	中生代白亜紀	
494	原石	19号住ベルト	4層	12.4	9.2	6.6	1165.0	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀	
495	原石	19号住Q3	2層	14.2	5.6	3.0	413.0	凝灰岩	北上山地	中生代白亜紀 原山層	
496	石皿	19号住Q3	2層	10.2	9.0	4.2	248.0	砂岩	宮古層群	中生代白亜紀	縦行
497	台石	19号住Q2	床底	31.4	25.7	3.7	2846.0	砂岩	宮古層群	中生代白亜紀	2片が接合
498	礫部	19号住	床面	10.9	12.3	4.3	832.0	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
499	磨石 石芥	24号住	3層	10.7	4.8	3.2	278.0	ヒン岩	北上山地	中生代白亜紀	原石への転用品
500	特殊磨石	24号住南北ベルト	1層	7.8	6.0	4.2	281.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	
501	磨石	24号住	埋土中	8.3	10.2	2.8	301.0	細粒閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	打欠損多数あり

第16表 石器観察表 (3)

収蔵 %	部種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	産地	時代	備考
502	磨石	24号住Q4	2層	128	116	4.5	10390	細粒閃緑岩	北上山地	中世代白卑配	
503	磨石	24号住Q2	2層	112	60	2.6	3110	頁岩	北上山地	中世代	
504	砥石	24号住	棟上中	5.0	7.8	2.8	1130	ホルンフルス	北上山地	中世代(産地は 中世代白卑配)	
505	石皿	CⅡv16グワッド	3層	234	146	5.8	25300	砂岩	北上山地	中世代	砥痕あり
506	磨製石芥	捨て場	Ⅱa層	7.5	4.0	1.9	1100	砂岩	北上山地	中世代	刃部欠損
507	磨製石芥	捨て場	Ⅱa層	10.3	4.7	2.5	1920	デイサイト	栗地山層	中世代白卑配	刃部欠損
508	磨製石芥	捨て場	Ⅱa層	5.9	5.4	2.6	1280	頁岩	北上山地	中世代	基部内加工
509	磨製石芥	捨て場	Ⅱa-d位層	5.6	1.4	0.7	100	頁岩	北上山地	中世代	ミニチュア
510	磨製石芥	捨て場	Ⅱa層	7.1	4.6	2.0	980	ホルンフルス	北上山地	中世代(産地は 中世代白卑配)	
511	磨製石芥	捨て場	Ⅱa層	8.5	4.9	2.8	2030	砂岩	栗地山層	中世代白卑配	刃部修整途中若しくは最石への転用品
512	磨製石芥	捨て場	Ⅱa層	6.3	5.4	2.6	1480	凝灰岩	早池畔山 残層	古世代オールドビ ス紀	基部欠損
513	磨製石芥	捨て場	Ⅱa層	8.7	3.4	2.5	1150	細粒花崗岩	北上山地	中世代白卑配	基部欠損
514	特殊磨石	捨て場	Ⅱ層	11.4	7.1	4.0	6550	花崗閃岩	北上山地	中世代白卑配	縄文中・後期の遺物包含層より下位の 土層から出土
515	特殊磨石	捨て場	Ⅱa層	14.3	7.6	5.6	9080	花崗岩	北上山地	中世代白卑配	
516	特殊磨石	捨て場	Ⅱa-d位層	13.3	7.1	5.2	6350	砂岩	北上山地	中世代	
517	特殊磨石	捨て場	Ⅱa-d位層	9.1	6.7	5.6	5210	砂岩	北上山地	中世代	
518	磨削部	捨て場	Ⅱa-d位層	7.3	6.6	2.1	1550	砂岩	北上山地	中世代	
519	砥石	捨て場	Ⅱa層	6.9	5.8	2.9	1340	細粒閃緑岩	北上山地	中世代白卑配	両面に砥痕あり
520	砥石	捨て場	Ⅱa層	6.5	6.0	5.4	3280	デイサイト	栗地山層	中世代白卑配	
521	砥石	捨て場	Ⅱa層	7.2	6.4	3.4	2300	ヒン岩	北上山地	中世代白卑配	
522	砥石	捨て場	Ⅱa層	9.1	6.2	3.6	3100	凝灰岩	北上山地	中世代白卑配(原 地山層)	両面に凹部あり
523	凹石	捨て場	Ⅱa-d位層	14.2	7.5	3.0	4430	砂岩	北上山地	中世代	両面に凹部あり
524	凹石	捨て場	Ⅱa-d位層	11.6	7.3	3.0	3400	花崗閃岩	北上山地	中世代白卑配	東セクション、両面に凹部あり
525	凹石	捨て場	Ⅱa-d位層	9.4	5.8	3.8	3050	砂岩	北上山地	中世代	
526	石皿	捨て場	Ⅱa層	10.5	9.5	4.7	4510	砂岩	宮古層群	中世代白卑配	両面に凹部有
527	石皿	捨て場	Ⅱa層	14.8	11.2	7.4	13110	砂岩	宮古層群	中世代白卑配	両面に凹部有
528	円鏡	捨て場	Ⅱa層	5.8	4.7	1.2	490	ヒン岩	北上山地	中世代白卑配	東セクション、縁部に打欠痕あり
529	円鏡	捨て場	Ⅱa-d位層	4.9	4.9	1.6	560	花崗岩	北上山地	中世代白卑配	一端に打欠痕あり
530	円鏡	捨て場	Ⅱa-d位層	4.6	4.1	3.5	900	花崗岩	北上山地	中世代白卑配	破欠
531	磨製石芥	西園赤区中央部	風割本流	13.7	5.9	3.7	5010	花崗閃緑岩	北上山地	中世代白卑配	
532	磨製石芥	A110aグワッド	3層	8.6	5.2	2.5	1760	デイサイト	栗地山層	中世代白卑配	基部に再調整痕有
533	特殊磨石	西園赤区中央部 山側	Ⅱb層相当	14.9	7.9	5.5	9620	花崗閃緑岩	北上山地	中世代白卑配	
534	砥石	第13トレンチ	3層	6.7	6.4	2.6	1480	デイサイト	栗地山層	中世代白卑配	上面鏡打痕、縁部に砥痕あり
535	砥石	第16トレンチ	明色土上	7.5	7.3	3.9	3510	砂岩	北上山地	中世代	砥痕が多数に亘る
536	凹石	西園赤区北西斜面	3層	8.6	8.3	3.3	2490	砂岩	宮古層群	中世代白卑配	
537	磨削部	A110aグワッド	3層	10.8	4.6	1.7	930	細粒花崗岩	北上山地	中世代白卑配	両面に両輪打痕

第17表 石製品観察表

収蔵 %	部種	出土地点	層位	石質	産地	時代	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
551	有孔石製品	捨て場	3層	頁岩	北上山地	中世代	7.3	3.6	2.1	276	
552	男性磨製石製品	捨て場	Ⅱb層	砂岩	北上山地	中世代	6.3	3.4	1.8	379	
553	石棒	捨て場	Ⅱb-d位層	頁岩	北上山地	中世代	6.7	1.6	0.8	6.5	
554	石刀	捨て場	Ⅱa-d位層	砂岩	北上山地	中世代	16.3	4.1	2.3	221.4	
555	石棒	CⅡv16グワッド	3層	凝灰岩	北上山地	中世代	31.8	7.7	6.5	2999.2	大型
556	不明石製品	A110aグワッド	3層	頁岩	北上山地	中世代	29	120	1.6	7.3	耳飾りの半成品か

VI 自然科学分析

- 1 黒曜石産地推定
- 2 放射性炭素年代測定 (AMS測定)
- 3 テフラ同定分析
- 4 漆分析

1 黒曜石産地推定

(株) 第四紀 地質研究所

(1) 実験条件

分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子製JSX-3200）で行なった。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法（FP法）による自動定量計算システムが採用されており、6 C～92 Uまでの元素分析ができ、ハイパワーX線源（最大30kV、4mA）の採用で微量試料～最大290mmφ×80mm Hまでの大型試料の測定が可能である。小型試料では16試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルクFP法でおこなった。FP法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。

実験条件はバルクFP法（スタンダードレス方式）、分析雰囲気＝真空、X線管ターゲット素材＝Rh、加速電圧＝30kV、管電流＝自動制御、分析時間＝200秒（有効分析時間）である。

分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Y, Zrの14元素、分析値は黒曜石の含水量＝0と仮定し、酸化物の重量％を100％にノーマライズし、表示した。

地質学的には分析値の重量％は小数点以下2桁で表示することになっているが、微量元素のRb, Sr, Y, Zrは重量％では小数点以下3～4桁の微量となり、小数点以下2桁では0と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した。

主要元素と微量元素の酸化物濃度（重量％）でSiO₂-Al₂O₃-Fe₂O₃-TiO₂-K₂O-CaOの各相関図、Rb-Srは積分強度の相関図の4組の組み合わせで図を作成した。

(2) 分析結果

第1表化学分析表には分析結果に基づいて原産地も記載してある。

第2表原産地対比表には出土遺跡の石器類の原産地が記載してある。

第1～4図に記載されている花泉、水沢の礫層中の黒曜石は小赤沢の黒曜石の化学組成が同じものであるので一連のものとして小赤沢系とした。

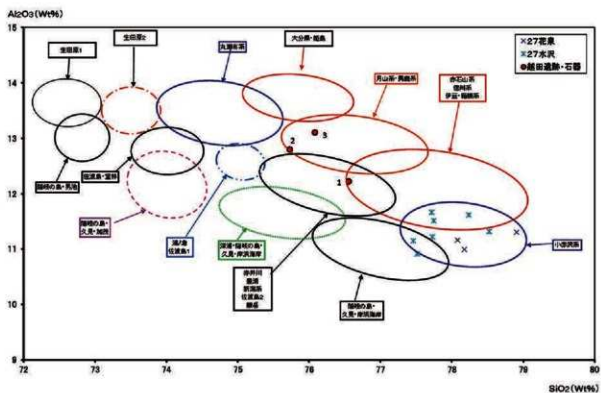
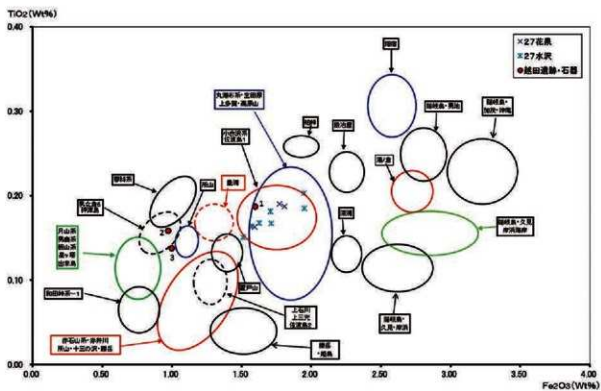
第2表に示すようにK-1～K-3の3個は男鹿系である。K-1は荷被熱している可能性がある。

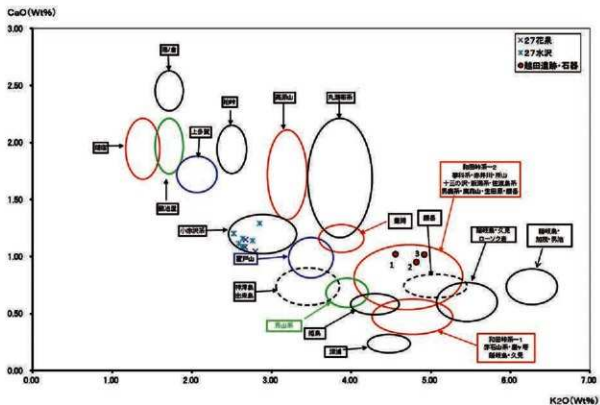
第2表 原産地対比表

試料番号	原産地	石器
K-1	男鹿系	剥片
K-2	男鹿系	剥片
K-3	男鹿系	剥片

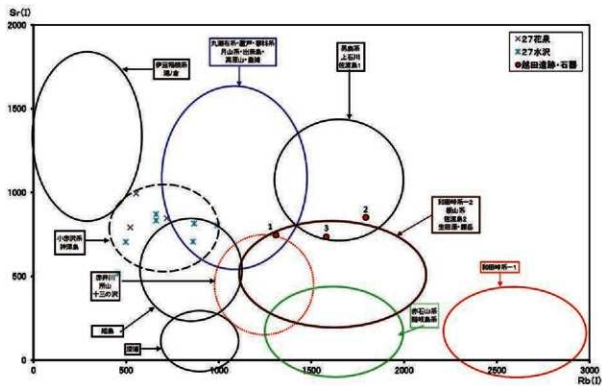
引用文献

- 井上 巖 (2000) 東北・北陸北部における原産地黒曜石の蛍光X線分析 (XRF) 北越考古学、第11号、23-38/
- 井上 巖 (2001) テフラ中の火山ガラスの同定に関する一提言、軽石学雑誌、第7号 23-51.
- 井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 関東・中部・東海編
- 井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 東北・北陸編
- 井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 北海道編
- 井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石写真集

第1図 日本の黒曜石 SiO_2 - Al_2O_3 (総合図)第2図 日本の黒曜石 Fe_2O_3 - TiO_2 図 (総合図)



第3図 日本の黒曜石K₂O-CaO図(総合図)



第4図 日本の黒曜石Rb-Sr図(標準図)

第1表 化学分析表

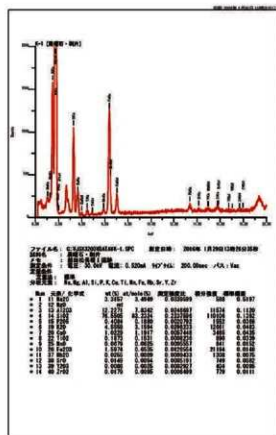
試料名	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO
K-1	3.3157	0.0000	12.2271	76.5505	0.4084	4.5558	1.0229
K-2	3.9681	0.0000	12.8081	75.7271	0.3434	4.8144	0.9552
K-3	3.1227	0.0000	13.1090	76.0808	0.3563	4.9134	1.0189

試料名	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SeO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂
K-1	0.1873	0.0679	1.5974	0.0255	0.0149	0.0089	0.0179
K-2	0.1592	0.1819	0.9711	0.0325	0.0159	0.0037	0.0195
K-3	0.1381	0.1951	0.9982	0.0298	0.0142	0.0080	0.0154

試料名	Total	RbD	SrD	原産地	石器
K-1	98.0804	1308	749	男鹿系	剥片
K-2	98.6163	1792	856	男鹿系	剥片
K-3	98.6011	1579	738	男鹿系	剥片



写真1 K-1



1 黑曜石產地推定



写真2 K-2

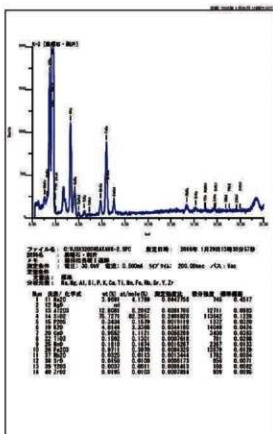
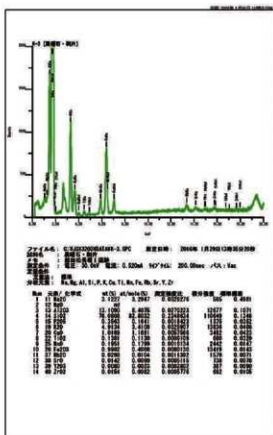


写真3 K-3



2 放射性炭素年代測定

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

越田松長根1遺跡は、岩手県宮古市田老字越田地内（北緯39° 44' 50"、東経141° 58' 30"）に所在する。測定対象試料は、堅穴住居跡から出土した炭化物、木炭、土器付着炭化物（煤）の合計4点である（表1）。住居跡の時期は縄文時代前期前葉（大木1式期前後）で、前期初頭の土器も見られる。土器付着炭化物（炭4）は、大木1式土器の外側から採取された。

(2) 測定の意義

試料が出土した遺構の年代を明らかにするとともに、縄文時代前期前葉大木1式期の実年代を検討する。

(3) 化学処理工程

- i) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- ii) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- iii) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- iv) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- v) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- vi) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(4) 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国立標準局（NIST）から提供されたシェウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

- i) δ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ii) ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代はδ¹³Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年

代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- iii) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少量) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- iv) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

(6) 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料4点のうち炭1、3、4の3点の ^{14}C 年代は、 $5930 \pm 30\text{yrBP}$ (炭4) から $5810 \pm 30\text{yrBP}$ (炭3) の間にまとまる。暦年較正年代 (1σ) は、最も古い炭4が $6790 \sim 6695\text{cal BP}$ の間に2つの範囲、最も新しい炭3が $6665 \sim 6565\text{cal BP}$ の間に2つの範囲で示され、全体として縄文時代前期初頭から前葉頃に相当する (小林編2008)。推定される年代とおおむね整合的な結果である。

炭4は土器の外面付着煤とされるが、土器を使用した調理の際に吹きこぼれたものなど、食物の残渣に由来する炭素を含む可能性もある。海生生物由来の炭素が測定された場合、海洋リザーバー効果によって実際より古い年代値が示される可能性がある。この試料が採取された土器は大木1式とされ、測定結果は大木1式期の年代値としてはやや古いと見られる点で注意を要するが、試料の $\delta^{13}\text{C}$ はC3植物の範囲に位置し、海生生物由来の炭素が含まれることを積極的に示す値ではない (赤澤ほか1993)。

試料炭2の ^{14}C 年代は $890 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は $900 \sim 747\text{cal BP}$ ($1050 \sim 1203\text{cal AD}$) の間に4つの範囲で示される。推定される年代より大幅に新しい結果となった。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- 赤澤 威, 米田 稔, 吉田邦夫 1993 北村縄文人骨の同位体食性分析, 中央自動車道長野県縄文文化財発掘調査報告書11 - 明科町内 - 北村道雄 本文編 (財)長野県縄文文化財センター発掘調査報告書14, 長野県教育委員会, (財)

長野県埋蔵文化財センター, 445-468

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧埋文土器, 総覧埋文土器刊行委員会, アム・プロモーション

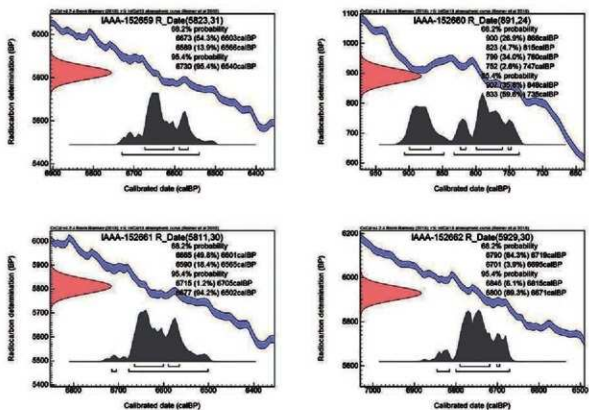
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0.50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(6), 1869-1887Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAA A-152659	炭 1	3号住 埋土中	炭化物	AAA	-25.85 ± 0.29	5,820 ± 30	48.43 ± 0.19
IAA A-152660	炭 2	5号住 床直	木炭	AAA	-25.49 ± 0.24	890 ± 20	89.50 ± 0.27
IAA A-152661	炭 3	10号住 Q2 埋土中位	炭化物	AAA	-25.42 ± 0.24	5,810 ± 30	48.51 ± 0.19
IAA A-152662	炭 4	14号住 Q1 出土土器埋土中	土器外面付着炭	AaA	-24.90 ± 0.31	5,930 ± 30	47.80 ± 0.18

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAA A-152659	5,840 ± 30	48.35 ± 0.19	5,823 ± 31	6673calBP - 6603calBP (54.3%) 6589calBP - 6566calBP (13.9%)	6730calBP - 6540calBP (95.4%)
IAA A-152660	900 ± 20	89.41 ± 0.27	891 ± 24	900calBP - 868calBP (26.9%) 823calBP - 815calBP (4.7%) 799calBP - 760calBP (34.0%) 752calBP - 747calBP (2.6%)	907calBP - 848calBP (35.8%) 833calBP - 735calBP (59.6%)
IAA A-152661	5,820 ± 30	48.47 ± 0.18	5,811 ± 30	6665calBP - 6601calBP (49.8%) 6590calBP - 6565calBP (18.4%)	6715calBP - 6705calBP (1.2%) 6677calBP - 6502calBP (94.2%)
IAA A-152662	5,930 ± 30	47.81 ± 0.18	5,929 ± 30	6790calBP - 6719calBP (64.3%) 6701calBP - 6695calBP (3.9%)	6846calBP - 6815calBP (6.1%) 6800calBP - 6671calBP (89.3%)

2 放射性炭素年代測定



[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

3 テフラ同定分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県宮古市に所在する越田松長根Ⅰ遺跡は、長内川左岸の丘陵と谷が複雑に入り組んだ地形内に分布する狭小な丘陵緩斜面上に位置する。現地調査は、西調査区と東調査区の2区で実施され、縄文時代前期前葉を中心とする集落跡であると考えられている。

谷頭斜面に位置する西調査区では、縄文時代前期前葉（大木1式期）の竪穴住居跡埋没後の堆積物中にテフラ様堆積物が確認され、十和田中振火山灰の可能性のあることが指摘されている。本分析調査では、このテフラ様堆積物を対象とし、テフラの検出同定、火山ガラスの屈折率測定、重鉱物組成および火山ガラス比分析を実施し、堆積物がテフラであることを確認するとともに、テフラである場合には既知のテフラとの対比を行うことにより、堆積物の年代について検討する。

(1) 試料

試料は越田松長根Ⅰ遺跡西調査区の調査区南壁Ⅲ層より採取されたテフラ様堆積物3点である。Ⅲ層は、縄文時代前期前葉（大木1式期）の竪穴住居跡埋没後に堆積した層とされる。3点の試料はほぼ同一の地点で同一の層（Ⅲ層）から採取されており、東から西にサンプル①、サンプル②、サンプル③の番号が付されている。試料の外観は、いずれも浅黄褐色を呈する砂質シルトである。これら3点について、テフラの検出同定、火山ガラス屈折率測定、重鉱物組成および火山ガラス比分析を実施する。

(2) 分析方法

i) テフラの検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

ii) 重鉱物・火山ガラス比分析・屈折率測定

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタンクステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下に250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を

3 テフラ同定分析

求める。火山ガラスは、上述の3タイプに分類した。なお、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉱物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

(3) 結果

i) テフラの検出同定

結果を表1に示す。サンプル①とサンプル②については、処理後の砂分中からは、中量の火山ガラスが検出され、サンプル③からは多量の火山ガラスが検出された。火山ガラスの特徴は3点ともに同様であり、径0.3mm程度、白色を呈し、スポンジ状に細かく発泡している。

砂分の主体は、白色または無色の石英や長石類の鉱物片であるが、黒色や緑色を呈する輝石類の鉱物片も比較的多く含まれる。

ii) 重鉱物・火山ガラス比分析・屈折率測定

結果を表2、図1に示す。3点の試料の重鉱物組成はともに、斜方輝石が最も多く、次いで単斜輝石、不透明鉱物の順に多く含まれる。火山ガラス比はいずれの試料にも多量の軽石型が含まれ、極めて微量のパブル型も混在する。

火山ガラスの屈折率を図2に示す。サンプル①のレンジはn1.511-1.515、モードはn1.512付近であり、サンプル②のレンジはn1.533-1.534の狭い範囲に集中する。サンプル③のレンジは、n1.508-1.515とやや幅が広く、n1.512付近にモードがある。

表1 テフラ分析結果

区名層名	試料番号	スコリア				軽石
		量	量	火山ガラス 色調・形態	量	
西調査区Ⅲ層	サンプル①	-	+++	cl・pm>>cl・fb>cl・bw	-	
西調査区Ⅲ層	サンプル②	-	+++	cl・pm>>cl・fb>cl・bw	-	
西調査区Ⅲ層	サンプル③	-	++++	cl・pm>>cl・fb>cl・bw	-	

凡例 -：含まれない (+)：きわめて微量 +：微量 ++：少量 +++：中量 ++++：多量
cl：無色透明 br：褐色 bw：パブル型 md：中間型 pm：軽石型 fb：繊維束状軽石型

表2 重鉱物・火山灰ガラス比分析結果

試料名		斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	パブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
サンプル①	西調査区Ⅲ層	134	62	0	50	4	250	2	0	118	130	250
サンプル②	西調査区Ⅲ層	154	54	0	41	1	250	0	0	91	159	250
サンプル③	西調査区Ⅲ層	139	68	0	39	4	250	1	0	96	153	250

(4) 考 察

テフラの検出同定により確認された試料中の砂分を構成する碎屑物は、中量から多量の火山ガラス含む。添付資料による土層断面の状況も考慮すれば、採取された試料は、火山ガラスを主体とする細粒の火山灰が降下堆積した後、土壌化の過程において若干の攪乱を受けた堆積物であると判断される。

上述した火山ガラスの形態と屈折率(町田・新井,2003)および輝石を主体とする重鉱物組成、さらには越田松長根 I 遺跡の地理的位置や縄文時代前期前葉の住居跡埋積土よりも上位という層位と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか(1984), Arai et al. (1986), 町田・新井 (2003) など)の比較から、採取された堆積物は、十和田中報テフラ(To-Cu;早川,1983;Hayakawa,1985)の降下堆積物であると考えられる。

To-Cuの噴出年代は、暦年で6,200年前とされている(工藤・佐々木,2007)。したがって、基本層序のⅢ層は、その前後の年代を示す層位と考えてよく、現地調査所見による年代観とも矛盾しない。

引用文献

- Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyachi,T.・Soda,T.・Yamagata,K.1986.Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II -Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido-, Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21.223-250.
- 古澤 明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの鑑別.地質学雑誌,101,123-133.
- 早川由紀夫,1983,十和田火山中報テフラ層の分布、粒度組成、年代.火山第2集,28,263-273.
- Hayakawa,Y.,1985,Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Research Institute University of Tokyo,vol.60 507-592.
- 工藤 崇・佐々木寿,2007,十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年.地学雑誌,116,653-663.
- 町田 洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦,1984,テフラと日本考古学-考古学研究と関連するテフラのカタログ-.渡辺直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学,同朋舎,865-928.

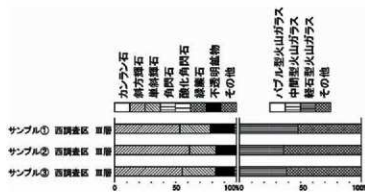


図1 重鉱物組成および火山ガラス比

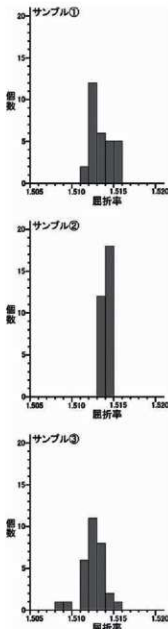


図2 火山ガラスの屈折率測定結果

図版1 砂分の状況・重鉱物・火山ガラス



1.砂分の状況(TRKNI-150730西調査区境土層断面Ⅲ層;テフラサンプル①)



2.砂分の状況(TRKNI-150730西調査区境土層断面Ⅲ層;テフラサンプル③)



3.重鉱物(TRKNI-150730西調査区境土層断面Ⅲ層;テフラサンプル①)



4.火山ガラス(TRKNI-150730西調査区境土層断面Ⅲ層;テフラサンプル①)

0.5mm 0.5mm
1.2 3.4

4 漆分析

(株) 古環境研究所

はじめに

越田松長根1遺跡は、岩手県宮古市田老字越田に所在する。三陸鉄道北リアス線田老駅の北北東約2km、真崎海岸から東に約2kmに位置する。西調査区では縄文時代前期前葉を中心とした集落、東調査区では縄文時代中期後半～後期前半の捨て場および平安時代の集落が調査された。東調査区の縄文時代中期後半～後期前半の捨て場から、漆と思われる黒色物が内面に付着した土器が出土した。ここでは、この黒色物の材質を調べるために、赤外分光分析を行った。

(1) 試料と方法

試料は、東調査区の捨て場から出土した土器内面付着物1点である(第1表)。

第1表 土器内面黒色付着物とその詳細

分析No.	出土地点	試料	遺物No.	土器の時期	層位	黒色物の特徴
1	東調査区捨て場南部	土器内面付着物	799	中期末葉(大木10式の新段階)	IIa層	黒色光沢物

塗膜の表面から手術用メスを用いて試料を薄く削り取った後、押しつぶして、厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光(株)製FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

(2) 結果および考察

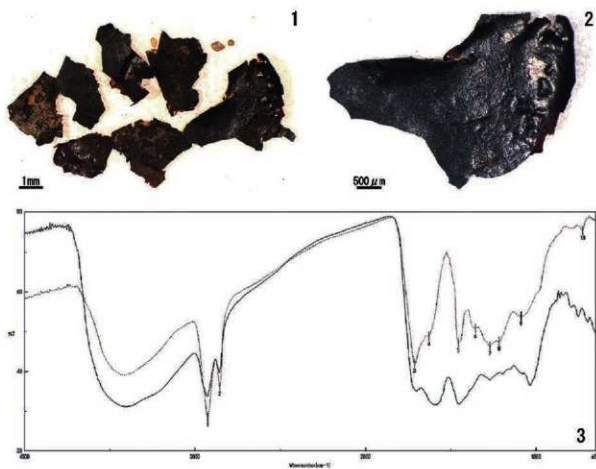
第2表 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

赤外分光法は、物質に赤外光を照射し、透過した光を測定することで、試料の構造解析や定量を行う分析手法である。図版1-3に、赤外吸収スペクトル図を示す。赤外吸収スペクトル図の縦軸は透過率(%T)、横軸は波数(Wavenumber (cm⁻¹);カイザー)を示す。また、スペクトル図はノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は主な生漆の赤外吸収位置(表2)を示す。なお、ここで比較試料とした生漆は、漆塗用として市販されているものを使用した。

分析No1の付着物は、薄膜の光沢のある黒色を呈し、表面は平滑である(図版1-1,2)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収の一部(吸収No7)が認められた。生漆に見られるCH基に由来する2925.48 (cm⁻¹)、2854.13 (cm⁻¹)の吸収などが同様に見られる(図版1-3)。

以上、赤外分光分析の結果から、この黒色物は漆に同定される。



図版1 黒色付着物片と赤外吸収スペクトル図

1. 黒色付着物片 2. 黒色付着物片の実体顕微鏡写真
3. 黒色付着物の赤外吸収スペクトル図
(縦軸：透過率 (%T)、横軸：波数 (Wavenumber (cm⁻¹))、数字：生漆 (点線) の赤外吸収位置)

Ⅶ 総 括

今回の調査成果としては、縄文前期初頭～前葉の遺構・遺物を中心に、縄文時代早期～後期初頭、弥生時代や奈良時代の遺物が出土した。ここでは、遺構と遺物を分けて総括を行う。

1 遺 構

今回の越田松長根Ⅰ遺跡の調査は、西調査区で4,025㎡、東調査区で805㎡を調査した。その結果、西調査区では縄文時代の竪穴住居跡24棟、陥し穴2基、土坑6基、焼土13基が発見された。遺物を精査した結果、竪穴住居跡・土坑は縄文時代前期初頭～前葉、陥し穴は縄文時代中期～後期に属すると推定される。焼土は、詳細な年代がわかる遺物は出土しなかったが、概ね住居跡と並行する時期のものとみて大過はないであろう。

東調査区では、竪穴住居跡6棟、土坑4基、柱穴列2条、柱穴群1カ所、集石遺構1基、捨て場1カ所が発見された。竪穴住居跡は形態からみて古代に属するもの(31・33・37・39号住)と、縄文時代前期のもの(38号住)があり、1棟は所属時期が不明であった(36号住)。柱穴列と柱穴群からは時期が決定できる遺物は出土しなかったが、周辺の調査成果から、古代に属するものと考えられた。捨て場は、縄文時代中期～弥生時代の遺物が出土したが、出土土器の主体性から縄文時代中期末葉～縄文時代後期初頭にかけて形成されたもので、豊富な土器資料を得ることができた。以下、各時代の主要な遺構について、いくつかの問題点・特徴をあげてまとめたい。

(1) 縄文時代前期初頭～前葉の住居跡の様相

西調査区では24棟の竪穴住居跡が発見されたが、その時期は出土土器の検討から縄文時代前期初頭(上川名2式期)から前葉の早い段階(大木1式期)に限られることがわかった。大木式土器文化圏では、次の段階である前期前葉大木2式期には大形住居が完成、増加することが知られている(須原拓2007)。縄文時代前・中期の大形住居は東日本の縄文文化を代表する遺構であり、建築学史上重要であるのみならず、その機能や集落構造についての議論も盛んである(渡辺誠1975、菅谷通保1987、武藤康弘1997など)。今回発見の住居群は大形住居登場の直前段階に位置付けることができ、前・後の段階の住居との承襲関係を検討することによって、大形住居出現の過程を解明できる可能性があると考えられる。そうした視点に立ち、本調査で発見された住居群の様相を整理する意味で、以下のように住居の分類を行った(第96図)。

A類型：竪穴は正方形で、中央部に一本柱を立てる。なお、この類型には一辺が3.5～4m程度のものと2m程度のものがあり、前者をA類型大(10・13号住)、後者をA類型小(28号住)とする。

B類型：竪穴は長方形で、中央部に一本柱を立てる(3・4号住)。

なお、A類型大・小とB類型には、他遺跡の例で竪穴中央の柱を欠くものがあり、これをA'類型大・小、B'類型とする。ただし、小規模な建物であり、中央柱の有無は構造的にさほど大きな差とはならないと思われる。今回の調査例では中央柱の有無が確定できないものもあり、8・15号住はA'類型大、9・17・22号住はA'類型小、5・16号住はB'類型に相当する可能性もある。

C類型：竪穴は長方形を基本とし、正方形のものもある。長手方向の中央に棟持柱をもつ。棟持柱の本数によってC1・C2類型に細分が可能で、3本のをC1類型(1号住a・b、14号住a、

19号住 a)・4本のをC2類型(24号住 a・b、14号住 b、19号住 b)とする。

D類型:堅穴は長楕円形で、周壁沿いに小規模な柱穴(壁柱穴)をもつ。21・27号住が該当し、7・18号住もこれに当る可能性がある。

E類型:堅穴は長方形で、長辺の両周壁沿いの対向する位置に欄柱が並ぶ。2号住がこれに当る可能性があるが、遺存状況が悪く、かつ、長軸を地形の傾斜方向に向けていることは不自然で、その存在を推定するにとどめる。

次に注目したいのは増築の問題である。C類型の1・14・19・24号住では建替えが行われ、建替えはすべて住居を拡大する方向で行われていた。具体的には、堅穴の短辺方向の幅はそのままに、長辺方向に堅穴を拡張して床面積を増した(第97図、第19表)。

住居の床面積を拡大しようとする方向性は、今回調査の他の類型も含めて、形式学的に一連の方向性として認めることが可能と思われる。つまり、A・B類型は建物の構造としては同じで、堅穴を長方形に拡大したものがB類型と捉えることができる。さらに、B類型の4号住とC1類型の1号住 aの堅穴はほぼ同規模であるが、1号 aでは棟持柱が付加され、建物の構造が変わっている。この構造の変化の原因は次のように考えることができる。一本柱を中心に垂木を放射状に配するB類型は、堅穴を拡大することで垂木も長大化し、さらに、一本柱で全垂木を支えることから構造上の限界を迎えて、これ以上の拡大ができなくなった。この限界を解決するために、長手方向に棟木を加えて垂木を平行に配してその重量を分散し、同時に長大な垂木を不要にするという改良が加えられたものであろう。こうして垂木長の制約が解除され、さらに棟木を2本、3本と延長し、堅穴を同方向に拡張することによって床面積の増大が図られたのである(C1・C2類型;以下越田A・B…類型と表記)。

は同時期の宮古市千鶴遺跡の住居群にも同様な様相を見出すことができる(宮古市教育委員会:1989)。つまり、正方形ないし長方形の堅穴で中央に一本柱をもつ越田A(A')・B類型の住居(千鶴遺跡第6・7・21・22・33号堅穴住居)に混じって、長方形の堅穴に棟持柱をもつ越田C類型住居がみとめられる(千鶴遺跡第1・5・26・29・31号堅穴住居)。ただし、千鶴遺跡での越田C類型は、概して小型ということと、両端の棟持柱が裏に位置せず堅穴の内側に取まるという特徴がある。さらに、千鶴遺跡で特徴的なのは、長楕円形で主柱穴をもたない住居が目立つことである(千鶴遺跡第14・16・18号堅穴住居)。これらは構造的には越田D類型の範疇で捉えられるが、千鶴遺跡では長軸の長さが8mを超えるものが含まれる(千鶴遺跡第14号堅穴住居)。

越田松長根I遺跡と千鶴遺跡の資料によって、岩手県沿岸部における縄文時代前期初頭～前葉頃の堅穴住居の様相は、次のように評価できるのではないだろうか。

まず、堅穴の拡張によって床面積を増加させる方法がとられる(越田B類型の登場)。しかし、中心一本柱への過荷重や垂木長の制約によって、この方法による拡張は限界を迎える。この問題は棟木の付加によって解消され、棟木の両側に、並列して垂木を懸架することによって荷重を分散し、長大な垂木も不要となった(越田C類型の登場)。越田C類型の建物は、必要があれば棟木を継ぎ足し、長手方向にはいくらかでも拡張が可能だったとみてよいであろう(越田C1→C2類型)。ただし、横方向への拡張は再び垂木長の制約を受けることとなり、この段階ではまだ達成されなかったとみられる。越田D類型は垂木を直接、合掌式に組んでいく構造で、強度に問題はあるものの、構造材の制約をさほど受けなかったとみられ、一部に長大化する傾向がみられる(千鶴遺跡)。

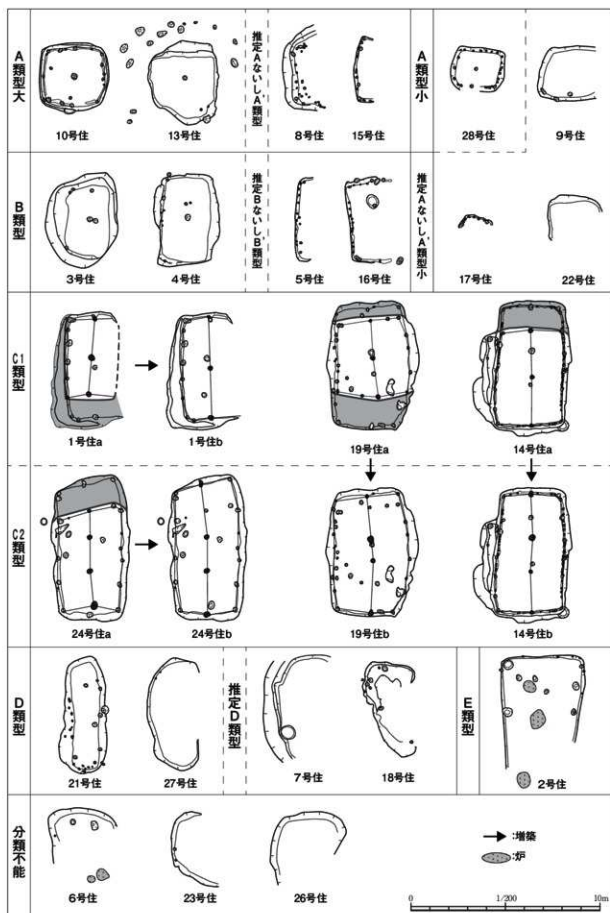
上述した、縄文時代前期前葉でも早い段階に属する住居群の様相についての評価が認められるとすれば、後続する前期前葉段階の住居との系譜関係が問題となる。山田町沢田I遺跡(岩手県埋文センター:2000)をその代表として住居の様相を検討してみたい。沢田I遺跡で発見された堅穴住居群に

も越田の類型分類があてはまるものが多い(第98図)。越田A・A'類型大(1次調査:RE02、4次調査:RA180・182など)、越田A・A'類型小(1次調査:RA102・105、4次調査:RA173など)、越田B類型(4次調査:RA217・183など)といった比較的小型な住居は越田松長根I遺跡とはほぼ同規模なものが一定の割合をもって存在する。棟持柱をもつ越田C類型は1次調査RA101-1(千鶴タイプ)・4次調査RA181-2(越田C1類型)で認められ、4次調査RA184も同じ類型であると思われるが、数的には越田松長根I遺跡に比べて減っている感がある。最大の変化は大形住居の出現で、3次調査RA116、4次調査RA201・202・211・216などが代表的なものである。これら大形住居の構造は大きく3つに分類が可能で、長方形堅穴に棟持柱をもつRA211、おそらく長方形の堅穴で主柱穴をもたず、多数の小さな壁柱穴をもつRA216、長方形の堅穴で両側の長辺沿いに側柱が対向して並ぶRA116・201・202に分類が可能である。

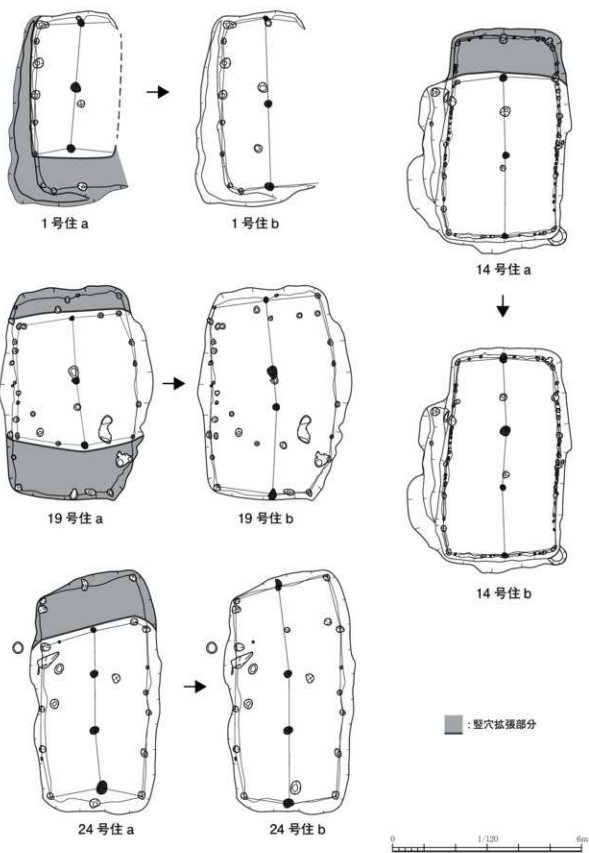
これらのうち、棟持柱をもつRA211は棟木を5本以上継いで延長し、長手方向に拡張したもので、越田松長根I遺跡の越田C類型との系譜関係の中で理解することができる。壁柱穴を多数もつRA216は長軸方向とともに短軸方向にも拡大しているが、構造材の制約をうけにくい越田D類型の範疇で理解することができる。越田C類の堅穴の長さが7m前後に対してRA211は10m以上、越田D類の6m前後に対してRA216は約15mであるから、型式学的にヒアタスがあるものの、構造原理で共通することからそれぞれの系譜関係を考えたい。沢田I遺跡で長軸長が7mほどの住居が少ないことも各類型の中で大形化が達成され、大・小の2極化がおきた傍証となろう。一方、側柱2列のRA116・201・202は越田松長根I遺跡で想定した越田E類型の確実な例で、いまのところこの段階で出現したものと見た方がよいであろう。長さは20mにも達することに加えて、越田B・C類型では4m前後だった幅が5mを超え、短軸方向にも拡大が行われている。短軸方向への拡大は、対向する側柱上に梁を架け、梁端を外方に突き出した上に桁材を渡し、そこに垂木を受ける構造をとったことによって可能になったものであろう。この段階で、所謂「置折」組とされるこの技法が採用され、越田C類型における棟木の付加に次いで、建築技術に大きな画期があったのではないだろうか。また、RA116には4回ほどの建替えが考えられているが、中軸上に2〜3基の柱穴がみられ、ある段階で棟持柱があった可能性がある。側柱2列の越田E類型と棟木をもつC類型は、建物がより大形化していく過程で混雑された可能性を考えておく必要があろう。

以上、縄文時代前期初頭から前葉にかけて、住居群の様相の変化を素描した。越田A類型から越田B類型へと堅穴が拡張され、棟木の付加によって越田C類型が出現した。さらに、越田C類型が長手方向に延長して大形建物が成立すると考えられた。越田D類型も同様に長大化したものであろう。前期前葉に至り、大形建物は長軸方向とともに短軸方向にも拡大するようになるが、その背景には「置折」組技法の採用があったことが考えられた。この段階で長大化は極度に達し、その構造・規格が完成されたものとみられる。つまり、大形住居は前期前葉に突如出現したのではなく、前期初頭からの進化論的な発展を経て成立したものと考えられるのである。また、A・B類型は大形住居の祖形ではあったが、それに淘汰されることはなく、大きな変化をみせずに継続して用いられた。このことは、予定される住人の人数や用途に応じて住居の大きさや構造(建て方)が選択されたことを示しているのである。

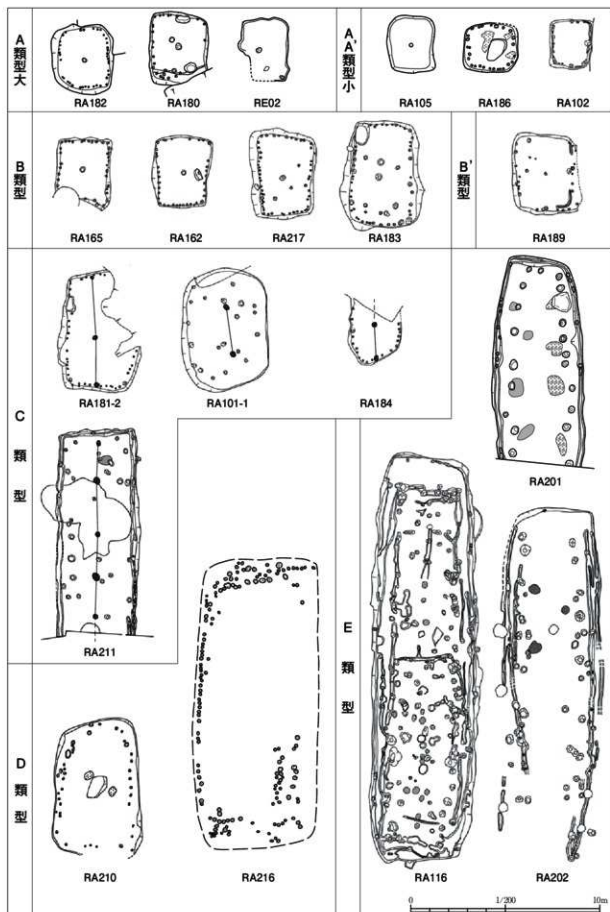
ここまで述べたことは、より詳しい資料を提示し、建築構造の復元を行いながら論じるべきものであったが、ここでは紙幅の関係から十分に行うことができなかった。別稿での再論を期したい。



第96図 越田松長根 I 遺跡の住居類型 (前期初頭～前葉)



第97図 住居の建替え状況



第98図 沢田I遺跡の住居類型（前期前葉）

第18表 越田松根Ⅰ遺跡の縄文時代前期初頭～前葉の竪穴住居跡一覧

類型	遺構名	柱穴	竪穴 平面形	床面短軸 (m)	床面長軸 (m)	床面積 (㎡)	平均面積 (㎡)
A類型大	10号住	中央1本	正方形	3.1	3.2	9.92	909
	13号住	*	*	2.5	3.3	8.25	
(AorA' 類型大)	8号住	不明	正方形?	(1.1)	(3.5)	△3.85	-
	15号住	*	*	(0.8)	3.1	△2.48	-
A類型小	28号住	中央1本	正方形	1.8	2.3	4.14	414
(AorA' 類型小)	9号住	不明	正方形?	2.5	(2.6)	△6.5	-
	17号住	*	*	(0.8)	(1.4)	△1.12	-
	22号住	*	*	(1.8)	(2.6)	△4.68	-
B類型	3号住	中央1本	長方形	2.2	3.7	8.14	992
	4号住	*	*	2.6	4.5	11.7	
(BorB' 類型)	5号住	不明	長方形	(0.8)	(5.2)	△4.16	-
	16号住	*	*	(1.5)	(4.3)	△6.45	-
C1類型	1号住 a	棟持柱3本	長方形	(2.8)	4.3	△12.04	-
	1号住 b	*	*	(2.8)	5.3	△14.84	-
	19号住 a	*	正方形	3.8	4.3	16.34	16.92
	14号住 a	*	長方形	3.3	5.3	17.49	
C2類型	24号住 a	棟持柱4本	長方形	3.2	5.5	17.6	21.01
	24号住 b	*	*	3.2	6.9	22.08	
	19号住 b	*	*	3.8	6.2	23.56	
	14号住 b	*	*	3.3	6.3	20.79	
D類型	21号住	壁柱穴のみ	長楕円形	1.3	5.5	7.15	14.27
	27号住	*	*	3.1	6.9	21.39	
(D類型)	7号住	不明	長楕円形?	(3.1)	(5.1)	△15.81	-
	18号住	*	*	(2.2)	(4.3)	△9.46	-
E類型?	2号住	壁柱穴2列?	長方形?	3.9	(5.7)	△22.23	-
分類不能	6号住	不明	不整形	(1.1)	(2.9)	△3.19	-
	23号住	*	*	(2.7)	(3.3)	△8.91	-
	26号住	*	*	(2.9)	(3.1)	△8.99	-

()内は推定

()内は現存値

△:以上

(2) 縄文時代捨て場が所属する集落について

東調査区の所謂捨て場では、縄文時代中期から弥生時代までの遺物が出土した。出土遺物からみたその中心時期は、縄文時代中期末葉から同後期初頭までであった。この捨て場が属する集落がどこに求められるかが問題となるが、当該時期に属する住居跡などの集落遺構は今回の調査地では見つかっていない。また、同じ平成28年度に東隣で実施された宮古市教育委員会の調査で発見された縄文時代の集落跡は、時間的に若干異なる様子にある。このように、現状では捨て場が所属する集落遺構は発見されていない。そこで、捨て場に投棄された土砂の堆積状況に着目すると、各単層は捨て場を中心として北東から北方向に向かって下降して堆積していた。このことは、土砂が捨て場の南から、北東～北方向に向かって投棄されたことを示している。想定される土砂の供給元は、東調査区南側の民家の辺りに該当し、地形的には調査区から約6m高い丘陵頂部に当る。この場所で、民家の敷地を造成した際の切土断面を観察すると、フラスコ型貯蔵穴とみられる遺構断面が複数箇所で見出されていた。

住居跡らしい断面は認められなかったが、この辺りに捨て場を残した集落が存在した可能性が考えられるのである。

(3) 古代の集落について

東調査区では古代に属する竪穴住居跡4棟(31・33・37・39号住)と柱穴列2条(1・2号柱穴列)が発見された。柱穴列は櫛の一部で、同時には存在せず、建替えられたものであろう。北西-南東方向へ延び、東側は東方向へ屈曲してさらに続く可能性が考えられた。各遺構から出土した遺物は少なく、所属時期の判定は難しいが、33号住から出土した土師器は古代のものであった。宮古市教育委員会調査地では平安時代の竪穴住居跡が複数見つかっており、本調査地の建物跡も含めて同時期のものである可能性が考えられる。地形との関係でこれらの建物群を捉えると、本調査地の南側は既述のように丘陵頂部になっており、その尾根筋は西北西-東南東方向へ延びる。宮古市調査区の竪穴住居群はこの尾根筋上に散在する立地であった。東調査区の北側は、北西へ延びる谷に面した、北東に下がる斜面で、2条の柱穴列はこの斜面の等高線に平行して築かれた区画施設であったとみられる。これによって区画される集落は、当然この南側(丘陵尾根筋側)に展開し、東調査区を経て宮古市調査区側へと続くものである。このように、尾根筋上に住居が展開し、谷に面した縁辺部を木柵で画した一連の古代集落の光景が復元できるのである。

2 遺物

今回の調査では、土器大コンテナ43箱分(550,635g)、土製品小コンテナ1箱分(39点)、石器大コンテナ16箱分(剥片石器が249点、礫石器が1,822点)、石製品大コンテナ2箱分(28点)、チップ・プレート小コンテナ1箱分(2,592g)が出土した。土器の中心時期は、縄文前期初頭～前葉及び中期末葉～後期初頭である。

(1) 土器

出土土器について、時期毎に特記事項をまとめてみる。

縄文早期 縄文早期前葉日計式(日計式後半か)と推定される破片が1点出土した(N634)。出土遺構や層位的観点からは、異時期の流れ込みと判断される。本地域の事例などは検索を行えなかったが、希少資料と捉えられる。代表的な類型としては盛岡市大新町遺跡(※本県では大新町Ⅰa式・Ⅰb式に区分されるが、本遺跡出土はⅠa式に相当しようか)や三沢市根井沼貝塚などが挙げられる。

縄文前期 縄文前期初頭～前葉は、今回の調査で中心となる土器である。上川名2式や組縄縄文を巡っては、未だ不透明感があることは否めないが、出土した当該期土器の特徴などを整理することで、前期初頭を上川名2式相当に、組縄縄文などは大木1式相当と捉え前期前葉として記述することで稿を進める(それらを巡る土器型式上の問題点・課題点と考えられる内容は、その都度記載する)。

① 縄文前期初頭の土器としては、口縁部に縄文原体による押圧縄文(原体の側面圧痕※早蕨状のルーブ文、渦巻文、平行条線など)や短沈線(刻み列)などの属性を持つ土器群に代表され、従来の土器型式編年に準拠すれば関東地方の花積下層式に並行し、東北地方南部では上川名2式として周知されているものに比定・相当する(註1)。県内の類型としては、住田町小松Ⅰ遺跡(岩手埋文:2004)、宮古市千鶴Ⅳ遺跡(宮古市教委:1989)出土土器に求めらる。また、0段多条の原体による非結束羽状縄文が整然と横方向に施文される(帯状に施文される)などの特徴は上川名2式以外に、東北地方

北部の前期初頭の指標とされている長七谷地Ⅲ群にも共通する属性と捉えられる（広域に分布する属性と捉えられる）。長七谷地Ⅲ群は、口縁部に糸が横走（0段多条の縄文原体による斜回転）や横位に縄の末端を用いた刺突列がめぐり、胴部地文は非結束羽状縄文が横帯する土器に代表されると思われる。上川名2式と同様に口縁部文様帯の形成を意識し胴部の文様帯と区分していると思えるものと、口縁部～胴部まで同一の地文のみで構成されるものがある。長七谷地Ⅲ群の器形は、口縁部形状が平縁主体で、底部形態は丸底中心と捉えられる。本遺跡のⅡ群土器をみると、縄文原体の斜回転による糸の横走はⅡ群3類c種としたが、出土数は非常に少ない（3点の内、0段多条の原体を用いているものは№316の1点だけである）。また、0段多条の縄文原体の押圧（側面圧痕）により、横に平行した糸線が複数施文されるものが№126の1点認められるもの、0段多条の縄文原体を用いた斜回転により「糸が横走」するものは希少性が高いことを指摘できる。さらには、口縁部に刺突列が巡るものが№138の1点認められるが、土器の厚さや胎土の様相からは後時期（前期前葉）と推定され、尚且つ長七谷地Ⅲ群に顕著な縄の末端を用いた（細長くやや大き目の）刺突列（刺突列）とは異様相にある。本遺跡資料の前期初頭は、全般に長七谷地Ⅲ群の影響が弱い土器群である可能性で提示しておきたい。

② 縄文前期前葉の土器については、斜行縄文（※原体は横回転が主体）、組縄縄文（いわゆるピッチリ縄文）や、非結束羽状縄文、縄文原体の環付き末端ループ、縄文原体を異方向に回転し重層させるなどの手法が特徴的に認められる。これらの属性は、本地域（本県沿岸北部地域）の大木1式の特徴の一つと考えたい。上記した属性の中では、組縄縄文を施文する土器が多く、環付き末端ループや重層施文の土器は少ない。また、組縄縄文を施文する土器には、同一個体においてセット関係で口唇部への刺突列を持つ属性が認められるものが多い。滝沢市（旧滝沢村）耳取遺跡や同市弘沢Ⅲ遺跡資料に代表される県内の組縄縄文を施文する事例には顕著な属性であり、内陸部と沿岸部の地域差に関わらず、共通した特徴と考えられよう。さらには、長七谷地Ⅲ群や表館式には口唇部に刺突を伴うものが存在するが、上川名2式に存在する属性かどうかは定かではなく（明確に存在する属性とは断定できない）、あるいはより東北地方北部の影響を受ける属性の可能性もあり検討が必要である。また、上川名2式相当の土器と比較して、組縄縄文を施文する土器の器厚は全般に薄く（※薄い器厚の土器が多い）、尚且つ縄文原体の節などの観察所見としても、両者が同一時期に制作されたとは考え難い。つまりは、従来の土器編年通り、この両者には時期差が存在すると考えたいが、後述する遺構単位で出土土器を見る限り両者が共伴気味に出土した遺構もある。当該時期の土器は、本地域の良好資料の一つである宮古市千鶴遺跡出土土器を標識とする千鶴1式や千鶴2式と呼ばれてきた土器群（宮古市教委：1989）に包括され、さらには崎山貝塚Ⅰ群土器（宮古市教委：1995）にも並行すると考えられる。しかしながら、本県における前期初頭～前葉を巡る土器様相は、属性を検討する纏まりのある資料は未だ少ない。また、前期初頭上川名2式から前期前葉大木1式へダイレクトに推移するとは考え難いものの、関東地方で花積下層式と関山Ⅰ式の間を担うニツ木式などのような、橋渡的な位置を担う土器（土器型式）の存在は明確ではない（註2）。本地域の当該期土器の編年研究は、層位的資料の希少も相まって進展が見取れない現状と考えられるが、今回の観察・分析からも、それらは見いだせなかった。

③ 次に、遺構単位で上川名2式と大木1式と捉えた土器の出土状況を概観してみた結果、以下a～dの4つのグループが想定された。

a グループ・・・出土土器の中心が前期初頭（上川名2式）の遺構→8号住、1号土坑

b グループ・・・出土土器の中心が前期前葉（大木1式）と推定されるが前期初頭も一定量認められ

る遺構（大木1式主体に上川名2式が客体）→6・7・9・13・18・19号住

cグループ・・・出土土器の中心は前期前葉で、前期初頭を僅かに含む遺構（大木1式主体に上川名2式が極客体）→2・4・21・24・26号住

dグループ・・・出土土器が前期前葉と推定され、高且つ前期初頭が含まないと判断された遺構（大木1式）→1・3・10・14・17・28号住、2・3・4号土坑。

従来の土器型式観に準拠すると、前期初頭上川名2式期の可能性のある遺構は少なく、前期前葉大木1式期を中心とする。ただ、bグループやcグループとした前期前葉を中心に前期初頭の土器が含まれる遺構は、本来的には両者土器の伴関係なのか、あるいは前期前葉の遺構埋土に前期初頭が混在した（流れ込んだ）ものなのか、調査判断が難しい。堅穴の遺存状態が良いものや（ある程度深さがあり攪乱をほとんど受けていないもの）、遺構同士の重複がほとんどないものの中で、その出土土器に一括性や同時性のある程度信頼できそうなものとして、1・10・14・17・19・24・28号住が抽出される。それらのほとんどはdグループとした堅穴住居跡であるが、その中でbグループの19号住とcグループの24号住は重要資料の可能性も窺える。今回は詳細な検討は行っていない。

④ 第18表に示した堅穴住居跡の類型と土器の出土状況のグループを、比較検討し何らかの傾向を導かないものか模索してみる。本遺跡の堅穴住居跡A～C類型は全般にdグループが散見されることで、それらの中で微妙な時期差を想定することは難しい。例えば、A類型大とA類型小の関係をみると、出土土器の観点からは堅穴の規模が違っても、土器型的には同時期にグループ分けされる。ただ、その中にあって13号住と9号住はbグループと、やや古い段階の可能性が示唆される。また、堅穴同士の重複する3号住と4号住の関係をみると、B類型の中でのcグループからdグループへの変遷が想定できようか（4号住→3号住）。C1類型からC2類型へと変化する14号住（14号住a→14号住b）や19号住（19号住a→19号住b）をみると、bグループの時期に堅穴住居跡が拡張傾向を示すことが窺えようか（集落の人口増加などが起因として考えられようか）。つまり、土器の観点からは、bグループの時期に堅穴住居の構造に変化が萌芽するものと考えられようか。なお、本遺跡にはE類型とした大形住居が認められない。これについては、大木1式段階ではC類型の規格に沿う規模までで、その後の大木2式期の段階でC類型が拡大したものがE類型、すなわち沢田I遺跡RA116やRA202に代表される大形住居に繋がると仮説を提示しておきたい。

さて、上述してきた前期初頭と前期前葉の土器は、V章において上川名2式相当、大木1式相当と分けてⅡ群土器として総括し、地文の種類や施文手法などの違いで1類～10類に分類を試行したが、当該期土器の課題などの抽出を目的に、分類の所見や見解を4節で後述してみたい。

縄文中期後葉～末葉・後期初頭 大木9式・10式及び上村・葦窪式などの資料を得られた。出土地は、東調査区捨て場から纏まって出土し、分層を志向して取り上げた。出土状況としては、大木9式が非常に少なく、ほぼ大木10式～葦窪式の時期幅に集約される包含層と云えよう。また、後期初頭の土器は、門前式に類似する属性も認められることから、本地域は北と南の両方の影響を受けた土器が分布することが予察される。土器型式と出土層位の関係について、大木10式は古段階～新段階まで認められるが、それらは層位の新旧関係も持って出土していない。また、後期土器とも層位的な違いを取ることができない（大木10式と葦窪式が一緒に出土している）。つまり、土器型的には編年に準拠した出土状況にはない。この状況を鑑みて、本稿では当該期土器をⅢ群として一括し、土器型式が把握できるものについて、大木9式をⅢ群1類、大木10式をⅢ群2類、葦窪式（相当）をⅢ群3類とし、中期末葉と後期初頭の区分が明確でないものをⅢ群4類と、それぞれ分類するに留める。

その他（弥生・奈良） 弥生土器はⅣ群、古代の土師器をⅤ群とした。弥生は中期が2点、土師器は

奈良時代と推定される
が3点出土した。

小結 今回の調査では、
縄文早期前葉～後期初
頭、弥生中期、古代（奈
良）と、長期に亘る土器
が出土した。主体となる
縄文前期初頭～前葉及
び中期末葉～後期初頭
は、地文のみなど特徴的
な文様を持たないもの

が多い。縄文前期初頭の上川名2式や縄文中期の大木9式や大木10式以外は、広域の土器型式への準拠が難しい様相にある。これら土器の厚さ（以後「器厚」と呼ぶ）の計測をまとめたのが、第19表である。Ⅱ群とした縄文前期の傾向は、上記の表からは導きが多く、あらかじめ分類毎の計測値を4の考察で明示することとする。Ⅲ群は、最大値の平均を見る限り6mm強に纏まりがある。また、分析点数は少ないが、Ⅲ群1類とした大木9式が、最大平均値がやや薄手で、尚且つ厚差が少ない均一の厚さを示すことは、興味深い。縄文早期・弥生中期・古代（奈良）は、分析点数が少ないため、ここでは多くを言及できる状況にはない。

（2）石器類

今回の調査成果から、石器の出土数、組成、石材などの傾向についてまとめてみる。その上で、西調査区と東調査区の出土状況の比較から、縄文前期初頭～前葉と縄文中期末葉～後期初頭の共通点や相違点の抽出を試みたい。

遺跡全体では、礫石器が圧倒的に多く、尚且つ石製品は非常に少ないことが分かった。

石器組成としては、剥片石器がスクレイパー、石鏃、石匙の順に多く、礫石器は円礫、磨石、敲石、礫器、磨製石斧、特殊磨石、敲磨器の順に多い。

石材の傾向は、剥片石器は圧倒的に頁岩が多く、礫石器は砂岩や花崗閃緑岩を中心に13種類以上に及ぶ石材が用いられている（※今回は全ての石器の石質鑑定を行っていない。さらに多くの石材種類があることは想像に難くない）。石材の産地や時代は、北上山地中生代や、原地山層中生代白亜紀と鑑定されたものが多い。

さて、今回の調査地は、西調査区が縄文前期初頭～前葉、東調査区が縄文中期末葉～後期初頭には限定できることから、時期の違いが石器組成に反映しているものかどうかを探るには良好な資料と考えられる。上述のとおり、共通点、相違点の抽出に視点を置き、以下にまとめてみる。

①西調査区と東調査区の共通点としては、共に石鏃、スクレイパー、磨石が多い。加えて、磨製石斧、特殊磨石、敲磨器、敲石なども一定量の出土をみる（両調査区はほぼ同様の割合にある）。これらの石器は、時期の変化・違いに関わらず、需要度が高かったと捉えられよう。それらの中で特殊磨石は、本遺跡から北に約5kmに位置する乙部遺跡（※平成27年度岩手県教委調査。※現時点では報告書未発刊）において多量に出土している。この遺跡では、縄文前期前葉の遺構や土器（大木2a式主体）に伴う。用いられている石材は非常にバラエティーに富むことから、対象作業に適した大きさの礫であれば石材の種類を問わないと考えられよう。

第19表 土器表

時期・分類	最大 (mm)	最少 (mm)	最大平均 (mm)	最小平均 (mm)	厚差平均 (mm)	分析点数
早期前葉(1群)	7.5	7.0	7.5	7.0	0.5	1
前期(Ⅱ群)	17.5	4.0	9.4	7.6	1.8	237
中期後葉～後期初頭(Ⅲ群)	9.0	3.5	6.3	5.2	1.1	82
大木9(Ⅲ群1類)	6.0	6.0	6.0	6.0	0.0	2
大木10(Ⅲ群2類)	8.5	3.5	6.3	5.1	1.2	25
後期初頭前葉(Ⅲ群3類)	9.0	4.0	6.2	5.1	1.1	37
中期末葉～後期初頭(Ⅲ群4類)	9.0	3.5	6.4	5.5		5
弥生(Ⅳ群)	10.0	5.0	8.5	6.5	2.0	2
古代(Ⅴ群)	6.0	3.5	5.2	3.5	1.7	3

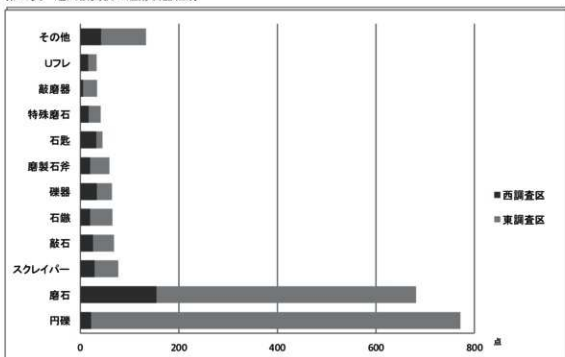
次に、逆に両調査区に共通して少ないか若しくは認め難い器種に、凹石、砥石、打製石斧などがある。加えて、石製品についても器種に関わらず全体的に少ない。

②全体の出土数の割合として西調査区に多い器種は、石匙、礫器（不定形な礫石器）が挙げられる。石匙は、縦型・横型・斜型（握みを上にした場合、主要な刃部の向きで判断）に大別すると、斜型の石匙は西調査区にほぼ限定して認められる。このことから、縄文前期の産物である可能性が高い。縦型の石匙と横型の石匙については、数量の観点から今回の調査で時期の出現性を言及できない。ただ、刃部加工（片刃と両刃）の傾向や様相の観点からは、考察の余地がある。今後の課題としたい。

③東調査区に顕著な器種（特に多い器種）は認知し難いが、強いて挙げれば礫石器として登録した円礫が挙げられる。円礫について説明すると、大きさは礫石くらい～少し大きいものまで（おおよそ3～8cm）、形態的には扁平なものを主体とするが、球状のものもある（含めた）。V章で上述したとおり、東調査区捨て場からの出土が97%（遺跡全体で771点中、東調査区から745点）を占めることから、縄文時代の中でも中期末葉～後期初頭の時期において、需要度が高かった（遺跡に持ち込まれることが多かった）ことが言及できよう。円礫の用途は、推定の域を出ないが、規模的な観点からは磨石、敲石としての使用目的とは考え難く、礫片を打ち欠いた後に使用される類（礫片スクレイパーなどの削接器類か）に多く用いられたのではないかと推定しておきたい。ただ、補正事項として、円礫の類は最近当センターで調査を実施した縄文後期の配石や列石を持つ遺跡などから多く出土する傾向が看取されることから、実用品かどうかを含め、今後の動向には注意が必要であろう。

④両調査区の顕著な違いとしては、力持型スクレイパーは西調査区のみ、石錐は東調査区からのみ出土している。これらの器種の出現性は、時期の違いが反映していると考えられる。

第20表 越田松長根 I 遺跡石器組成



3 科学分析から

今回実施した科学分析の結果を踏まえ所見を述べたい。

(1) 年代測定

先に年代測定に用いた試料を説明すると、炭1は3号住の埋土中から出土した炭化物、炭2は5号住の床直から出土の木炭（木炭片）、炭3は10号住の埋土中位から出土した炭化物、炭4は14号住の埋土中から出土した土器（No140）の外面对着スズである。調査判断としては、全て縄文前期前葉大木1式期の遺構（先の部類ではdグループとした遺構）出土試料である。炭1・3・4からは5,810～5,930yrBPの年代値を得られた。炭2は11世紀代の年代値を示すが、試料の出土地である5号住からは出土土器が無く検証ができない（※検出面や埋土の様相などを含めた状況からは前期前葉である。何らかの原因による誤差値と考えたい）。炭2を除くこれらの結果を従来の土器の年代観に準拠するならば、分析の報文の記述にあるとおり、前期前葉大木1式よりは古く、前期初頭上川名2式よりは微妙に新しいと捉えられよう。

さて、分析で得られた年代を検討する上で、比較試料として同じ宮古市田老地区に所在する向新田Ⅲ遺跡を取り上げる（岩手埋文：2016）。この遺跡では、SI15坪内出土炭化材が5,830±30yrBP、SX09埋土下位一床出土炭化物が5,710±30yrBPの年代値を得られている。残念ながら、両遺構ともに土器の出土に恵まれず、縄文前期前葉までの評価である。向新田Ⅲ遺跡の報告書に掲載されている土器の中で縄文前期初頭～前葉土器を概観するなら、前期初頭は極めて少なく、主体は大木2a式で大木1式は一定量あると見て取れる。状況から、SI15とSX09の帰属時期は、大木2a式あるいは大木1式の遺構の可能性が高いとみてとれるが、本遺跡の測定値に近似しており、それらの土器型式の年代値（従来の年代値?）より古い値を示している。この向新田Ⅲ遺跡の2つの測定試料や本遺跡の3つの試料の $\delta^{13}C$ は何れも25‰前後であることから、単純に海洋リザーバー効果などによる誤差値とするには疑問が残る。仮に、これらの年代値を尊重するなら、以下の3点の指摘事項が仮説・予察される。①大木1式土器の年代が従来言われていたより古い。②大木1式土器の実年代の上限が遡る（寿命が長い）。③今回の調査で主体的な組縄文を施文する土器群は大木1式より古い段階に相当する可能性。参考までに、総覧縄文土器に載る羽状縄文系土器群の中で田中和之氏は、花積下層式～黒浜3式（※1点黒浜～諸磯a式としたものがある）までの年代測定事例を掲載している（田中：2008※測定値はyrBP±1 σ ）。それら関東地方の当該期試料と、本遺跡試料で得られた年代値を比較すると、花積下層式より全般に新しく、関山Ⅰ式や関山Ⅱ式よりやや新しいものやや近似、黒浜1式よりは古いと捉えられよう。ただし、田中氏の記載では、これらの ^{14}C 年代測定データが若干データの信憑性に欠ける点も否めないとの記述もあり、土器型式編年と年代測定値を直接リンクして捉えることは、現時点では時期高早かもしれない。東日本大震災の復興事業に関連した緊急発掘調査が多く実施されたことで、前期前葉の年代測定事例も増えている。改めて年代測定資料の集成や比較検討などの必要性を感じる。

(2) 火山灰分析

今回の調査では、西・東の調査区に関わらず、明黄褐色や明褐色若しくはそれらより若干肌色に近いぶい黄褐色の色調を呈するパウダー状のテフラが良好な状態で検出された。分析試料のテフラ3

点は、西調査区の調査区南境の土層断面（カラー図版1及び第7図上に示した土層断面図中）からサンプリングしたもので、ほぼ同一地点におけるⅢ層混入テフラである。分析の結果、To-Cuテフラと考察され、現場時の調査判断や同テフラより下位から出土した前期前葉土器と整合的である。今回の調査におけるTo-Cuテフラと縄文前期前葉（大木1式期）の竪穴住居跡の關係は、竪穴の検出面より上に同テフラが堆積する様相にある。つまり、竪穴住居跡が完全に埋まった後、それらを覆う地層に同テフラが混入すると捉えられる（※竪穴住居の完没期よりテフラ降下時期の方が余裕をもって新しいと捉えられる）。補足として、宮古市田老地区で近年当埋蔵文化財センターが調査を実施した遺跡では、高頻度でTo-Cuテフラが検出されている（平成25年以降では、青野滝北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、乙部遺跡、乙部野Ⅱ遺跡、向新田Ⅲ遺跡、重津部Ⅰ遺跡など）。

(3) 黒曜石分析

今回の調査では3点の黒曜石が出土し、産地同定の分析を実施した。サンプル名はK1～K3と命名した。K1（No415）のスクレイパーは西調査区で検出された10号住の埋土中から出土した。この10号住の時期は縄文前期前葉（大木1式期）と推定される。K2の剥片とK3の剥片（石礫未成品？）は、東調査区の縄文時代中期後葉～後期初頭の捨て場で出土した。出土層位はⅡa層と命名した土層である。このⅡa層は、野外調査では約20cm単位で3回に分け掘り下げたが、黒曜石2点は2回目の掘削で出土した。従ってⅡa層中位の出土である。縄文中期末葉頃の文化層の可能性もあるものの、出土土器は中期末葉と後期初頭が混在して出土している状況にある。加えて、中期後葉は数点の出土であることから、K2・3の帰属時期は中期後葉までは遡らないと推定されよう。

分析の結果、3点全て男鹿系の結果を得られた。帰属時期は、K1が縄文前期前葉、K2とK3が縄文中期末葉～後期初頭と推定される。このことから、本遺跡において少なくとも縄文前期前葉の段階では、日本海側との交流が行われていたことが分かり、さらには時期が新しくなった後も同様の地域から黒曜石が供給されていたと捉えられる。

(4) 漆分析

漆の被膜と推定される黒色物の付着を、No216の内面とNo217の外面で認められた。この2点の土器は、東調査区捨て場で出土した大木10式土器である。その内、No216の付着物について、赤外分光分析を実施した結果、漆と同定された。

分析結果を踏まえると、本遺跡では少なくとも中期末葉の段階では土器などに漆を塗布する技術の存在が明らかとなった。

4 Ⅱ群土器の若干の考察

主に西調査区から出土した縄文前期初頭～前葉の土器は、遺構出土が多く、高且つ比較的単時期様相の集落跡であることにも関わり、当該土器の良好資料を提供するものである。本稿では全般に前期初頭は上川名2式に、前期前葉は大木1式と捉えて記述してきた。上川名2式は、土器型式名は周知されているが、その内容については拡大解釈されてきたと捉えられ（早瀬：2008）、少なくとも本県に分布する当該期の土器群の内容や属性は明らかとは言えない現状がある。また、本遺跡で主体を成す組縄縄文を中心とする土器群についても、厳密には大木1式より古い時期である可能性もあり、加えて早稲田6類cなど東北地方北部の土器との関連も視野に入れる必要がある（高橋：1992他）。

それらの課題・問題点を一度棚上げするかたちで、兩型式名を用いて稿を進める。

2節において、遺構単位でその出土状況から a～d グループに分け概観したが、上川名 2 式から大木 1 式にダイレクトに推移するのか、あるいは上述のとおり両者の橋渡しの時期の土器（※関東地方の二ツ本式などのような位置付けの土器）が本遺跡資料中に存在するのか否か明確ではない。V 章では前期の土器を初頭と前葉に分けず II 群土器として一括した。それら II 群土器を地文の種類やその施文手法などの諸特徴で 1～10 類に分類を試みた。さらには、土器の器厚の傾向から導ける情報を探るべく、計測値をまとめたものを第 21 表に示した。それらの結果を踏まえ、II 群土器について所見を加えまとめる。

II 群 1 類 a 種（縄文押圧による早麻状・渦巻状と短沈線）は、土器の口縁部文様帯への多様な装飾を描く特徴的な文様手法である。これらの口縁形状は平縁が多い。II 群 1 類 a 種の器厚をみると、最大値の平均値が約 12.3mm と厚く、また最大値から最小値を引いた厚差平均値も約 2.3mm と高い数値になる特徴が看取される。このことは、土器全体で均一の厚さには無く、厚みにバラツキがあることが特徴の一つと考えられる。傾向として、厚手の部位としては口縁部や、胴部と底部の接点付近に多い。II 群 1 類 a 種は、長七谷地 III 群には認め難い属性である（※少なくとも出現率は低いと捉えた）。加えて、本遺跡資料には、長七谷地 III 群に特徴的に見られる口縁部に条が横走する属性の土器が少なく（※少なくとも 0 段多条の縄文原体による斜回転は Na316 の 1 点のみ）、縄の末端を用いた刺突列も認め難い。従って、上川名 2 式と長七谷地 III 群の並行関係などは掴み難い。上述の内容は、住田町小松 1 遺跡や宮古市千第 IV 遺跡出土土器にも共通する内容で、やはり口縁部に条が横走するものは認め難い（※刺突文が巡るものは少数あるが）。ただ、普及村力持遺跡においては、層位の共伴例と断定はできないが、兩型式の属性が認められる点は見逃せない。本地域における上川名 2 式と長七谷地 III 群の主客性なのか、あるいは微妙な時期差を示しているのか、現段階では断定できず、両方の可能性で予察されようか。なお、II 群 1 類 a 種の胴部地文には、**II 群 2 類 a 種（0 段多条の原体による非結束羽状縄文）**の採用率が高いことは強く指摘できる。

II 群 1 類 c 種（地文後に押圧縄文）は、厚さの最大値の平均が 7.8mm で、II 群 1 類 a 種より全般に薄手で、加えて均一の厚さの作りのものが多い。土器型式への比定は難しいが、堅穴住居単位でみると組縄文を施文する II 群 6 類との共伴性が高い。

II 群 2 類（羽状縄文）として一括した羽状縄文について、本遺跡資料では羽状縄文の中で非結束が約 80% を占める（結束は少ない）。**II 群 2 類 a 種（0 段多条の原体による非結束羽状縄文）**は、上述のとおり II 群 1 類 a 種とのセット関係が高いと判断される。その中で分類上 II 群 2 類 a 種とした 19 号住出土の Na157～161 は、整然とした羽状縄文とは言えない様相で、共伴土器（II 群 6 類の組縄文が多い）との関係からみて、前期初頭に帰属されるものなのかどうか、今後の検討が必要であろう（前期前葉の可能性もある）。結束するものを見ると、全て結束第 1 種によるもので、0 段多条の原体を用いるものは **II 群 2 類 c 種 A** に分類した Na171 の 1 点のみ（※RL のみ 0 段多条）である。このことから 0 段多条の縄文原体を用いる羽状縄文は、非結束の II 群 2 類 a 種にほぼ限定できる様相であることを指摘できる。結束羽状縄文には 0 段多条の縄文原体を用いるものがほとんどない（※Na171 は RL のみ 0 段多条を用いる）。また、羽状縄文により菱形の構成をみるものが Na68・98・315 の 3 点含まれる（Na68 は非結束、他 2 点は結束）。何れも胴部の小破片であることから、さらなる情報抽出が難しく細分の対象にはしなかったが、これらも前期前葉の前半段階として大木 1 式期のバリエーションの一つに捉えておきたい。上記以外に本遺跡にみられる羽状縄文土器の特徴として述べておきたい内容に、複節の縄文原体を採用するものが結束・非結束に関わらず認められないことが挙げられる。この複節

を用いた羽状縄文は、東北地方北部に分布する大木2a式には一定量認められる属性（武藤：1988）と捉えられることから、時期による出現性に関わり本遺跡資料に大木2a式が存在しない可能性を端的に示唆していると考えられよう（註3）。

II群3類a種（単節・複節の横回転）は、II群の土器の中では最も出土数が多いものの、縄文原体の横回転と言う要素・属性だけでは土器型式への比定が困難である。ただ、器厚の最大平均値は約8.9mmで、II群1類a種（上川名2式相当）の平均値12.3mmよりかなり薄い値を示す。加えて、組縄縄文のII群6類と類似した数値を示し、両者ともdグループとした遺構出土に多い。これらのことから、上川名2式よりやや後出の時期（大木1式期）に帰属するものが多い可能性を指摘できようか。また、II群3類a種アとした0段多条の縄文原体を用いるが、羽状縄文を構成しない土器類の中には、底部形態が丸底を呈する資料が3点（No106・111・137）抽出される。これらは胎土の様相や土器の厚さ（やや薄手）などの観察所見から前期前葉の可能性もある。

II群4類（環付き末端ループ）は、大木1式のメルクマールの一つを担うが、東北地方北部の表館式や早稲田6類にも比較的顕著に認められる属性と捉えられる。当該期の並行関係を予察する上でも重要な属性の一つである（註4）。II群4類の出土点数が最も多い9号住は、II群1類a種やII群2類a種など上川名2式相当と、II群6類の組縄縄文など大木1式相当が共存気味に出土したことで、bグループとした遺構である。また、器厚の最大平均値は約8.6mmで、II群2類c種ア、II群3類a種ア、II群3類c種、II群6類a種ア、II群8類などの土器類の値に類似する。上記の分類土器は前期前葉と捉えられる。本類も同時期に属すると予察しておく。

II群5類（付加条※附加条とも表記される）は、本遺跡資料では希少性が高い。胎土中に多量の繊維が入り、厚さの最大平均値が6.3mmと薄手であること、さらには口唇部にミガキが施される制作上の特徴が見て取れる。これらの内容からは、大木1式（期）の可能性が高く、少なくとも前期前葉に帰属すると推定しておきたい。なお、付加条自体は、前期前葉早稲田6類などにも認められる属性のようであるが、あるいは大木1式との並行関係を窺う観点では興味深い属性になるものかもしれない。補足として、付加条は本県の事例を見る限り前期中葉大木3式にも顕著に認められる属性であるが、大木3式は胎土中に繊維が入らないことから、異時期と判断される（註5）。

II群6類（組縄縄文※断定できるものがa種、断定できないものがb種）は、今回の調査では特徴的に出土が認められた属性である。II群6類の器厚の平均は約8.8mmで、II群1類と比較すると薄手の資料が多く、上川名2式と同じ集団が制作したとは考え難い。また、組縄縄文を施文する土器の口唇部資料には、指頭圧痕による刺突文が伴うものと、伴わないものがあり、前者はb・c・dグループに、後者はdグループの遺構出土に多い。つまり、口唇部に指頭圧痕文を伴うものが若干古い時期に帰属する可能性を予察させる一方で、上川名2式相当と捉えるII群1類a種の口唇部に指頭圧痕文を施文するものが無いことも重要な視点である（註6）。結論は今後の研究に委ねるが、上川名2式には組縄縄文は伴わない可能性が極めて高いと予察しておきたい。

参考までに、普代村力持遺跡では上川名2式と長七谷地Ⅲ群は共存気味に出土している。また、前期初頭、前期前葉に関わらず、組縄縄文を施文する土器はほとんどない（明確ではないが組縄縄文の可能性のあるものを含めて数点）。力持遺跡では明確に大木1式と特定できる資料自体が少なく、前期前葉は大木2式相当を中心とする。加えて、本遺跡に認め難い属性である組紐を施文する土器（本遺跡資料ではNo191の1点のみ）が非常に多い特徴がある（※力持遺跡では組紐の施文する土器自体は、大木2b式や大木3式、白座式に多い様相で捉えられる）。また、住田町小松I遺跡ではⅣ群土器に分類された中に少数であるが組縄縄文が認められる（※組縄縄文が出土した40号住は前期初頭として

いるが、土器の分群上は大木2a式相当のⅡ群土器より古い段階に位置づけている)。さらには、八戸市地域の事例である楯館遺跡などを見る限り、組縄縄文を施文する土器は早稲田6類cとの関係も示唆される。検証・分析が弱い現段階で強く言及することは憚るが、本地域においては、組縄縄文は前期前葉の前半段階大木1式を中心に大木1式に近い段階の大木2a式(古段階)に、組紐は前期前葉の後半段階に出現する可能性が予想できようか。

Ⅱ群7類(組紐)は、28号住から1点出土した。この28号住からはⅡ群2類土器(羽状縄文、※結束と非結束両方あり)が相伴して出土している。ただ、織維や焼成具合など胎土の様相が相違する状況が看取されることから、本遺跡のⅡ群土器の中心時期より新しい時期(大木2b式や白座式が考えられる)に帰属する可能性もある。

Ⅱ群8類(円形の刺突列をもつもの)は、1点の出土であり、多くを言及できない。上述のとおり、前期前葉の産物と推定しておきたい(前期初頭までは上らないと推定するに留める)。

Ⅱ群9類(S字状連鎖沈文)は、今回の調査で確認したものはNo318の1点のみである。また、明らかに大木2a式に特定できる不整然糸文を施文する資料は認められないことを鑑みても、遺構の帰属時期(主体時期)とは異時期(大木2b式)の産物と調査判断される。

Ⅱ群10類(口端に斜位の刻み)は、白座式と呼ばれるものに比定できよう。No317の1点のみ確認した。Ⅱ群9類と同様に、遺構の帰属時期とは異時期の産物と捉えられる。

まとめ 上記してきた内容を整理し予察を加える。

① 上川名2式と長七谷地Ⅲ群の関係について。本遺跡資料は、各所で記述してきたとおり押圧縄文による早麻状・渦巻状や直線的な条線、さらには短沈線(刻み列)などが特徴的に認められる。これらは現行の土器型式では上川名2式と捉えられる。また、長七谷地Ⅲ群にみられる口縁部に0段多条の原体を斜回転することで生じる「条が横走」するものが極めて少ない特徴が看取される。「条が横走」するものが本遺跡資料に希少な様相からは、本地域は東北地方南部の上川名2式の影響が強い土器群が分布する可能性が示唆される。一方で、両型式に共通するのが、胴部の0段多条の縄文原体による非結束羽状縄文が横帯する属性で、前期初頭における広域的な特徴・属性と捉えられる。0段多条の原体の採用の有無で前期初頭と前葉を区分することはできない。しかしながら、同じ0段多条であっても初頭と前葉では節の大きさや形に違いが看取されることから、今後の検討内容の一つと考えられる。

② 上川名2式と大木1式の関係について、上川名2式はⅡ群1類a種などにより口縁部文様帯を意識した構成を見るが、本遺跡資料の大木1式は口縁部一胴部まで地文のみを施文するものがほとんどで、明確な口縁部文様帯は存在しない様相にある(註7)。組縄縄文を施文する土器に着眼するなら、今回の調査における出土層位からは上川名2式と組縄縄文土器は相伴関係なのか、あるいは新旧を持つのか微妙な状況にある(言及が難しい)。ただ、組縄縄文を施文する土器は、土器の厚さ(※上川名2式の厚さ平均値は約12.3mm、組縄縄文土器は厚さ平均値約7mm)や縄文原体の違い(※0段多条の採用率や節の形・規模など)からは、上川名2式と同時期に制作されたとは考え難い。組縄縄文は前期初頭までは遡らず、その出現期は前期前葉の前半に求められようか。また、大木2a式まで組縄縄文の属性が存続するものかどうかは本遺跡資料からは窺い知れないが、普及村力持遺跡の資料を見る限り、ポピュラーな属性では無いと判断・考察される。つまり、「潜伏」期間の短い属性の可能性で考えたい(少なくとも大木2a式では、その出現率が低いと考えられる)。

③ 上川名2式と大木1式の間を担う土器の存在は、今回の調査成果からは不明にある。押圧縄文によるモチーフの更なる分析や、Ⅱ群3類a種Aに分類した土器などの位置づけが、鍵を握る可能性を指摘するに留める。

II群1類：縄文原体の側面による押圧縄文の手法を用いるもの。

- II群1類a種・渦巻文がモチーフされる。短沈線を伴うものが多い。(初頭上川名2式)
 II群1類b種・口縁部に横方向に押圧縄文が施されるもの。(初頭上川名2式・長七谷地Ⅲ群)
 II群1類c種・地文施文後に押圧縄文が施されるもの。(前業)

II群2類：羽状縄文。

- II群2類a種・0段多条のLRとRLの2種類の原体を用いて非結束羽状縄文を構成するもの。(初頭)
 II群2類b種・2種類の原体(※原体は0段多条以外)による非結束羽状縄文を構成するもの。(前業)
 II群2類c種・2種類の原体(※原体は0段多条以外)を用いて結束羽状縄文を構成するもの。
 II群2類c種ア 横走するもの。(前業)
 II群2類c種イ 縦回転と横回転を併用し、変形を構成するもの。(前業大木1式)
 II群2類d種・1種類の原体を異方向に回転し羽状縄文を構成するもの。(前業)

II群3類：単節・複節など地文のみ施文が認められるもの。

- II群3類a種・単節・複節を用いて横回転を基調とするもの。
 II群3類a種ア 0段多条の原体を用いるもの。(初頭・前業)
 II群3類a種イ 0段多条以外のもの。(前業主體)
 II群3類b種・縦回転を基調とするもの。(前業?)
 II群3類c種・斜回転を基調とするもの。(初頭?)
 II群3類d種・原体を異方向に回転し重層施文するもの。(前業大木1式・早稲田6類)
 II群3類e種・原体が判別できないもの。(前業?)

II群4類：環付き末端ループの手法をとるもの。(前業大木1式・表筒式・早稲田6類)**II群5類：付加条の原体を用いるもの。(前業早稲田6類?)****II群6類：組縄縄文(俗称ビッチリ縄文)を施文するもの。**

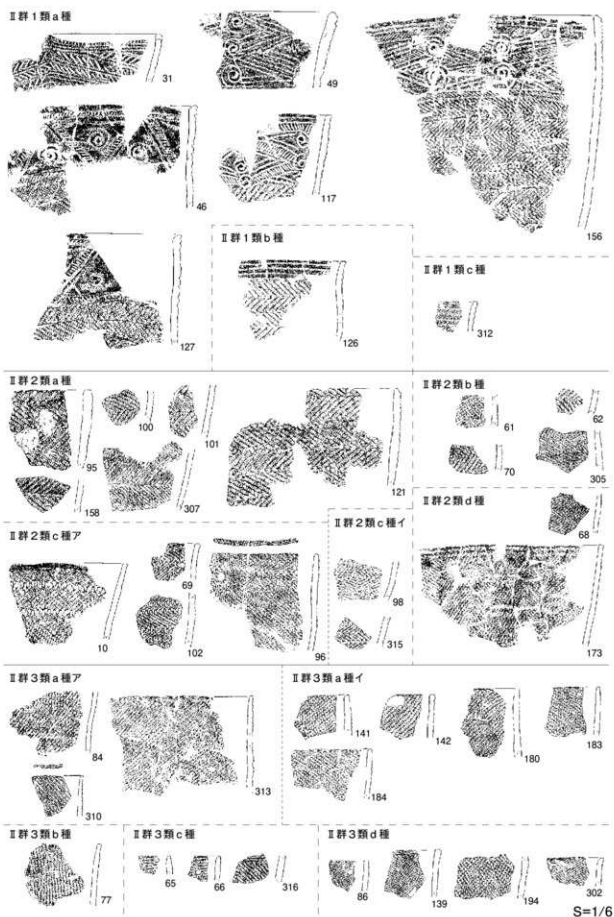
- II群6類a種 組縄縄文。(前業大木1式・早稲田6類c)
 II群6類b種 組縄縄文の可能性が高いものの、断定できかねるもの。(前業大木1式・早稲田6類c)

II群7類：組紐を施文するもの。(前業～中業)**II群8類：口縁の端部付近に円形の刺突列が施文されるもの。(前業)****II群9類：S字状連鎖沈文を施文するもの。(前業の新相大木2b式相当)****II群10類：口縁端部に斜位の刻みを持つもの。(前業～中業白磁式)**

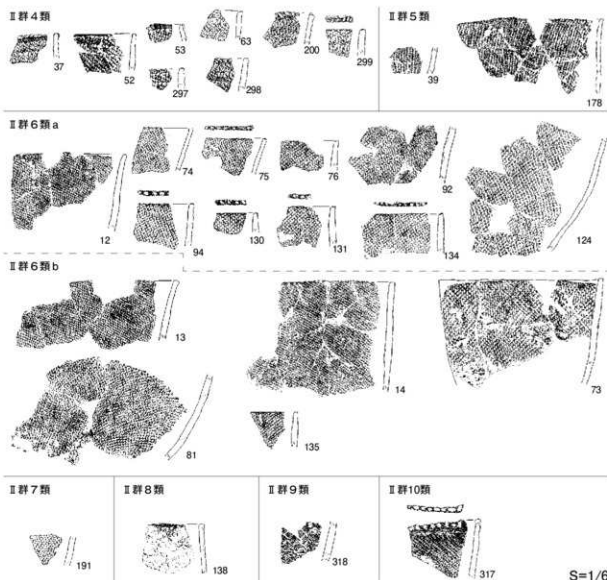
＜越田松長根Ⅰ遺跡縄文前期土器分類＞(※推定される土器型式)

第21表 越田松長根Ⅰ遺跡出土土器の器厚表

時期・分類	最大 (mm)	最少 (mm)	最大 平均 (mm)	最小 平均 (mm)	分析 点数	時期・分類	最大 (mm)	最少 (mm)	最大 平均 (mm)	最小 平均 (mm)	分析 点数		
II群(全体)	17.5	4.0	9.4	7.6	1.8	237	II群3類b種	8.0	6.0	8.0	2.0	1	
II群1類	10.0	9.0	10.0	9.0	1.0	1	II群3類c種	10.0	5.5	8.8	6.6	2.2	6
II群1類b種 (縄文押圧による渦巻文と短沈線)	17.5	6.5	12.3	9.9	2.4	20	II群3類d種	10.0	5.5	8.3	7.4	8.9	9
II群1類c種	10.0	7.5	10.0	7.5	2.5	1	II群3類e種	9.0	6.0	8.0	6.5	1.5	2
II群1類c種(地文後に押圧縄文)	8.0	6.5	7.8	6.5	1.3	2	II群4類(環付き末端ループ)	10.0	5.0	8.6	6.6	2.0	11
II群2類a種 (0段多条の原体による非結束羽状縄文)	15.5	6.5	10.9	9.4	1.5	30	II群5類(付加条)	7.0	4.0	6.3	5.2	1.2	3
II群2類b種	12.0	6.0	9.4	7.9	1.5	7	II群6類a種(組縄縄文断定できるもの)	12.0	5.0	8.6	6.8	1.9	40
II群2類c種ア	10.0	6.0	8.9	7.4	1.5	10	II群6類b種(組縄縄文断定できないもの)	11.5	5.0	9.0	7.1	2.0	20
II群2類c種イ	9.5	8.0	9.0	8.5	0.8	2	II群7類(組紐)	8.5	8.5	8.5	8.0	0.5	1
II群2類d種	8.0	6.5	7.5	6.8	0.8	2	II群8類(円形の刺突列をもつもの)	8.5	8.0	8.5	8.0	0.5	1
II群3類a種(単節・複節の横回転)	12.0	4.0	8.9	7.8	1.1	9	II群9類(S字状連鎖沈文)	10.5	9.0	10.5	9.0	1.5	1
II群3類c種イ	13.0	4.0	9.0	7.0	2.0	56	II群10類(口縁部に斜位の刻み)	9.0	7.0	9.0	7.0	2.0	1



第99図 越田松長根 I 遺跡前期土器集成図 1



第100図 越田松長模 I遺跡前期土器集成図2

註

- (註1) 上川名2 (II) 式は、学史的には早期末葉～前期初頭を包括する土器群を指すと思われるが、今日的には東北地方南部における花積下層式並行期の位置づけで周知されている。ただ、内容については、はっきりしない。
- (註2) 上川名2式と大木1式の間には、学史的には柱高式や室浜式と呼ばれた土器がある。ただ、内容がはっきりせず、今日的にはその土器型式名を用いた論文や報告書を目にしない。
- (註3) 武藤氏の論文以後、本県沿岸部の大木2a式土器の資料が増えた。今日の見解としては、南北の地域差に関わらず、複節による結束羽状縄文は存在する属性と判断されよう。
- (註4) 震災後に発行された大木洞貝塚の大木2a式には、原体の環付き末端ループの属性が存在する旨の記述があり、注意が必要である。ただし、本地域の大木2a式の良好事例である山田町沢田I遺跡や宮古市八木沢野米遺跡を見る限りで、その属性は存在を認知し難い。
- (註5) 今回の調査では大木3式は出土していない。ただし、大木2a式や大木3式との並行関係が察される白磁式が出土していることは補足事項である。なお、仙台湾の資料では、大木3式には胎土中に繊維が入らないを基本とするようであるが、本遺跡資料には繊維が認められることから、前期中葉までは時期が下らないと推定される。ただ、大木1式

なのか、あるいは早稲田Ⅵ類かについては、両者とも繊維が顕著に認められるのが普通なので、付加条を施文するものの詳細な時期や土器型式は不明と言わざるをえない。

(註6) 口唇部に指頭圧痕文あるいは刺突文を伴うものは、長七谷地Ⅲ群には存在するようである。ただし、土器の厚みに関係し、刺突の深さやその間隔などには差異がありそうで、長七谷地Ⅲ群からダイレクトに踏襲されている属性とするには更なる分析・検討が必要である。

(註7) 本道跡資料を見る限り前期前葉は、口縁部文様帯を意識しているものが認め難い(※Ⅱ群4類にその可能性は残る)。また、口縁部の器形的な観点では、上川名2式は内湾するいわゆるキャリバーを呈する資料が認められるが、組縄縄文を施文するものの口縁部は直立若しくはやや外傾するものがほとんどである。つまり、上川名2式(前期初頭)と組縄縄文(前期前葉)では、口縁部の器形・文様帯及び土器の厚さなど、明らかな相違点がある。今回の調査では層位的な新旧関係は微妙と言わざるをえないが、両者の相違点からは新旧の存在を字察するものである。

参考文献

<論文関連>

- 相原淳一：1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に－」『考古学雑誌』第76巻第1号 P1-65 日本考古学協会
- 岩手県：1973『土地分類基本調査－田老－』国土調査岩手県企画開発室(北上山地開発)
- 小林達雄監修：2008『総覧縄文土器』
- 鎌田祐二：1989「千鶴遺跡4まとめ」『千鶴遺跡発掘調査報告書』宮古市教育委員会 宮古市文化財調査報告書16p133-144
- 工藤 崇・佐々木寿：2007「十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火編年」『地学雑誌』第116巻5号公益社団法人東京地学協会p653-663
- 熊谷常正：1983「岩手県における縄文時代前期土器群の成立－秦仮文系土器群から羽状縄文土器群へ」『岩手県立博物館研究報告』第1号p45-65
- 熊谷常正：1989「岩手県内における縄文時代前期初頭の土器群について」『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』第4回縄文文化検討会シンポジウム 縄文文化検討会
- 佐藤達夫：1983「青森県上北部早稲田貝塚」『東アジアの先史文化と日本』p224-283
- 佐藤則之：1996「上川名Ⅱ式土器」『日本土器辞典』p308 大川清・鈴木公雄・工業書通
- 渋谷賢太郎・濠谷昌彦：2014「多縄文系土器における原体・手法・効果の解明」『縄文時代』25号 縄文時代文化研究会
- 縄文セミナーの会：1994「第7回縄文セミナー-早期終末・前期初頭の諸様相-記録集-」
- 須原 拓：2007「縄文時代前期の大形住居について－大木式土器文化圏の事例を中心に－」『紀要X XVI』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 菅谷通保：1987「縄文時代特殊住居論批判－大形住居展開のために－」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第4号 東京大学文学部考古学研究室
- 高橋重貴子：1992「東北地方縄文時代前期前葉組縄縄文について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤杉先生選集記念p593-632
- 田中和之：2008「羽状縄文土器」『総覧縄文土器』小林達雄編p234-241
- 千葉 毅・高山理美：2014「東北地方北部における縄文時代後期初頭から前葉土器編年研究の現状と課題－青森県安部遺跡出土土器の研究のために－」『縄文時代』第25号 縄文時代文化研究会
- 名久井文明：1971「青森県戸野遺跡の土器群について」『考古学雑誌』57巻2号日本考古学協会p1-25
- 二本柳正一・角龍三・佐藤達夫：1956「青森県上北部早稲田貝塚」『考古学雑誌』43-2 p35-58
- 早川由紀夫：1983「十和田火山中環テフラ層の分布、粒度組成、年代」『火山』第2集第3号p263-273
- 早瀬亮介：2005「阿武隈川下流域における縄文時代前期初頭の土器型式」『歴史』第10輯 p82-107
- 早瀬亮介：2008「前期大木式」『総覧縄文土器』小林達雄編p226-233
- 早瀬亮介：2009「前期大木式土器の変遷と地域性－編年研究の現状と課題－」『日本考古学協会2009年山形大会発表資料』p273-282
- 本岡 宏：1987「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)－東北地方北部を中心に－」『よねしろ考古』第3号p31-50
- 本岡 宏：1988「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)」『よねしろ考古』第4号p71-84
- 三宅徹也：1989「早稲田Ⅵ類と表館式の関係」『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』

ついで」第4回縄文文化検討会シンポジウム 縄文文化検討会

武藤康弘：1987「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究－表館式早稲田6類土器をめぐる－」『考古学雑誌』第74巻第2号日本考古学学会p29～51

武藤康弘：1997「縄文時代前・中期の長方形形住居の研究」『住の考古学』同成書

武藤康弘：2008「表館式・早稲田6類土器」『総覧縄文土器』小林達雄編p210～217

渡辺 誠：1975『縄文時代の植物食』猿山園

<他県報告書関連>

東北大学大学院文学研究科考古学研究室 角田市教育委員会：2008「阿武隈川下流域における縄文貝塚の研究－土浮貝塚－」角田市文化財調査報告書第33集

青森県教育委員会：1980「長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書 昭和53年度第2次発掘調査」青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集

青森県埋蔵文化財調査センター：1983「前坂下(13)遺跡」『下北地原点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第75集』

青森県階上町教育委員会：1989「白崖遺跡・野場遺跡(3)発掘調査報告書」

三沢市教育委員会：1985「根井沼(1)遺跡 緊急発掘調査報告書」三沢市埋蔵文化財調査報告書第2集

三沢市教育委員会：1988「根井沼(1)遺跡 緊急発掘調査報告書Ⅱ」三沢市埋蔵文化財調査報告書第4集

三沢市教育委員会：1988「根井沼(1)遺跡 発掘調査報告書Ⅲ」三沢市埋蔵文化財調査報告書第5集

三沢市教育委員会：2008「根井沼(3)遺跡」三沢市埋蔵文化財調査報告書第23集

<岩手県報告書関連>

岩手県教育委員会：2016「岩手県内遺跡発掘調査報告書」(平成26年度 復興関係) 岩手県文化財調査報告書第146集

滝沢村教育委員会：1986「耳取遺跡」滝沢村文化財調査報告書第3集

滝沢村埋蔵文化財センター：2008「仏沢遺跡－平成2年度発掘調査報告書－」滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第3集

盛岡市遺跡の学び館 2009『盛岡の縄文時代草創期～早期の土器文化』(資料集)

盛岡市教育委員会：1983「大館遺跡群 大新町遺跡」－昭和57年度発掘調査概報－

宮古市教育委員会：1989「千歳遺跡発掘調査報告書」宮古市文化財調査報告書16

宮古市教育委員会：1995「崎山貝塚発掘調査報告書」宮古市文化財調査報告書44

<岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書(発行年順)>※岩手埋文と呼称し記載

岩手埋文：1983「小瓶内Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手埋文第52集

岩手埋文：1994「寺久保遺跡発掘調査報告書」岩手埋文第239集

岩手埋文：2000「沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手埋文第318集

岩手埋文：2000「鈴山牧場Ⅰ遺跡B地区発掘調査報告書」岩手埋文第320集

岩手埋文：2004「小松Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手埋文第433集

岩手埋文：2009「本流遺跡発掘調査報告書」岩手埋文第536集

岩手埋文：2015「平成25年度発掘調査報告書」岩手埋文第630集

岩手埋文：2015「菅窪遺跡発掘調査報告書」『鳥越Ⅱ遺跡・鳥越Ⅳ遺跡・菅窪遺跡発掘調査報告書』岩手埋文第645集

岩手埋文：2016「向新田Ⅲ遺跡発掘調査報告書」岩手埋文第657集

岩手埋文：2016「青野滝北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書」岩手埋文第658集

写真図版



越田松長根ノ遺跡遺景 東から



調査地全景 南西から



調査区配置状況 南から

写真図版 1 航空写真



西調査区調査着手時全景 西から



東調査区調査着手時全景 東から

写真図版2 着手時現況



西調査区南壁東部層序 北西から



西調査区南壁中央部層序細部 北から



東調査区北壁層序 南東から

写真図版3 基本層序



床面検出状況全景 西から



Aベルト 南から



PP8断面 東から



PP10断面 北から

写真図版4 1号住



全景 東から



Bベルト 西から



炉1断面 北東から



炉2断面 東から

写真図版5 2号住



全景 東から



Aベルト 南西から



3・4号住精査中 西から



全景 北東から

写真図版6 3号住



全景 北から



Aベルト 南西から



PP1断面 東から



PP9 東から

写真図版7 4号住



5号住全景（手前23号住）東から



5号住Aベルト 南から



5号住炭・焼土検出状況 北東から



5号住床面上炭・焼土濃集部分 東から

写真図版8 5・23号住



6号住全景 東から



6・7・8・9号住断面 東から

写真図版9 6・7・8・9号住



8号住全景 南から



7号住全景 南から



9号住全景 南から



全景 東から



Aベルト 東から



Bベルト 南から

写真図版11 10号住



全景 南東から



Aベルト 南西から



Bベルト 南東から

写真図版12 13号住



全景 南西から



Aベルト 南東から



Cベルト 南西から

写真図版13 14号住



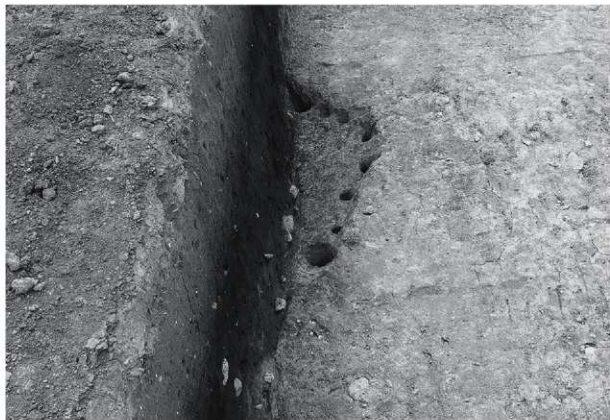
15号住全景 東から



16号住全景 東から



16号住Aベルト 南から



全景 南東から



Aベルト 北から

写真図版15 17号住



全景 北から



Aベルト 東から



北側土器出土状況 南から



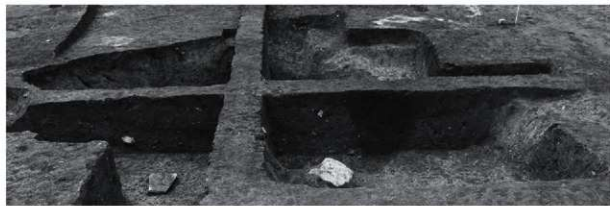
北東側土器出土状況 北東から



全景 東から



Aベルト 南から



Bベルト 東から

写真図版17 19号住



21号住全景 南西から



21・22号住精査中 南西から



22号住全景 南から



全景 南西から

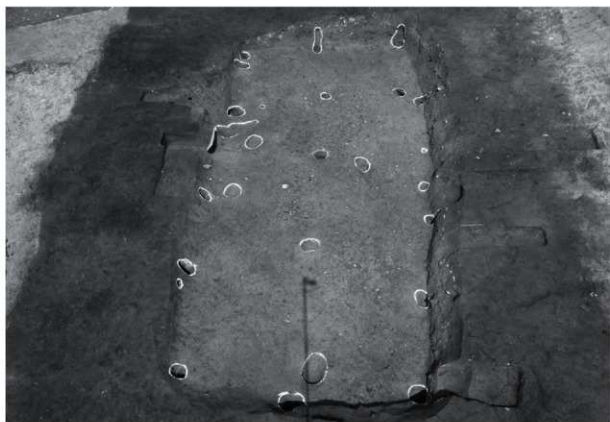


Aベルト 南西から



Bベルト 北西から

写真図版19 24号住(1)



全景 南東から



立石 北東から



立石 南東から



土坑断面 南東から



A・Bベルトと焼土の位置 西から



全景 南東から



Aベルト 南西から

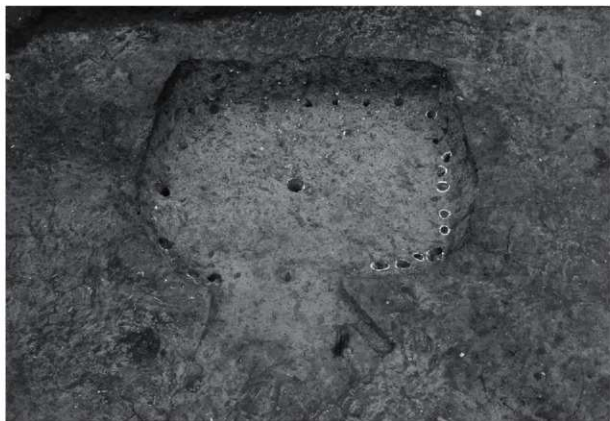


Bベルト 南西から

写真図版21 26号住



27号住全景 南東から



28号住全景 南から



全景 北から



検出状況 北東から



Aベルト 北から

写真図版23 31号住



全景 北東から



Aベルト 北から



煙道平面 北から



煙道断面 北西から



36号住全景 南西から



37号住全景 北から

写真図版25 36・37号住



全景 南から



Aベルト 西から



Bベルト 南から



検出状況 北東から



全景 北東から

写真図版27 39号住



1号陥し穴全景 南から



1号陥し穴断面 南から



2号陥し穴全景 南から



2号陥し穴断面 南から



1号土坑断面 南から



5号土坑断面 南から



2号土坑断面 南から



2号土坑全景 南から



3号土坑断面 東から



3号土坑全景 東から



4号土坑断面 東から



4号土坑全景 南から

写真図版29 土坑



1号焼土断面 南東から



7号焼土平面 南西から



2号焼土平面 南から



2号焼土断面 南西から



3号焼土平面 南から



3号焼土断面 南西から



4号焼土平面 南から



4号焼土断面 南西から



5号(左)・6号(右) 焼土平面 南から



5号(左)・6号(右) 焼土断面 南西から



8号焼土断面 南から



11・12号焼土平面 東から



11号焼土断面 南東から



12号焼土断面 東から



13号焼土平面 南から



13号焼土断面 南西から

写真図版31 焼土遺構(2)



1・2号柱穴列全景 南東から



P3断面 南西から



P11断面 南東から



P10断面 南西から



集石遺構 西から

写真図版32 柱列、柱穴、集石遺構



捨て場全景 北から



捨て場掘削開始時作業風景 北から

写真図版33 捨て場（1）



捨て場層堆積・遺物出土状況 南西から



土器出土状況 北東から



土器出土状況 西から



土器出土状況 南から



作業風景 南西から



土器出土状況 北東から



土器出土状況 南西から



土器出土状況 南西から



土器出土状況 南西から



捨て場完掘状況 西から

写真図版35 捨て場(3)



やませの西調査区全景



東調査区 重機掘削作業



西調査区 整穴住居調査状況



西調査区 19号住居床面精査作業



東調査区 地層断面実測作業



西調査区 14号住居現地説明会準備完了



西調査区 現地説明会

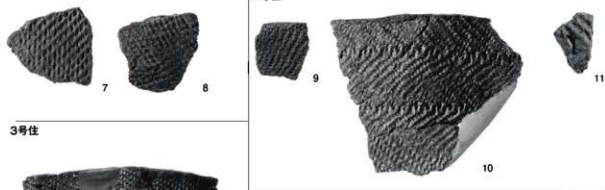


東調査区 現地説明会

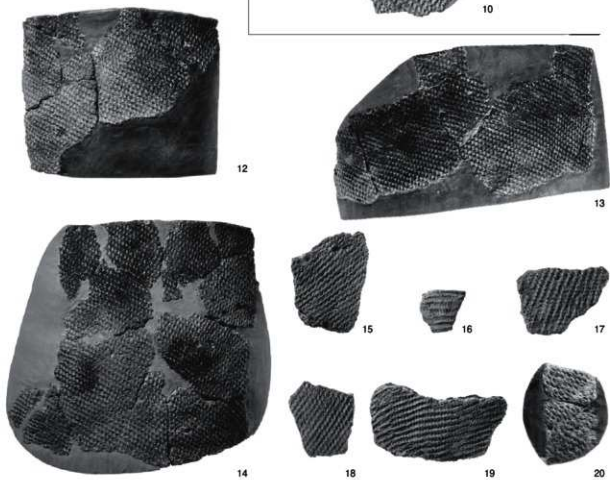
1号住



2号住



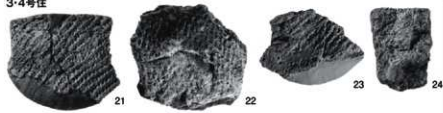
3号住



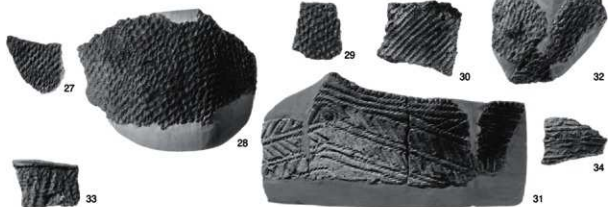
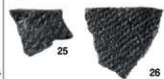
S=1/3

写真図版37 1・2・3号住土器

3・4号住



4号住



6号住



7号住



8号住



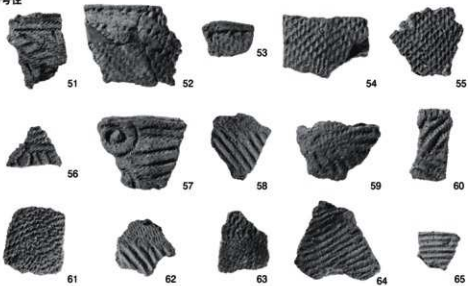
S=1/3

写真図版38 3・4・6・7・8号住土器

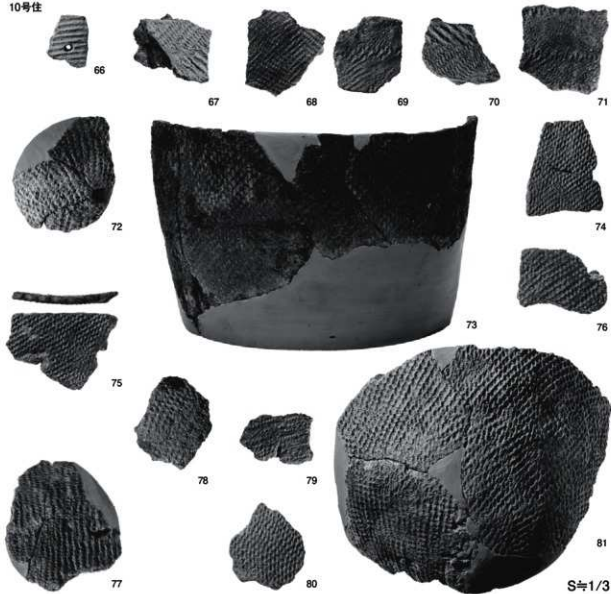
8号住



9号住



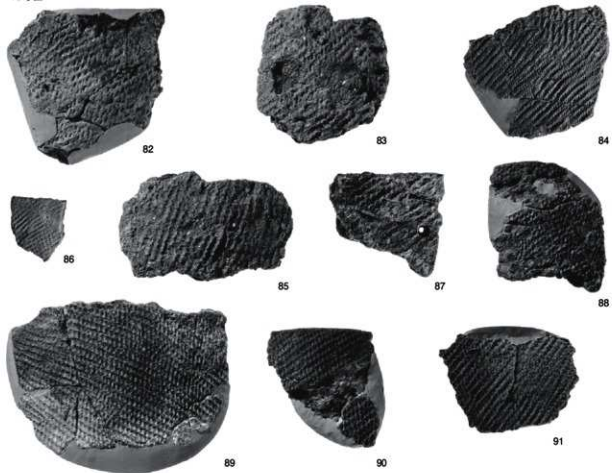
10号住



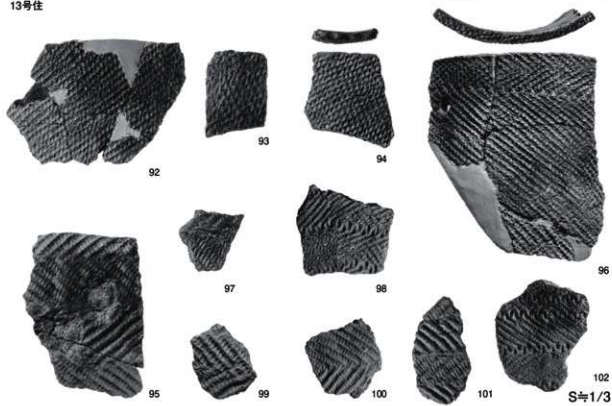
S $\frac{1}{3}$

写真図版39 8・9・10号住土器

10号住



13号住



写真図版40 10・13号住土器

13号住

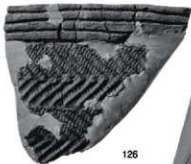


写真図版41 13号住土器

13号住



125



126



127



128

14号住



129

130

131

132



133



134



135



136



137



138



139



141



140



142

17号住



143



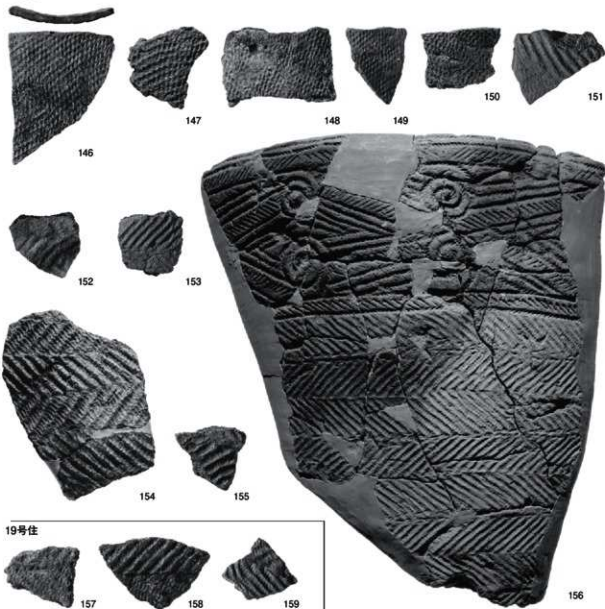
145



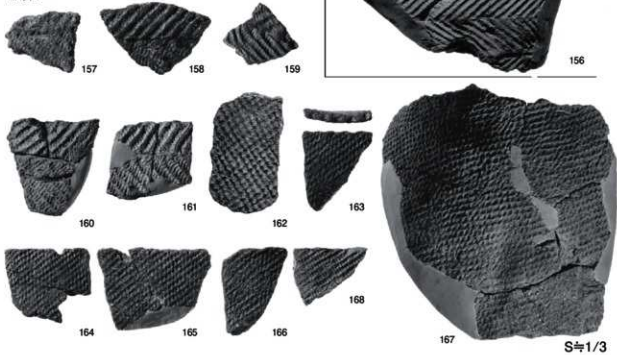
144

S=1/3

18号住

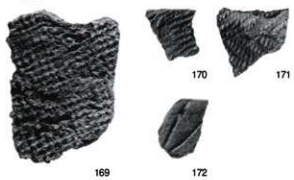


19号住



写真図版43 18・19号住土器

21号住



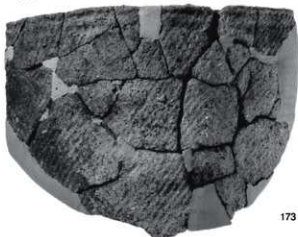
169

170

171

172

24号住



173



174



175



176



177



178



179



184



180



181



182



183



185

26号住



186



187



188

1号土坑



192

28号住



189



190



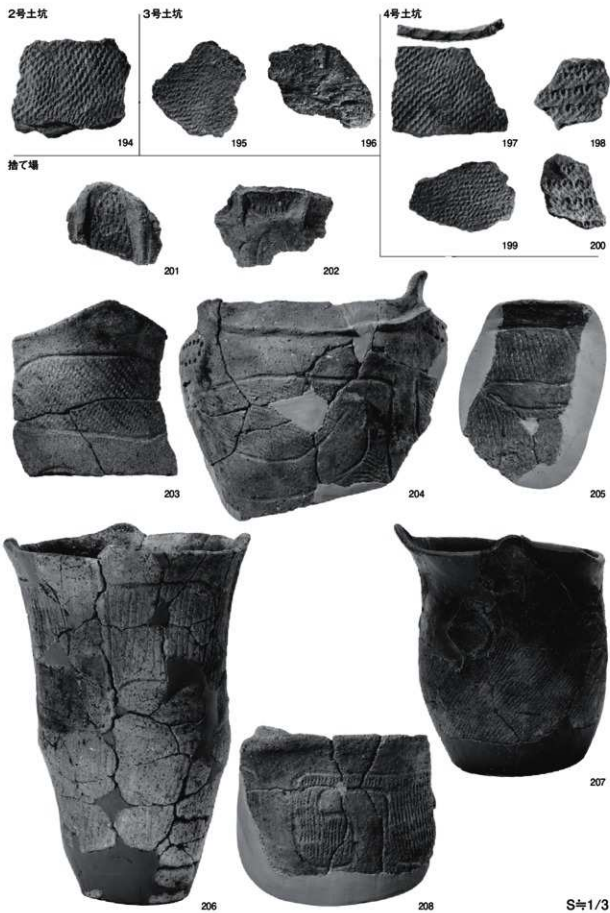
191



193

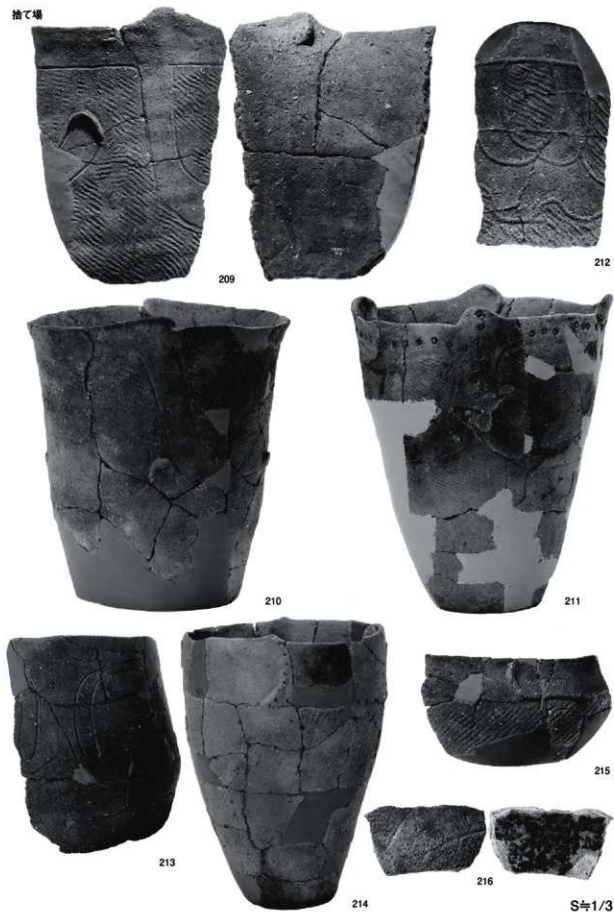
S=1/3

写真図版44 21・24・26・28号住、1号土坑土器



写真図版45 2・3・4号土坑、捨て場(1)土器

捨て場



写真図版46 捨て場(2)土器

捨て場



217



218



219



220



221



222



223



224

S=1/3

写真図版47 捨て場 (3) 土器

捨て場



225



226

S=1/3

写真図版48 捨て場(4)土器

捨て場



227



228



229



230



230



232



231



S=1/3

写真図版49 捨て場 (5) 土器

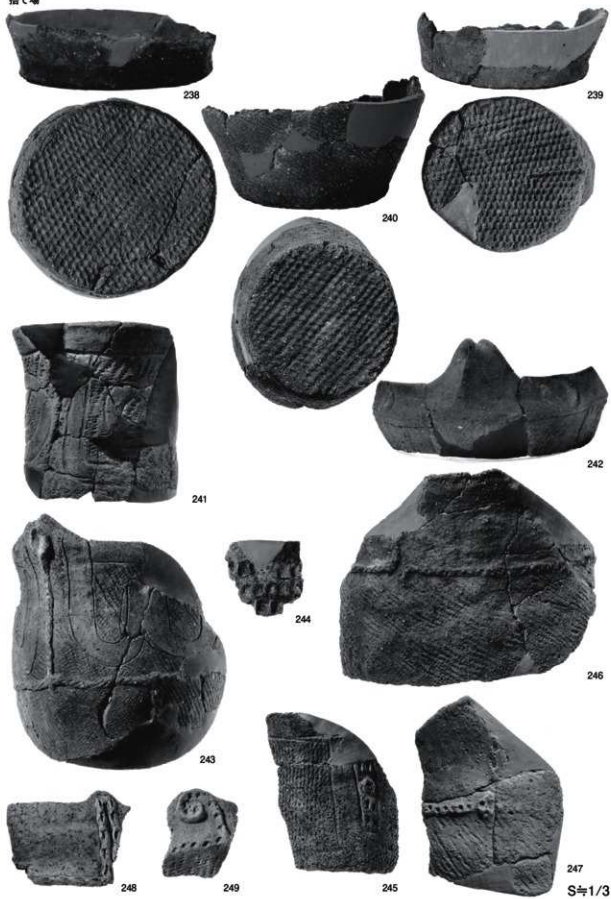
捨て場



S≒1/3

写真図版50 捨て場 (6) 土器

捨て場



写真図版51 捨て場(7)土器

捨て場



250



252



251



253



254

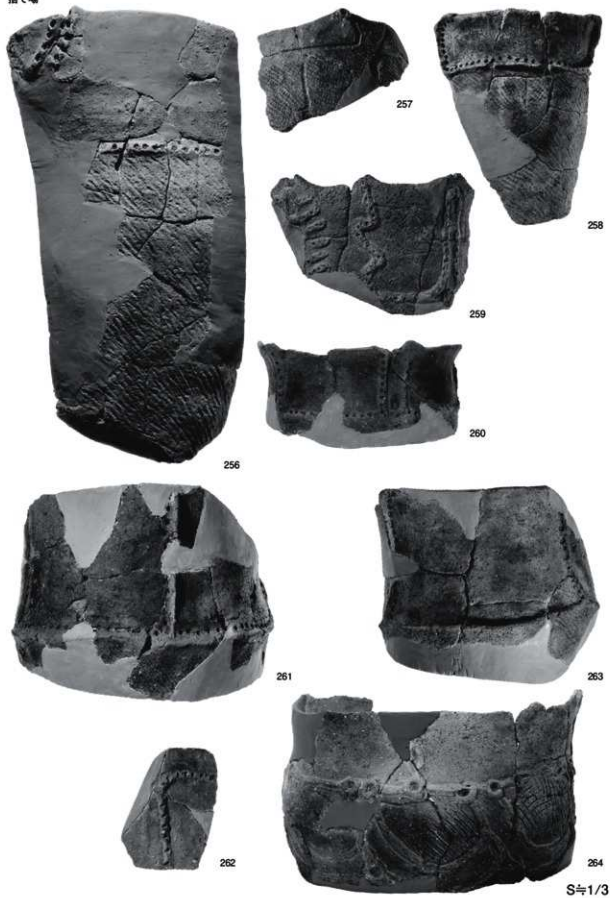


255

S≒1/3

写真図版52 捨て場 (B) 土器

捨て場



写真図版53 捨て場(9)土器

捨て場



265



267



266



268



270

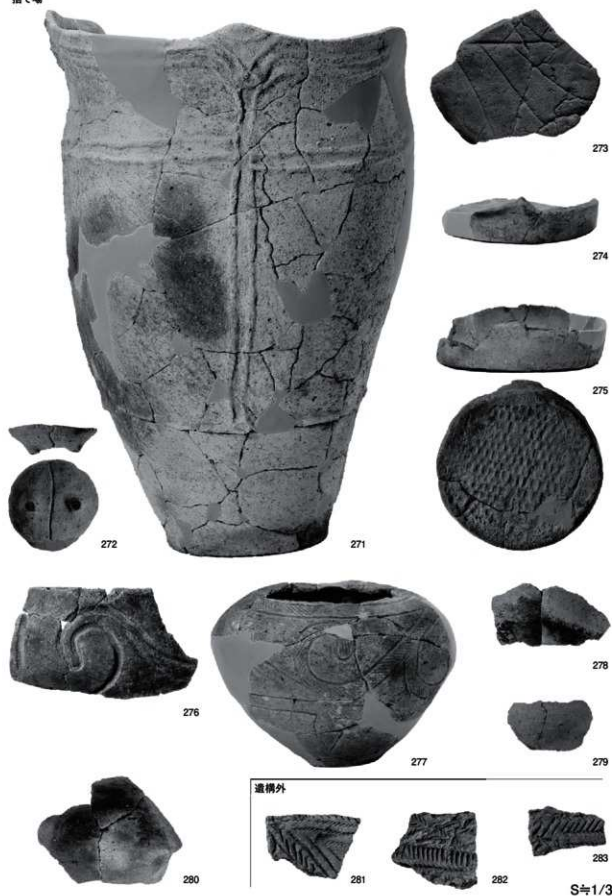


269

S=1/3

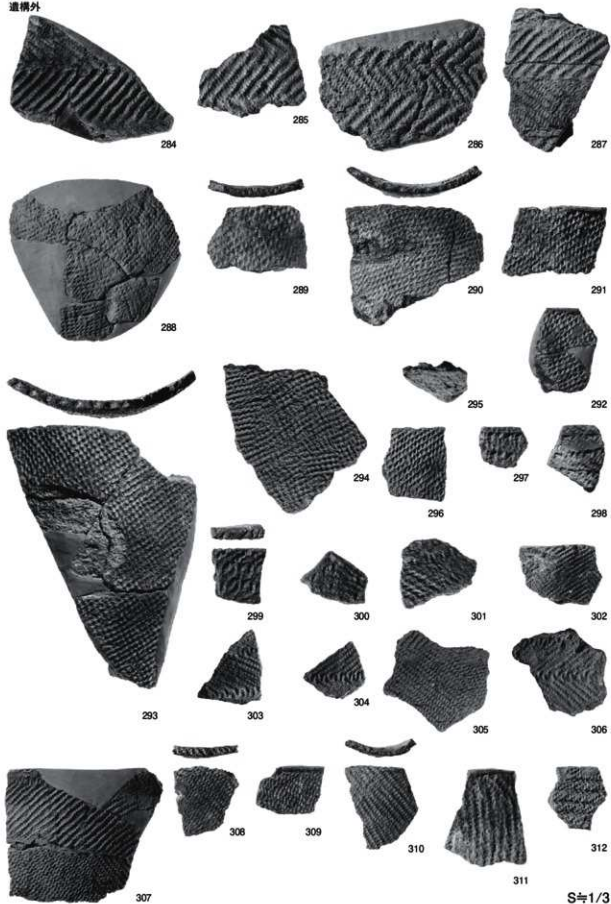
写真図版54 捨て場 (10) 土器

捨て場



写真図版55 捨て場 (11)、遺構外 (1) 土器

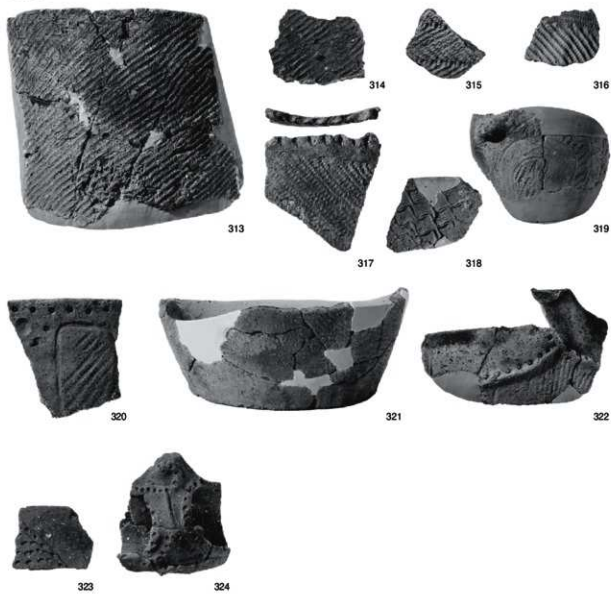
遺構外



S=1/3

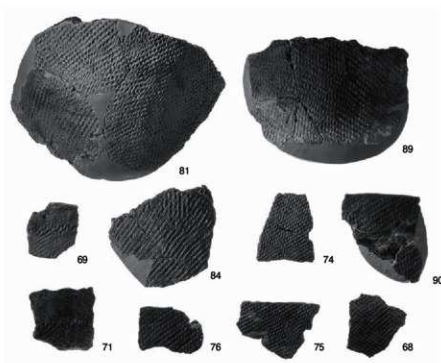
写真図版56 遺構外(2)土器

遺構外

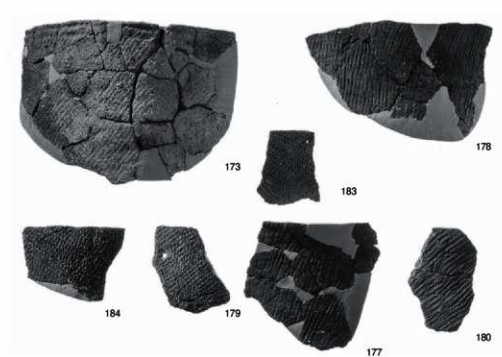


S=1/3

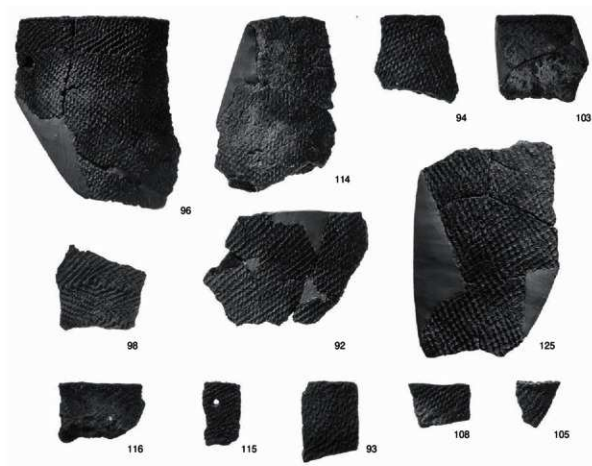
写真図版57 遺構外(3)土器



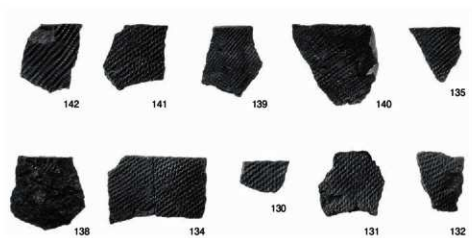
10号住 出土土器



24号住 出土土器



13号住 出土土器



14号住 出土土器

S=1/4

捨て場



341



342



343



344



345



346

24号住



348



349



350



347



351



352



353



354



355



356

遺構外



357



358

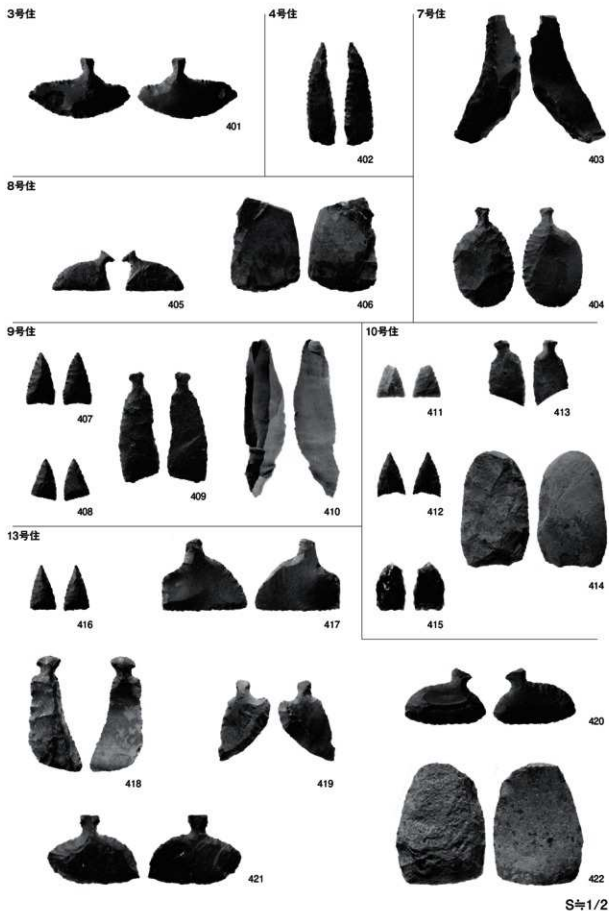


359

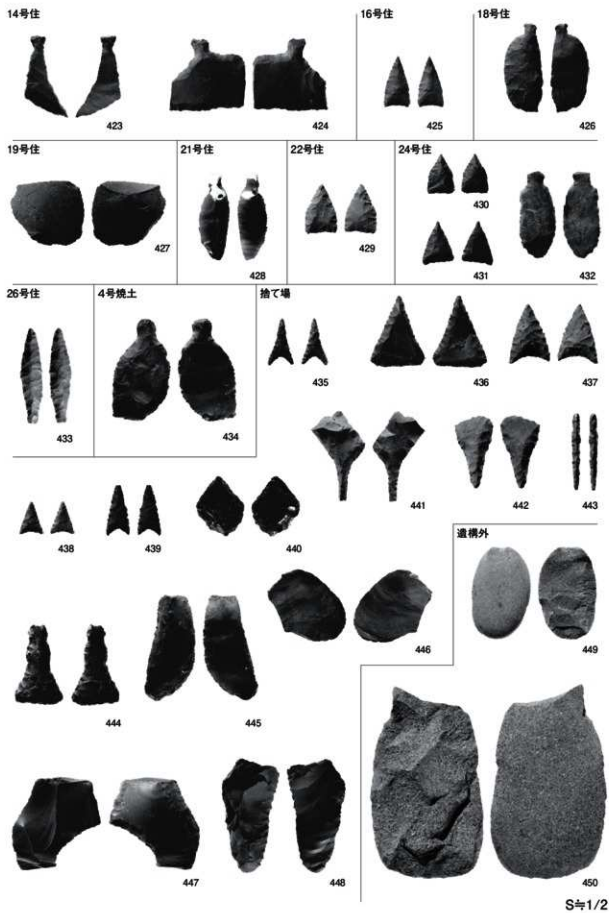


360

S $\frac{1}{2}$

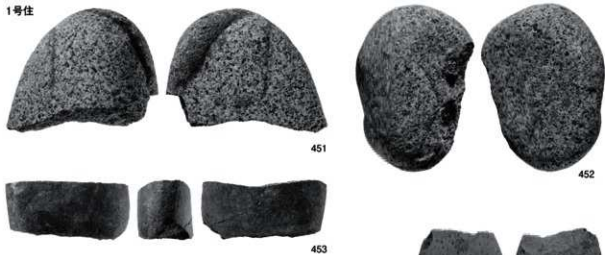


写真図版61 3・4・7・8・9・10・13号住剥片石器

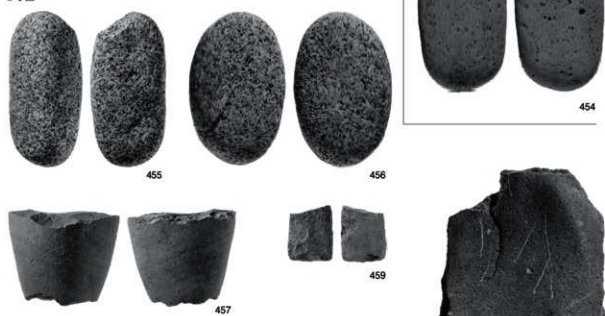


写真図版62 14・16・18・19・21・22・24・26号住、4号烧土、捨て場、遺構外剥片石器

1号住



3号住



4号住



S=1/3

4号住



461

6号住



462

7号住



463



464

8号住



465



466

10号住



467



468

S=1/3

写真図版64 4・6・7・8・10号住礫石器

10号住



469



470



471



472



473



474



475

13号住



476

S=1/3

写真図版65 10・13号住礫石器

13号住



477



478



479



481



482



480

14号住



483



484



485



486

17号住



487

S=1/3

19号住



S=1/3

写真図版67 19号住礫石器

19号住



24号住

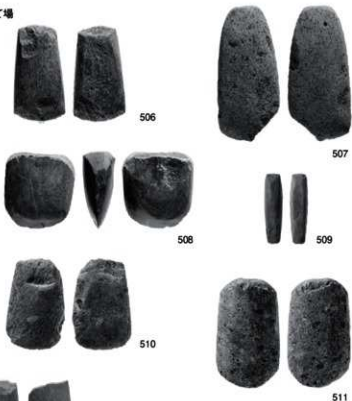


S=1/3

遺構外



捨て場



S=1/3

写真図版69 捨て場（1）、遺構外礫石器

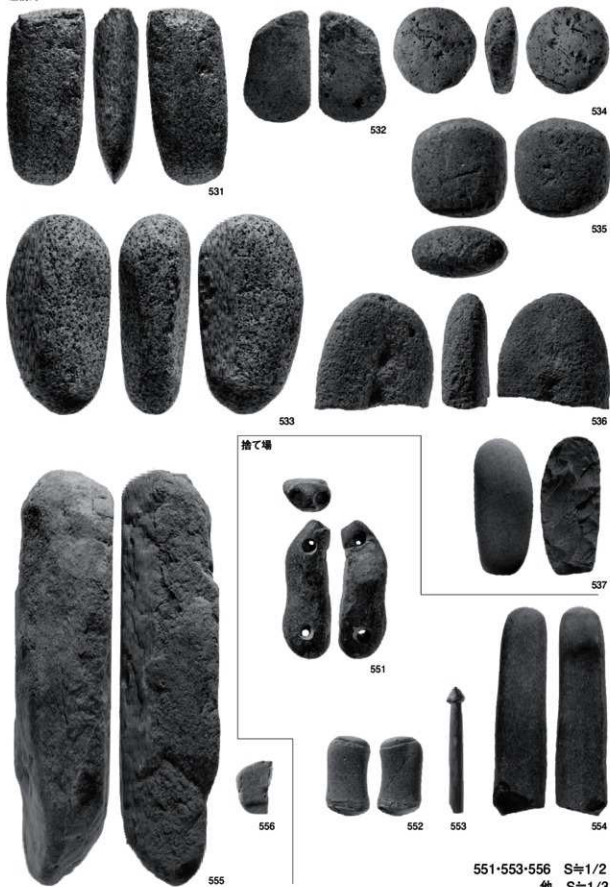
捨て場



S=1/3

写真図版70 捨て場 (2) 礫石器

遺構外



写真図版71 捨て場（3）、遺構外礫石器・石製品

報告書抄録

ふりがな	こしだまつながね1いせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	越田松長根1遺跡発掘調査報告書							
副書名	宮古市新田平乙部線道路整備事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第666集							
編著者名	星 雅之 高橋 工 對馬利彦 佐々木あゆみ							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL019-638-9001							
発行年月日	西暦2017年2月28日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
越田松長根1遺跡	岩手県宮古市 新田平乙部線 田老字越田地 内	03202	KG94-0273	39度 44分 52秒	141度 58分 30秒	2015.04.08 ～ 2015.07.30	4830㎡	道路建設
				世界測地系				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
越田松長根1遺跡	集落跡	縄文 弥生 古代	竪穴住居跡30棟 土坑1基 隔し穴2基 焼土13基 柱穴列2条 柱穴群1カ所 集石1基 捨て場1カ所	縄文土器大43箱 弥生土器2点 古代土器3点 石器大16箱 石製品2箱 土製品39点		縄文時代前期の集落。 縄文中期から後期の捨て場。 古代の集落。		
要約	調査地は、縄文時代、古代の居住域であることが明らかとなった。西調査区では24棟の竪穴住居と焼土、土坑などがみつかった。これらの時期は縄文時代前期でも早い段階に集中している。東調査区では、縄文時代中期末葉～後期初頭を中心とする捨て場がみつかった。当該期の居住域は未確認であるが、この南側の丘陵上に展開するものとみられる。東調査区では古代の竪穴住居や柱穴列も検出されており、東方に広がる集落の一部と考えられた。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第666集

越田松長根 I 遺跡発掘調査報告書

宮古市新田平乙部線道路整備事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成29年2月21日

発行 平成29年2月28日

編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001

発行 岩手県宮古市都市整備部建設課

〒027-8501 岩手県宮古市新川町2番1号

電話 (0193) 62-2111

(公財)岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電話 (019) 654-2235

印刷 株式会社 熊谷印刷

〒020-0015 岩手県盛岡市本町通3丁目5番8号

電話 (019) 653-4151